牛頸土地区画整理事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

牛頸後田・小田浦古墳群

大野城市文化財調査報告書
第36集

1992

大野城市教育委員会

牛頸土地区画整理事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

牛頸後田・小田浦古墳群

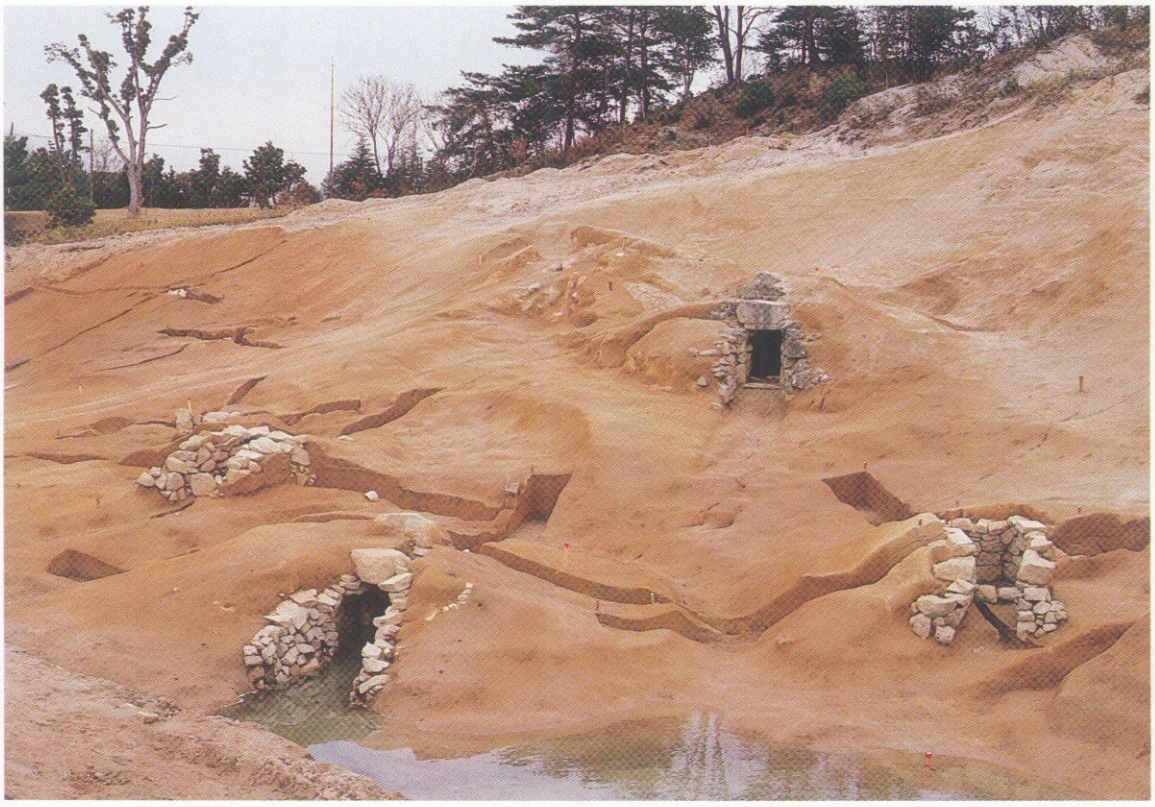
大野城市文化財調査報告書
第36集

1992

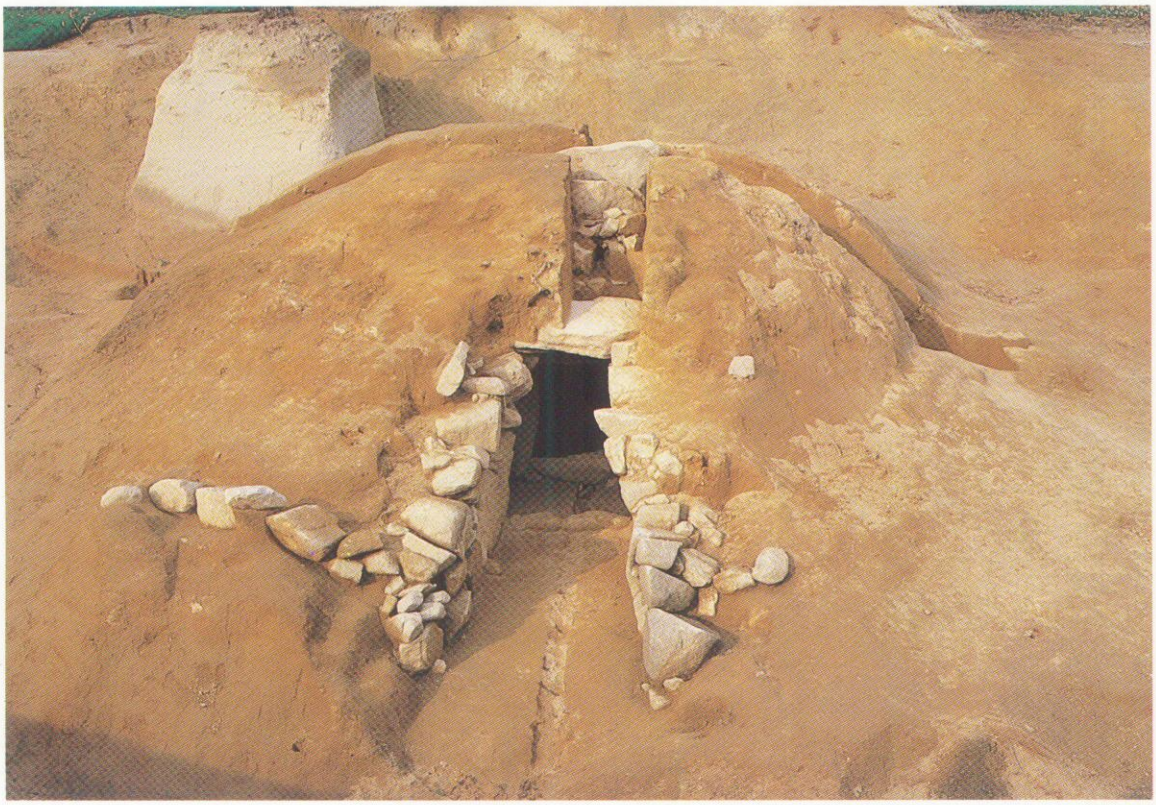
大野城市教育委員会



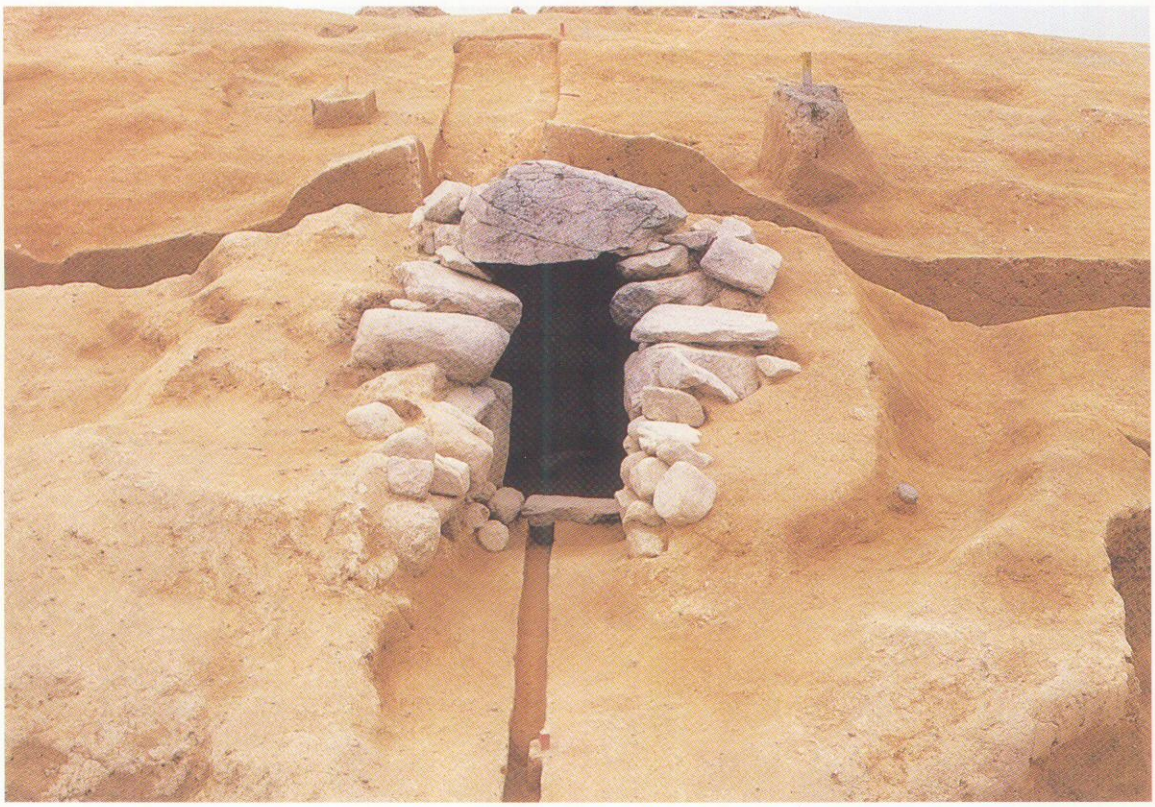
後田 2 ～ 4 号墳



後田 1 ～ 9 号墳



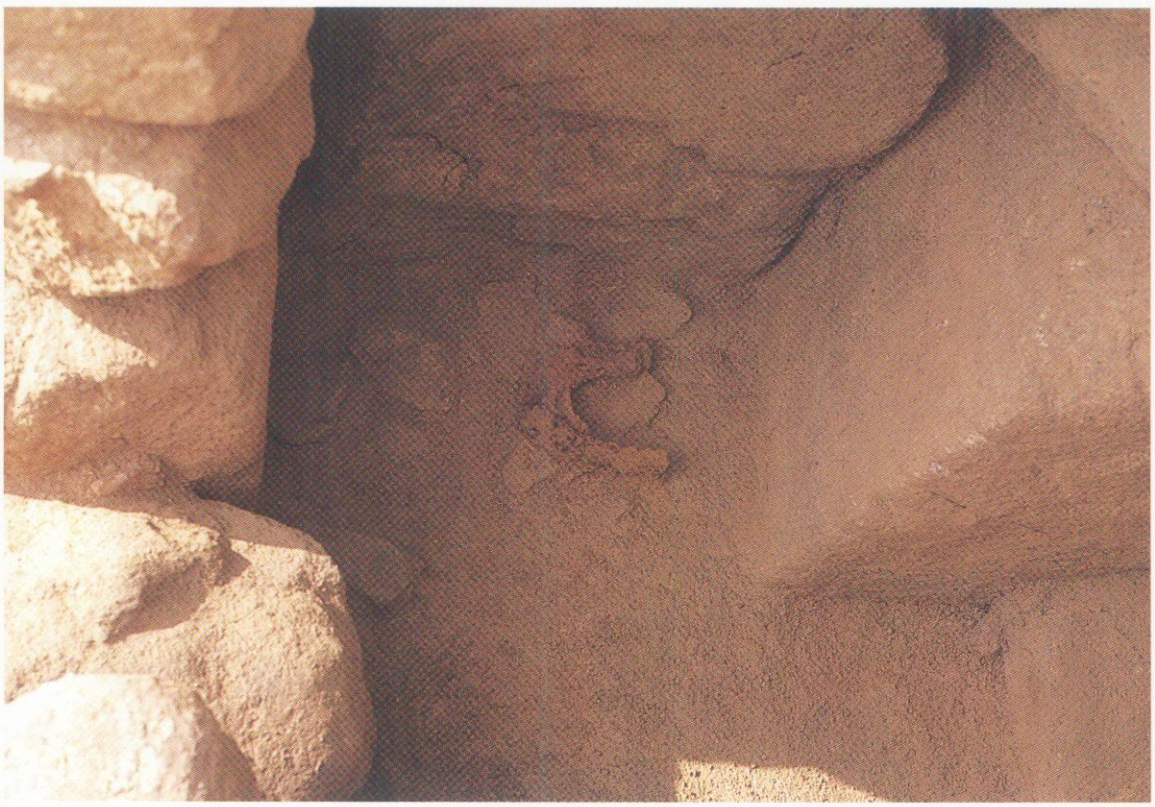
後田10号墳



小田浦 3 号墳



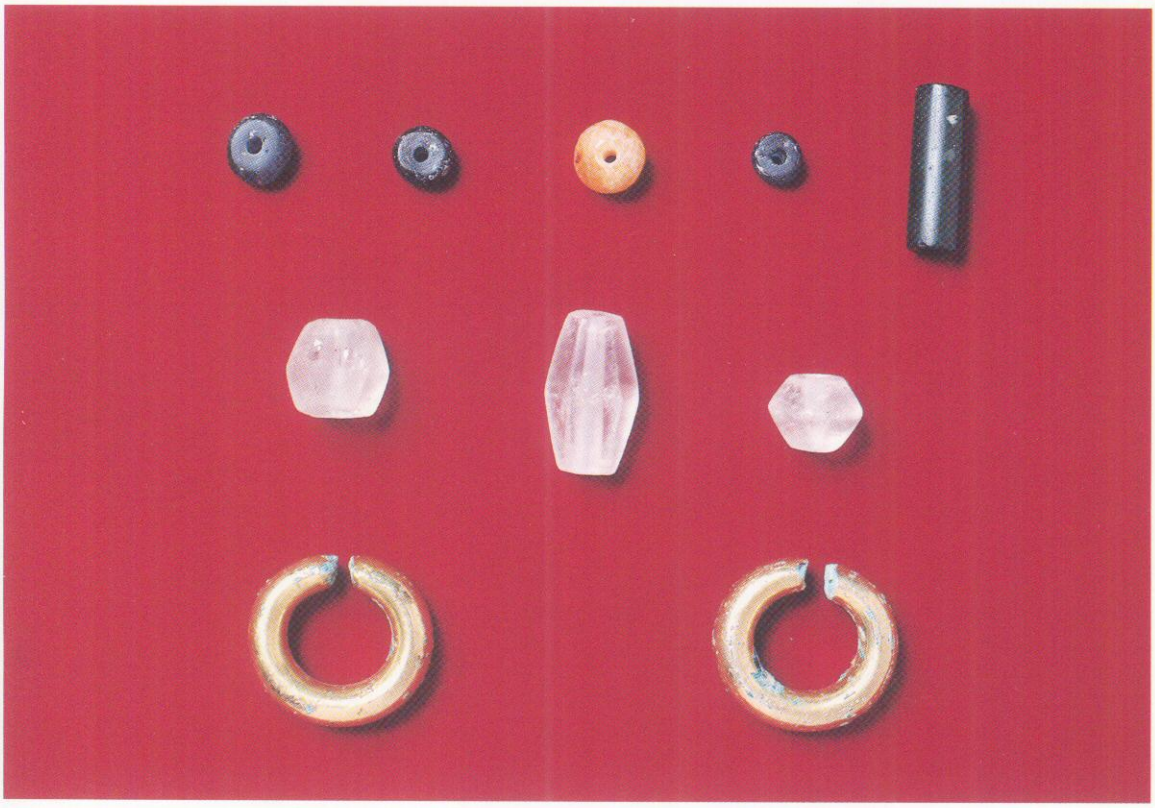
後田 2 号墳前室遺物出土状態



後田 3 号墳前室遺物出土状態



後田 7 号墳祭祀遺構



後田古墳群出土装身具（4・6 号墳）

序

牛頸土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第３集を刊行することができました。１・２集が窯跡調査の報告書だったのに対し、今回は古墳調査の報告書です。後田地区と小田浦地区にあった古墳群ですが、牛頸窯跡群の中にあり、両古墳群の近くにも須恵器窯跡がありました。したがって、古墳群は須恵器作りに携った工人達の墓と考えられます。出土遺物の中にも関連性を考えさせるものが含まれていました。古墳群は削平されたり、地中深く埋もれたりして現在その姿は見られませんが、本報告書によって、牛頸地区の歴史、ひいてはより広く北部九州の歴史の一端が明らかになれば幸いと存じます。

最後になりますが、調査費の負担を含め多大のご協力を賜りました牛頸土地区画整理組合、地権者を初めとする地元牛頸区の皆さん、さらに種々のご協力をいただいた工事関係者の皆さん、指導・助言をいただいた福岡県教育委員会、別府大学教授賀川光夫先生その他関係者各位に対しまして心から感謝申し上げます。

平成４年３月31日

大野城市教育委員会
教育長　久　野　英　彦

例　言

1．本書は牛頸土地区画整理組合（理事長　戸渡朋來）より委託を受けて福岡県大野城市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2．遺物写真は、岡紀久夫の撮影による。
3．遺物実測は秀嶋和子、竹林りさ、製図は同人と河鍋洋子、拓本は井手美智子と牟田昌子が担当した。
4．遺物観察表は秀嶋が担当した。
5．出土遺物については小破片だったり、風化の著しいものは図示しなかった。その数量については各古墳の出土遺物の項に（図示せず）として示した。
6．本書の執筆はⅢ－(2)－１を徳本洋一が、Ⅲ－(2)－13、Ⅲ－(3)－３を秀嶋和子が、その他並びに編集を舟山良一が担当した。
7．本書に掲載した地形図には、建設省国土地理院発行の2.5万分の１『福岡南部』・『不入道』、20万分の１『福岡』を使用した。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに …… 1
(1)　報告に際して …… 1
(2)　調査の経過 …… 2
Ⅱ．位置と環境 …… 6
Ⅲ．調査の結果 …… 10
(1)　調査概要 …… 10
(2)　後田古墳群 …… 11
1．1号墳 …… 11
2．2号墳 …… 18
3．3号墳 …… 27
4．4号墳 …… 37
5．5号墳 …… 44
6．6号墳 …… 53
7．7号墳 …… 69
8．8号墳 …… 75
9．9号墳 …… 80
10．10号墳 …… 83
11．11号墳 …… 90
12．焼土坑 …… 93
13．その他の遺物 …… 94
(3)　小田浦古墳群 …… 95
1．2号墳 …… 95
2．3号墳 …… 100
3．その他の遺物 …… 105
Ⅳ．まとめ …… 106

表　目　次

表1．牛頸土地区画整理事業地内遺跡地名表 …… 3
表2．牛頸周辺遺跡地名表 …… 7

図　版　目　次

図版１　(1)　後田古墳群調査前全景
　　(2)　後田古墳群調査前全景
図版２　(1)　後田古墳群調査前全景
　　(2)　後田古墳群第２次調査開始時全景
図版３　(1)　後田古墳群１～９号墳
　　(2)　後田古墳群５～８号墳
図版４　(1)　後田１号墳閉塞状況全景
　　(2)　後田１号墳閉塞状況
図版５　(1)　後田１号墳石室全景
　　(2)　後田１号墳石室（墓道より）
図版６　(1)　後田１号墳玄室右側壁
　　(2)　後田１号墳羨道右側壁
図版７　(1)　後田１号墳玄室左側壁
　　(2)　後田１号墳羨道左側壁
図版８　後田１号墳出土装身具・鉄器・土器
図版９　後田１号墳出土土器
図版10　(1)　後田２号墳全景（第１次調査時）
　　(2)　後田２号墳全景（第２次調査時）
図版11　(1)　後田２号墳（墓道側より）
　　(2)　後田２号墳玄室奥壁
図版12　(1)　後田２号墳前室
　　(2)　後田２号墳前室
図版13　(1)　後田２号墳前室遺物出土状態
　　(2)　後田２号墳前室遺物出土状態
図版14　後田２号墳出土装身具・鉄器
図版15　後田２号墳出土土器
図版16　後田２号墳出土土器
図版17　後田２号墳出土土器
図版18　後田２号墳出土土器
図版19　後田２号墳出土土器
図版20　(1)　後田３号墳全景

(2)　後田3号墳全景（墓道より）
図版21　(1)　後田3号墳（西側より）
(2)　後田3号墳羨道左側壁
図版22　(1)　後田3号墳石室奥壁
(2)　後田3号墳石室奥壁細部
図版23　後田3号墳出土鉄器・土器
図版24　後田3号墳出土土器
図版25　後田3号墳出土土器
図版26　後田3号墳出土土器
図版27　(1)　後田4号墳全景
(2)　後田4号墳閉塞状況
図版28　(1)　後田4号墳玄室
(2)　後田4号墳玄室奥壁
図版29　(1)　後田4号墳羨道左側壁
(2)　後田4号墳玄室遺物出土状態
図版30　後田4号墳出土装身具・鉄器
図版31　後田4号墳出土土器
図版32　(1)　後田5号墳全景
(2)　後田5号墳閉塞状況
図版33　(1)　後田5号墳玄室
(2)　後田5号墳玄室天井
図版34　(1)　後田5号墳石室右側壁（奥壁より）
(2)　後田5号墳石室左側壁（奥壁より）
図版35　後田5号墳出土土器
図版36　後田5号墳出土土器
図版37　後田5号墳出土土器
図版38　(1)　後田6号墳全景
(2)　後田6号墳閉塞状況
図版39　(1)　後田6号墳（墓道より）
(2)　後田6号墳玄室奥壁
図版40　(1)　後田6号墳玄室左側壁
(2)　後田6号墳玄室遺物出土状態
図版41　(1)　後田6号墳玄室遺物出土状態

(2)　後田6号墳玄室遺物出土状態
図版42　(1)　後田6号墳墳丘下遺物出土状態
(2)　後田6号墳墳丘断面
図版43　後田6号墳出土装身具・鉄器
図版44　後田6号墳出土土器
図版45　後田6号墳出土土器
図版46　後田6号墳出土土器
図版47　(1)　後田7号墳全景
(2)　後田7号墳閉塞状況全景（西側より）
図版48　(1)　後田7号墳閉塞状況全景（東側より）
(2)　後田7号墳祭祀遺構遺物出土状態遠景
図版49　(1)　後田7号墳祭祀遺構遺物出土状態
(2)　後田7号墳祭祀遺構遺物出土状態
図版50　後田7号墳出土土器
図版51　後田7号墳出土土器
図版52　(1)　後田8号墳石室（蓋石除去前）
(2)　後田8号墳石室（蓋石除去後）
図版53　(1)　後田8号墳全景
(2)　後田8号墳出土装身具・土器
図版54　(1)　後田9号墳石室（蓋石除去前）
(2)　後田9号墳石室（蓋石除去後）
図版55　(1)　後田9号墳全景
(2)　後田9号墳出土土器
図版56　(1)　後田10号墳調査前全景
(2)　後田10号墳全景（調査終了後）
図版57　(1)　後田10号墳閉塞状況
(2)　後田10号墳全景
図版58　(1)　後田10号墳（墓道より）
(2)　後田10号墳玄室天井
図版59　(1)　後田10号墳玄室
(2)　後田10号墳（玄室より）
図版60　(1)　後田10号墳右側壁（奥壁側より）
(2)　後田10号墳奥壁

図版61　(1)　後田10号墳墳丘断面（Ｎトレンチ）
　　(2)　後田10号墳墳丘断面（Ｗトレンチ）
図版62　後田10号墳出土鉄器
図版63　後田10号墳出土土器
図版64　後田10号墳出土土器
図版65　(1)　後田11号墳調査前全景（西側より）
　　(2)　後田11号墳調査前全景（南側より）
図版66　(1)　後田11号墳石室全景
　　(2)　後田11号墳石室（南東より）
図版67　(1)　後田11号墳（調査終了後）
　　(2)　後田11号墳出土土器・後田古墳群出土石器
図版68　(1)　焼土坑 SK 01（精査前）
　　(2)　焼土坑 SK 01（精査後）
図版69　(1)　焼土坑 SK 02（半裁）
　　(2)　焼土坑 SK 02（完掘状態）
図版70　(1)　小田浦古墳群調査前全景
　　(2)　小田浦古墳群調査後全景
図版71　(1)　小田浦２号墳閉塞状況（墓道側より）
　　(2)　小田浦２号墳閉塞状況（玄室側より）
図版72　(1)　小田浦２号墳全景
　　(2)　小田浦２号墳石室全景
図版73　(1)　小田浦２号墳石室全景（墓道側より）
　　(2)　小田浦２号墳石室全景（南側より）
図版74　(1)　小田浦２号墳玄室遺物出土状態
　　(2)　小田浦２号墳墳丘断面（Ｎトレンチ）
図版75　小田浦２号墳出土装身具・鉄器・土器
図版76　(1)　小田浦３号墳全景
　　(2)　小田浦３号墳石室
図版77　(1)　小田浦３号墳閉塞状況
　　(2)　小田浦３号墳出土土器

挿　図　目　次

第１図　牛頸土地区画整理事業地内遺跡分布図（１／１万）…… 折り込み
第２図　牛頸周辺遺跡分布図（１／2.5万）…… 折り込み
第３図　後田古墳群地形実測図（１／300）…… 折り込み
第４図　後田１・２号墳地形実測図（１／200）…… 11
第５図　後田１号墳墳丘断面実測図（１／60）…… 12
第６図　後田１号墳石室実測図（１／60）…… 折り込み
第７図　後田１号墳閉塞状況実測図（１／60）…… 13
第８図　後田１号墳遺物出土状態実測図（１／30）…… 13
第９図　後田１号墳出土装身具実測図（１／１）…… 14
第10図　後田１号墳出土鉄器実測図（１／２）…… 14
第11図　後田１号墳出土土器実測図（１／３）…… 15
第12図　後田２号墳墳丘断面実測図（１／60）…… 折り込み
第13図　後田２号墳石室実測図（１／60）…… 折り込み
第14図　後田２号墳遺物出土状態実測図（１／30）…… 21
第15図　後田２号墳出土装身具実測図（１／１）…… 22
第16図　後田２号墳出土鉄器実測図（１／２）…… 22
第17図　後田２号墳前室出土土器実測図①（１／３）…… 23
第18図　後田２号墳前室出土土器実測図②（１／３）…… 24
第19図　後田２号墳出土土器実測図（１／３）…… 25
第20図　後田３・４号墳地形実測図（１／200）…… 27
第21図　後田３号墳墳丘断面実測図（１／60）…… 折り込み
第22図　後田３号墳石室実測図（１／60）…… 折り込み
第23図　後田３号墳閉塞状況実測図（１／60）…… 29
第24図　後田３号墳遺物出土状態実測図（１／30）…… 30
第25図　後田３号墳出土鉄器実測図（１／２）…… 30
第26図　後田３号墳出土土器実測図①（１／３）…… 31
第27図　後田３号墳出土土器実測図②（１／３）…… 33
第28図　後田３号墳出土土器実測図③（１／３）…… 35
第29図　後田３号墳出土土器実測図④（１／３）…… 36
第30図　後田４号墳石室実測図（１／60）…… 折り込み
第31図　後田４号墳墳丘断面実測図（１／60）…… 39

第32図　後田４号墳出土装身具実測図（１／１）…… 40
第33図　後田４号墳出土鉄器実測図（１／２）…… 40
第34図　後田４号墳出土土器実測図①（１／３）…… 41
第35図　後田４号墳出土土器実測図②（１／６）…… 42
第36図　後田５・６・７号墳地形実測図（１／200）…… 45
第37図　後田５号墳閉塞状況実測図（１／60）…… 46
第38図　後田５号墳墳丘断面実測図（１／60）…… 折り込み
第39図　後田５号墳石室実測図（１／60）…… 折り込み
第40図　後田５号墳出土鉄器実測図（１／２）…… 47
第41図　後田５号墳出土土器実測図①（１／３）…… 49
第42図　後田５号墳出土土器実測図②（１／３）…… 50
第43図　後田１・５号墳周溝出土土器実測図（１／３）…… 51
第44図　後田５・６号墳周溝出土土器実測図（１／３）…… 51
第45図　後田６号墳閉塞状況実測図（１／60）…… 53
第46図　後田６号墳墳丘断面実測図（１／60）…… 54
第47図　後田６号墳石室実測図（１／60）…… 55
第48図　後田６号墳遺物出土状態実測図（１／30）…… 56
第49図　後田６号墳出土装身具実測図（１／１）…… 57
第50図　後田６号墳出土鉄器実測図（１／２）…… 57
第51図　後田６号墳石室・墳丘下出土土器実測図（１／３）…… 59
第52図　後田６号墳出土土器実測図①（１／３）…… 61
第53図　後田６号墳出土土器実測図②（１／３）…… 63
第54図　後田６号墳出土土器実測図③（１／３）…… 64
第55図　後田６号墳出土土器実測図④（１／６）…… 65
第56図　後田６号墳出土土器実測図⑤（１／６）…… 66
第57図　後田７号墳墳丘断面実測図（１／60）…… 68
第58図　後田７号墳石室実測図（１／60）…… 68
第59図　後田７号墳祭祀遺構遺物出土状態実測図（１／20）…… 69
第60図　後田７号墳出土土器実測図①（１／３）…… 70
第61図　後田７号墳出土土器実測図②（１／３）…… 71
第62図　後田７号墳祭祀遺構出土土器実測図（１／３）…… 72
第63図　後田８・９号墳地形実測図（１／200）…… 76
第64図　後田８号墳墳丘断面実測図（１／60）…… 77

第65図　後田８号墳石室実測図（１／30）…… 78
第66図　後田８号墳出土装身具実測図（１／１）…… 79
第67図　後田８号墳出土土器実測図（１／３）…… 79
第68図　後田９号墳トレンチ断面実測図（１／60）…… 80
第69図　後田９号墳石室実測図（１／30）…… 81
第70図　後田９号墳出土土器実測図（１／３）…… 82
第71図　後田10号墳地形実測図（１／200）…… 83
第72図　後田10号墳墳丘断面実測図（１／60）…… 折り込み
第73図　後田10号墳石室実測図（１／60）…… 折り込み
第74図　後田10号墳閉塞状況実測図（１／60）…… 85
第75図　後田10号墳出土鉄器実測図（１／２）…… 86
第76図　後田10号墳出土土器実測図①（１／３）…… 87
第77図　後田10号墳出土土器実測図②（１／３）…… 88
第78図　後田11号墳地形実測図（１／200）…… 90
第79図　後田11号墳墳丘断面実測図（１／60）…… 90
第80図　後田11号墳石室実測図（１／60）…… 91
第81図　後田11号墳出土土器実測図（１／３）…… 92
第82図　焼土坑 SK 01・02実測図（１／30）…… 93
第83図　後田古墳群出土石器実測図（１／２）…… 94
第84図　小田浦２号墳閉塞状況実測図（１／60）…… 95
第85図　小田浦古墳群地形実測図（１／200）…… 96
第86図　小田浦２号墳墳丘断面実測図（１／60）…… 97
第87図　小田浦２号墳石室実測図（１／60）…… 98
第88図　小田浦２号墳出土装身具実測図（１／１）…… 99
第89図　小田浦２号墳出土鉄器実測図（１／２）…… 99
第90図　小田浦２号墳出土土器実測図（１／３）…… 99
第91図　小田浦３号墳閉塞状況実測図（１／60）…… 100
第92図　小田浦３号墳石室実測図（１／60）…… 折り込み
第93図　小田浦３号墳墳丘断面実測図（１／60）…… 101
第94図　小田浦３号墳遺物出土状態実測図（１／30）…… 102
第95図　小田浦３号墳出土土器実測図（１／３）…… 103
第96図　小田浦古墳群出土石器実測図（１／２）…… 105
第97図　後田小田浦古墳群石室プラン一覧表 …… 109

Ⅰ．はじめに

(1) 報告に際して

本書は牛頸土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書の第３集である。第１集は後田窯跡群、第２集は小田浦窯跡群の報告を行ったが、今回は両窯跡群と同地域にあった古墳群の報告を行う。

牛頸土地区画整理事業は101.2 haに及ぶ大規模な事業で、昭和58年１月27日に組合設立、翌59年10月27日に起工式がとり行われた。現在、事業は終盤を迎え、かつて山だった所に最新の家が次々に建てられている状況である。

この事業に伴う発掘調査は昭和57年（1982年）５月の月ノ浦窯跡を嚆矢とし、平成３年（1991年）３月の胴ノ元古墳まで９年間を要した。今回報告する後田古墳群は昭和57年度（1982年度）に第１次調査を行い、昭和61年度（1986年度）に第２次調査を行った。また、小田浦古墳群については２・３号墳を昭和61年度（1986年度）に調査を行った。

調査に際しては、事業主体者である牛頸土地区画整理組合、工事施工者の間・清水ＪＶ、大野城市区画整理課、地元牛頸区の皆様に多大なご協力を得た。また、段々畑に埋もれていた古墳の存在を教えていただいた前田軍治氏、戸渡朋來氏、学生の応援の手配をしていただいた別府大学教授賀川光夫先生、県文化課の栗原和彦氏ら多くの方々の指導、援助を受けた。厚く感謝の意を表したい。

本市教育委員会歴代の調査体制は以下のとおりである。

教育長	二宮親卯
	久野英彦
教育部長	後藤幹生
	村上信幸
	池田嘉門
	助村浩靖
社会教育課長	井原信一
	船越美直
	岡部弥之助
社会教育課長補佐・係長	赤星健彦
	安恒巧高
	青木克正

	白水岩人
庶務担当主査・主事	後藤秀規
	高橋裕司
	浦山敏弘
調査担当技師	舟山良一
	向　直也
	徳本洋一
同　　嘱託	横大路俊明
	下村精一
	秀嶋和子
同　　補助員	上野智裕（現稲築町教育委員会）

(2) 調査の経過

各年度の調査経緯は以下のとおりである。

○昭和57年度（1982年度）の調査

1．月ノ浦Ⅰ号窯跡（27地点）　5～6月
2．分布調査　10～11月
3．後田古墳群（2～4号）（42・43地点）　11～翌年2月

○昭和58年度（1983年度）の調査

1．小田浦窯跡群（31～34地点）　11～翌年2月

○昭和59年度（1984年度）の調査

1．下ノ原遺跡（20・24・25地点）　8月
2．小田浦窯跡群（50・51地点）　11～翌年2月

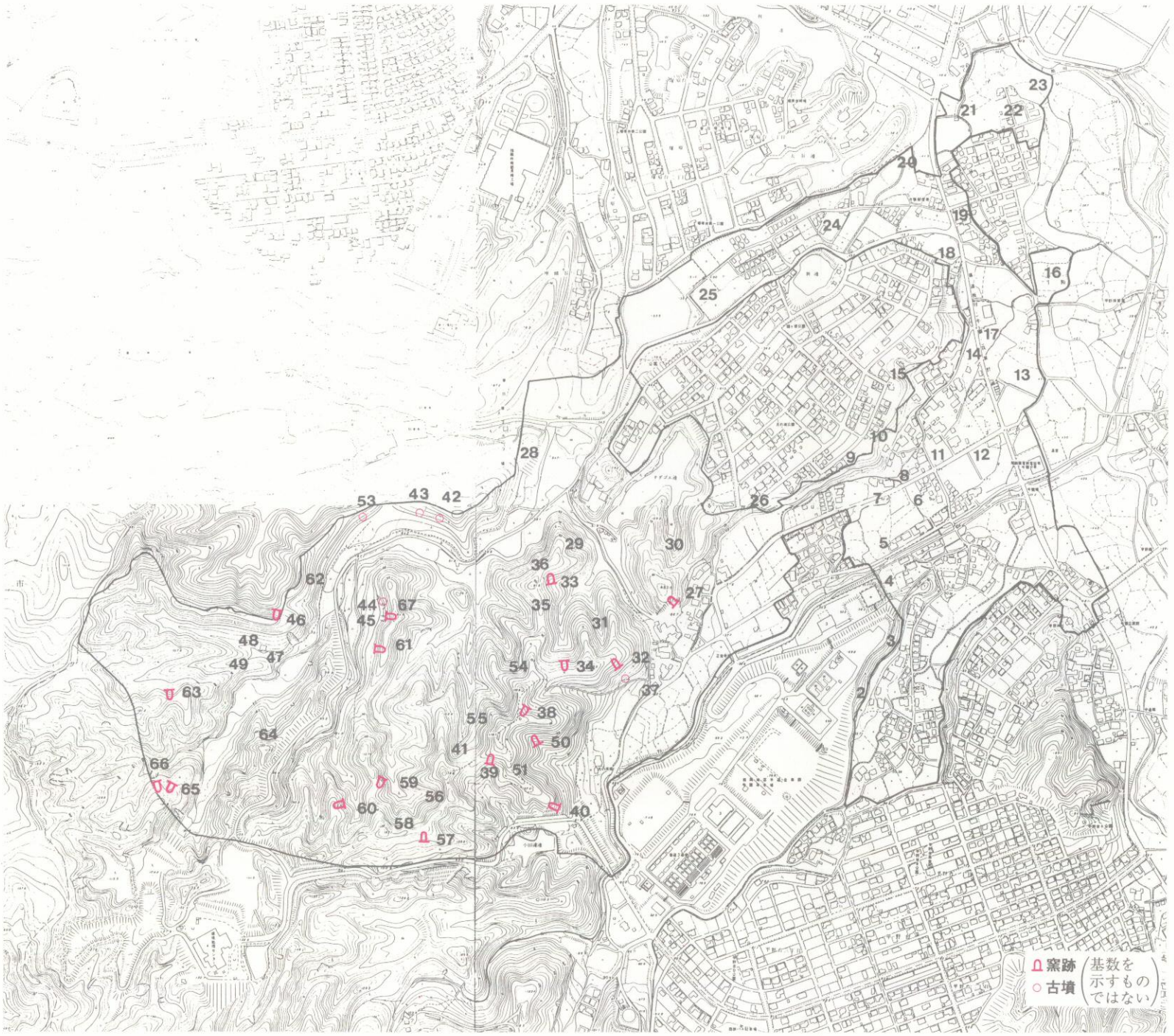
○昭和60年度（1985年度）の調査

1．小田浦窯跡群（37・40・57地点）　10～翌年2月
2．後田窯跡群（59・60・63地点）　2～3月

○昭和61年度（1986年度）の調査

1．後田窯跡群（61・65・66・45・46地点）　4～10月
2．小田浦窯跡群（28地点）　10月
3．後田古墳群（44・42・43・53地点）　10～2月
4．小田浦古墳群（37地点）　2～3月

○昭和62年度（1987年度）の調査



第１図　牛頸土地区画整理事業地内遺跡分布図（1/１万）

1．塚原遺跡群（13地点）　4～翌年3月
2．畑ケ坂遺跡（14地点）　6月

○昭和63年度（1988年度）の調査
1．塚原遺跡群（13地点）　4～5月、8月
2．畑ケ坂遺跡（14地点）　5～8月
3．日ノ浦遺跡（16地点）　9～翌年2月
4．日ノ浦Ⅱ遺跡（22地点）　11月、翌年3月
5．塚原遺跡（12地点）　2月

○平成元年度（1989年度）の調査
1．塚原遺跡（12地点）　4月
2．日ノ浦Ⅱ遺跡（22地点）　5～6月
3．日ノ浦遺跡（16地点）　6～翌年3月

○平成2年度（1990年度）の調査
1．塚原遺跡群（13地点）　7～12月
2．胴ノ元古墳（1地点）　翌年1～3月

表1　牛頸土地区画整理事業地内遺跡地名表

（S：昭和、H：平成）

No.	遺跡名	調査年度	遺跡の内容	備考
1	胴ノ元古墳	1990(H. 2)	円墳1基(横穴式石室)　(古)	
2	胴ノ元窯跡群		須恵器窯跡1基以上、未確認　(古)	
3	胴ノ元遺跡		散布地、未確認　(縄)	
4	正楽寺遺跡	1990(H. 2)	試掘調査で確認できず	
5		1988(S. 63)	〃	
6		1988(S. 63)	〃	
7		1988(S. 63)	〃	
8		1988(S. 63)	〃	
9	畑ケ坂窯跡群		須恵器窯跡　窯体確認できず　(奈)	
10	〃		〃　(奈)	
11		1988(S. 63)	試掘調査で確認できず	
12	塚原遺跡	1988･89(S. 63･H. 1)	集落跡　(平～鎌)	
13	塚原遺跡	1987･88(S. 62･63)	集落跡(住居跡26軒)古墳(20基)　(古～奈)	
14	畑ケ坂遺跡	1988(S. 63)	集落跡　(古～奈)	

No.	遺跡名	調査年度	遺跡の内容	備考
15	畑ケ坂窯跡群		須恵器窯跡　窯体確認できず　(奈)	
16	日ノ浦遺跡	1988･89(S．63･H．1)	集落跡(住居跡22軒)　(古～奈)	
17	畑ケ坂遺跡	1987(S．62)	集落跡	
18	畑ケ坂窯跡群		須恵器窯跡確認できず	
19	日ノ浦遺跡			
20	下ノ原遺跡	1984(S．59)	試掘調査で確認できず	
21	日ノ浦Ⅱ遺跡	1986	〃	
22	〃	1988･89(S．63･H．1)	甕棺墓、土坑墓、古墳　(弥～古)	
23	〃		流れ込みの土器多数出土　(平)	
24	下ノ原遺跡	1984(S．59)	試掘調査で確認できず	
25	〃	〃	〃	
26	月ノ浦古墳		円墳1基(横穴式石室)1979(S．54)調査(古)	『牛頸中通遺跡群Ⅱ』所収
27	月ノ浦窯跡	1982(S．57)	窯体削平､灰原から須恵器､軒丸瓦､平瓦､鴟尾(古)	
28	後田窯跡	1986(S．61)	灰原のみ、須恵器、瓦	
29	柳ケ原古墳群	1983(S．58)	確認できず、尾根の凹凸の見誤りと思われる	
30	後田窯跡群			
31		1983(S．58)	試掘調査で確認できず	
32		〃	〃　、弥生土器散布	『牛頸小田浦窯跡群』所収
33	小田浦窯跡群	〃	須恵器窯跡1　(古)	〃
34	〃	〃	〃　1、(窯体ほとんど流失)　(古)	〃
35	柳ケ原古墳群	1983(S．58)	確認できず	
36	〃	〃	〃	
37	小田浦古墳群・窯跡群	1985･86(S．60、61)	円墳3基(横穴式石室)、須恵器窯跡2基(古)	〃
38	小田浦窯跡群		須恵器窯跡2基､1976(S．51)立正大学調査　(古)	
39	〃		〃　〃　(古～奈)	
40	〃	1986(S．61)	須恵器窯跡2基、1基は未操業　(古)	〃
41	小田浦窯跡群	1986(S．61)	試掘調査で確認できず	

No.	遺跡名	調査年度	遺跡の内容	備考
42	後田古墳群	1982(S．57)		
43	〃	1986(S．61)	円墳10基(横穴式石室７、小石室３) (古)	
44	〃	〃		
45	後田窯跡群	1986(S．61)	須恵器窯跡２基 (古～奈)	『牛頸後田窯跡群』所収
46	〃	1986(S．61)	〃 １基(灰原のみ) (古)	〃
47		1985(S．60)		
48		〃	試掘調査で確認できず、窯体と見えたのは炭焼窯らしきもの	
49		〃		
50	小田浦窯跡群	1984(S．59)	須恵器窯跡２基 (古)	『牛頸小田浦窯跡群』所収
51	〃	1984(S．59)	窯体流失か	
52		1986(S．61)	試掘調査で確認できず	
53	後田古墳群	〃	円墳１基(横穴式石室)	
54		〃	試掘調査で確認できず	
55		〃	〃	
56		〃	〃	
57	小田浦窯跡群	〃	須恵器窯跡１基(ほとんど流失) (奈)	〃
58		〃	試掘調査で確認できず	
59	後田窯跡群	〃	須恵器窯跡３基 (奈)	『牛頸後田窯跡群』所収
60	〃	〃	〃 １基 (古)	〃
61	〃	1987(S．62)	〃 ５基 (古～奈)	〃
62		1986(S．61)	試掘調査で確認できず	
63	後田窯跡群	〃	須恵器窯跡２基 (古～奈)	〃
64		〃	試掘調査で確認できず	
65	後田窯跡群	1987(S．62)	須恵器窯跡１基 (古)	〃
66	〃	〃	〃 (奈)	〃
67		1986(S．61)	試掘調査で確認できず	

(縄)：縄文時代、(弥)：弥生時代、(古)：古墳時代、(奈)：奈良時代、(鎌)：鎌倉時代

Ⅱ．位置と環境

後田・小田浦古墳群は福岡県大野城市大字牛頸にあった古墳群である。福岡平野の縁辺部に位置し、博多湾まで直線で13km、大宰府政庁跡まで４kmの地点に当たる。両古墳群は九州で最大規模を有する牛頸窯跡群の範囲に含まれる。牛頸窯跡群は本市大字牛頸、上大利を中心に北は春日市、東は太宰府市の一部を含む東西４km、南北4.6kmの範囲にある大窯跡群で、総数300基以上の窯跡があると考えられている。窯の操業期間は６世紀中頃から８世紀後半までである。

さて、当地域の古墳について見ると、かなり新たな知見が得られるようになった。まず、今まで知られていた古墳はすべて６世紀後半～７世紀後半のものだったが、思いもかけなかった水田の下からの古墳群の発見があった。塚原古墳群である（第２図50)。水田にされる際に上部は削平されてしまっているが、かろうじて石室床面近くが残っているものも多く、土器、鉄器その他装身具類などが出土している。石室は竪穴系横口式石室の特色を示すものもあり、また、出土須恵器は陶邑Ⅰ型式４段階のものからある。これらのことから塚原古墳群は５世紀後半～６世紀初めにかけて築造されたものと考えられる。今まで21基の古墳と９基の小石室が検出されているが、今後の調査によって少なくともあと数基増えることは確実である。小字名が歴史的事実を反映していたことになる。当該時期の集落跡は塚原古墳群の北方約1.1kmにある円入（えんにゅう）遺跡（春日市）(41）が候補に挙げられるのではないかと考えられる。次に後期の群集墳について見ると、牛頸では最大規模のものに中通（なかどおり）古墳群（31）がある。〈註２〉19基の横穴式石室を持つ円墳から成る。最大規模のものが中通古墳で、他の18基からやや離れて立地しているのが特徴である。この立地の仕方は後田古墳群にも相通じるところがあって注目される。中通古墳群は牛頸でもほぼ中心にあり、牛頸窯跡群の構造を考える上でも重要な古墳群である。〈註１〉

中通古墳群と後田古墳群を除くと当地域では10基以上の古墳群は見当たらない。消滅した場合もあり得るが、大量に消滅したことも考えにくく、それほど大規模な古墳群は形成されなかったと考える方が妥当であろう。独立丘陵上で１基だけ存在した胴ノ元古墳（51）〈註３〉、丘陵南斜面に石室の一部だけが残っていた月ノ浦古墳（64）〈註４〉、また、石がほとんど抜かれた石室の残がいが検出された日ノ浦古墳（47）などが区域の古墳である。

行政区画は違うが牛頸窯跡群に含まれる古墳としては、後田古墳群の北方の春日市に数ケ所知られている。まず、前述した塚原古墳群と同名であるが、４基から成る塚原古墳群（46）がある。舌状にのびた丘陵の先端部に立地し、４基のうち１基は前方後円墳の可能性もある。〈註５〉そこから約1.4km西に円墳３基以上から成るイケ谷古墳群（56)、さらにそこから北へ0.6kmに円墳３基からなる大堤古墳群（55)、イケ谷古墳群から西へ0.3kmにある西浦古墳群（６）などがある。西浦古墳群は春日市と那珂川町の境にある観音山東麓に立地するが、北側と西の麓にも

多数の古墳群があり、総称して観音山古墳群と呼ばれている。(註6)総数は100基を超える。第2図には含まれないが、この観音山古墳群から西側は筑紫郡那珂川町になるが、こちらには古式の前方後円墳を初め、後期の群集墳まで多数の古墳が知られている。

以上、周辺の古墳群を概観したが、現在の調査結果から言えば当地域には、前期にさかのぼる古墳はなく、古くとも5世紀後半から築造が始まり、後期群集墳も小規模なものが多いということが言える。

〈註1〉『春日地区遺跡群Ⅳ』春日市教育委員会　1986

〈註2〉『牛頸中通遺跡群』大野城市教育委員会　1980　『牛頸中通遺跡群Ⅱ』大野城市教育委員会　1982

〈註3〉1991年（平成3年）3月に発掘調査を実施した。現地保存ができなかったが、牛頸土地区画整理組合のご厚意によって、すぐ近くに移築、復元されることとなった。

〈註4〉註2の後者の報告書に写真のみを掲載した（図版36）。

〈註5〉春日市教育委員会技師平田定幸、中村昇平氏のご教示による。

〈註6〉『観音山古墳群Ⅱ』那珂川町教育委員会　1986等

表2　牛頸周辺遺跡地名表

1	天神山古墳群	春日市大字上白水	前方後円墳、円墳	
2	天神山水城	〃　〃	土塁	(国指定史跡)
3	大土居水城跡	〃　〃	土塁	(国指定史跡)
4	ウトグチ窯跡群	〃　〃	窯跡2基以上	1987春日市教委調査(2基)
5	観音山古墳群	那珂川町大字中原他	前方後円墳、円墳100基以上	1972県教委、那珂川町教委調査
6	西浦古墳群	春日市大字上白水	円墳4基	1981春日市教委調査
7	大牟田池窯跡	〃　大字春日	窯跡1基以上	
8	惣利窯跡群	〃　〃	窯跡15基以上	1977～80春日市教委調査(9基)
9	惣利遺跡群	〃　〃	古墳～歴史時代住居跡	1979・80春日市教委調査　縄文～中世
10	向谷遺跡群	春日市大字春日	甕棺・方墳、弥生～歴史時代住居跡	1979～82春日市教委調査
11	春日平田窯跡群	〃　〃	窯跡21基	1982～85春日市教委調査(21基)
12	九州大学筑紫キャンパス内遺跡	春日市・大野城市	集落、溝等、縄文～奈良	1978～九州大学調査
13	梅頭窯跡	大野城市大字上大利	窯跡1基	消滅
14	上園遺跡	〃　〃	散布地	1985～大野城市教委調査

15	出口窯跡	〃　〃	窯跡1基	
16	唐土遺跡	〃　下大利	奈良時代の土器溜め	1989大野城市教委調査
17	吉松古墳	太宰府市大字吉松	円墳1基	
18	水城	太宰府市・大野城市	土塁	(国指定特別史跡)
19	神ノ前窯跡群	太宰府市大字吉松	窯跡2基	1978太宰府市教委調査(2基)
20	篠振窯跡	〃　〃	窯跡2基	1974・85太宰府市教委調査(2基)
21	尊田窯跡	〃　〃	窯跡	
22	長浦窯跡	〃　大字向佐野	窯跡1基	1972福岡県教委調査(1基)
23	向佐野窯跡群	〃　〃	窯跡3基	同上　(3基)
24	宮ノ本窯跡群	〃　大字向佐野	窯跡8基	1979・84太宰府市教委調査(8基)
25	谷蟹窯跡	大野城市大字上大利	窯跡1基	消滅
26	野添窯跡群	〃　〃	窯跡10基以上	1969福岡県教委調査(2基)1986大野城市教委調査(3基)
27	大浦窯跡群	〃　大字牛頸	窯跡5基	1968福岡県教委調査(2基)
28	平田窯跡群	〃　〃	窯跡9基	1972立正大学調査(4基)1979～81大野城市教委調査(4基)
29	東浦窯跡群	〃　〃	窯跡3基	1968国士館大学調査(3基)
30	上平田窯跡群	〃　〃	窯跡4基	1972福岡県教委調査(4基)
31	中通窯跡群	〃　〃	窯跡12基以上	1979・80県教委・大野城市教委調査(6基)
32	中通古墳群	〃　〃	円墳19基	1972・73福岡チブサン会調査(13基) 1975県教委調査(1基) 1979・80県教委・大野城市教委調査(5基)
33	原窯跡群	〃　〃	窯跡3基	土取りで灰原の一部を残すのみ
34	ハセムシ窯跡	〃　〃	窯跡30基以上	1987・88大谷女子大学・大野城市教委調査(15基)
35	井手窯跡群	〃　〃	窯跡39基以上	1982～86県教委調査(31基)1988大野城市教委調査(3基)
36	道ノ下窯跡群	〃　〃	窯跡10基以上	1982～86県教委調査(10基)
37	足洗川窯跡群	〃　〃	窯跡5基以上	1982～86県教委調査(4基)
38	笹原窯跡群	〃　〃	窯跡4基以上	同上　(4基)
39	長者ケ原窯跡群	〃　〃	窯跡16基	同上　(16基)
40	野口窯跡群	太宰府市大字吉松	窯跡2基以上	
41	円入遺跡	春日市大字春日	古墳時代住居跡	1981春日市教委調査
42	惣利古墳	〃　〃	円墳1基	消滅(横穴式石室・須恵器出土)
43	春日平田遺跡群	〃　〃	弥生～歴史時代住居跡、古墳	
44	華無尾窯跡群	大野城市大字牛頸	窯跡2基	消滅



第２図　牛頸周辺遺跡分布図（1/2.5万）

45	華無尾遺跡	〃　〃	散布地	旧石器～縄文(ナイフ形石器石鏃等出土)
46	塚原古墳群	春日市大字春日	円墳4基	前方後円墳1基・円墳2基か？
47	日ノ浦遺跡	大野城市大字牛頸	散布地	縄文～中世
48	畑ケ坂窯跡群	〃　〃	窯跡3基	1基消滅
49	畑ケ坂古墳	〃　〃	円墳1基	
50	塚原遺跡群	〃　〃	円墳10基以上 古墳時代・奈良時代住居跡	1987大野城市教委調査
51	胴ノ元古墳	〃　〃	円墳1基	
52	胴ノ元窯跡群	〃　〃	窯跡2基	
53	城ノ山窯跡	〃　〃	窯跡1基以上	窯本体が空洞で露出している
54	楠木遺跡	春日市大字下白水	甕棺墓	弥生(中期)
55	大堤古墳群	〃　大字白水	円墳3基	(満水時水没)
56	イケ谷古墳群	〃　大字上白水	円墳3基以上	(春日原ゴルフ場内)
57	浦ノ原窯跡群	〃　大字下白水	窯跡10基以上	1978春日市教委調査(8基)
58	浦ノ原遺跡	〃　〃	散布地	土師・須恵器
59	後田窯跡群	大野城市大字牛頸	窯跡16基以上	1986大野城市教委調査(16基)
60	後田古墳群	〃　〃	円墳11基	1982・86大野城市教委調査
61	小田浦窯跡群	〃　〃	窯跡13基以上	1976立正大学調査(4基)1982～86大野城市教委調査(9基)
62	小田浦古墳群	〃　〃	円墳3基	1976立正大学調査(1基)1987大野城市教委調査(2基)
63	月ノ浦窯跡群	〃　〃	窯跡2基	1982大野城市教委調査(1基)
64	月ノ浦古墳	〃　〃	円墳1基	消滅(横穴式石室)
65	大谷窯跡群	〃　〃	窯跡12基以上	1971国士館大学調査(4基)
66	石坂窯跡群	〃　〃	窯跡20基以上	1983・89・90大野城市教委調査(7基)
67	足洗川遺跡	〃　〃	散布地	旧石器(石刃出土)
68	上大利水城	〃　上大利	土塁	(国指定特別史跡)
69	出口遺跡	〃　下大利	弥生～奈良の集落跡	1989大野城市教委調査、『出口遺跡』

Ⅲ．調査の結果

(1) 調査概要

後田・小田浦両古墳群の発掘調査は主に牛頸土地区画整理事業に伴って実施されたものであるが、すべて同時期に行ったものではない。特に小田浦１号墳は1976年（昭和51年）立正大学教授坂詰秀一氏を団長とする小田浦窯跡発掘調査団によって調査されている。後田古墳群も２時期に分けて調査を行っている。したがって、調査年次を以下に明記する。

1　後田２～４号墳（第１図42）　1982年11月～1983年２月（大野城市教育委員会）

2　後田１、５～11号墳（第１図43、53、44）　1986年10月～1987年２月（大野城市教育委員会）

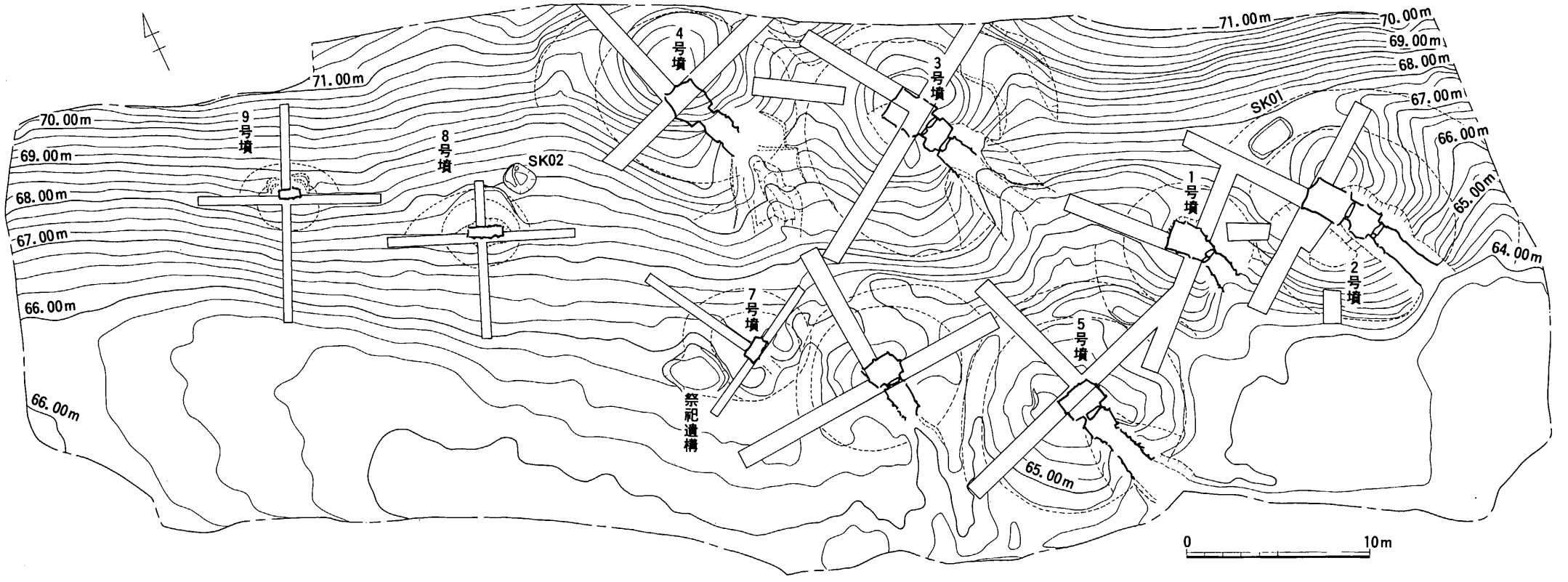
3　小田浦１号墳（第１図37）　1976年（立正大学）

4　小田浦２～３号墳（第１図37）　1987年２月～３月（大野城市教育委員会）

今回報告するのは１、２、４の調査分である。なお、１については地形測量図と調査のあらましを報告したことがある。(注1)

後田古墳群は11基から成る古墳群であるが、１～９号墳がまとまって造られているのに対し、10号墳がやや離れて立地し、11号墳はさらに離れて造られていた。10号墳が墳丘、石室ともに最も大きい円墳で盟主的な古墳と考えられる。１～６号墳は通常の横穴式石室を持つ円墳で、かなり接近して造られている。１号墳は玄室から墓道がわん曲しているが、２号墳に規制されたものではないかと考えられる。７号墳は横穴式石室の形をなしているが、大変小型のもので、本来の横穴式石室と同様の性格を持つものかどうかは疑問がある。また、７号墳の周溝の一部が土坑状に掘り広げられており、焼土とともに須恵器蓋杯、土師器の甕、甑などが出土した。古墳の祭りの一形態と推測されるが、興味深いものである。８～９号墳は小石室を主体部とするもので、墳丘や周溝が明確でないものである。10号墳は先述したようにやや離れて立地する盟主的な古墳である。しかし、開口していたため玄室内にはほとんど遺物がなかった。10号墳はやや離れて立地すると言っても、１～９号墳と同じ向きの斜面に造られているが、11号墳はそれらの南隣の丘陵にある。複数の古墳があれば、別の支群として把える方が適当かもしれないが、１基のみであるので一応連続した番号で呼ぶものにした。主軸と直交して断ち切られたような形で見つかったものである。斜面下位にあるが、谷側にあたる方の墳丘もほとんどなかった。現況写真を撮った後で天井石と上位の石を事故防止のため落として調査した。

小田浦古墳群は小田浦37－Ⅰ号窯跡の下方にあったもので、横穴式石室を持つ小円墳３基が見つかった。本市教育委員会が発掘調査したのはそのうちの２基である。２号墳は墓地の中に



第３図　後田古墳群地形実測図（1/300）

埋もれていたもので破壊の程度がはなはだしかった。3号墳は比較的残りが良かったが、開口していたため出土遺物は少なかった。

〈註1〉『牛頸地区遺跡群Ⅰ』大野城市教育委員会　1985

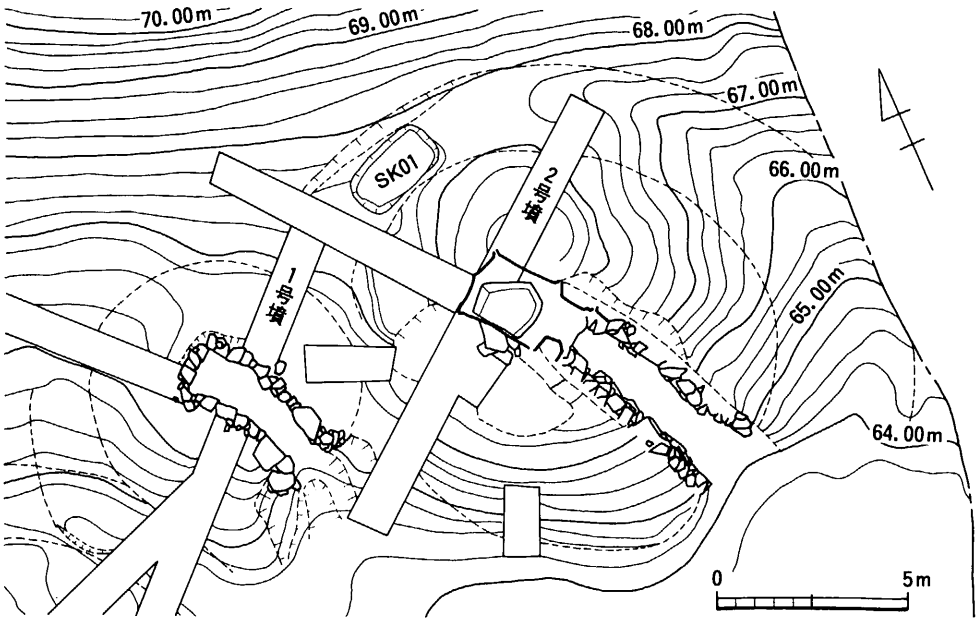
(2) 後田古墳群

調査前は段々畑の段の部分に石室を構成する大石がいくつか見え、また石室の中がのぞける部分がある程度で、2～3基の古墳の存在は推定できたが、全体で何基あるかは全くわからない状況であった。したがって、最初は手掘りで古墳の全体を出すように務めたが、土量が膨大なため重機を用いて表土を除去した。その結果、1～9号墳が1グループで、離れて10号墳と11号墳が確認された。

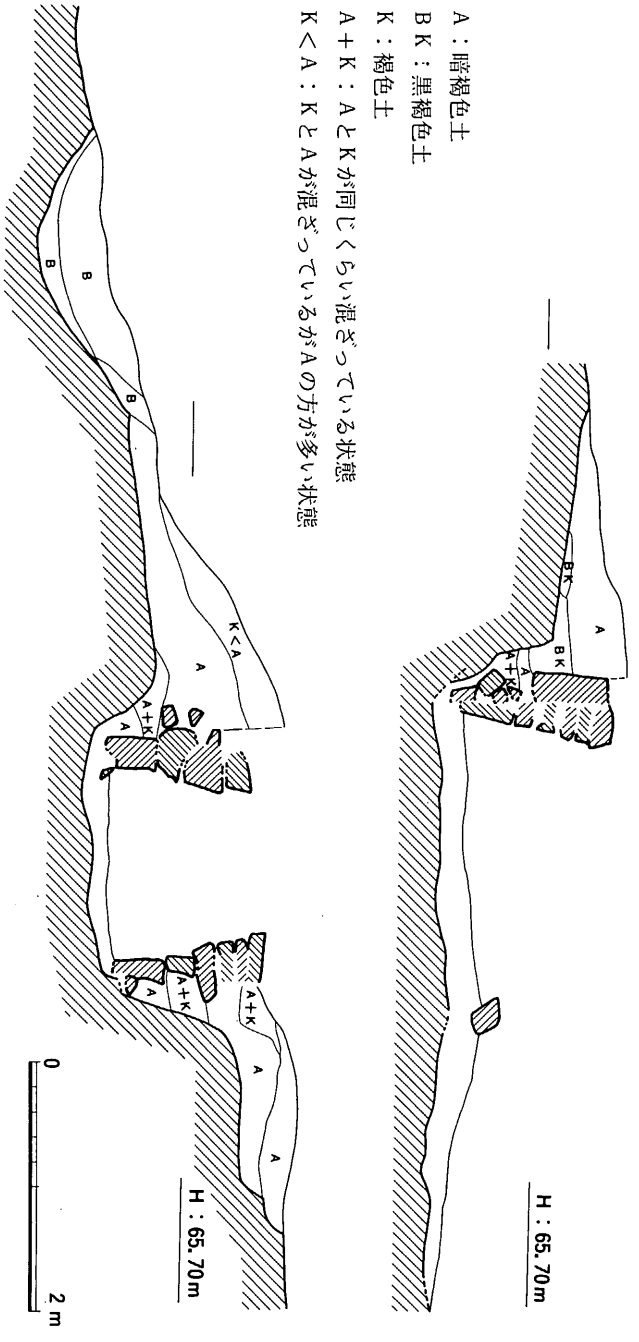
1．1号墳

1）．立地と現況（第3・4図）

西から東へ伸びる丘陵の南斜面に位置する。丘陵は最高所で約85m、下で約65mとそれほど比高差のないものである。1～9号墳はほとんどひとまとまりで群在しているが、標高で言え



第4図　後田1・2号墳地形実測図（1/200）



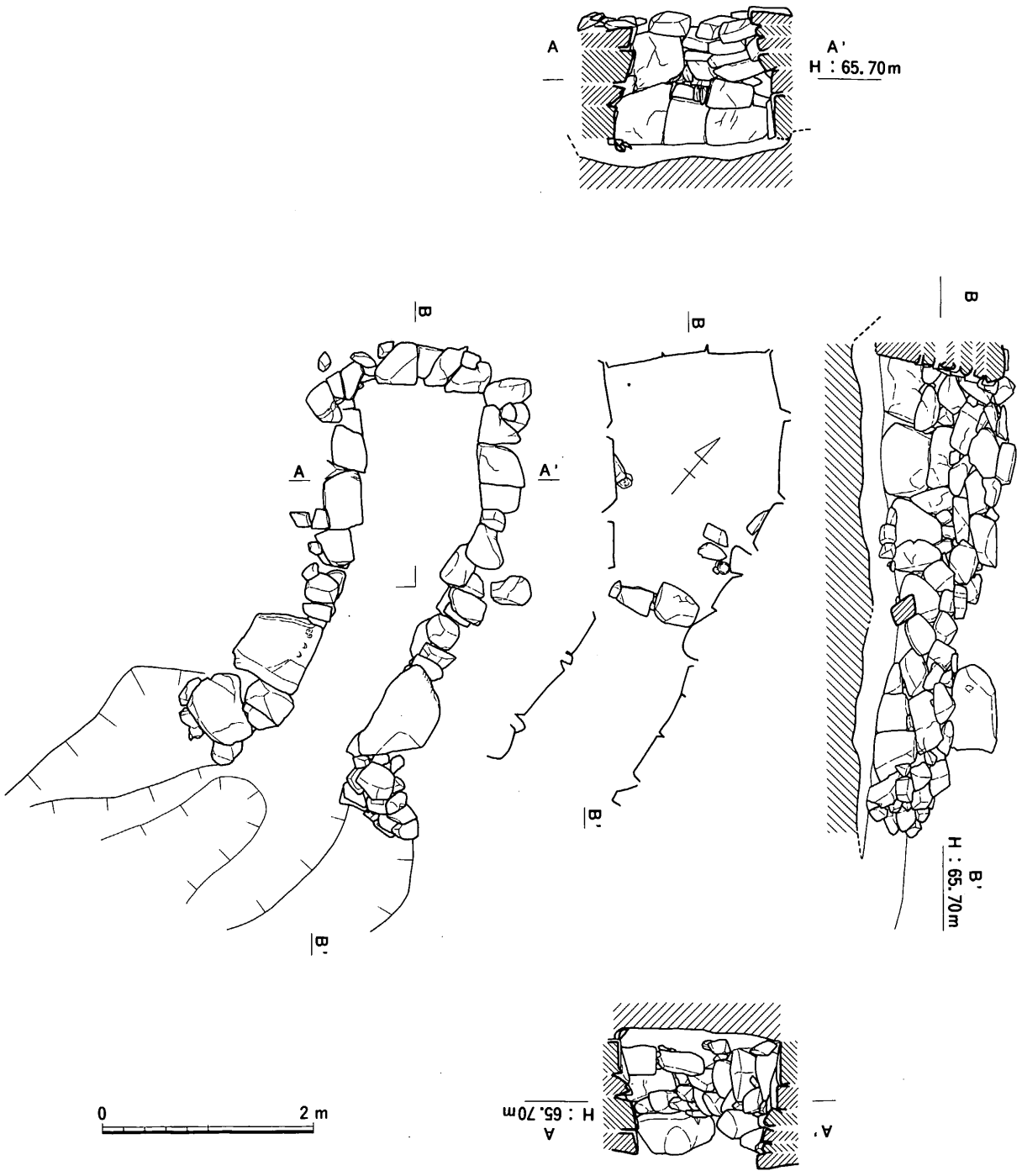
第5図　後田1号墳墳丘断面実測図（1/60）

ば65～75ｍの高さにある。前述したように、ほとんどが段々畑の中に埋没していたため古墳の総数がわからず、発見順に号数を付けた。したがって、1号墳と2号墳を入れかえた方が理解しやすいが、混乱を防ぐためそのままにしている。1号墳は玄室のレベルが標高65ｍの高さに位置し、東側の2号墳と接するようにして造られている。また西南側に5号墳があるが、これも周溝と接している。調査時には天井石と石室上位の石がなく、石室内には落ち込んだ土が充満していた。

2）．墳丘（第5図、図版5）

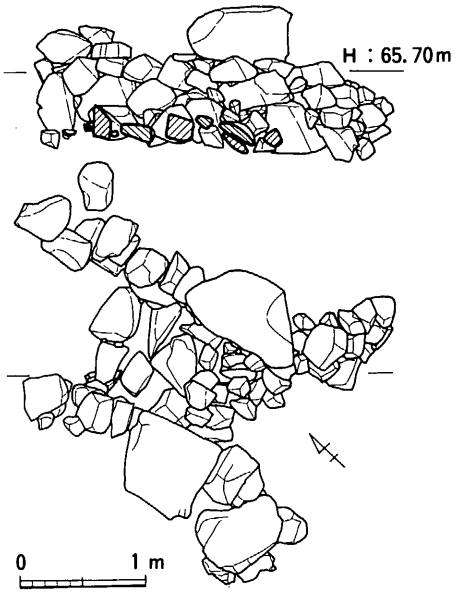
前述のような状態であったため、1号墳の墳丘の封土は、検出時にすでに上位の部分が失われており、本来の高さを知ることはできなかった。しかし、最も残存状態の良い部分では、石室の掘り込み面から約1ｍの高さを測った。

周溝は、斜面の下部にあたる南西部から南部にかけて（石室主軸と直交する方向）その一部が認められるが、これ以外の部分では明



第６図　後田１号墳石室実測図（1/60）

らかでなかった。この部分で石室中心からの距離を測ると、周溝内側で約3.6m、外側で約5.9mであり、周溝の幅は約2.3mであった。ただし、この部分は5号墳の東側の周溝と接しているため、1号墳の周溝が、本来幅約2.3mを有していたかどうかについては検討を要するものである。斜面上部の石室直交方向については、墳丘の裾と考えられる部分と石室中心との距離は約3mであった。これらのことから、主軸と直交する方向の直径は約6.6mという数値が考えられる。一方、主軸方向での規模を考えると、墓道の先端部でかつ墳裾と考えられる部分までは、石室中心から約3.4mを測った。また、これと反対側では、石室中心から墳裾と考えられる部分までの距離は約3.6mであった。以上のことから、1号墳については直径6.6～7mという墳丘規模を考えることができる。

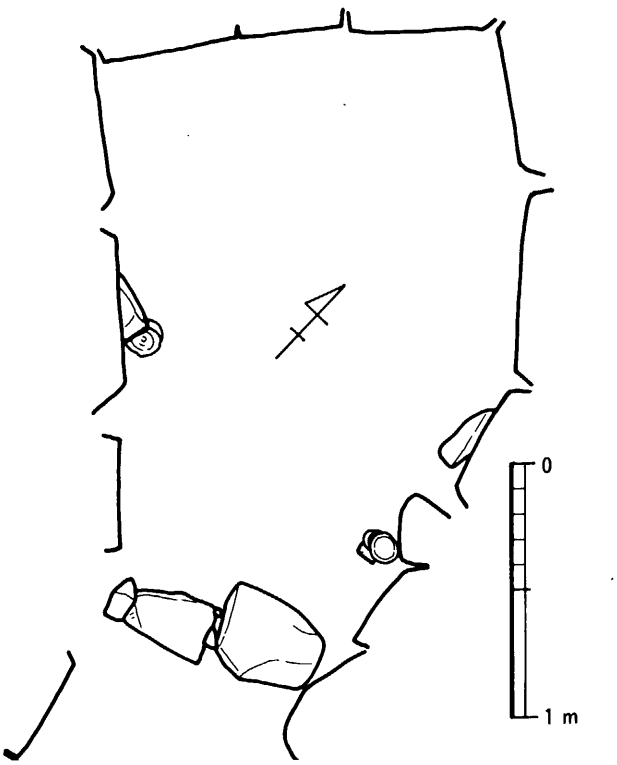


第7図　後田1号墳閉塞状況実測図（1/60）

墳丘の盛土について見てみると、石室を構築するために、まず地山を掘りこんでから腰石を据え、順に上位の石を積んでいっているが、石の裏側に積んでいる土は、いずれのトレンチにおいてもかなり粗い盛り方を示していた。また、墳丘の封土も、残っている部分の土層観察によれば、厚さ25～80cmほどの土を、墳丘全体にわたって一気に積み上げるようなやり方で盛られていたものと考えられる。

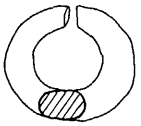
3）. 石室（第6図、図版5）

石室は、ほぼ南に開口しており、左側壁を見る限りでは単室無袖の横穴式石室であるが、右側壁を見ると、奥から3石の腰石が並び、その隣りに柱状の袖石が置かれている。また、

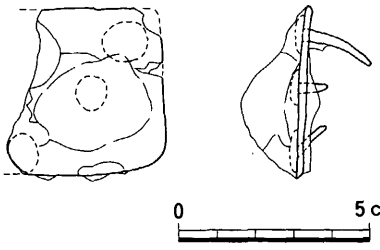


第8図　後田1号墳遺物出土状態実測図（1/30）

この袖石から1石をはさんだ石を見ると、柱状ではないものの石室の中心軸方向に突出するように置かれており、やはり袖石と考えることができる。したがって、ここでは記述の都合上、石室中心に近い柱状の袖石までの部分を玄室、そこからさらに外側の柱状でない袖石までの部分を前室と考えておくこととする。このため、前室部分は三角形状の平面形を呈する。このような変則的な形となったのは、羨道のみならず石室の一部をも南方向に振っているためである。すなわち、石室主軸は一応N－43°－Wに求められるが、奥壁から2番目の右側の腰石が、この主軸に対して約4°南に振れるように置かれている。さらに、その手前の3番目の腰石は主軸から約30°南に振られており、羨道はほぼこの延長線上に平行になるように作られている。したがって、羨道の主軸はN－4°－Wに求められ、南に向かって開口する結果となっている。後田古墳群の中には、他にもこのように羨道を石室に対して振って作っている例があるが、1号墳については、東隣の2号墳の存在を強く意識し、これを避けようとしたものと考えられる。



第9図　後田1号墳出土装身具実測図(1/1)

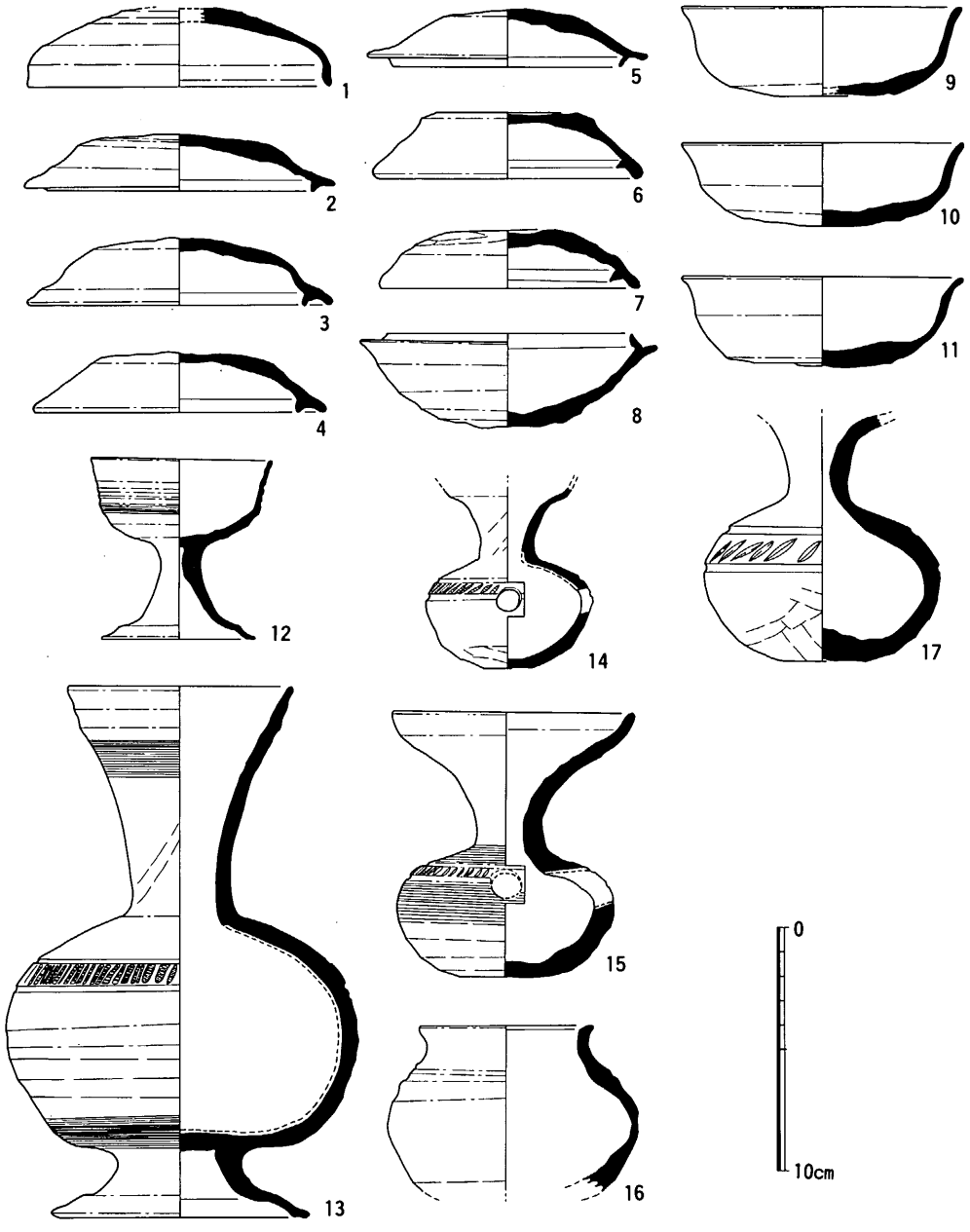


第10図　後田1号墳出土鉄器実測図（1/2）

玄室の平面形はゆがんだ長方形で、左側壁長は1.9mを測る。右側壁は直線状ではないが、奥壁と接する部分から袖石の最も石室中心に近い部分までで1.85mを測る。幅は、奥壁側で1.55m、中央部で1.55m、玄門部側は1.3mを測る。前室は三角形状を呈しており、袖石に接するように框石が置かれている。框石は2石で、その幅は約0.8mである。玄室・前室ともに敷石は残っていなかった。羨道は、ほぼ南向きに約1.8m続いている。

奥壁は腰石として高さの違う3石を用いている。床面からの高さは、左側壁側が58cm、中央部が46cm、右側壁側が35cmである。このため、2段目以上の石の積み方もそれぞれに違っている。まず左側壁側は、腰石の上に50×45cm程度の石を直接置いて2段目とし、側壁とのすき間を18×10cmほどの平行四辺形の石で埋めている。さらにその上に40×25cmほどの平らな石を横にして積んであるが、この石と左側壁との間にはややすき間がある。あるいは、このすき間を埋めていた石が落ちてしまったのかもしれない。中央部では、腰石の上に1石を横、2石を縦にして積み、縦にした2石の上にさらに平らな石を置いている。左右との高さを合わせる意味で、ここまでを2段目と考えたい。その上に27×27cm程度の菱形の石を置き、左の2段目とのすき間を小ぶりな3石をもって埋めている。そして、この菱形の石の上に平らな1石を横にして積み上げ、左側の石積みと高さを合わせている。右側壁側では、腰石の上に40×25cmほどの台形の石を積み、側壁との間を2石をもって埋めている。これが2段目であるが、台形の石が

向かって右下りであるため、その右端部に小石を横にして積んで高さを合わせている。これより上位の部分は、厚さ10～20cm程度の石を横にして３段重ねている。以上述べてきたようにして、奥壁は床面から約１ｍの高さに合わせて整えられている。さらにこの上に左・中・右それ



第11図　後田１号墳出土土器実測図（1/3）

ぞれ１石ずつが積まれているが、これらの３石は、いずれも原位置から石室中央方向へ動いているようである。側壁は、左右ともに腰石として３石を用いている。一見して、右側壁よりも左側壁の方が、整然と石を積み上げていることがわかる。右側壁の場合は、床面からの腰石の高さが奥の方から35cm、45cm、55cmと違っている。したがってそれぞれの２段目は高さを合わせるように積み上げられている。奥壁側では、腰石の上に厚さ15～25cmほどの２石を置き、その間を小石で埋める。この２段目の上に、25×40cmほどの菱形に近い１石を置く。この石の上面で、中央部と玄門側の２段目とだいたい同じくらいの高さに調節しているが、後２者に比べると10cmくらい高くなっている。また、中央部の２段目の石とのすき間を15×25cmほどの石で埋めている。中央部は、腰石の上に厚さ約20cmの石を積み、２段目としている。また、中央部と玄門側の腰石の間のすき間は、25×45cm程度の細長い石で埋めている。玄門側では、腰石の上に小さな２石を置き、高さを調節している。これ以上の部分は、中央部と玄門側では厚さ10～20cmほどの石を横にして積み上げている。奥壁側では積み方がやや乱れ、むしろすき間を石で埋めているような観を呈している。袖石は、右側では高さ約50cmの柱状の石を壁からせり出させて立ててある。左側にはこのような施設は見られない。

変則的ではあるが、前室とした部分は側壁は右側しかないことになるが、前室框石内側までで約0.45ｍを測る。三角形に近い石を腰石としているが、石材をあまり選んだ形跡がなく、人頭大かそれより小さめの石を形状に合わせて積み上げている。羨道部の石積みは、左右ともに高さ20～40cm程度の石を２～３段積み、その上に80×50cm強の大きな石を置いている。石室内に比べると、積み方がやや粗い感じを抱かせる。

閉塞は、前室の框石の部分で行われている。ただし、閉塞石自体は框石の上に積まれていたものが、調査時にはすでに羨道上に崩落していたと考えられる。しかし、最終的な閉塞としてこのような形にした可能性もある。

墓道は羨道と同じ向きで若干認められる程度である。羨道に近い部分は石組みを持つ。この部分に連続する石組みは外護列石の可能性がある。

４）．出土遺物（第９～11図、図版８・９）

出土遺物は以下のとおりである。なお、材質、用途などによって分類の仕方も変わるが、すべての種類があるわけでもないので、便宜上次のような分類をした。

装身具	耳環	1
鉄　器	留金具	1
須恵器	杯蓋	7
	杯身	4
	高杯	1
	甕	2

壺２

台付長頸壺　１

出土状態（第８図）

玄室内床面より出土したのは、耳環１点、須恵器杯蓋３点、杯身２点である。耳環は玄室左奥に近いところから出土した。対になるべきもう１点を探したが、結局発見できなかった。須恵器は、左側壁近くの中央部から杯蓋２点（第11図２・４）、袖石近くから杯蓋１点と杯身２点（第11図３・10・11）が、いずれも重なった状態で出土した。その他の須恵器は羨道からの出土が５～７・９・12・14・15・17、墓道からの出土が13・16、周溝からの出土が１・８である。また、鉄器は玄室内埋土中の出土である。

遺物

装身具（第９図、図版８）

耳環（１）外径で1.5×1.7cm、断面が0.6×0.4cmを測る小さな耳環である。青銅に鍍金したもので、重さは3.95ｇを測る。所々緑青がふいているが、金の輝きを失っていない。

鉄器（第10図、図版８）

留金具（１）錆化が激しいため不明な部分が多いが、現存長で4.2×4.5cmの長方形状を呈した鉄板に、対角線に添うような形で鋲が打たれたものである。このような形状からして留金具とした。出土状態から考えて古墳時代のものとして良いか疑問もある。

須恵器（第11図、図版８・９）

杯蓋（１～７）２号墳出土遺物の項でやや詳しく述べるがタイプに分けて記述したい。１のようにかえりのないものをＡタイプ、２～７のようにかえりのあるものをＢタイプとする。ＢタイプはさらにつまみのあるB_1タイプとつまみのないB_2タイプに分ける。したがって、２～７はすべてB_2タイプということになる。

Ａタイプは１個しかないが、口径12.3cmを測るもので、口縁部が直に折れ曲がるものである。天井部外面をヘラケズリし、その他をヨコナデとナデで仕上げる。B_2タイプは口径10.6～12.8cmのもので、かえりが高く外へ出るもの（２・５）もあるが、口縁部とほとんど同じぐらいの高さのもの（３・４）、退化して完全に中に隠れてしまうもの（６・７）がある。形態的には口縁部が外へ開くもの（２・３・５）と、開かずに体部の傾斜を保ちながらそのまま終わるもの（４・６・７）の２形態が見られる。

杯身（８～11）８のように立ち上がりを持つものと９～11のように立ち上がりを持たないものがある。前者をＡタイプ、後者をＢタイプとする。Ａタイプの８は口径10.1cm、受部径12.2cm、器高3.9cmを測るもので、立ち上がりは内傾し低い。立ち上がりの接合部は沈線状に稜が入る。底部外面はヘラケズリを行わず、未調整である。その他はナデ、ヨコナデで仕上げる。Ｂタイプは口径11.4～11.5cm、器高3.5～3.7cmを測るものである。斜行する体部と外反す

る口縁部が特徴である。また、体部中位でゆるい屈曲点を持つ。口径的に見て、Bタイプの杯蓋と合う。

高杯（12）杯部の口径7.3cm、器高7.5cmを測る小型のもので、杯部には3条の沈線とカキ目を施す。脚部は下位で屈曲する。ヨコナデ、ナデで仕上げる。

台付長頸壺（13）器高21.9cm、口径9.1cmを測るものである。球形に近い胴部にやや外開きの口頸部と短い脚台が付く。頸部上位にはカキ目を施す。また、シボリ痕が見える。胴部は肩部に約1cmほどの間隔を置いて2条の沈線を入れ、その間を刺突文で埋めている。ただし、施文の順番としては目安になる線は先に入れただろうが、刺突文を施した後に沈線を入れている。胴部中位はヨコナデをし、下位は粗いヘラケズリ、さらにその下にはカキ目を施している。台部（脚部）はわずかに屈曲し、丸い端部で終わる。内外面ともヨコナデで仕上げる。

甕（14・15）14はやや小型のもので、胴部最大径6.9cmを測る。球形の胴部中位に円形の孔がうがたれており、その上半部の高さにそって2条の沈線を入れ、その間を刺突文で埋めている。底部外面は手持ちヘラケズリを行い、その他はヨコナデする。頸部はややシボリ痕が見えるが、ヨコナデを行っている。15は14に比べ平坦に近い底部を持ち、扁球形気味の胴部と、大きく開く口頸部を持つものである。口頸部は段を持たずにゆるやかに広がるのが特徴的である。ヨコナデで仕上げる。胴部は14同様に孔の上半部の高さに添う形で2条の沈線を入れて、その間を刻目で埋める。上半部にはカキ目、下半部並びに底部にヘラケズリを施す。口径9.6cm、器高10.7cmを測る。

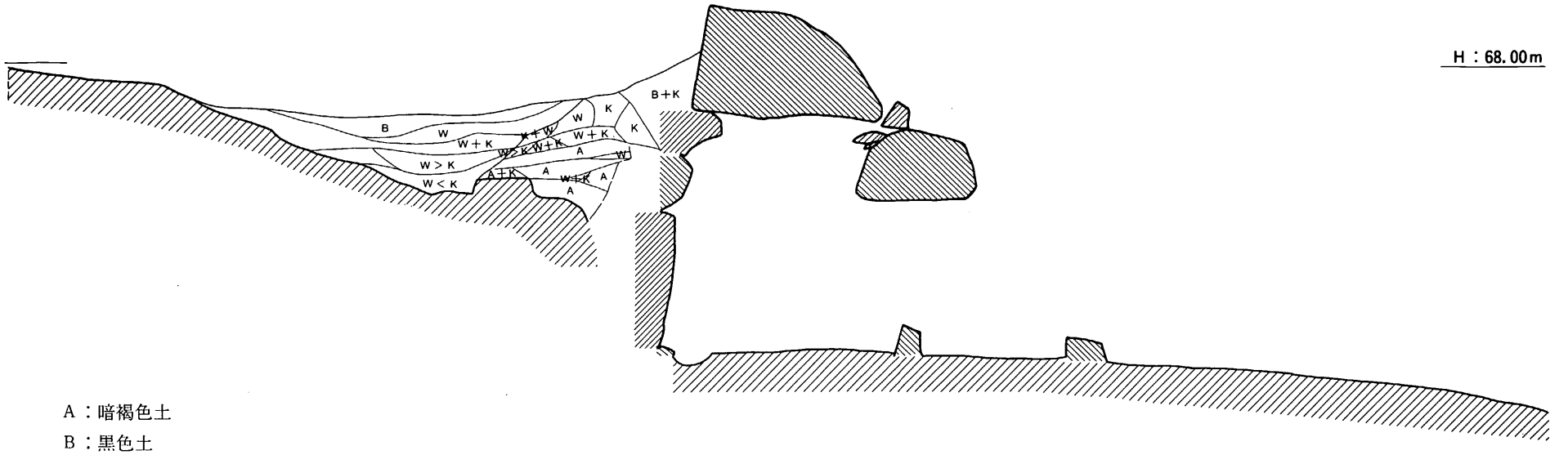
壺（16・17）16は口径7.0cmを測るもので、広口壺の部類に入るものであろう。内外面のほとんどをヨコナデするが、失われた底部付近にややヘラケズリの痕跡が見られるので、底部はヘラケズリしたものかもしれない。また、底部内面に同心円文状の当て具痕が残る。17は形態的には甕であるが孔をうがっていない。胴部上位に2条の沈線を入れ、その間に刻目を連続して入れている。底部外面を手持ちのヘラケズリを行い、その他をヨコナデで仕上げる。また、頸部にはシボリ痕が見える。

2．2号墳

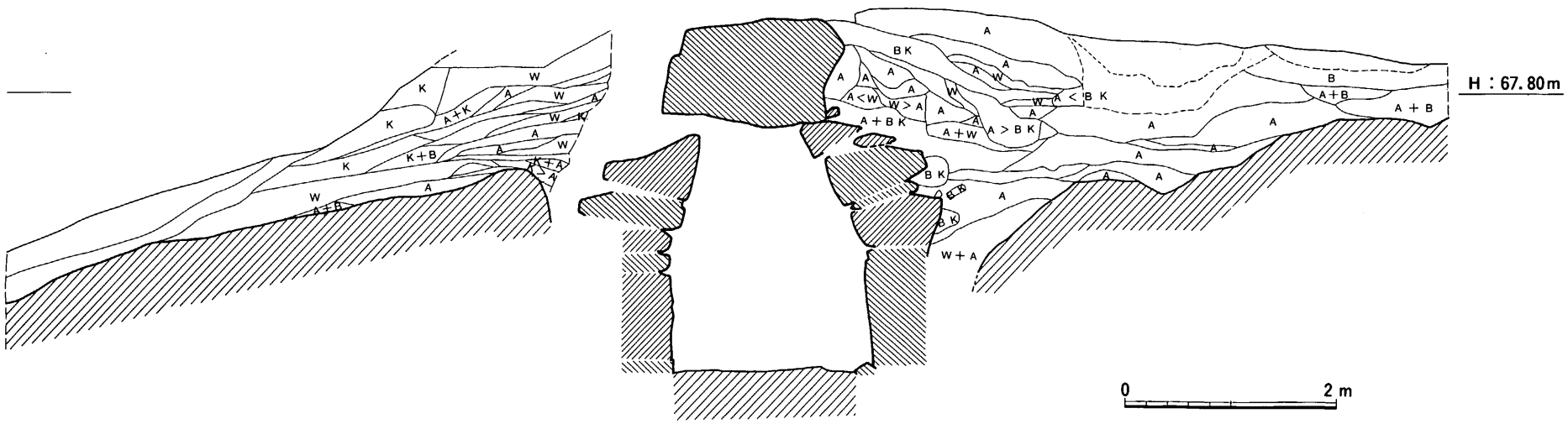
1）．立地と現況（第3・4図）

1号墳の東に接して造られているが、後田古墳群全体で見ても最も東に位置する。玄室のレベルは65.20mである。

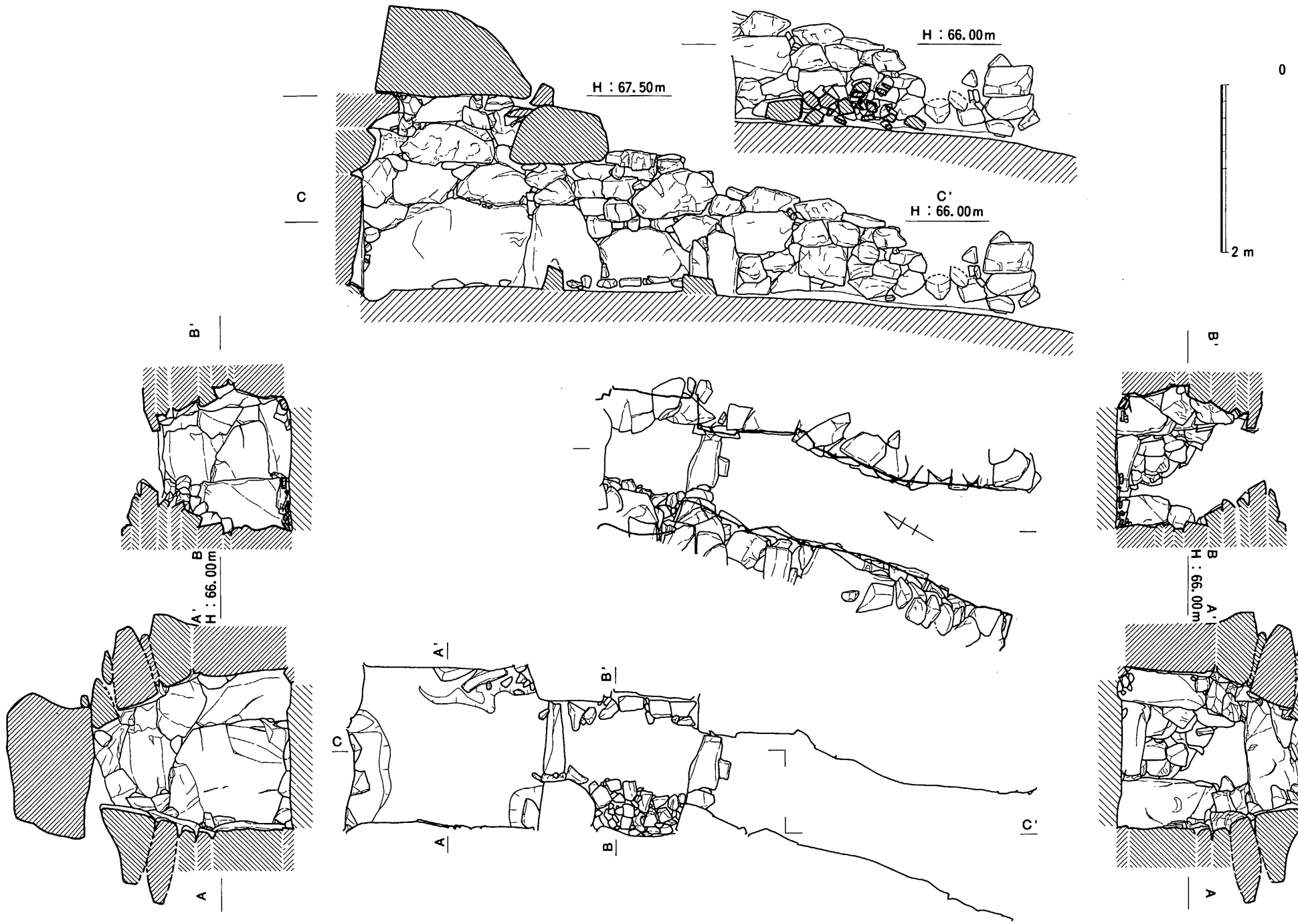
段々畑の段に当初から天井石の一部が見えていた古墳である。また、玄室の天井石は残っていたが、玄室上位の一部の石が崩落していた。玄室内には土がだいぶ流れ込んでいたが完全に埋まりきってはいなかった。



A：暗褐色土
B：黒色土
W：白褐色土
BK：黒褐色土
A＋W：AとWが同じくらい混ざっている状態
A＞W：AとWが混ざっているがAの方が多い状態



第12図　後田２号墳墳丘断面実測図（1/60）



第13図　後田２号墳石室実測図（1/60）

2）. 墳丘（第12図、図版10）

2号墳は1次調査で発掘調査した古墳であるが、予算などの関係もあって、墳丘のすべてを掘り出したのは2次調査の時であった。また、前述のように玄室上部の石の一部が崩落し、その部分の封土も落ち込んでいた。このため、封土は天井石より下の部分しか残っておらず、本来の高さを知ることはできない。

また、周溝については斜面上位に当たる北側と北西側にやや認められるが、その他の部分については明確ではない。周溝の認められる部分で、玄室中心からの距離を測ると周溝内側で約3m、外側で約5.5mである。一方、周溝は確認できないが、墓道の先端部で、かつ、墳丘の裾と考えられる部分と玄室中心の距離は約7mである。したがって、主軸方向での規模は墳丘の直径が約10m、周溝外側までは12.5mという数値が考えられる。一方、主軸と直交する方向での規模を考えると、周溝が明確でないためわかりにくいが、玄室中心から墳裾まで西側で約6m、東側でも約6mという数値が得られる。以上のことから墳丘の直径は10～12m、周溝外側まで含めると12.5mという規模が考えられる。

次に墳丘の盛土について見ると、まず石室を構築するため、地山を掘り込んで腰石から順に石を積み上げていったと考えられるが、石の裏側に積んでいる土は西側ではかなり叩きしめたか薄い層が多く観察できるが、その他のトレンチの土層は比較的あらい盛土の仕方を示している。これは、斜面下方に当たる西南側を特に注意深く盛土していったことを示すものと考えられる。土は白褐色砂質土、褐色土、暗褐色土（こげ茶色）、黒色土を積み上げていっている。旧表土面が残る部分については特に焼土層などが認められない。また、後田古墳群全体について言えることだが、地山面、旧表土面が判別しにくい土質で、したがって、石室掘り込み面がわかりにくい場合が多々あった。

3）. 石室（第13図、図版12）

南方向へ開口する複室の横穴式石室である。玄室の主軸はN－31°－Wの向きを示すが、前室、羨道・墓道と進むに従って向きが（奥壁へ向かって）左へ振れる。墓道での主軸方向はN－16°－Wとなる。東側には古墳その他の遺構はないので、向きを変えなければならない理由がわからない。

玄室はほぼ長方形を呈し、長さは奥壁に向かって右の側壁長1.95m、左側壁長2.3m、幅は奥壁側で1.85m、玄門側で1.9m、高さ2.3mを測る。奥壁は床面からの高さが1.5mの大石を1石据えている。右下がりの石のため、それに合わせ、かつ右側壁最奥の腰石との間を埋めるため、小ぶりの石から中位の石を詰め、高さを整えてさらに80×50cmほどの石を積んでいる。奥壁中心部では腰石を含め3段石を積み上げた後に天井石に至る。しかし、腰石を初めとしてそれほど整った石を選んでいないため、やや雑然とした感じはいなめない。奥壁に比べ側壁特に右側壁は比較的整っている。腰石は奥壁側がやや下がるが、高さ1.1m、幅2.0m以上の上端

が平坦な大石を使用している。その上に高さ50cm、幅80cmほどの石を２石積み上げている。また、奥壁との境にはおよそそれらと同じぐらいの大きさの石を角切りするような形でさしかけている。さらに３段目には高さ50cm、幅1.1ｍほどの石を中央に積み、左右に比較的小ぶりの石を積んで調整している。そして４段目はやはり中央に大きめの石を積んで左右をやや小ぶりの石で整えている。側壁は全体的に見ると中央部は重箱積みの観を呈している。天井石はその上にのり、1.6×1.85ｍ、高さ１ｍの大石を使用している。床面からの高さは約2.3ｍである。袖石は高さ１ｍ以上の大石を据え、その上に高さ30cm、幅50cmほどの石を２石置いて楣石をのせる。また、床には細長い石を框石として据える。玄門部は幅が約１ｍ、高さ約1.2ｍとなる。

前室は前述のように主軸がやや西に振れるが、おおよそ横長の長方形状を呈する。右側壁長1.1ｍ、左側壁長１ｍ、幅約1.6ｍである。腰石には１石の大石を据え、その上は大ぶりの石と小ぶりの石を高さを調節しながら２～４段積み上げている。前室の天井はなかったが、側壁の状態からすれば楣石の底面よりそれほど高くはなかったのではないかと推定される。袖石は高さ80cmほどの石を据えて、その上に中位の石を２石積み、楣石を受けるためであろう大石を側壁側から角切りするようにかけわたしている。袖石間は約0.8ｍである。

羨道は前室袖石の外側約1.3ｍの部分と考えられる。比較的大ぶりの石を用いる。

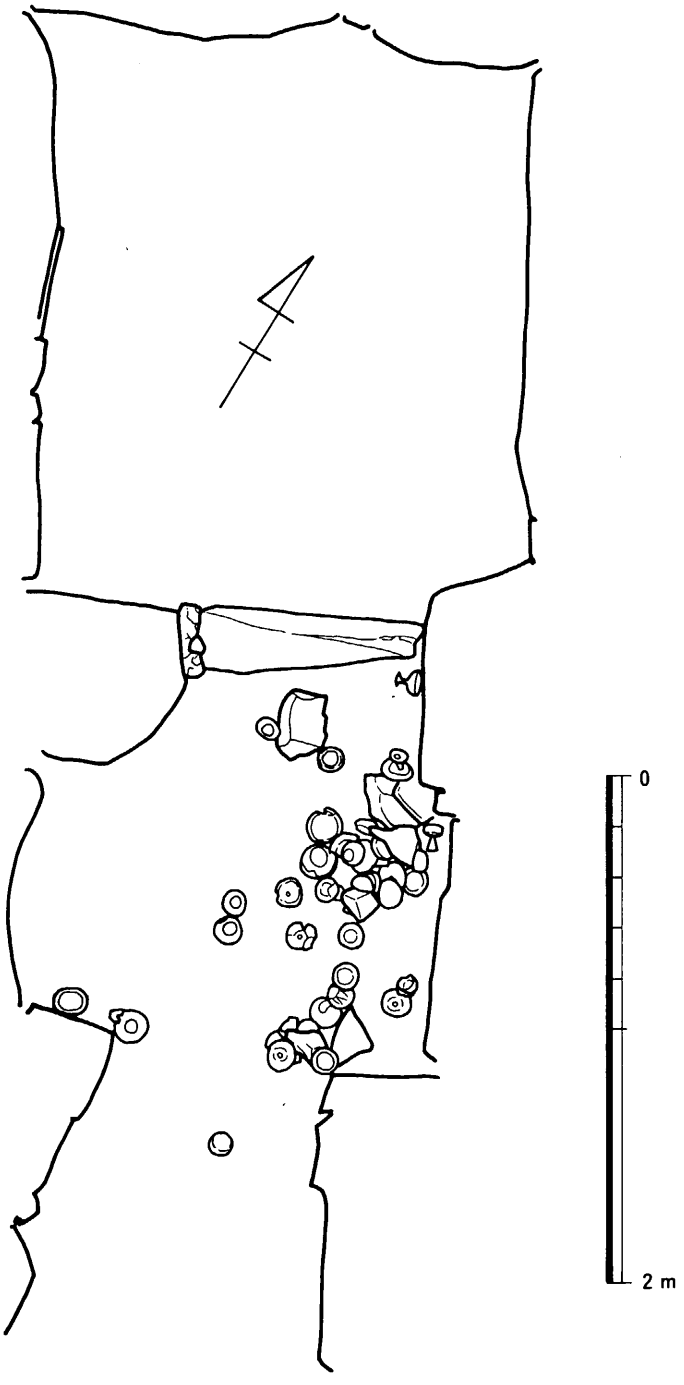
石組み墓道が約2.3ｍ続く。

閉塞については、第13図に示すとおりの状況であったが、前室框石からやや離れていることもあって、どれだけ元の状況を示すかわからない。ただ一番大きな石が最も框石側にあることからその近辺が本来の位置ではないかと考えられる。最下段にやや大きめの石を使用した以外は人頭大あるいはそれより小さめの石を積み上げて閉塞したものと想定できる。

４）．出土遺物

出土遺物は以下のとおりである。なお、材質、用途等によって分類の仕方も変わるが、すべての種類があるわけでもないので、１号墳同様便宜上次のような分類をしている。

装身具	管玉	1
	耳環	1
	小玉（ガラス玉）	3（磨滅激しく図示せず）
鉄　器	鏃	8
	刀子	1
須恵器	杯蓋	25（図示22）
	杯身	34（図示28）
	高杯	6（図示４）
	平瓶	５？（図示３？）
	壺	1

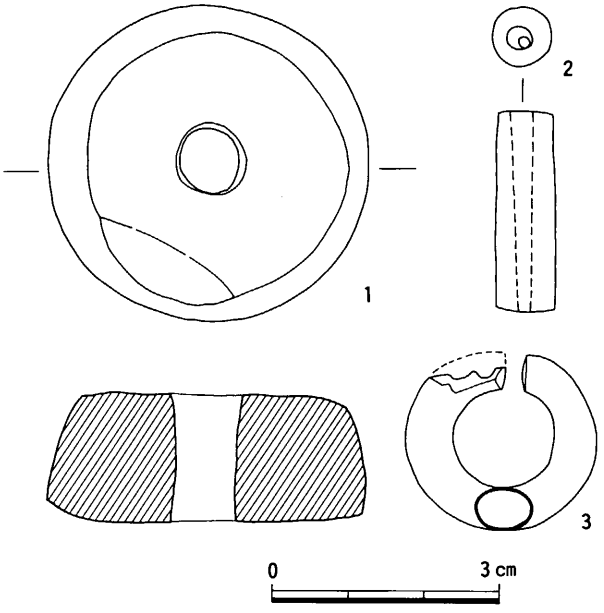


第14図　後田２号墳遺物出土状態実測図（1/30）

その他　　石製紡錘車　1

出土状態（第14図、図版13）

前室から須恵器を中心にかなりの遺物が出土した。第16図５～７を除いた鉄器と装身具も前室からの出土である。その他は、鉄鏃５～７が羨道、紡錘車が墳丘上で、前室以外から出土した須恵器は、42・43・45・47・48・50・52～55・58が羨道から、44・46・49・56・57が墳丘からで、出土位置の確定できないものが、51・54である。

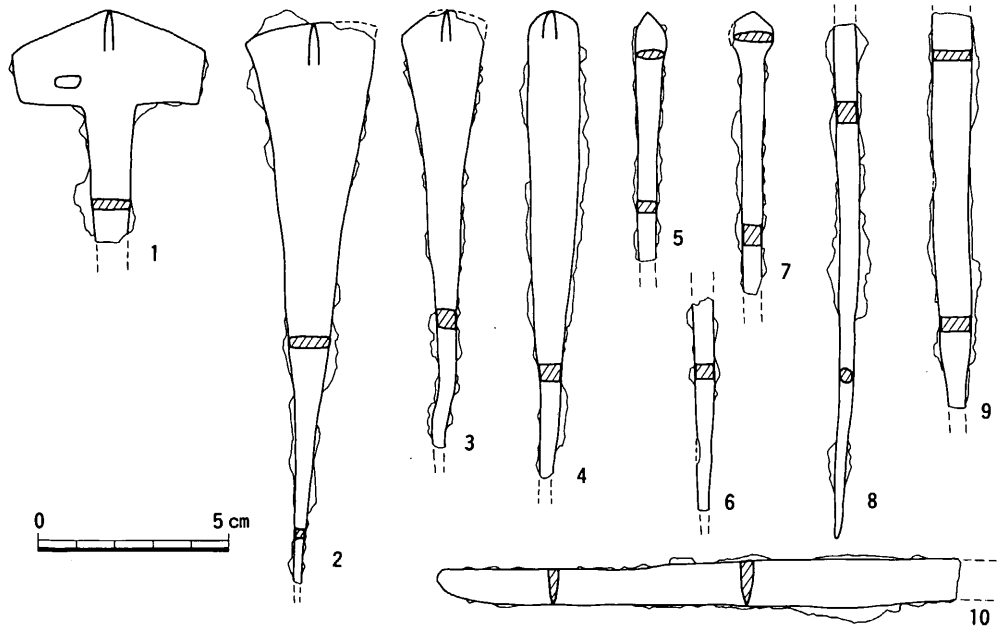


第15図　後田２号墳出土装身具実測図（1/1）

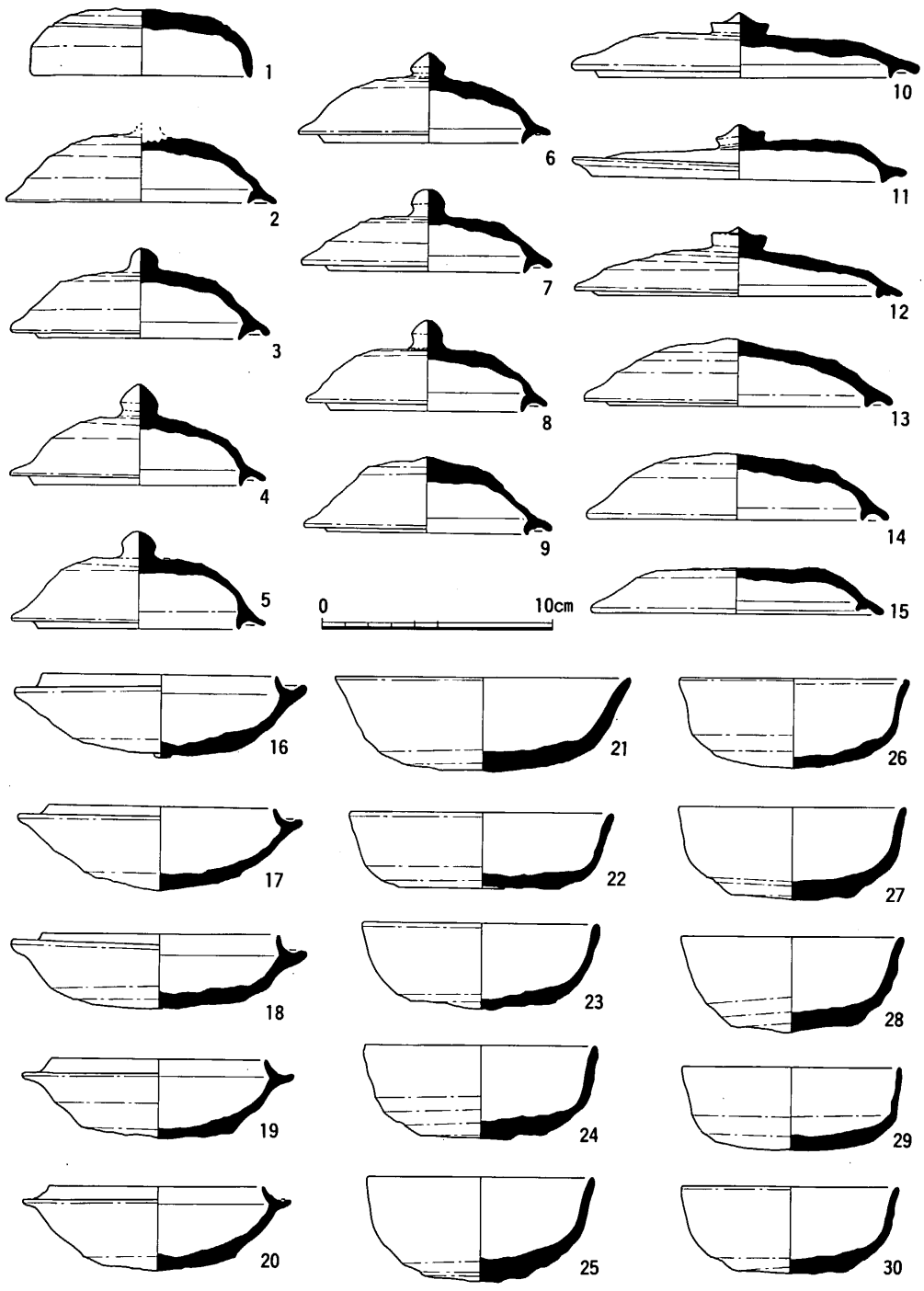
遺物

装身具（第15図、図版14）

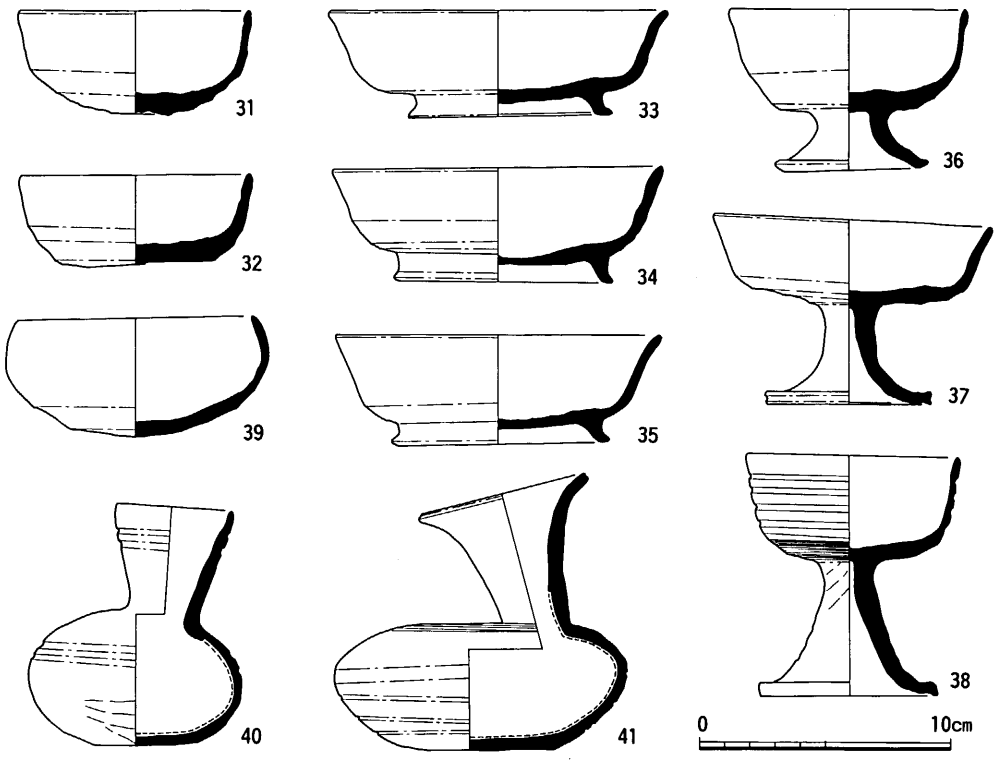
管玉（２）碧玉と思われる濃緑色の石製である。長さ2.7㎝、径約0.8㎝を測り片側から穿孔されている。



第16図　後田２号墳出土鉄器実測図（1/2）



第17図　後田２号墳前室出土土器実測図①（1/3）



第18図　後田２号墳前室出土土器実測図②（1/3）

耳環（３）中空になっており、青銅管に鍍金したものである。最大径2.6cm、管の断面は約７×５㎜の楕円形を呈するものである。

その他の石製品（第15図）

紡錘車（１）滑石と思われる灰白色の石製で、ほとんど完形品である。断面はやや台形状を呈し、上端部は径約3.6cm、下端部は径約4.2cm、そして孔径は約１㎜を測る。穿孔は両側からしたものと考えられる。重さは54.9ｇである。

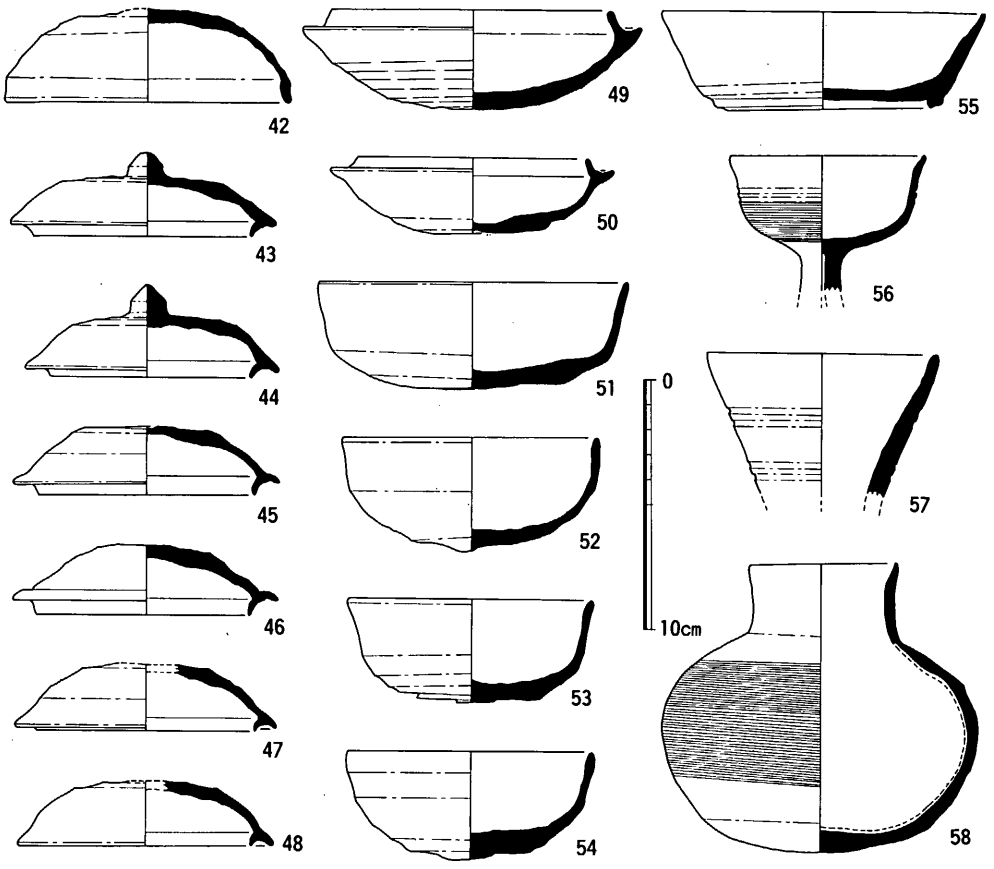
鉄器（第16図、図版14）

鉄鏃（１～９）１は変形飛燕形式に属し、片方にのみ穿孔がある。２・３はやや疑問もあるが円頭広根斧箭式、４は円頭細根斧箭式、５・７は両丸造で篦被のある鑿（のみ）箭式に属するものと考えられる。

刀子（10）現存長13.7cmを測る。錆のため関の部分が明確ではない。刃部断面は二等辺三角形を、茎断面は長方形を呈す。

須恵器（第17～19図、図版15～19）

杯蓋（１～15、42～48）大きく３タイプに分けられる。１と42のように身受けのかえりを持



第19図　後田２号墳出土土器実測図（1/3）

たない古墳時代通有のものがあり、これをＡタイプとして記述する。次は２～９、43～48のように身受けのかえりを持つもので、かつ次に述べるＣタイプよりも最大径の小さいもの（12cm以下）である。これをＢタイプとする。これにはつまみのあるＢ$_1$タイプとつまみのないＢ$_2$タイプにさらに分けられる。最後はＢタイプ同様身受けのかえりを持つが、Ｂタイプより口径の大きいもの（15のようにやや小ぶりのものもあるが、最大径13cm以上のもの）で、10～15がこれにあたる。これらをＣタイプとする。ＣタイプにもつまみのあるＣ$_1$タイプとつまみのないＣ$_2$タイプがある。

Ａタイプの杯蓋は出土量が少ない。１は口径が9.5cmと小さい。42は口径11.3cmである。どちらも天井部をヘラケズリしない。ＢタイプはつまみのつくＢ$_1$タイプの方が多く出土している。Ｂ$_1$タイプの最大径は10.1～11.7cmの範囲に収まる。つまみの形状は宝珠型を呈するもの（４～８等）と乳頭状を呈するもの（３等）がある。かえりの高さは高く、外に出る。天井部をヘラケズリする。Ｂ$_2$タイプは最大径10.3～10.8cmと平均すればＢ$_1$タイプより小さい。また、

B_1タイプに比べ身受けのかえりの低いものが多く、48のように見えないものもある。46が手持ちのヘラケズリを行う以外ヘラケズリはしない。Cタイプについて見れば、つまみの付くC_1タイプとつかないC_2タイプが同数ずつ出土している。C_1タイプのつまみはB_1タイプと違うがかなりきちんとしたものである。最大径は14.2～15cmで、身受けのかえりB_1タイプほどではないにしても外に出る。天井部にヘラケズリを行う。C_2タイプは最大径が12.8～13.4cmでC_1タイプより小さめである。また、かえりも退化していて15のように完全に中に隠れてしまうものもある。ヘラケズリは行わない。

杯身（16～35、49～55）杯蓋のA～Cタイプに見合う形で杯身もA～Cタイプに分けられる。Aタイプは16～20・49・50のように立ち上がりのあるものである。次に立ち上がりのないもので、高台の付かないものをBタイプとする。しかし、口径の大きさからCタイプの蓋に合うものもあり、それらをC_2タイプとする。Bタイプのものには23～32・52～54、C_2タイプのものとして21・22・51が考えられる。高台が付き、口径の大きいものをC_1タイプとする。33～35、55が当てはまる。

Aタイプの杯身は立ち上がりがかなり内傾し高い。底部は丸味を持ちながらも平坦気味のものが多い。49の底部外面にヘラケズリが見られる以外はヘラケズリを行わない。Bタイプの杯身はやや外反気味ながらも直立する体部と平坦気味の底部を持つものが多い。体部に沈線は持たない。C_2タイプのものはこれらに比べやや外へ開き気味に立ち上がる。両者ともヘラケズリは行わない。C_1タイプの杯身は前室出土の33～35と羨道出土の55とは異なる。前者は斜行する体部と外湾する口縁部を持ち、外へふんばる高い高台を付けている。それに対して55は斜行する体部とそのまま終わる口縁部、そして底部の外周に近い位置に取り付けられた低い高台が特徴になっている。

高杯（36・37・56）いずれも無蓋高杯である。38は杯部に4条の沈線を持ち、底部付近にカキ目を施す。56は杯部中位から下にすべてカキ目を施す。36は中位でやや屈曲する杯部と短い脚部を持つ。37は前述3個に比べ口径の大きい杯部を持つ。杯部底部をヘラケズリする。

椀（？）（39）杯身とするには形態から疑問があるので椀としたものである。全体をヨコナデ、ナデで仕上げるものである。口径9.4cm、器高4.8cmを測る。

平瓶（40・41・57？）40・41ともに小型の平瓶である。44は口頸部と胴部にそれぞれ2条ずつの沈線を持つ。胴部下半を手持ちのヘラケズリを行い、その他はヨコナデで仕上げる。41は扁球形の胴部とラッパ状に大きく開く口頸部を持つものである。胴部に3条の沈線を持ち、上位にカキ目を施す。その他はヨコナデを行い、底部はヘラで切り離した後ナデている。57は大きさから平瓶として良いかわからないが、2条ずつの沈線を2組持ち、その他をヨコナデするものである。

壺（58）形態から直口壺であろう。球形に近い胴部にはカキ目を施し、その他はヨコナデを

行う。底部はヘラ切り後軽いナデを行う。

3．3号墳

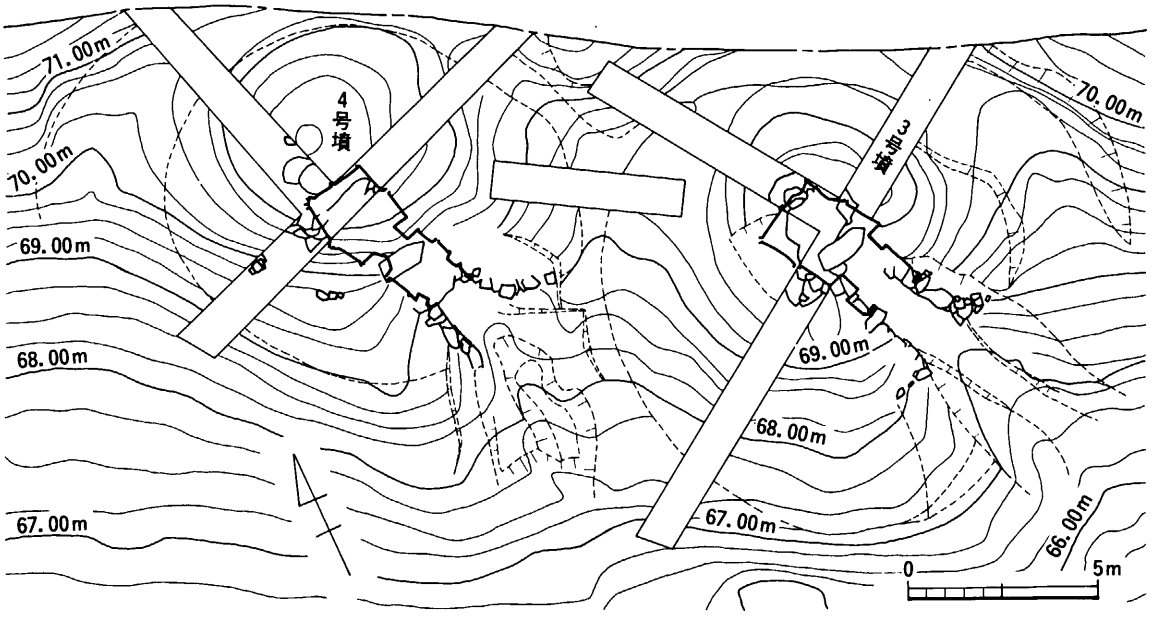
1）．立地と現況（第3・20図）

2号墳の北西5ｍの位置にあり、4号墳と接する。玄室床面の標高は67.60ｍで、1～9号墳の中では4号墳に次いで高い位置にある。1、2号墳が接近して造られているのと同様、4号墳と接近して造られている。

完全に段々畑の中に埋没していたが、前室の天井石が落ち込んでいる以外、比較的残りの良い古墳であった。

2）．墳丘（第21図、図版20）

前述のように段々畑に埋没していた古墳であるが、天井石より上の封土は失われていた。このため、古墳本来の高さを知ることはできない。また、周溝は斜面上位である北側と東側に認められるが、その他には認められない。周溝のある部分で、玄室からの距離を測ると周溝内側で5.3m、外側で6.5ｍである。また、羨道側を見ると墳丘裾まで約7ｍを測る。したがって、主軸上での直径は12.3～13.5ｍという数値が得られる。一方、主軸と直交する方向での規模については、玄室中心から西側の墳裾まで約7.1m、東側は周溝が認められるが、内側で約4ｍ、外側で約7ｍである。したがって、主軸と直交する方向で考えられる直径は11.1～14ｍである。



第20図　後田3・4号墳地形実測図（1/200）

以上から３号墳は最も大きく見た場合、直径が13.5～14ｍの円墳と言うことができる。

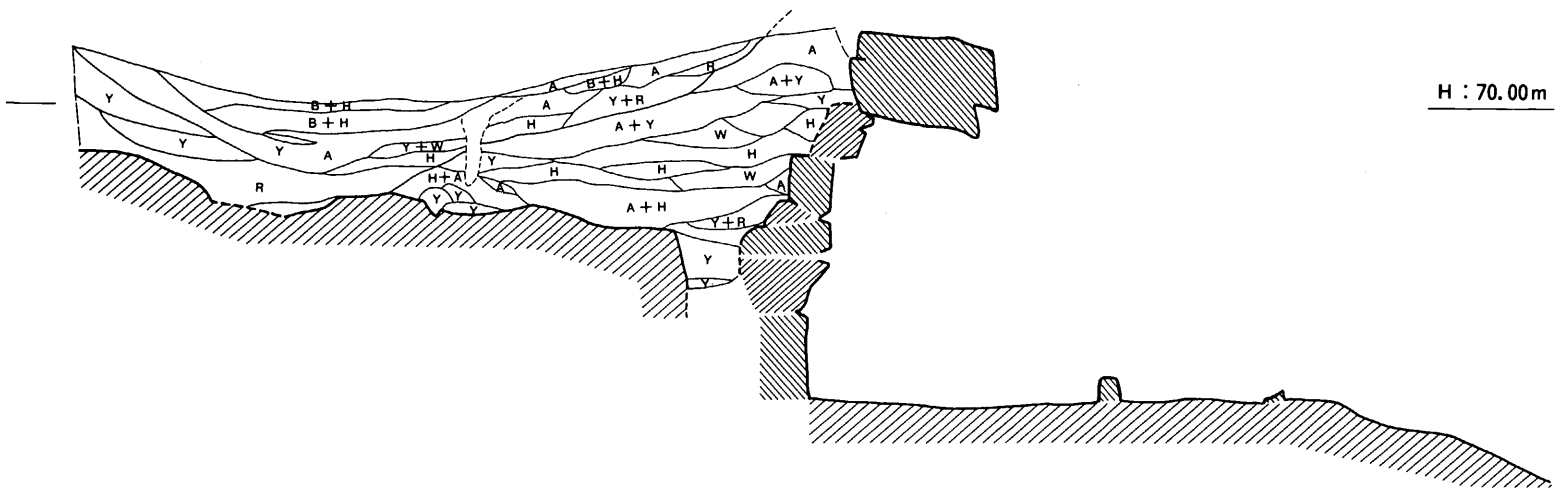
次に墳丘盛土について見ると、西側トレンチではわかりにくいが、石室構築のため、地山を掘り込んで墓坑を造っている。その後、腰石から順に積み上げるに従って、封土を盛り上げていっているが、北側トレンチ土層図で見ると、腰石を含めて３段目の石を積んだ段階までは墓坑壁と石の間を埋め、かつ少なめの裏込めをしているが、それが終了すると周溝近くまで土を入れて高さを整えている。そして、４段目以後の裏込めは墳丘全体の形を整えながら盛土していったことが観察される。また、東側トレンチ土層図を見ると、墓坑掘り込みの開始地点あたりで墳丘を形成する盛土とは逆の流れを示すような部分があるが、地山側の崩れもあろうが、２段目の石を積み上げた後にまず墓坑壁付近にある程度の土を入れ、その後で石とその盛土の間の窪みを埋めるような盛土の方法もあったことが考えられる。

３）．石室（第22図、図版21・22）

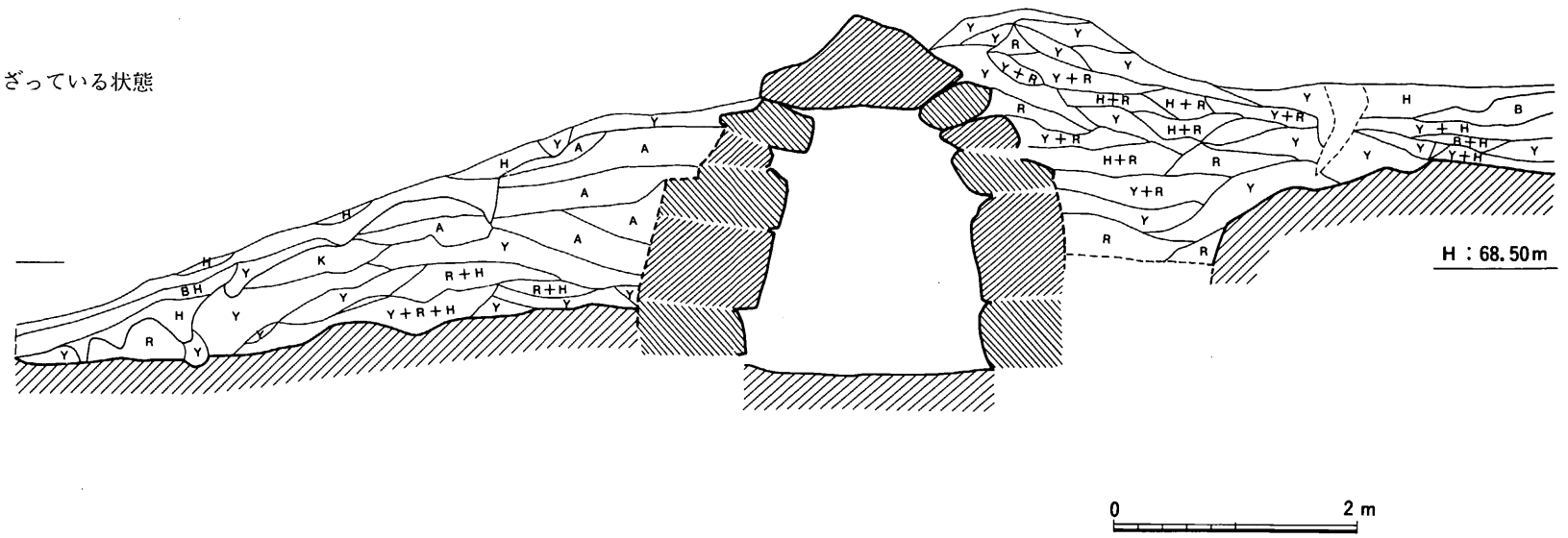
南東に開口する複室の横穴式石室である。玄室の主軸はＮ－28°－Ｗであるが、前室、羨道はやや西に振れる。羨道部主軸はＮ－20°－Ｗである。２号墳同様障害物はないので、物理的理由で振ることは考えられない。

玄室はやや平行四辺形気味である。長さは両側壁長とも2.15ｍ、幅は奥壁側で1.95ｍ、玄門側で2.05ｍ、高さは2.1～2.25ｍを測る。奥壁は腰石として２石を据える。床面からの高さが60㎝、90㎝と違っているため、左側の低い石の上には大きめの石を、右側の高い石の上には小さめの石を２個用いて高さの調節をしている。３段目は、右側の石がやや大きいが、あまり高さの変わらない石を２石積む。ここまでは言わば重箱積みの感じである。４段目は３段目の２石にまたがる形で大きめの石を積み、両側に小さめの石を用いている。５段目は小ぶりの石を３石用い、天井石に至る。天井石までの高さは2.1～2.25ｍである。石と石の間隙には小石を詰めて安定させているが、特に１段目と２段目、２段目と３段目の間が顕著である。奥壁は比較的整然と積み上げている印象がある。それに対して側壁はそれほどでもない。右側壁の場合、大ぶりの石を２石、横長に使って腰石としている。これらも高さが違っているため、２段目では高い方の石の上には小ぶりの石を、低い方の石の上にはそれらより大きめの石を積んで調節しているが、それほど整ってはいない。３段目は１×0.6ｍほどの大石を１つ中央部に積み、その両側に40㎝四方ほどの石を２段積んでおおよその高さを整えている。４段目はほぼ同大の石を３石積みげている。５段目は４段目より小ぶりの石を雑然とした感じで積み上げ、天井石に至る。石と石の間隙は小さめの石で詰めている。天井石は1.65×1.15ｍ、厚さ0.75ｍの石とその半分ほどの石の２石を用いている。袖石は縦長に石材を用い、床面から90㎝の高さの石を据え、その上に２石積んで楣石を架けている。框石は細長い石を２石と、その間にはさんだ石の３石から成る。この結果、玄門の幅は1.2ｍ、高さ1.3ｍを測る。

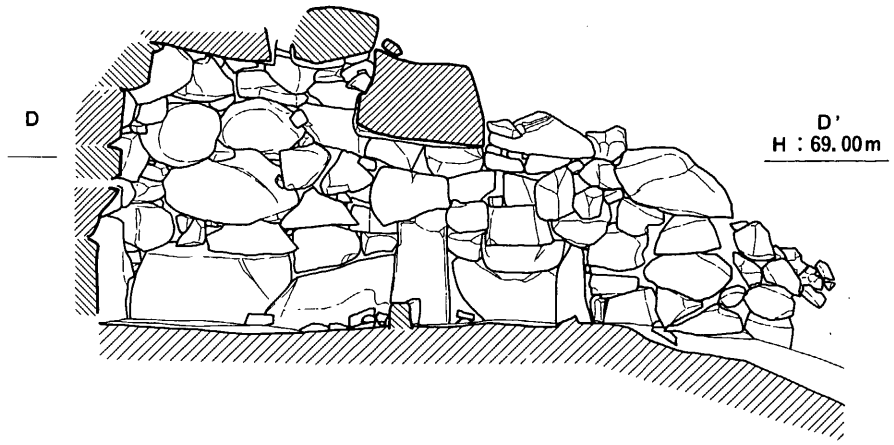
前室は袖石の大きさが違う影響で、側壁長が違う。右側壁長0.85ｍ、左側壁長0.7ｍである。

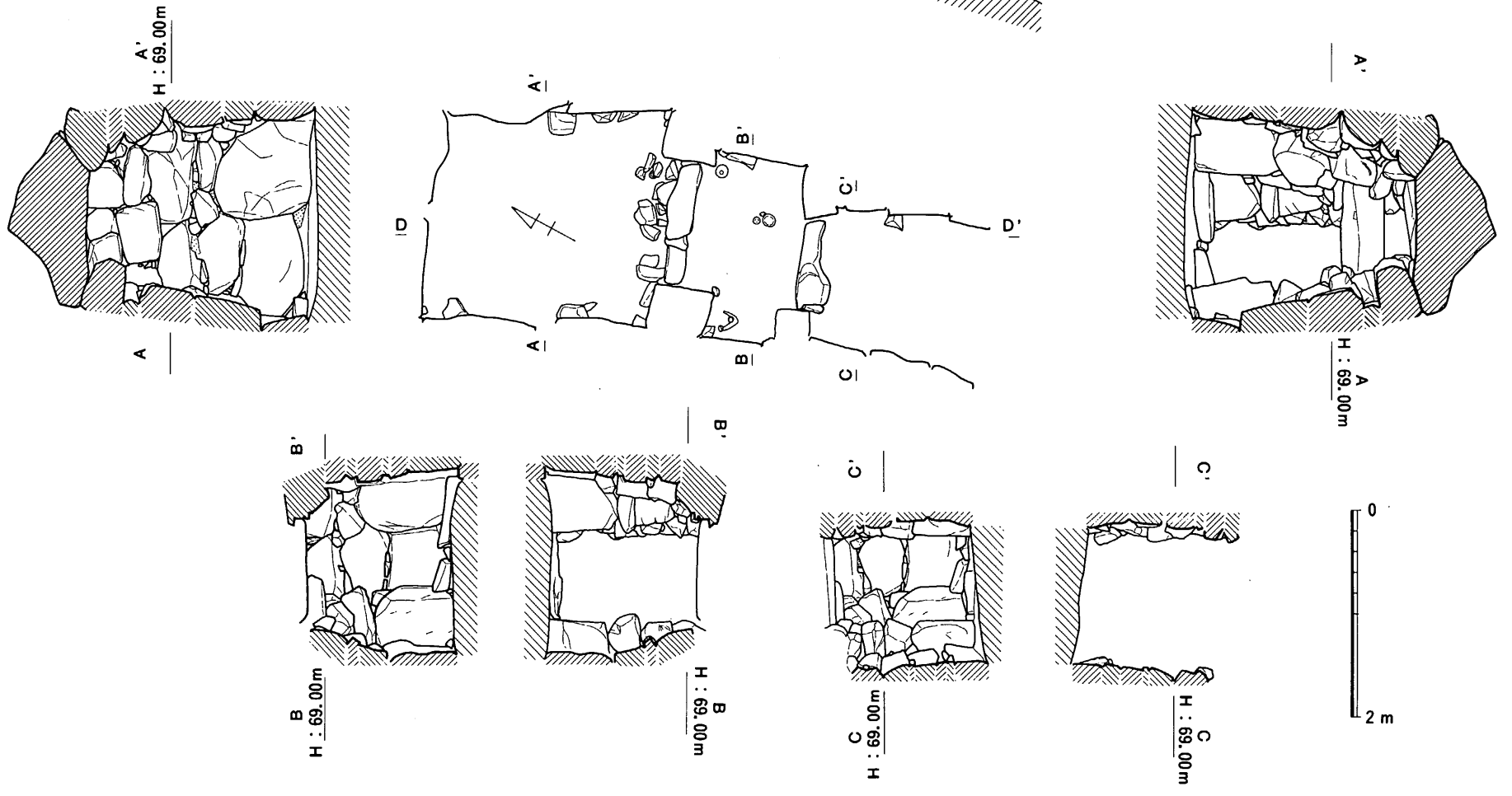


A：暗褐色土
B：黒色土
H：灰褐色土
K：褐色土
R：赤褐色土
W：白褐色土
Y：黄褐色土
BH：黒灰褐色土
R＋H：RとHが同じくらい混ざっている状態

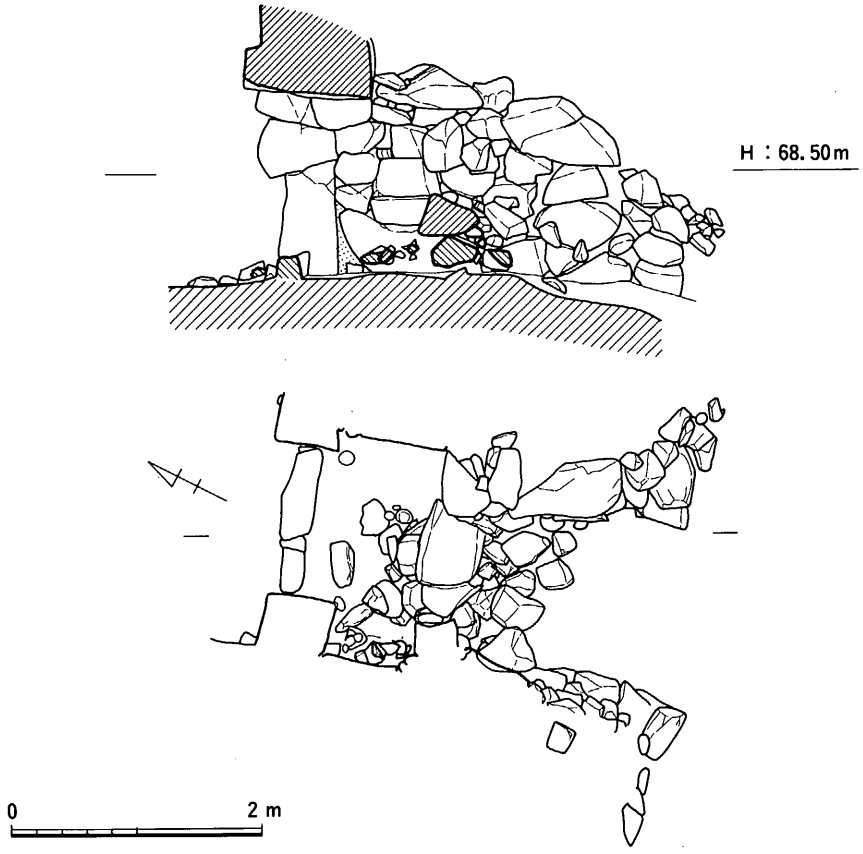


第21図　後田３号墳墳丘断面実測図（1/60）





第22図　後田３号墳石室実測図（1/60）



第23図　後田３号墳閉塞状況実測図（1/60）

幅は約1.8ｍで、横長の長方形状を呈する。側壁については特に右側壁について見ると、まず腰石に大きめの石を１石用い、２段目以後については奥壁側は小ぶりの石を３段、羨道側はそれより大きめの石をやはり３段重箱積みに積んでいる。そして、５段目として袖石上にも架けながら小ぶりの石を３石積み、その上に大きめの石をのせる。この石の上に前室天井石がのっていたものであろうが、落ち込んでいた。しかし、高さとしては楣石下端からそう高くはならなかったであろう。袖石はまず最下段に石材を縦に用い、その上にあまり大きくない石を２段積む。楣石はなかったが、框石は細長い石を１石用いている。幅は0.85ｍである。

羨道は外に向かってわずかに開き気味である。側壁は右側の場合、幅50～60㎝程度の石を用い、上に大ぶりの石をのせる。前室袖石の外側約1.1ｍの間が羨道と考えられる。

墓道は最初側壁に石組みを持ち、そのあとは素掘りとなる。

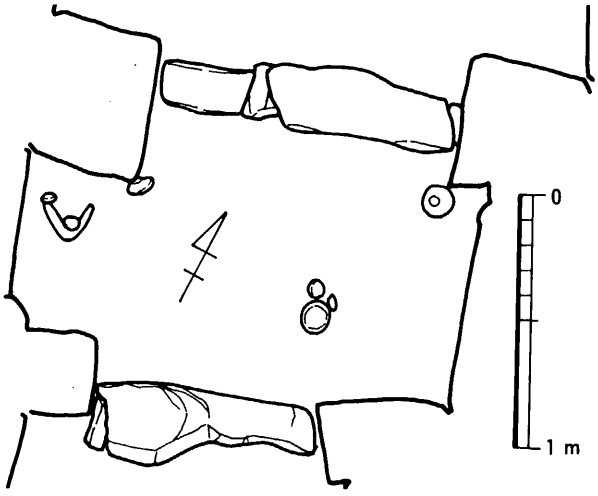
閉塞は前室框石上で行っている。下部に大きめの石を用い、それから上は人頭大程度の石を

積み上げていたことが推定されるが、かなり崩れた状況であった（第23図）。

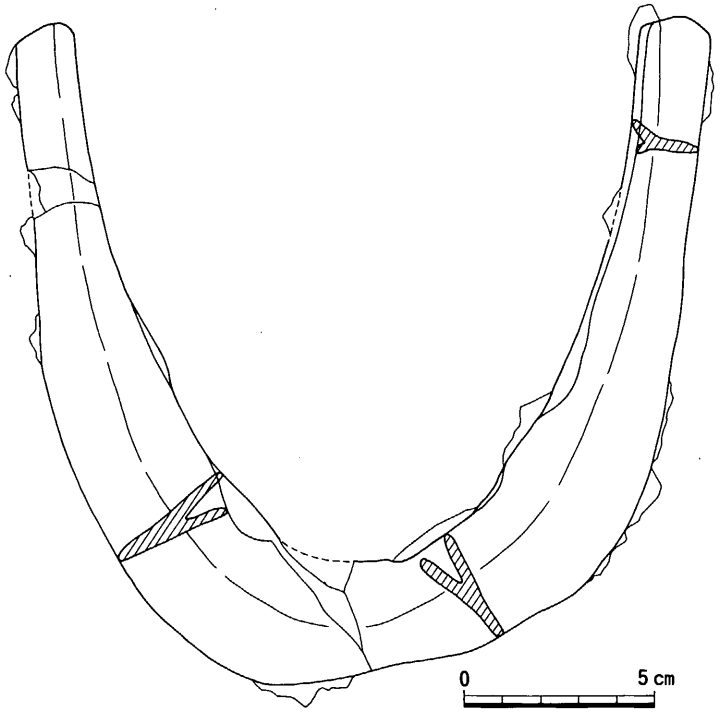
4）．出土遺物

出土遺物を列挙すれば以下のとおりである。なお、分類については1・2号墳と同様である。

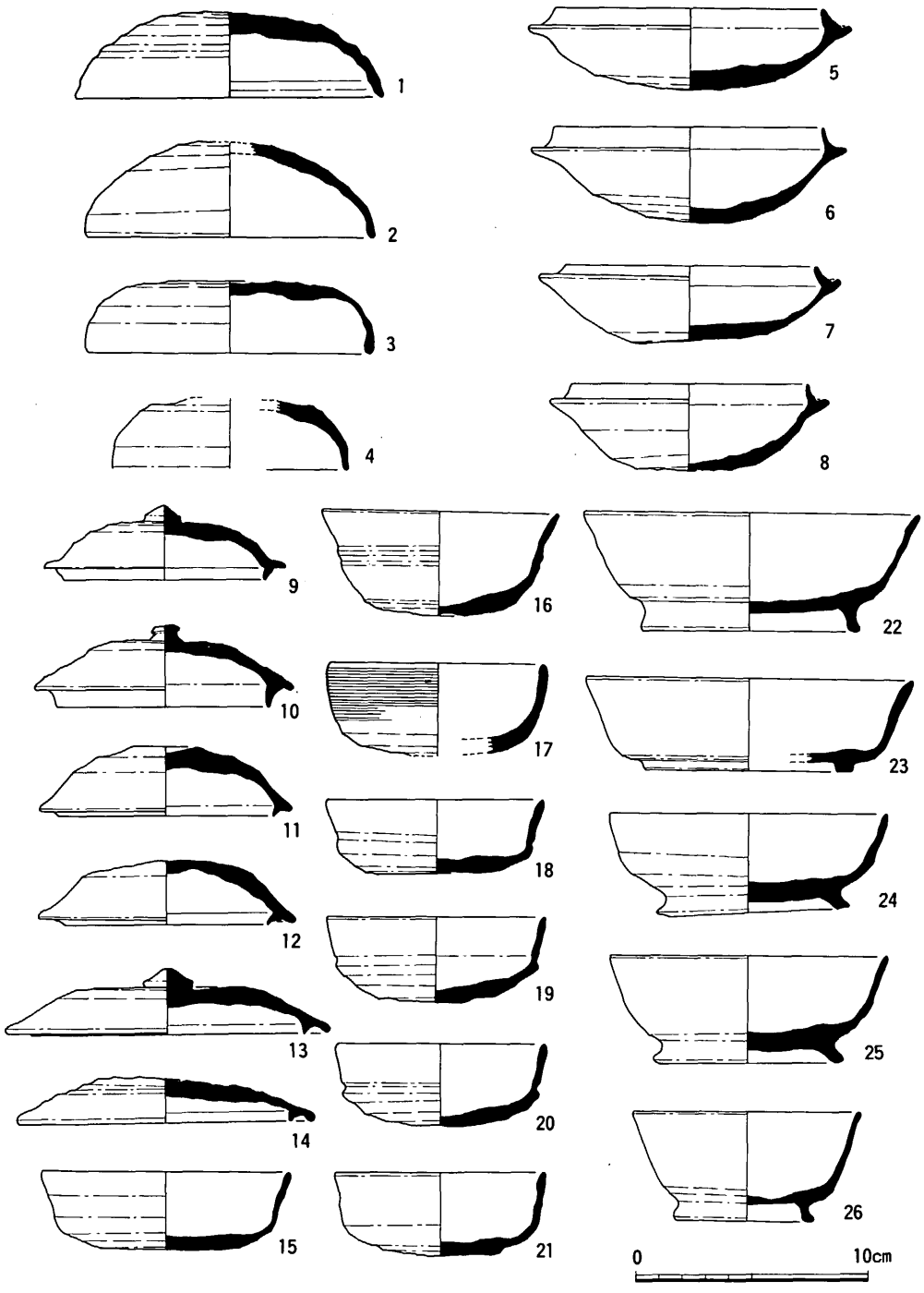
鉄　器	鋤先	1
須恵器	杯蓋	20（小破片のため図示10）
	杯身	27（図示17）
	皿	2（図示1）
	高杯	16（図示8）
	鉢	1
	甕	2（図示1）
	壺	10（図示8）



第24図　後田3号墳遺物出土状態実測図（1/30）



第25図　後田3号墳出土鉄器実測図（1/2）



第26図　後田３号墳出土土器実測図①（1/3）

平瓶　8（図示５）
盤　　1（図示せず）
甕　　1（図示せず）

土師器　高杯　2

出土状態

原位置を保っているものはないと考えられる。鉄製鋤先は前室左側床面近くから、須恵器は13・16・21・26・27・49・50が前室床面から、43が羨道部、30が玄室埋土、２と36が墳丘から、その他はすべて墓道埋土中からの出土である。ただし、40と42はそれぞれ周溝並びに墳丘出土破片と接合した。土師器37・38の高杯はともに墓道からの出土である。

遺物

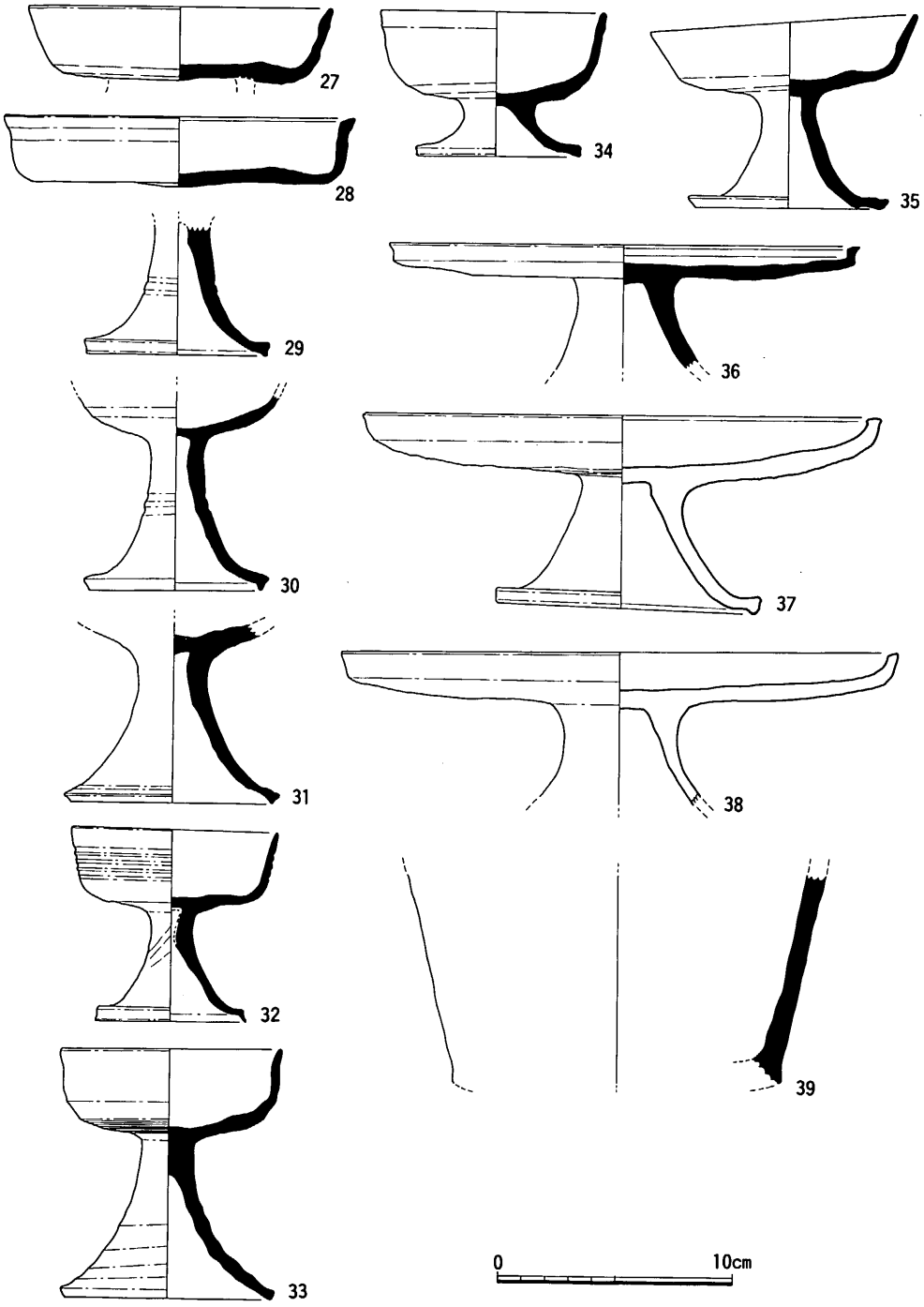
鉄器（第25図、図版23）

鋤先（１）耳部先端がやや欠けているが、ほとんど完形に近いＵ字形鋤先である。現存長17.5cm、最も開いた耳部端での幅18.2cmである。厚みは刃部先端部中央で約６㎜を測る。木柄挿入部は前、背二面に分かれ、前側の幅が狭くなる。刃部中央付近の残りの良い部分で刃部の幅約２cm、挿入部約1.6cm、合計3.6cmを測る。

須恵器（第26～29図、図版23～26）

杯蓋（１～４、９～14）１・２号墳出土須恵器の項で述べた分類に従うと、１～４がＡタイプ、９・10がB_1タイプ、11・12がB_2タイプ、13がC_1タイプ、14がC_2タイプとなる。Ａタイプは口径10.1～13.2cmの間にあり、天井部と体部の境が不明瞭な丸味を持つもの（１・２）と体部がやや直線的になるもの（３・４）がある。天井部はヘラケズリする。B_1タイプは受部径10.5、11.2cmを測るもので、９は宝珠型のつまみを10は宝珠型が変形したようなつまみを持つ。つまみの周辺は接合する際のヨコナデが見られるが、その他の天井部分をヘラケズリする。かえりは高く、しっかりしている。11・12のB_2タイプは受部径が11.0、11.2cmを測るものであるが、B_1タイプに比べかえりは低い。しかし、外には出る。天井部はヘラケズリしない。C_1タイプの13は受部径14.1cmを測るもので、平坦に近い天井にしっかりしたつまみが付く。つまみはB_1タイプの宝珠型とはやや違ってきて、径が大きくなり、中央の高まりも一旦内湾してから高くなる。かえりはわずかに外に出る程度の高さである。天井部にはヘラケズリを行う。C_2タイプの14は受部径が12.9cmを測るもので、かえりは退化し、体部とほとんど同じ高さになっている。ヘラケズリは行わない。

杯身（５～８、15～26）杯蓋の各タイプに合う形で５～８がＡタイプ、15～21がＢタイプ、22～26がＣタイプに分けられる。Ａタイプは古墳時代に通有のもので立ち上がりを持つ。ただし、立ち上がりは低く内傾している。立ち上がりの形態に基部から端部までほとんど厚みの変わらないもの（６・７）、基部が太く先端の細いもの（５）、その中間的なもの（８）がある。



第27図　後田３号墳出土土器実測図②（1/3）

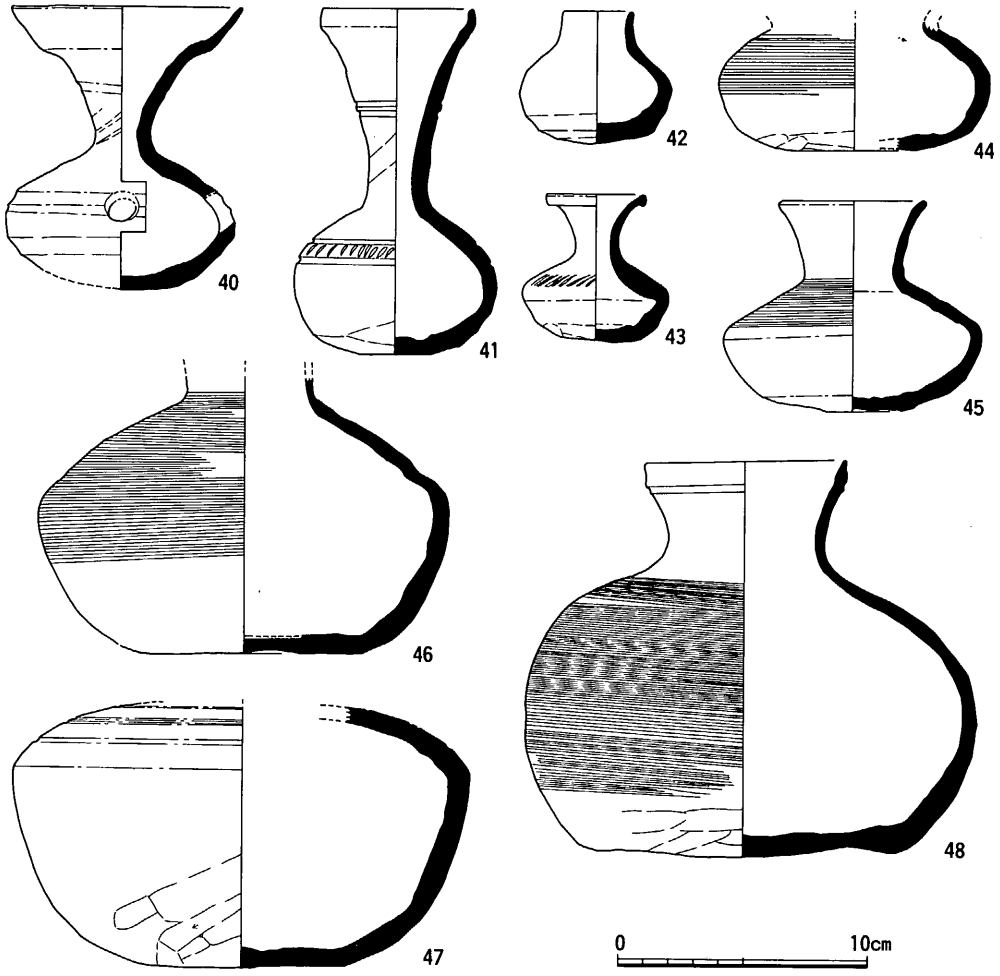
口縁部径10.1～11.5cm、最大径12.1～14.0cmの大きさである。底部外面はすべてヘラケズリする。Bタイプは口径9.1～10.7cmを測るものであるが、17は底部が欠落していて確実なことは言えないが高杯の可能性もある。また、16は口縁部の開き具合は著しい。その他はやや外開きに立ち上がる体部と平坦に近い底部からなるものである。15～20は底部外面をヘラケズリする。B_1、B_2タイプの蓋杯がセットで出土した時は、つまみの付くB_1タイプの杯蓋の天井がヘラケズリされていることが多く、それと対になる杯身にもヘラケズリされることが多い。それに対しつまみの付かないB_2タイプは両者ともにヘラ切り離し後軽くナデるか未調整がほとんどである。それから言うと、ヘラケズリのある15～20がB_1タイプ、ヘラケズリされない21がB_2タイプと細分できることになる。22～26のCタイプは26がやや小さく口径9.8cm、それ以外は12.0～14.4cmの大きさである。高台は23を除いて高く外へ踏んばる。23は高台の付く位置がやや中央寄りで低い。他の出土須恵器と比較して、流れ込みと見た方が妥当かもしれない。26の体部外面にはヘラ記号かと見まちがうが「×」印がめぐらされている。「×」印は体部外面に9個、底部外面に1個さらに底部内面にも1個つけられている。

皿（27・28）27は口径12.9cm、器高3.1cm、を測るもので、体部はやや外反気味に斜行し、端部はそのまま丸く終わる。底部はヘラケズリする。28は口径14.9cm、器高3.0cmを測り、ほとんど垂直に立ち上がる体部はやや内傾する平担面を作って終わる。底部外面はヘラ切り後ていねいなナデを行い、その他はヨコナデをする。

高杯（29～36）すべて無蓋高杯である。29～33はBタイプの杯身に脚を付けたもので、脚部に沈線を持つもの（29・30）と持たないもの（31・32）がある。杯部も沈線を持つもの（32）と持たないもの（33）があるが、33の底部外面にはカキ目を施す。その他の杯部もヘラケズリは行わずヨコナデする。34は杯部はBタイプの杯身と似ているが、脚部は短い。また、杯部の底部外面はヘラケズリする。35は今までのものとやや形状が違う。すなわち、杯部は浅めで直線的に外反する体部と平坦に近い底部を持ち、脚部はやや長めで、端部ははね上がり気味で稜を作り出す。杯部底部外面はヘラケズリする。36は口径20.0cmを測る大きな浅い杯部と短い脚部からなるもので、杯部体部と口縁部が特徴的である。すなわち、底部からほとんど垂直に短く立ち上がった体部は内傾する平坦面を持つ口縁端部を作り出して終わる。杯部の底部外面をヘラケズリ、その他をヨコナデ、ナデで仕上げる。

鉢（39）胴部の一部の破片であるため詳細は不明である。内外面をヨコナデするものである。内外面とも暗青灰色を呈する。

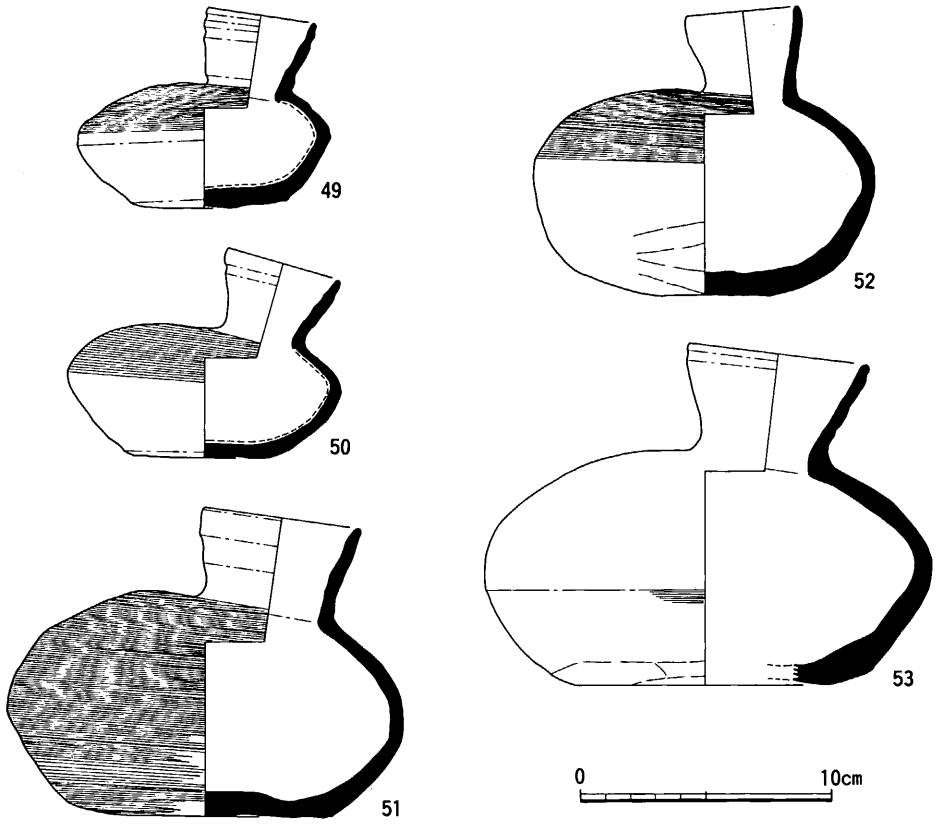
甕（40）口径9.1cm、器高11.3cmを測る。ややいびつな扁球形の胴部にラッパ状の口頸部が付く。胴部中央に円形の孔がうがたれ、その中央よりやや下位に相当する位置に沈線がめぐる。下半部はヘラケズリ、上半部はヨコナデをする。口頸部にはシボリ痕が残る。口縁部下に段を有するが、あまりシャープな段とは言えない。全体にヨコナデする。



第28図　後田３号墳出土土器実測図③（1/3）

壺（41～48）41と43は円孔を持たない鼠型の壺と言えるかもしれない。41は口径6.0cm、器高13.8cmを測るものである。胴部上位に２条の沈線を持ち、その間を刺突文で埋める。底部は手持ちのヘラケズリを行い、その他はヨコナデで仕上げる。43は口径3.9cm、器高5.9cmを測る小型のもので、41と形態は違うが底部外面を手持ちヘラケズリするなど調整方法は同一である。42は口径2.7cm、器高5.3cmの小型の壺で、頸部の立ち上がり方や口縁部の形態などが43と違う。底部外面は回転ヘラケズリしている。44～48は広口壺か直口壺の部類に入るものと思われる。ただし、47は肩部から上が大きく欠落しているため詳細がわからず、あるいは平瓶になるかもしれない。その他のものは胴部上半部または下半部までカキ目を施す。44・47・48の底部外面は手持ちのヘラケズリを行う。

平瓶（49～53）53が通常の大きさ、51・52がやや小さめ、49・50はミニチュアの平瓶として



第29図　後田３号墳出土土器実測図④（1/3）

良いだろう。49～51は大きさは違うが形態は良く似ている。49は口径4.3cm、器高8.0cm、胴部最大径10.1cmを測る。50は口径4.6cm、器高8.4cm、胴部最大径10.9cmと49よりやや大きい。51は口径6.2cm、器高10.3cm、胴部最大径15.9cmの大きさである。口頸部の付き方が３個とも良く似ている。また、49・50は胴部上半部に、51は全体にカキ目を施す。52は51よりやや小さめであるが、口頸部の向きが49～51とは違い胴部主軸側に傾いている。胴部上半部にはカキ目を施し、下半部には手持ちのヘラケズリを行う。53は口頸7.1cm、器高13.6cm、胴部最大径13.6cmを測るもので、口頸部の向きは胴部主軸より外側に傾く。胴部はヨコナデで仕上げているが、中央よりやや下位にはカキ目の痕跡がわずかに見える。底部外面は手持ちのヘラケズリを行う。

土師器（第27図）

高杯（37・38）須恵器高杯36と似ているが、形態的には体部の立ち上がりと口縁部が違う。37・38ともに明褐色を呈し、杯部内面と外面の一部にヘラミガキがなされている。その他はナデ、ヨコナデである。ロクロを使用したものと考えられる。

4．4号墳

1）．立地と現況（第3・20図）

3号墳の北西にあって、ほとんど接するようにして造られている。また、8号墳の東約8mの位置に当たる。1～9号墳の中では最も高い場所に位置し、玄室の標高は約69mである。4号墳から上の斜面は急になり古墳を造るには適さない。また、古墳群を横の広がりで考えた場合、中央よりやや西寄りに位置する。

段々畑の中に完全に埋没していたが、石室の残りは良い。玄室内の流入土も少なかった。

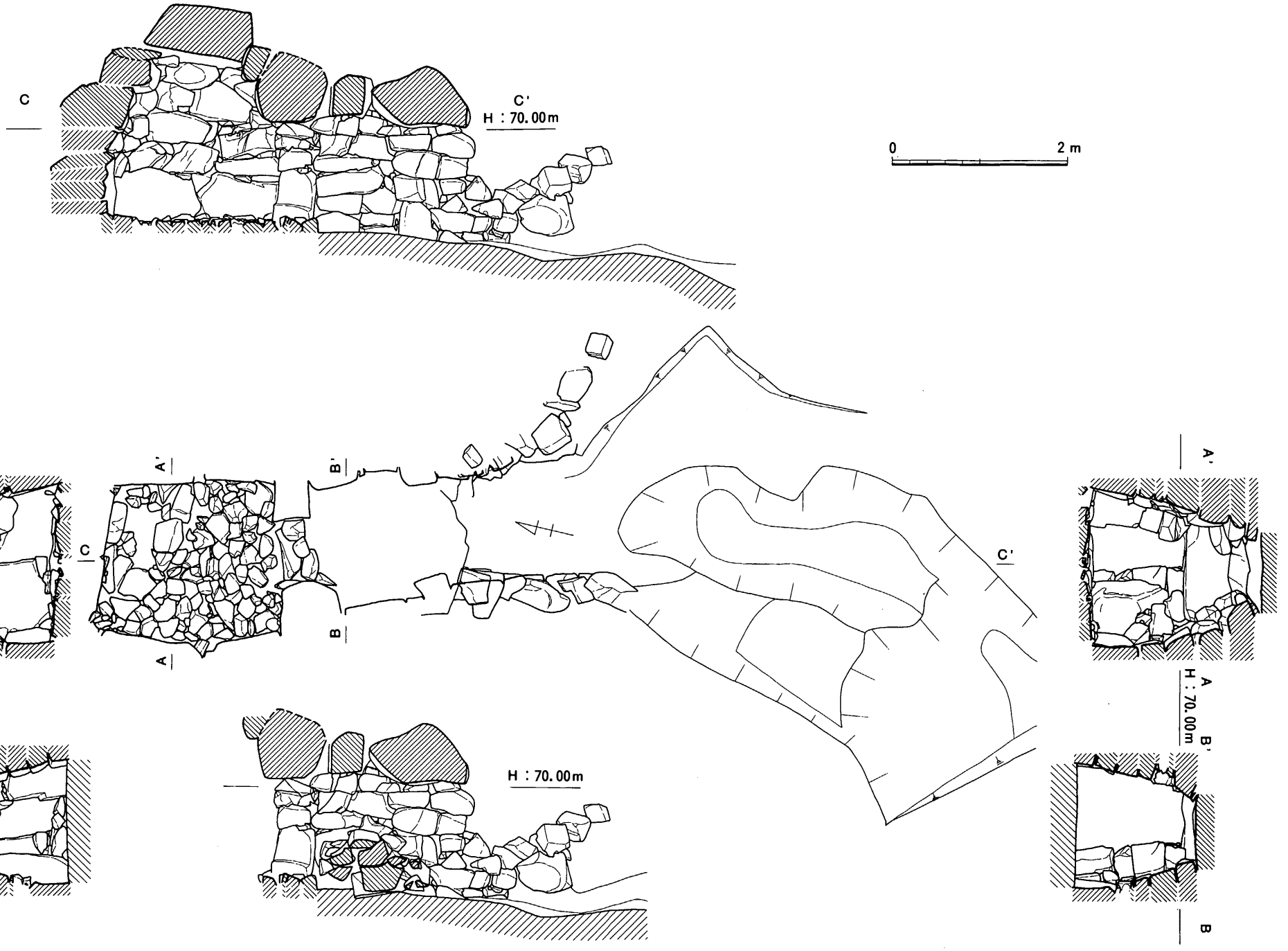
2）．墳丘（第31図、図版27）

比較的残りが良く、玄室天井石上の封土も少し残っていた。ただ、わずか20cmの厚さで残っていただけで、本来の高さを知ることはできない。周溝については北東側で見出されたが、段々畑の盛土量が多く、全てを掘り出すことは不可能であった。これは、当初古墳の存在がわからず、判明してからは下から段々畑の盛土を除去していったため、古墳の裏側に当たる北側、北東側で盛土を除去した切土面が高く危険になったことによる。主軸上で玄室中心から北側墳丘裾と思われる部分までは4.4mを測る。一方、羨道側で墳丘裾と思われる部分と玄室中心間は約5.5mである。したがって、主軸上での墳丘径は約9.9mということになる。一方、主軸と直交する方向での規模を考えると、玄室中心から西側では約4m、東側では約5mで墳丘裾と思われる部分となる。したがって、主軸と直交する墳丘径は約9mが考えられる。これらのことから、周溝外側までの規模はわからないが、直径9～9.9mの円墳と言うことができる。1～3号墳と比べてやや規模が小さい。

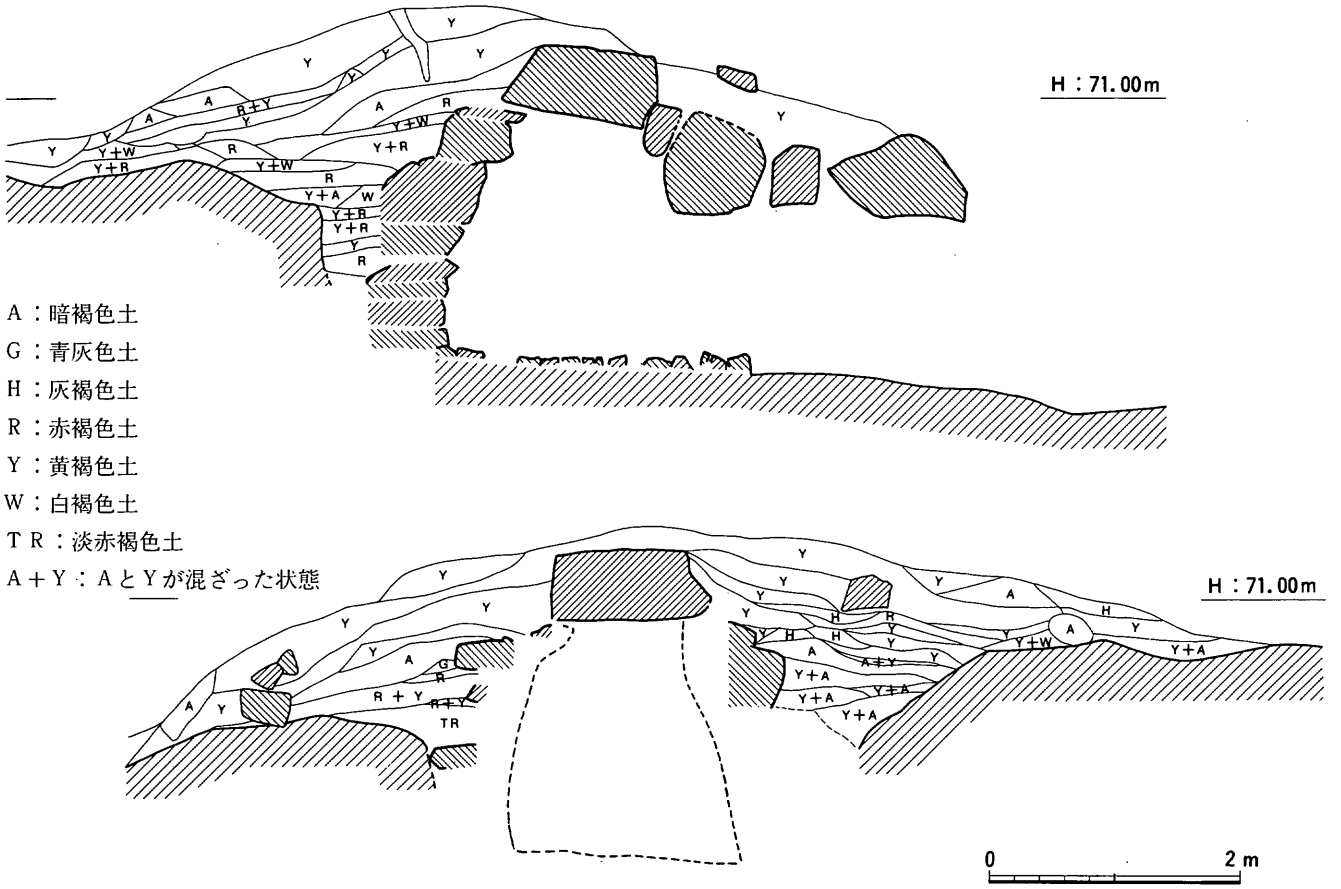
次に封土について見ると、以下のようなことがわかる。まず、石室を構築するための墓坑を掘り込んでいる。そして、北側トレンチの土層で顕著であるが、墓坑と石の間は叩きしめながら土を入れるせいか、層は水平の層となっている。それより上側は積石に従って中心部から墳裾に向かって傾斜を持つ土層となる。古墳によっては、石を押さえるため固く叩きしめる盛土と、形を整えるための盛土の2段階の工程を推測させる場合があるが、ここではそれらが見られず、均一に作業していったものと思われる。盛土には砂質土と粘質土を使用しているが、全体的に見て、それほどていねいな盛土ではない。また、墓坑を掘り始める面が比較的平坦なことから、あらかじめ古墳予定地をならしたことも考えられる。さらに西側トレンチで見つかった石は、最終的な確認はしなかったが、墓道からの石列や、墳丘崩落部で見つかった石などから外護列石の可能性がある。

3）．石室（第30図、図版28～29）

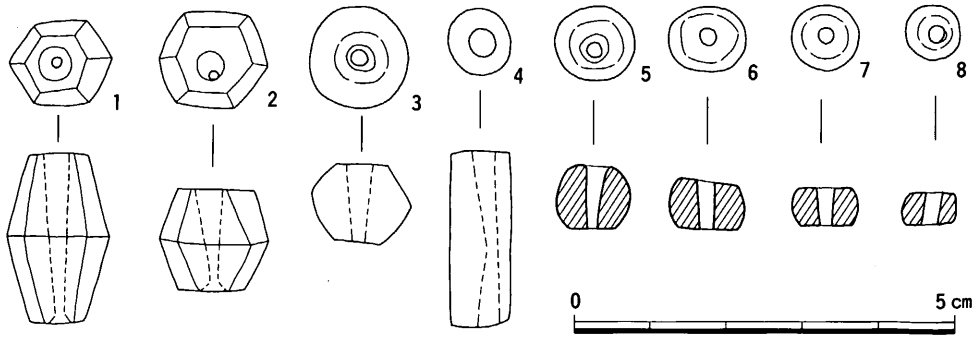
南々東に開口する複室の横穴式石室である。玄室の主軸はN－13°－Wの向きを示すが、前室、



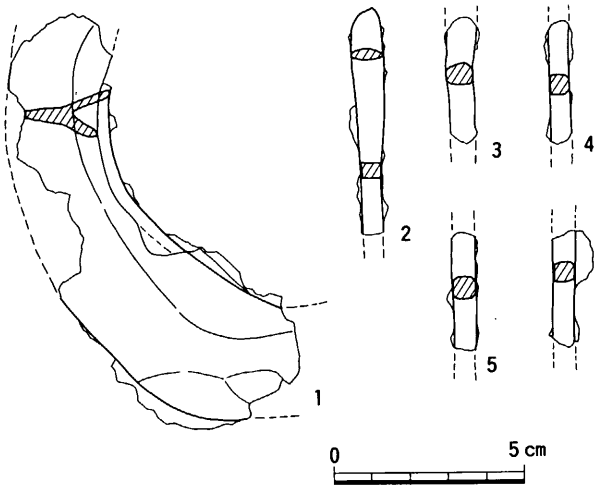
第30図　後田４号墳石室実測図（1/60）



第31図　後田４号墳墳丘断面実測図（1/60）



第32図　後田４号墳出土装身具実測図（1/1）



第33図　後田４号墳出土鉄器実測図（1/2）

羨道部の石積みは袖石にもたせかけるような感じで、右側は小ぶりの石を重箱積みに、左側はそれらよりやや大きめの石をやはりどちらかというと重箱積みに積んでいる。

閉塞は前室を埋めるような状態で行われていた（第30図、図版27）。本来の形とは考えられないので、原位置を保ったとしても最終閉塞としてわざとこのようにしたのか、あるいは下方の大きめの石が原位置を保ち、玄室側の小ぶりの石は崩れたものなのかのどちらかであろう。いずれにしても天井まで届いていないので約半分は崩れたものであろう。

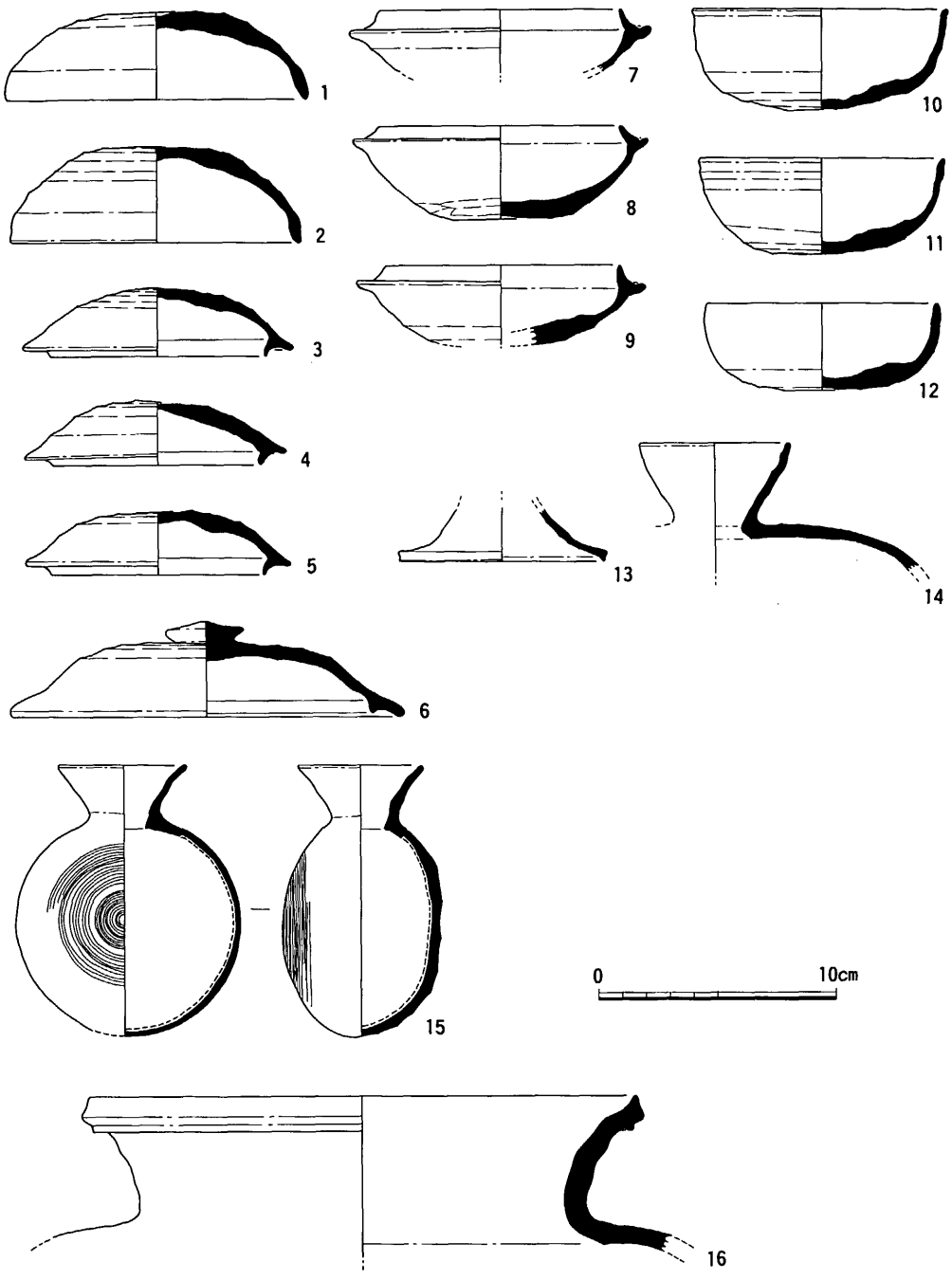
墓道はやや左（西側）へ振れて5.6ｍほど確認されている。ゆるやかな段をなして下がっていく。羨道に続く部分は石組み墓道となる。

また、墓道右側壁の石と連続して人頭大の石が墳丘をめぐるように置いてあるが、墳丘の項でも述べたように外護列石の可能性がある。とすればこれらの石は当初は墳丘の中へ隠れていたものであろう。

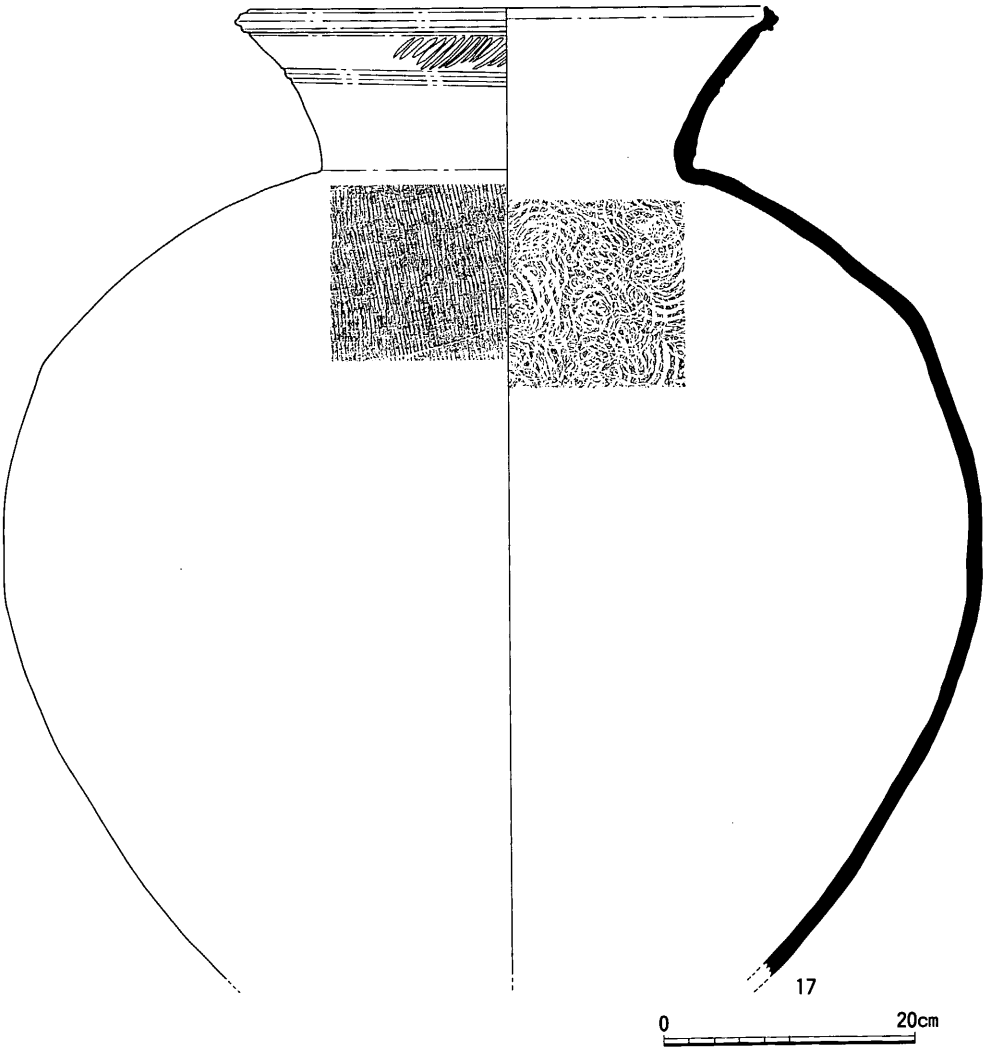
４）．出土遺物

出土遺物は以下のとおりである。

装身具	切子玉	3
	管玉	1



第34図　後田４号墳出土土器実測図①（1/3）



第35図　後田４号墳出土土器実測図②（1/6）

	ガラス玉	12（図示４）
鉄　器	鋤先	1
	鉄鏃	1
	刀子	1（図示せず）
	釘	5片（図示４）
須恵器	杯蓋	8（図示６）
	杯身	10（図示６）
	高杯	2（図示１）

平瓶　　2（1個紛失、図示1）
提瓶　　1
甕　　2（図示1）

出土状態

装身具類はすべて玄室床面である。鉄器は鋤先と鏃が玄室、その他は羨道埋土中の出土である。須恵器は図示したものは、羨道埋土中からの出土が3・6・10～13、墓道埋土中が1・4・5・7～9・14～16である。ただし、11の杯身と17の甕は羨道と墓道にまたがって破片が出土している。また、図版29(2)に示すように玄室内で玄門入ってすぐ左の隅に完形に近い平瓶が置いてあったが、遺憾ながら紛失してしまった。

遺物

装身具（第32図、図版30）

切子玉（1・2）いずれも水晶製で、横断面は六角形を示すものである。穿孔は片側からなされる。1は最大腹径1.35cm、長さ3.25cm、2は同じく1.45cm、1.35cmを測るものである。

そろばん玉（3）截頭円錐形を2つ合わせた形をしているが、稜はそれほど明瞭でない。水晶製で、最大腹径1.3×1.35cm、長さ1.05cmを測る。穿孔は片側からなされる。

管玉（4）濃緑色を呈し、碧玉製と思われる。両側から穿孔されている。腹径0.9×0.8cm、長さ2.35cmを測る。

小玉（5～8）5はめのう製、その他はガラス製である。ガラス玉はすべて青色を呈する。径は0.7～1.05cm、厚さ0.5～0.9cmである。重さはガラス玉が0.35～0.9gであるのに対し、めのう製の玉は1.26gとやや重い。めのうの場合片側から穿孔する。

鉄器（第33図、図版30）

鋤先（1）耳から刃部にかけての破片である。残存長約12cm、最大幅3.6cmである。木柄挿入部は前・背の2面に分かれる。

鏃（2）残存長5.9cmを測るもので、錆化が著しい。両丸造の鏃箭式に属するものと思われる。

釘（3～5）断面形が楕円形を呈するもので、若干木質が付着しているものがある。断面は0.7×0.6mmほどの大きさである。頭の部分が錆のためよくわからない。

須恵器（第34・35図、図版31）

杯蓋（1～6）今までの分類に従えば1・2がAタイプ、3～5がB_2タイプ、6がC_1タイプになる。1は口径12.5cm、器高3.8cm、2は口径12.0cm、器高4.1cmを測る。両者とも天井部をヘラケズリし、その他をナデ、ヨコナデで仕上げる。3～5は受部径11.1～11.4cmを測るもので、かえりは比較的高く外に出る。B_2タイプとしては珍しく天井部外面を回転ヘラケズリする。6は口径14.0cm、受部径16.4cm、器高4.1cmを測るものである。全体的に高くしっかりした作りだが、かえりは退化して外に出ない。天井部外面はヘラケズリする。

杯身（7～12）7～9がAタイプ、10～12がBタイプに属する。7～9は口径9.8～10.1cm、受部径12.2～12.7cmの大きさで、立ち上がりは低く内傾する。7は底部を欠くため明らかではないが、8は底部外面を手持ちのヘラケズリ、9は回転ヘラケズリする。その他はヨコナデとナデで仕上げる。10～12のBタイプについては、形態的に12の口縁部がやや内湾気味であるのが違っているが概略似た形態を示す。口径は9.6～10.4cm、器高3.7～4.2cmである。底部外面はヘラケズリしていて、3～5の杯蓋の天井部をヘラケズリしているのと合致する。

高杯（13）脚部のみであるが、大きさから見て高杯と考えた。脚端径8.8cmを測り、ヨコナデを行うものである。

平瓶（14）口頸部と胴部の一部の破片である。口径は6.2cmを測る。胴部のうち肩部に当たる部分にカキ目を施す。

提瓶（15）ミニチュア提瓶と言っていいかもしれない。口径5.3cm、器高11.4cm、胴部最大径9.4cmを測るものである。胴部側面観は左右のふくらみがそれほど変わらない。片面にカキ目、反対側をヘラケズリする。暗灰色をした焼成良好なものである。

甕（16・17）16は口径23.0cmで中型の部類に属する。口頸部内外面をヨコナデ、胴部は外面叩きの後にナデている。17は口径40.6cm、残存高77.8cmを測る大型の甕である。頸部を2条の沈線によって上下2段に分け、上段にヘラによる連続斜線文を入れる。胴部は外面を平行叩き、内面には同心円の当て具痕が残る。暗灰色を呈し、焼成堅致である。

5．5号墳

1）．立地と現況（第3・36図）

1号墳の西隣りでかつ、北西側では6号墳と接する。1～9号墳の中では最も低い位置にあり、玄室床面の標高は約62.00mである。

段々畑の中に完全に埋没していたが、天井石も残存しており、全体の残りは良い。ただ、調査時は工事が既に始まって、周囲の低い所に盛土がされている段階で、5号墳とそこから1号墳にかけての部分が最も低い所となってしまい、雨水のみならず、湧水まで加わり、水中ポンプで排水しないと石室中位まで水没するという状態になってしまった。このため、石室床面近くの精査ができにくい状況であった。装身具類はあるいは見のがしているかもしれない。

2）．墳丘（第38図、図版32）

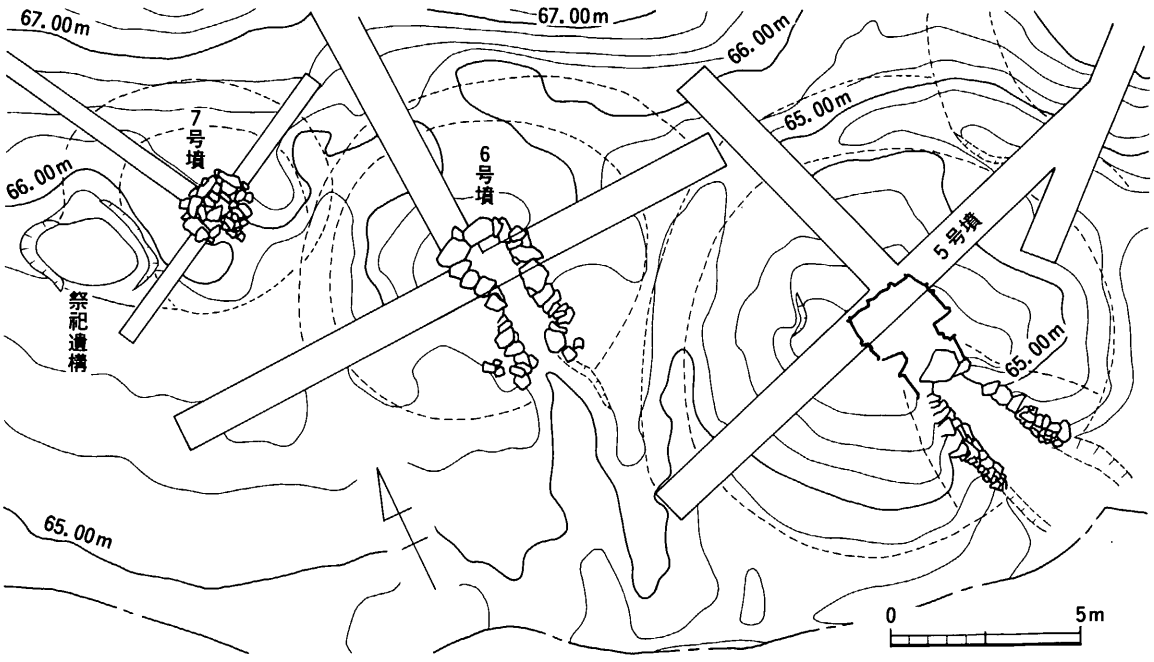
石室の残りは良い古墳であるが、それに比べて墳丘は必ずしも残りは良くない。天井石は露出しているため、古墳本来の高さを知ることはできない。また、西側の封土は比較的残っているが、北側、東側はだいぶ流失してしまっている。周溝は古墳の後側（北側）で顕著である。玄室中心から北側周溝の内側の下端と思われる部分まで約5.3m、周溝外側肩部まで約6.5mを

測る。一方玄室中心から羨道側の墳裾までは約5.5ｍなので主軸上の直径は10.8ｍ、周溝外側までは約12ｍということになる。一方、主軸と直交する方向での規模を考えると、まず西側では墳裾が比較的わかりやすく、玄室中心から6.3ｍを測る。東側は１号墳と接していて周溝も本来どちらに属するか検討を要するところであるが、周溝底まで約６ｍを測る。その外側は１号墳々丘となってしまう。以上から墳丘直径は12.3ｍと考えられる。これらのことから５号墳は直径12ｍ強の円墳と言うことができる。

墳丘の盛土について見ると、石室構築のための墓坑部分はほぼ水平あるいは石室側に傾斜を持つ薄い層が版築状に観察できる。石材を入れて、土を叩きしめながら積んでいったことを示すものであろう。墓坑内を埋めきると石を積むに従って、今度は墳丘外側へ傾斜を持つ層となる。石室主軸と直交するトレンチで石室西側のセクションを観察すると、墓坑を埋めきった後の２段分ほどの石の裏側は水平の層が見られるが、それより上はまず石材の安定を図るため土を盛り、そのあと墳丘の大きさを整えるため比較的無雑作に土盛していったことがうかがえる。盛土には暗褐色土と褐色土を多用している。墓坑切り込み面に一部黒色土層があるが、焼土層ではないようだ。したがって、古墳築造に際して儀式的なことがあったことはうかがえない。

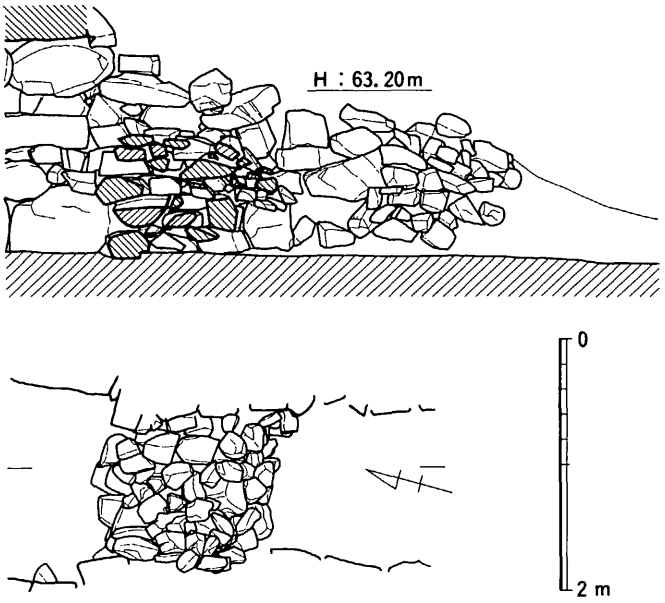
3）．石室（第39図、図版33・34）

おおよそ南に開口する複室の横穴式石室を持つ古墳である。玄室主軸はＮ－15°－Ｗである。



第36図　後田５・６・７号墳地形実測図（1/200）

1～5号墳が玄室とその他の部分の主軸がやや違っていたのに対し、5号墳の場合、前室プランがひずむが全体的に見てほとんど同一方向に造られている。

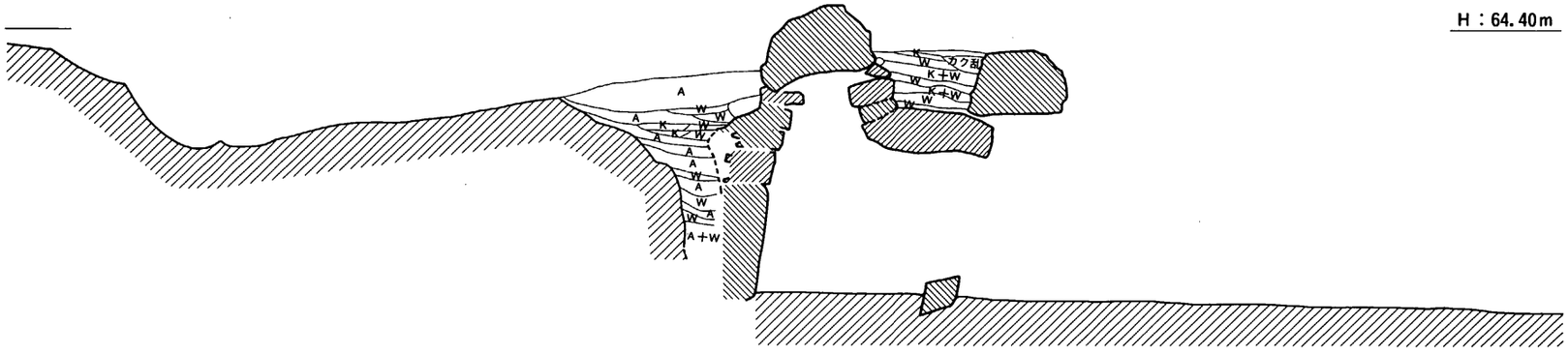


第37図　後田5号墳閉塞状況実測図（1/60）

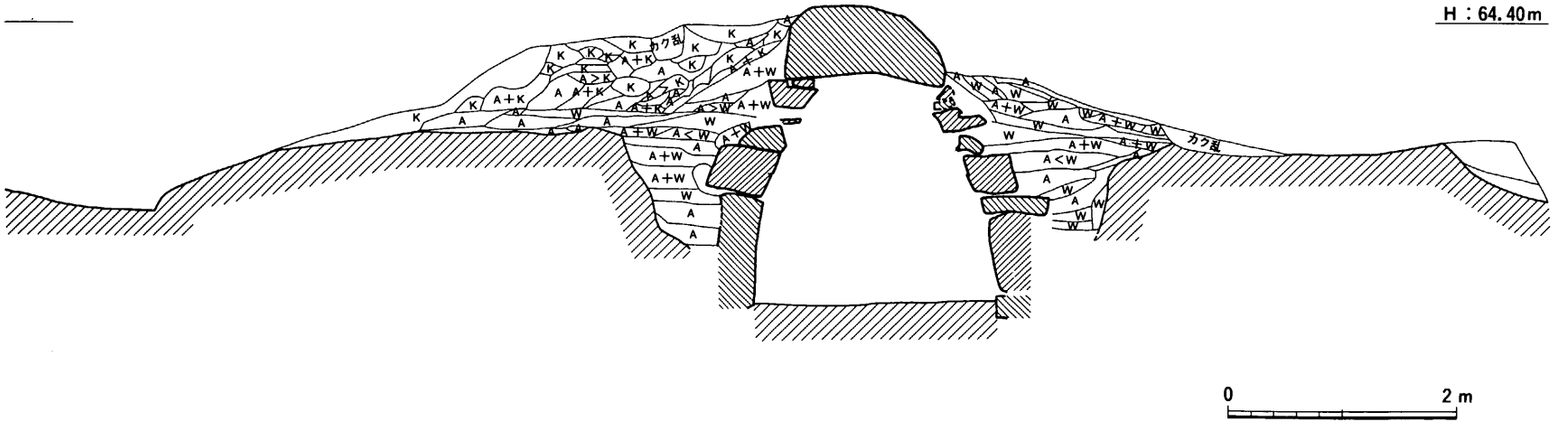
玄室は横長のいびつな平行四辺形状を呈する。右側壁長約1.3m、左側壁長約1.3m、幅は奥壁側が1.95m、中央部2.2m、玄門側で2.15mである。

石積みを見ると、石材をあまり吟味しているとは思えない。玄室奥壁の場合は、腰石として3石を使用しているが、高さはそろっておらず、また、上端部が平らでないため2段目以降も横並びになっていない。ただ、腰石のうち右側2つは上端部の傾斜を合わせており、2段目の石は両石にまたがる形でうまくはめ込んでいる。また、奥壁中央部は腰石の上に2～4段目までほとんど重箱状に重ねて5段目の石をのせ天井石を積んでいるが、左右の石は大きさもふぞろいで、まず左右側壁との架けわたしをしっかりさせることに重点を置いて、奥壁を整えようとする余裕がなかったような印象を受ける。天井までの高さは約2mである。側壁は左右とも2石を腰石として据える。右側壁の場合は腰石に2石用いられているが、羨道側の石が低い。2段目は逆に羨道の石が高く、3段目でおおよその高さをそろえている。4段目、5段目は石の大きさが違うが、高さはおおむねそろえながら積み上げている。そして6段目は、比較的平らな石を積んでいるが、5段目までの石と比べ小ぶりで、天井石と5段目の石との調節用としての役割を持っているという感じである。側壁全体として見ると奥壁に比べて比較的整った石を用いて整然と積んでいる印象を受ける（図版34）。袖石は玄室腰石とあまり変わらない高さの石を用いて、玄室側壁から約50cmせり出させている。その上に右側で2石、左側で1石積んで楣石を架けわたす。框石としては細長い石を1石横に置いているが、袖石とわずかに隙間が生じるため、その部分に小石を詰めている。玄門幅1.05m、高さ1.15mを測る。

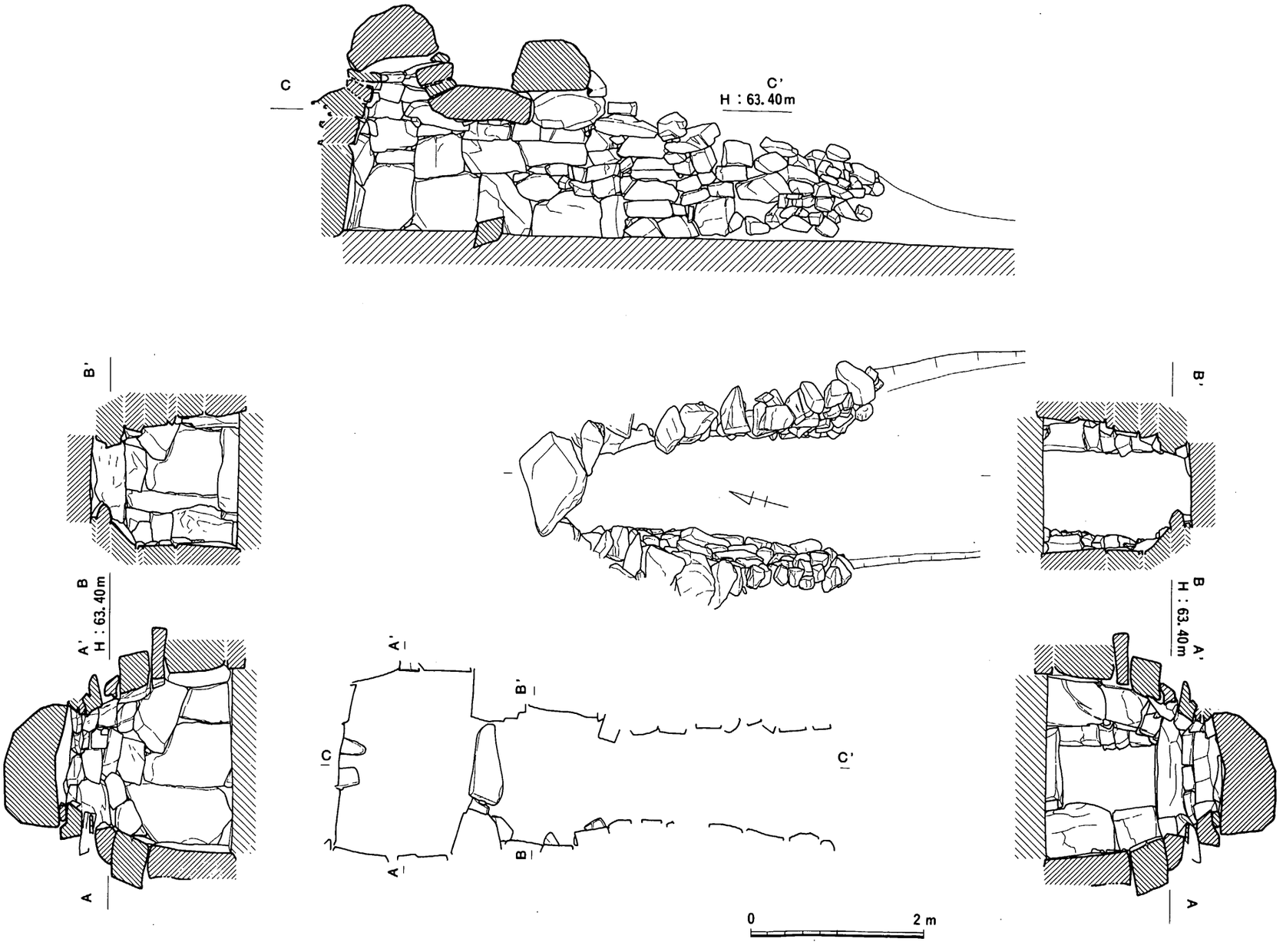
前室はややゆがんだ横長の長方形状を呈する。側壁長は左右ともほぼ同じで0.9m、幅は玄



A：暗褐色土
B：黒色土
W：白褐色土
A＋W：AとWが混ざっている状態
A＞K：AとKが混ざっているがAが多い状態

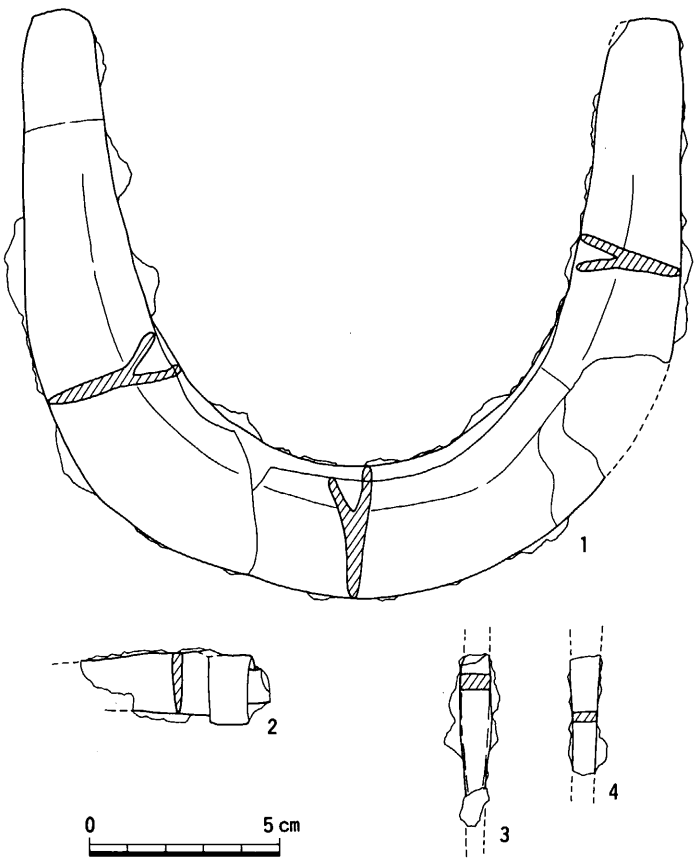


第38図　後田５号墳墳丘断面実測図（1/60）



第39図　後田５号墳石室実測図（1/60）

門側で1.55ｍ、羨道側で1.5ｍである。玄室同様敷石は乱れており、また湧水もあってすべてとり除いた。腰石は右側壁で１石、左側壁で２石用いている。右側壁の場合、上端が平らではない石を使用しているため、玄室袖石の高さとほぼ同じになるまで中位の石と小ぶりの石を積み上げ、その上は比較的整った石を横長にして２段分積み上げる。その上に丸味があるが大ぶりの石を積み上げて天井石をのせる。玄室楣石下端から前室天井までの高さは約35㎝である。袖石はそれほど大きな石ではない。隣り合う前室腰石と同じ高さで、その上に角張った石を４段積む。その上に羨道部の石に架けわたす形で長めの石を積んでいる。この上に楣石がのっていたものであろう。



第40図　後田５号墳出土鉄器実測図（1/2）

羨道は前室袖石の外側の約0.9ｍの間と考えられる。比較的石材を選んで横長の石を整然と積む。上から重量がかかっても耐えられるようにしているものであろう。平面的にも、この間が両側石とも平行に積まれている。幅は約１ｍである。

墓道は羨道に続く部分で、両側に石組みを持つ。若干外開き気味である。素掘り部分はあまり明確ではない。石積みは羨道側が比較的整然と積んでいるが、先端部に行くにつれ、石の大きさも小さくなり乱雑な積み方になる。羨道側の石は小ぶりながらも大きさや形が比較的そろえられている。

４）．出土遺物

出土遺物を列挙すれば以下のとおりである。

鉄　器　　鋤先　１

刀子　1
鏃　2
須恵器　杯蓋　20（図示11）
杯身　21（図示11）
高杯　8（図示６）
𤭯　2
甕　2（図示せず）

なお、周溝が東側で１号墳と、北西側で６号墳といっしょになっているような状況なので、これらの場所から出土した遺物はどちらに帰属するか決めがたかったので、ここで、それぞれ１・５号墳周溝出土遺物（第43図）、５・６号墳周溝出土遺物（第44図）として扱った。

１・５号墳周溝出土遺物

須恵器　杯蓋　4
杯身　2
鉢？　1
壺　3

５・６号墳周溝出土遺物

須恵器　杯身　3
高杯　2
蓋　1
椀？　1
甕　1

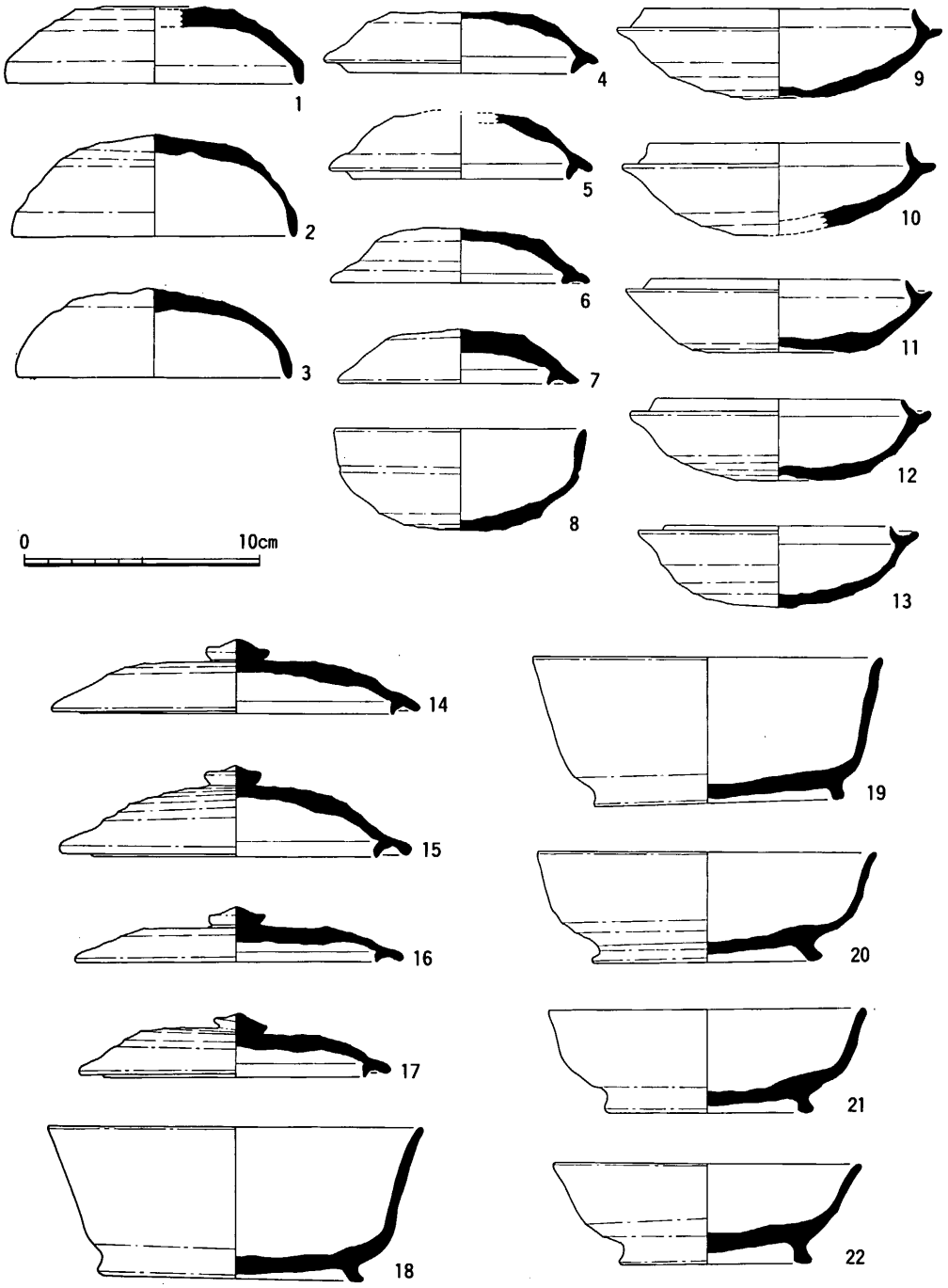
出土状態

１・５号墳周溝出土遺物、５・６号墳周溝出土遺物は前述のとおりである。それ以外については以下のとおりである。鉄器のうち、鋤先と刀子と鏃（第40図４）は前室から、もう１本の鏃は羨道埋土から出土した。須恵器は原位置は保っていないが、第41、42図の15・18～21・28が前室から、特に28の高杯は床面近くから出土した。次に８・10・12・16・17・22・23・30が羨道から、１・６・７が墓道から、２～５・13・26が周溝から、９・11・25・27が墳丘からの出土である。また、24の高杯は羨道、墓道、墳丘出土の破片が接合し、29の𤭯は周溝と墳丘出土の破片が接合している。

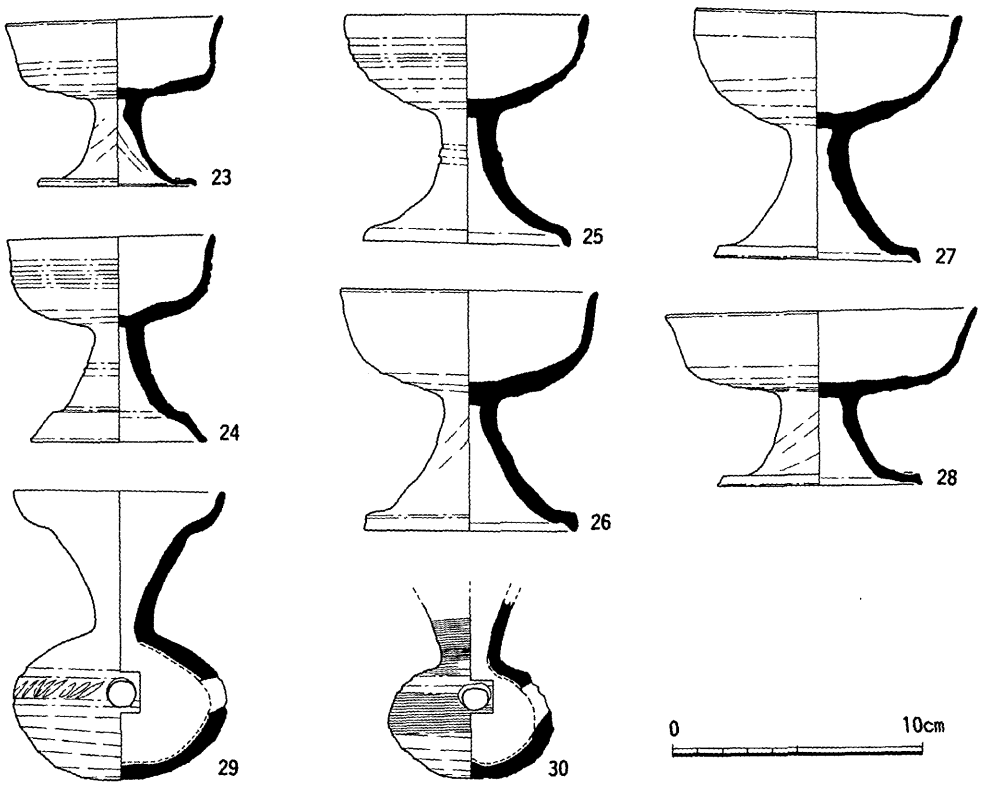
遺物

鉄器（第40図）

鋤先（１）欠落部分があるが、ほとんど完形に近いものである。全長15.5cm、最大幅17.3cmを測る。木柄挿入部は前、背二面に分かれるが、中央付近で、刃部幅約2.3cm、挿入部幅1.2cm



第41図　後田５号墳出土土器実測図①（1/3）



第42図　後田５号墳出土土器実測図②（1/3）

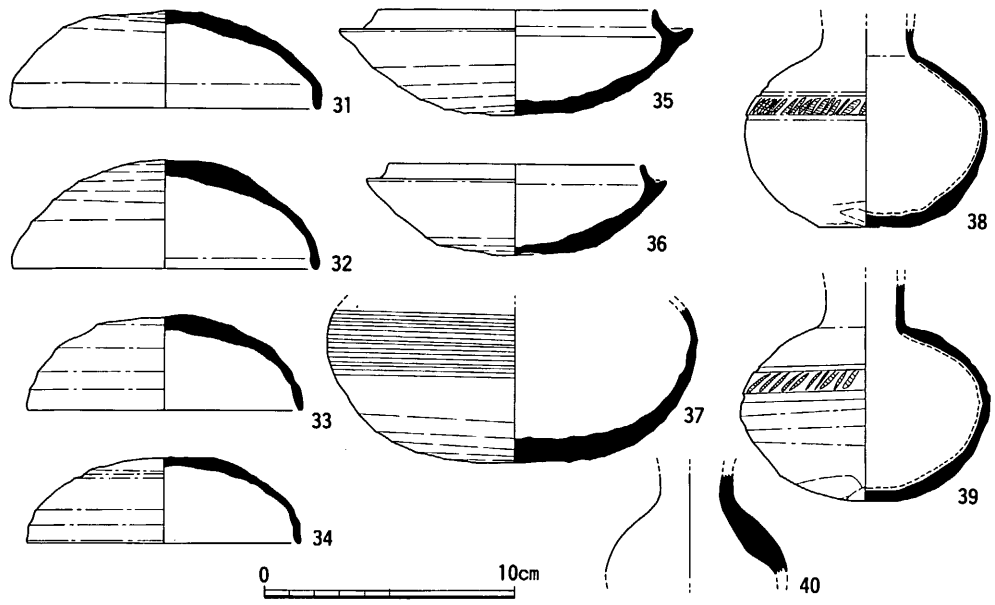
である。

刀子（２）小破片で、かつ錆化が著しいため関周辺の細部が不明である。把をおさえる縁金具が残る。身の背部は先端に向かってやや湾曲していく。残存長約５cmである。

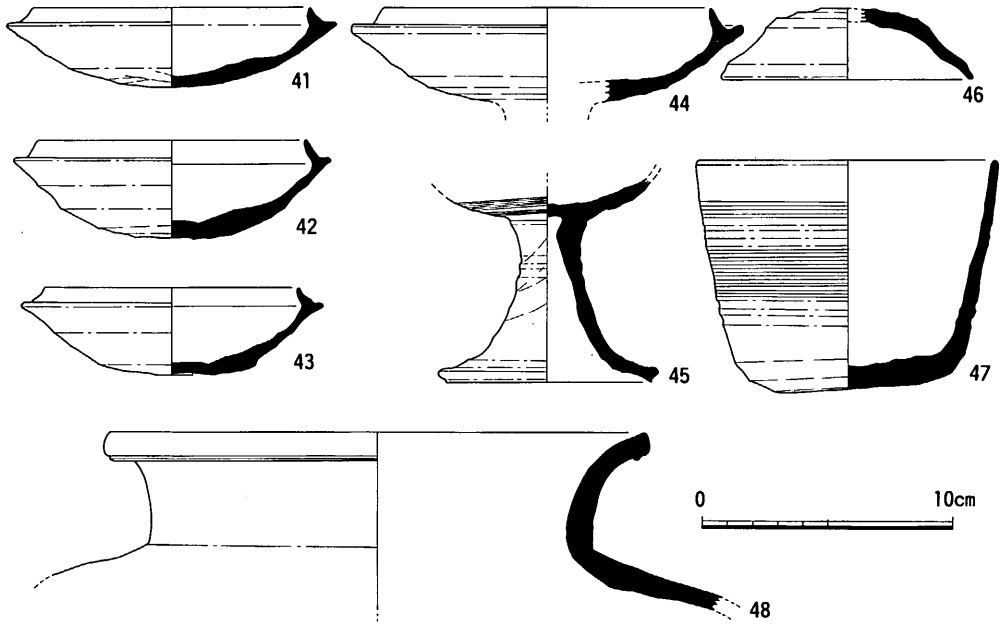
鏃（３・４）いずれも小破片で、かつ先端部が失われたものである。残存長は３が4.5cm、４が3.1cmである。

須恵器（第41図、図版35～37）

杯蓋（１～７、14～17）今までの分類に従えば１～３がＡタイプ、４～７がB_2タイプ、14～17がC_1タイプである。Ａタイプは口径11.5～12.5cmを測り、１が天井部を回転ヘラケズリしているが、２・３はヘラ切り後軽くナデるだけである。B_2タイプは口径7.7～9.5cm、最大径10.2～11.1cmを測るものである。かえりは４・５は比較的高く外に出るが、６・７はほとんど体部と同じ高さになって外に出ない。天井部外面は４・５は磨滅のため不明だが、６・７はヘラ切り後ナデるだけである。C_1タイプの14～17について見れば、一番大きい14が口径13.2cm、最大径15.6cm、器高3.2cmを測り、最小の17は口径11.0cm、最大径13.1cm、器高2.8cm



第43図　後田１・５号墳周溝出土土器実測図（1/3）



第44図　後田５・６号墳周溝出土土器実測図（1/3）

である。すべてつまみは高いが、かえりは若干外へ出るもの（14・15・17）と外へ出ないもの（16）がある。天井部は回転ヘラケズリをする。

杯身（8～13・18～22）やはり1・2号墳の出土遺物の項で述べたように分類すると、9～13がAタイプ、8がBタイプ、18～22がCタイプとなる。Aタイプは口径9.5～11.4cm、受部径11.8～13.2cmを測るものである。ただし、13は蓋とすべきか迷うものである。立ち上りは低く内傾する。また、その形態も基部から先端までほとんど同じ厚さのもの（12）と基部が太く先端部が細くなるもの（11）がある。9～12は底部外面をヘラケズリするが、13はヘラ切り後ナデるものである。Bタイプは8のみであるが、口径10.5cm、器高4.3cmの大きさである。体部に1条の沈線を持ち、底部外面をヘラケズリするものである。Cタイプのうち18・19は深味のあるもので、18は口径15.7cm、器高6.6cm、19は口径14.6cm、器高6.4cmを測る。いずれも高台は高く外へふんばる。20～22は口径12.9～14.1cm、器高4.3～4.8cmを測る。前者に比べやや浅めのもので、体部にゆるやかではあるが屈折点を持つ。全体をヨコナデ、ナデを行う。

高杯（23～28）すべて無蓋高杯である。杯部の形状と口径・器高の比率から見て、大きく23～27と28の2種類に分けられる。前者はさらに杯部が角張り気味の23・24と、丸味を持つ25～27に分けられる。また、脚部の形状は24が屈曲する以外はゆるやかな曲線を描いて端部に至る。23～25は杯部の体部に沈線を持つ。23で口径8.5cm、器高6.8cm、27で口径10.4cm、器高10.2cmを測る。28は杯部口径12.3cm、器高7.1cmを測り、他の高杯に比べ短脚気味である。杯部底部外面はヘラケズリする。脚部はシボリ痕が残るが、ヨコナデで仕上げる。

甕（29・30）29は口径8.3cm、器高11.6cmを測るもので、球形に近い胴部にラッパ状に開く口頸部を持つ。口縁部は段をなしているが、明確ではない。胴部中央に円孔を有する。そしてその高さの位置で2条の沈線を入れ、中を斜行する刺突文で埋める。胴下半部はヘラケズリする。30は口縁部を欠くが、29より小型である。胴部中央よりやや上側に円孔を有する。胴下半部はヘラケズリ、上半分並びに頸部にはカキ目が施される。

1・5号墳周溝出土須恵器（第43図）

杯蓋（31～34）すべてAタイプに属するものである。31・32は口径12.2cm、12.1cmとほぼ同じ大きさである。31の口縁部がわずかに折れ曲がる。天井部は外面を回転ヘラケズリする。33・34は口径10.8cmと上2個に比べ小さい。天井部外面はヘラケズリしない。ヘラ切り後ナデるだけである。

杯身（35・36）2個ともAタイプに属する杯身である。35は口径11.0cm、受部径14.1cm、器高4.3cmを測るもので、底部外面の3分の2ほどをヘラケズリし、その他をヨコナデ、ナデで仕上げる。36は口径10.2cm、受部径12.1cm、器高3.6cmを測るもので、底部外面の2分の1ほどをヘラケズリする。

壺（37～40）37は扁球形をした胴部破片で、中位をカキ目、底部をヘラケズリするものであ

る。38・39はよく似た形のもので、残念ながらどちらも口縁部を欠く。甕と似た形態を示すが、頸部が垂直に立ち上がる点が違う。胴部の肩に当たる部分に2条の沈線を持ち、その間を連続する刺突文で埋めている。また、底部外面は手持ちのヘラケズリを行う。その他はヨコナデである。40は小型のもので形態的にも良くわからない。内外面とも明橙色を呈する。

5・6号墳周溝出土須恵器（第44図）

杯身（41～43）すべてAタイプに属する。口径10.1～11.0cm、受部径12.0～13.1cmの大きさのものである。立ち上がりは低くて内傾する。立ち上がりの形態は基部が太く先端部が細いもの（41・43）、基部から先端部まであまり厚味の変わらないもの(42)がある。底部外面は41が手持ちヘラケズリ､42は回転ヘラケズリ、43はヘラケズリはせずにヘラ切り後ナデているだけである。

高杯（44・45）44は有蓋高杯の杯部、45は脚部の破片である。44は口径13.0cm、受部径15.6cmと大型の高杯である。底部外面はヘラケズリし、その他はヨコナデ、ナデである。45のわずかに残る杯部外面にはカキ目が残る。脚部にはシボリ痕が見えるが、全体をヨコナデする。

蓋（46）口径10.0cm、器高2:8cmを測るものである。天井部外面をヘラケズリ、その他をヨコナデ、ナデをする。杯蓋とするには形態的にやや疑問がある。

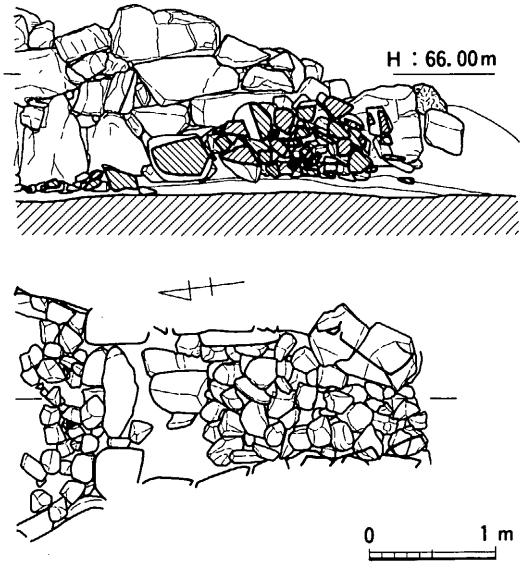
椀（47）椀とすべきか鉢にすべきか迷うが、椀として扱った。平垣な底部と外側に斜行する体部から成る。口径11.8cm、器高9.3cmを測るもので、体部に対になった沈線を2ケ所に施し、その間と上位にカキ目を施す。底部外面をヘラケズリする。その他の外面と体部内面はヨコナデ、底部内面はナデを行う。

甕（48）口径21.3cmを測り中型甕の部類に入る。頸部は無文である。胴部外面は平行叩きのあとカキ目を施し、内面には同心円の当て具痕が残る。

6．6号墳

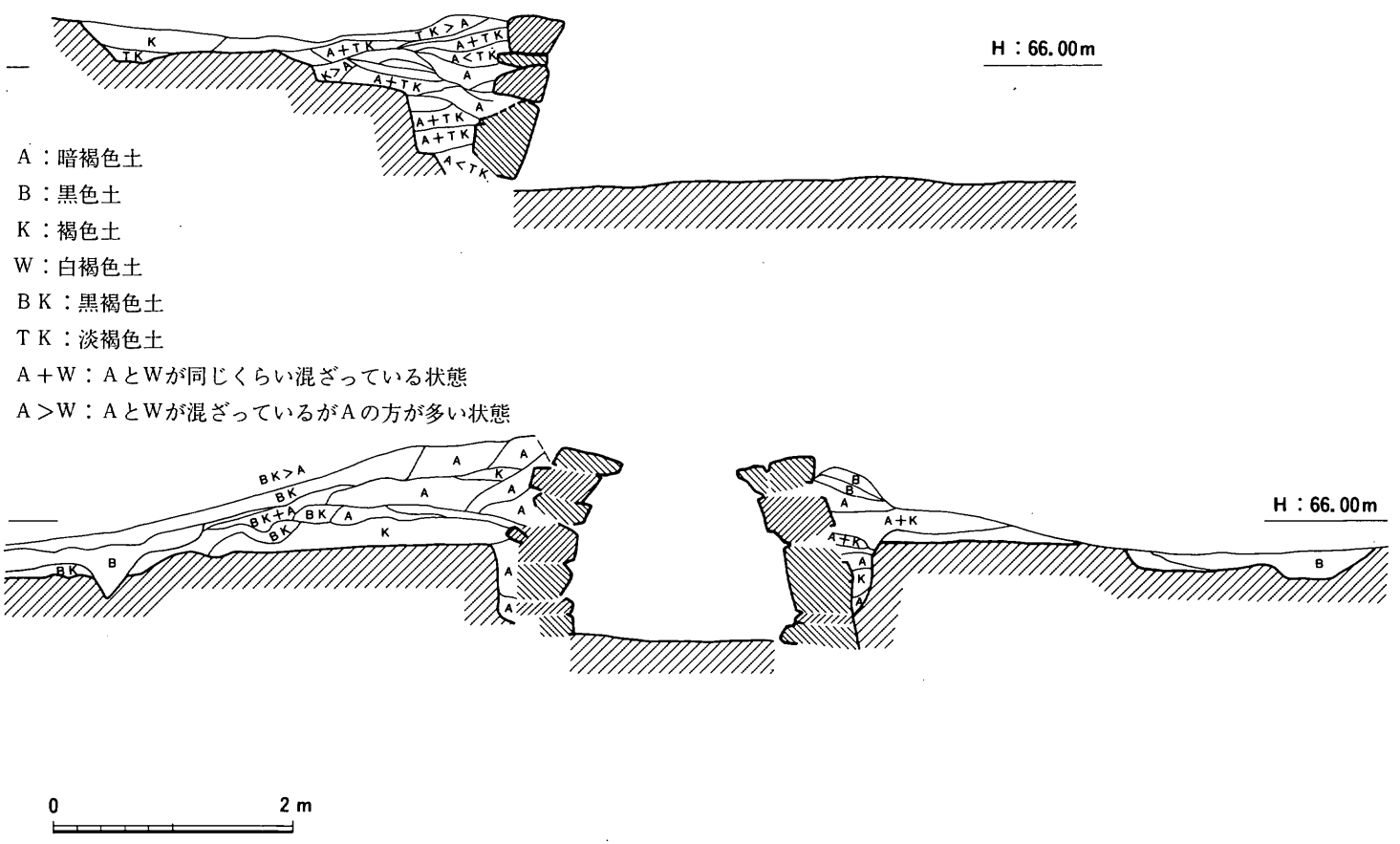
1）．立地と現況（第3・36図）

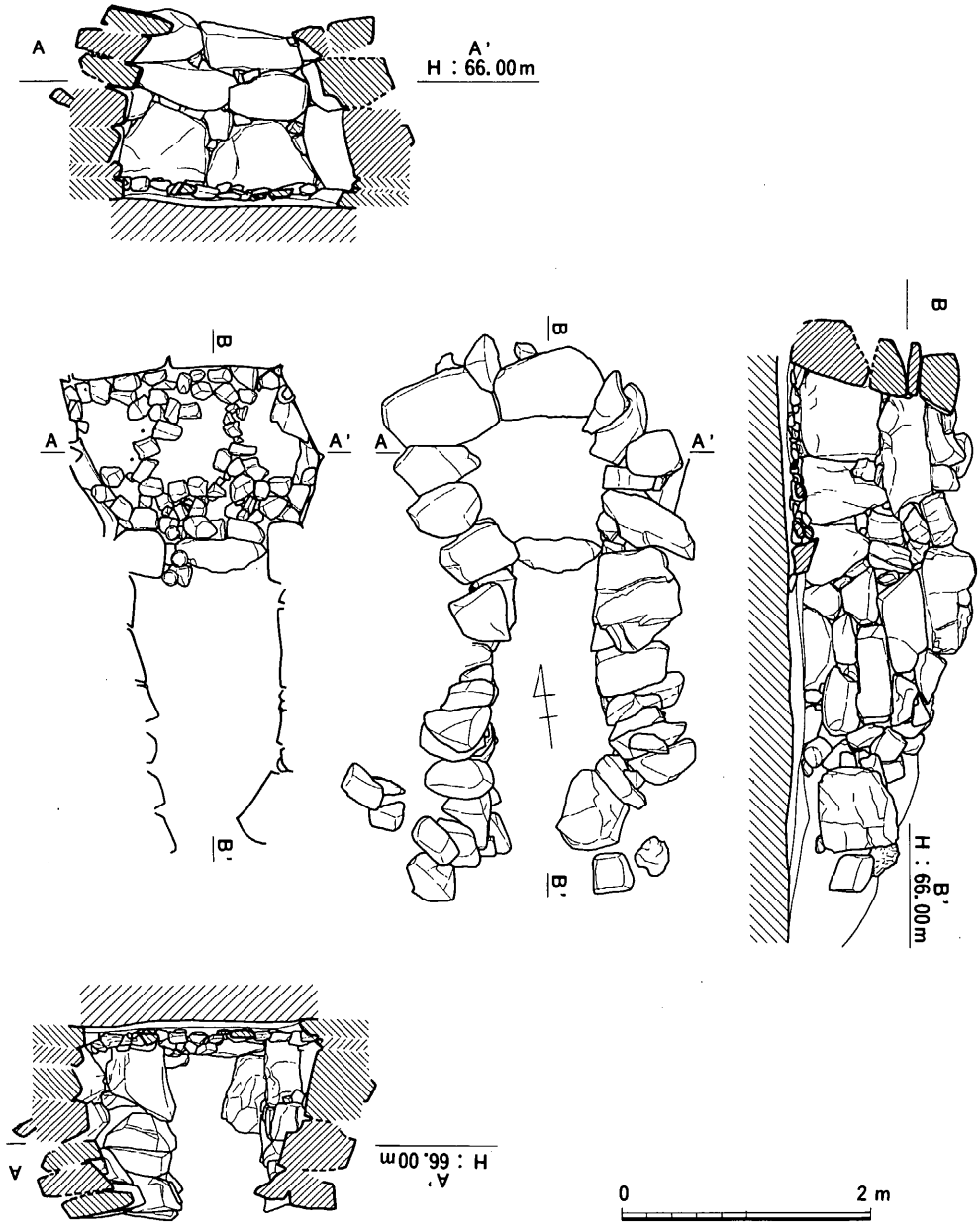
5号墳と7号墳にはさまれて立地する。5号墳と6号墳の間の周溝は切り合っていると思われるが、黒色土の埋土は区別がつかず、先後関係はわからない。5号墳に次いで低い位置にあり、玄室床面の標高は約65.10mである。



第45図　後田6号墳閉塞状況実測図（1/60）

第46図　後田６号墳墳丘断面実測図（1/60）





第47図　後田６号墳石室実測図（1/60）

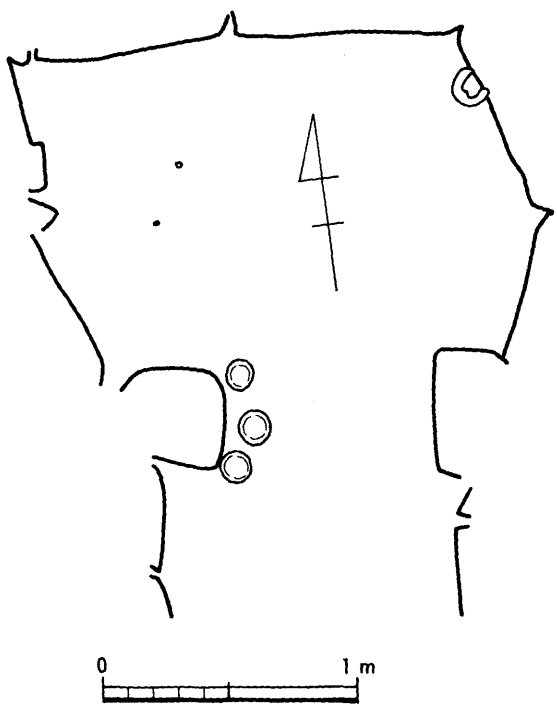
これも段々畑の中に埋没しており、表面からはわからなかった古墳である。盛土を除去した結果、石組みが現われ、古墳とわかった。天井石並びに石室上部の石は既になく、石室内は流入土が充満していた。

2). 墳丘（第46図、図版38）

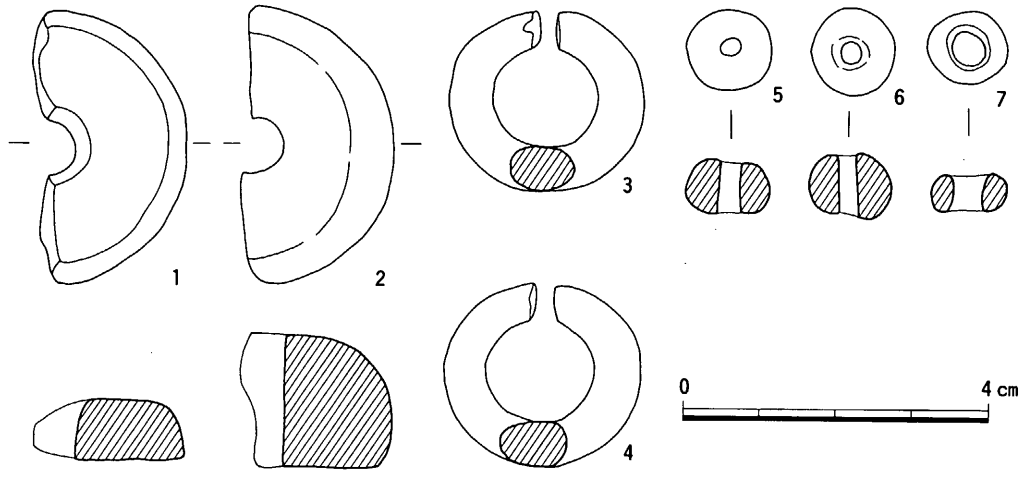
前述のように石室上部の石が既になくなっていたため、古墳本来の高さを知ることはできない。周溝は古墳の東側と北側に見られるが、東側では5号墳の周溝と接している。周溝はゆるやかな断面をなし、埋土は黒色土である。

規模を検討してみると、まず石室主軸方向では、玄室中心から周溝外側と思われる地点までで約4.4m、周溝内側の下端で墳丘裾と考えられる部分まで約3.8mである。また、墓道側の墳裾までは約4mである。したがって墳丘の主軸上の規模は約7.8m、周溝外堤までは約8.4mである。一方、墳丘と直交する方向では、東側トレンチの土層観察からすると、玄室中心から周溝外堤まで約5.65m、内側下端即ち、墳裾と考えられる部分まで約3.65mである。西側トレンチでは周溝が明確ではなくなっており、わかりにくいが、墳丘裾と考えられる地点まで約4.95mである。以上から、この方向での規模は径約8.6m、周溝外堤まで入れると約10.6mとなる。したがって正円とは言いがたく、径約7.8～8.6m、周溝を含めると約8.6～10.6mの楕円形の古墳と言える。

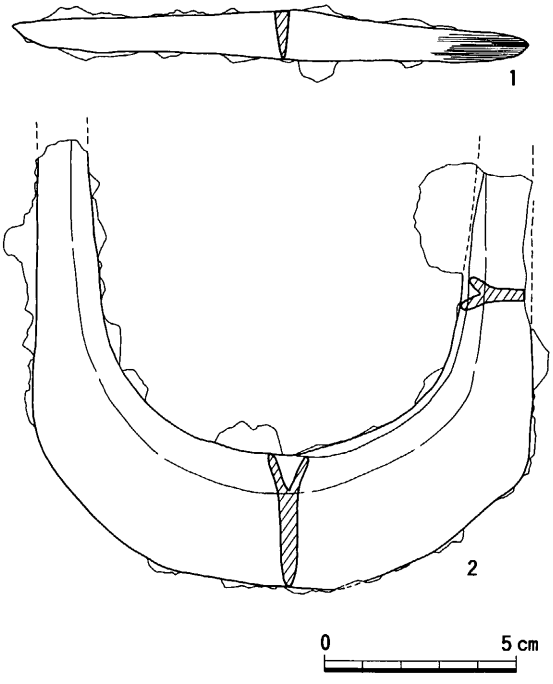
また、盛土について見ると、墓坑壁と石の間はほぼ水平の層を成すように充塡されている。石室後側の土層観察によれば、比較的短い土層が多く、ていねいに積み上げたことが考えられるが、必ずしも石に近い部分を早く盛るとはかぎらない。即ち、石材からやや離れた場所まで墳丘を整える形で土を盛り上げ、そこと石材の間の窪地へ土を入れ込んだと考えられる土層が見られ



第48図　後田6号墳遺物出土状態実測図（1/30）



第49図　後田６号墳出土装身具実測図（1/1）



第50図　後田６号墳出土鉄器実測図（1/2）

るからである。その一方、主軸と直交する方向での土層観察によれば、石室後側に比べてやや粗い盛り方をしている。墓坑と石材の間を埋めた後は、墳丘を整える盛土を行う。そこから上は石を積むに従ってその後を固めて、墳丘全体を盛り上げる盛土の順序である。東側トレンチ土層では墓坑切り込み面に炭まじりの黒褐色土層が見える。他の古墳では見られなかったが、古墳築造に先だっての祭り、あるいは伐採と焼却に伴うものなどの理由が考えられる。しかし、６号墳の場合、古墳羨道側半分の盛土をはずしたところ、奥壁に向かって左側で須恵器の甕片や蓋杯を検出した（図版42－１）。このことを考え合わせれば、何らかの祭祀行為のあったことが推測できる。盛土は黒色土、褐色土、暗褐色土、黒褐色土、淡褐色土が使われている。砂質の土と粘質の土を特に使い分けているとは考えられない。

３）．石室（第47図、図版39・40）

おおよそ南に開口する単室の両袖式横穴石室である。玄室があまり整った形をしていないため、羨道との均衡を考えて主軸を設定した。このため、玄室だけで主軸を設定した場合に比べ東側にふれている。N－17°－Eである。

玄室は横長の不整平行四辺形状を呈する。側壁長は左右ほぼ同じで1.25m、幅は奥壁側で1.75m、中央部で1.95m、玄門側で約1.6mである。やや胴張り気味と言える。天井石が失われているため石室の高さはわからない。床面には比較的敷石が残っている。一辺20cm程度の角張った石を多用している。石積みは比較的整然としている。奥壁はあまり整ったものではないが、高さの近い2石を腰石として据え、小ぶりの石で調節しながら2段目の石を2個積んでいる。石材は横にして使っているが、これらもそれほど高さが違わない。3段目も大きさは違うが、高さをほぼそろえた2石を使用して積み上げている。そして、石と石の間隙には小ぶりの石をうまくはめ込んでいる。側壁も腰石として2石使っているが、高さをそろえている。右側壁について見ると、特に奥側の石は方形に近い整った石である。玄門側の石も整ってはいないが、間隙を小石でうまく埋める。そして、2段目は大ぶりの石を横にして両腰石の上に架けわたすようにして積み上げている。3段目は小ぶりの石を2個使っているが、高さはおおよそそろえている。袖石は良く選定したとは言えない。腰石よりも低い石をまず据え、その上に中位の石を3石積み上げている。左側の袖石の積み方の方がしっかりしている。框石は長めの石と、調節のための小石の2石からなる。玄門幅は0.8mを測る。

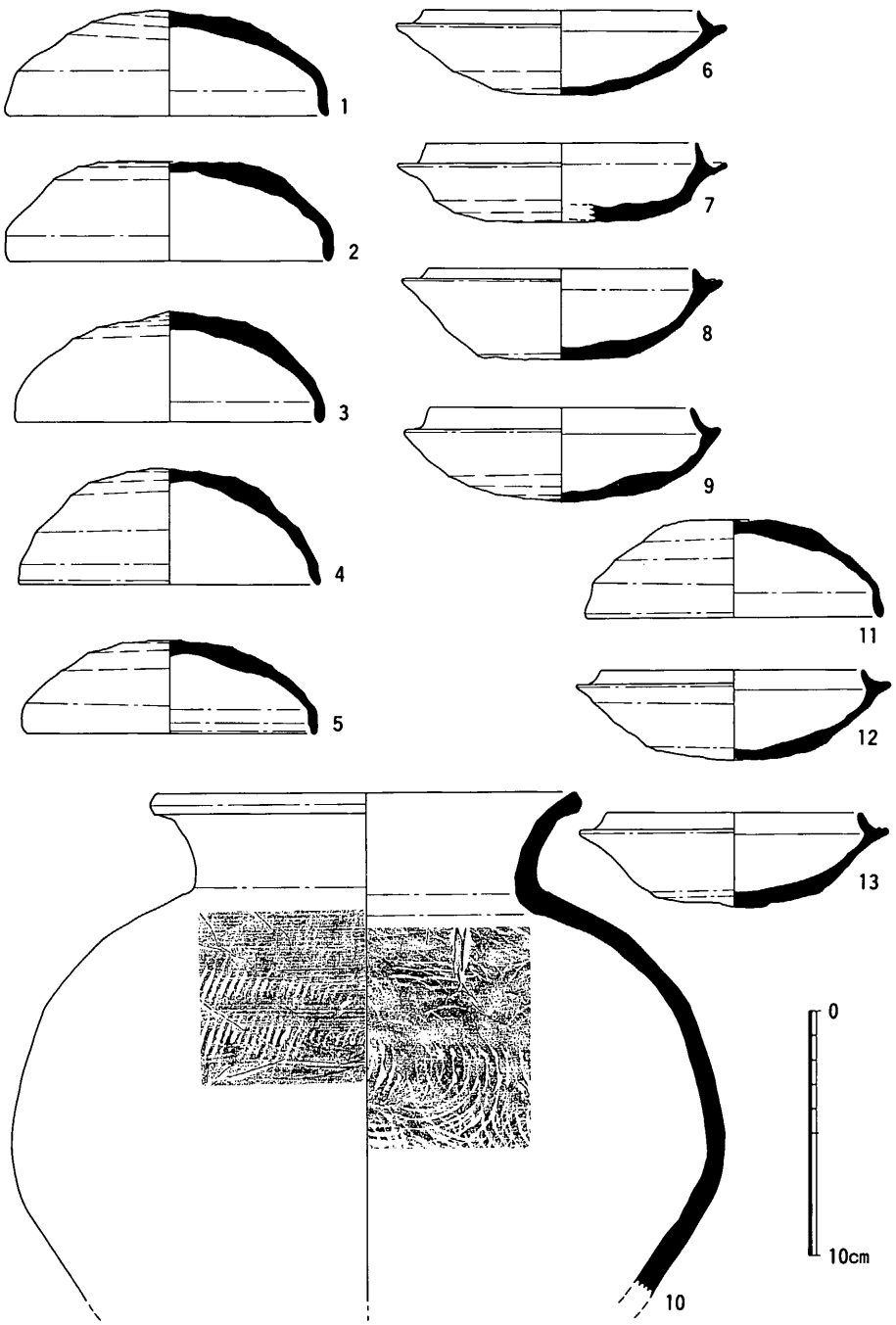
羨道については、石組みのある部分全てなのか、石組み墓道が含まれるのか迷うところがあるが、右側壁の場合、袖石外側から約1.2mの間とそれより先では様相を異にする。即ち、前者の部分では石材として比較的大きな石を横長にして積み上げており、それに対して後者の部分は大石1個はあるが、小ぶりの石を玄室側にもたせかけるようにして積み上げている。これは前者が重量に耐えられる積み方であるのに対して、後者はそうでない状態である。これから前者部分を羨道、後者部分を石組み墓道と考えたい。幅は1.05～1.15mである。

墓道は石組み墓道部分が約1.4m、素掘りの部分が約7m検出された。石組み部では右側の先端部の大石がやや崩れた状態と考えれば、「八」の字型に開く。比較的小ぶりの石を積んでいる。素掘り部分は底面は平坦に近いかやや丸味を持つ。側面はゆるやかな傾斜をなす。この結果、横断面は浅い皿のようなゆるやかな形を示す。

閉塞は玄室框石より外側でなされていたと思われる。原位置を保っているか疑わしいが、框石近くに比較的大きめの石が1個あり、そこから墓道側にかけて20cm内外の石が密集して検出された。大きめの石が玄門側に多いことからすれば、当初は框上かあるいはすぐ外側で行っていたものが墓道側に崩れた（崩した）可能性が考えられる。

4）．出土遺物

出土遺物は次のとおりである。



第51図　後田６号墳石室・墳丘下出土土器実測図（1/3）

装身具　耳環　2
　　小玉（ガラス玉）　9（図示３）
鉄　器　鋤先　1
　　刀子　1
　　鏃　1（小破片のため図示せず）
須恵器　杯蓋　29（図示19）
　　杯身　32（図示24）
　　甕　1
　　高杯　9（図示７）
　　高杯蓋　2
　　鉢　1
　　平瓶　1（図示せず）
　　蓋　1（図示せず）
　　甕　9（図示６）
　　壺　1
　　横瓶　1
土師器　壺　1
　　甑？　1
その他の石製品　紡錘車　2

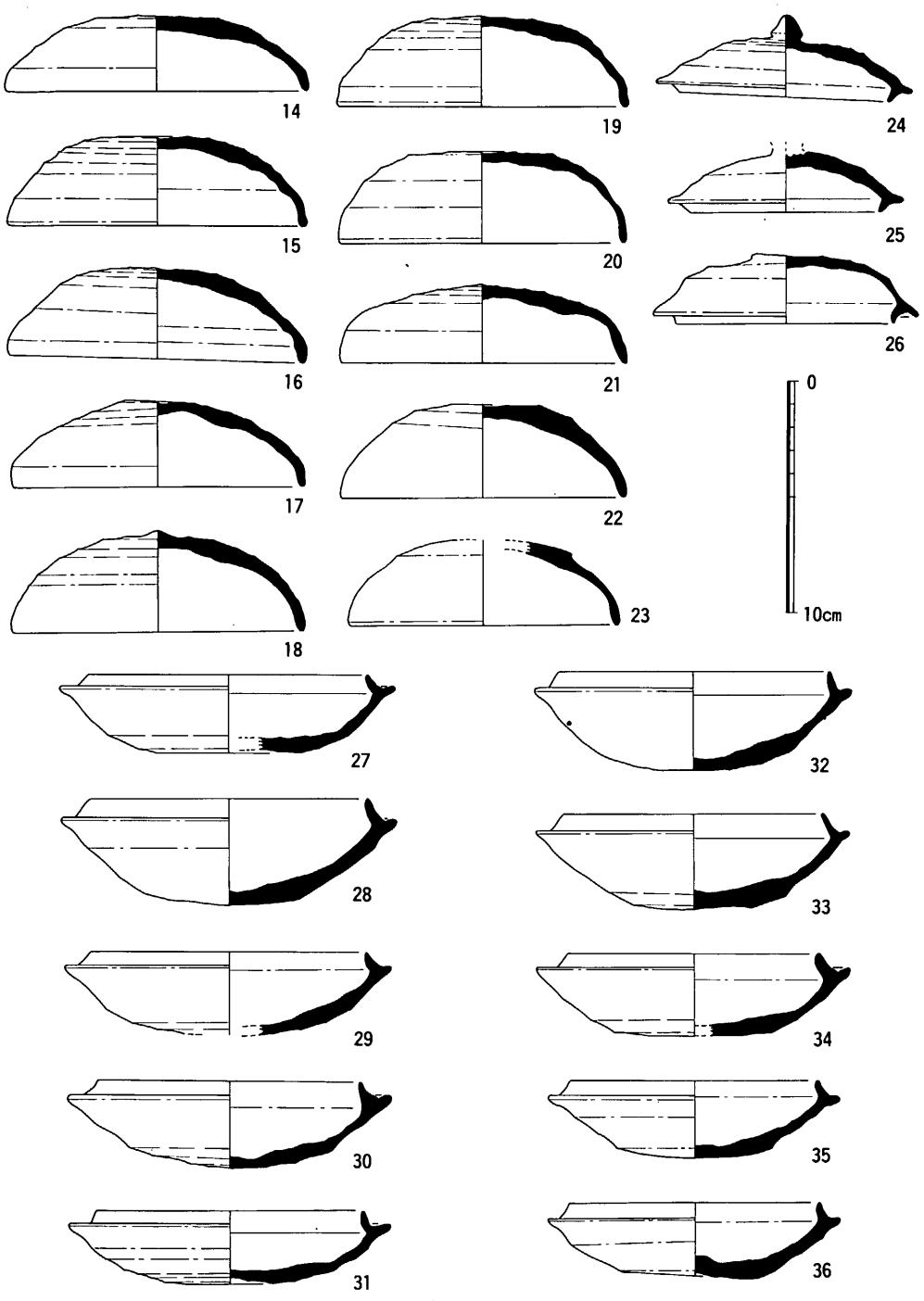
出土状態（第48図、図版40～42）

装身具類は玄室床面からの出土で、原位置に近い可能性がある。鋤先は玄室右側壁に立てかけるようにして検出された。刀子も玄室出土である。須恵器は杯蓋（第51図11）、杯身（同12・13）が框石周辺から出土したもので、１～10は羨道部左側の墳丘下から出土した。その他について列挙すると、羨道からは20・38・53、墓道からは24・37・43・44・50・56・57・59、周溝から18・48・49・58、墳丘からはその他のもので、14～17・19・21～23・25・26～36・39～42・45～47・51・52・55・62・63が出土している。ただし、31と64は墳丘と周溝からの出土破片が接合している。土師器60・61は墳丘からの出土である。また、紡錘車は１が墓道から、２が墳丘からの出土である。

遺物

装身具（第49図、図版43）

耳環（３・４）３は径2.4×2.55cm、断面は0.85×0.6cmを測る。重さは14.35ｇである。青銅に鍍金している。４は径2.4×2.55cm、断面0.85×0.6cm、重さ14.1ｇを測るもので、やはり鍍金している。金の残り具合は良い。



第52図　後田６号墳出土土器実測図①（1/3）

小玉（５～７）すべてガラス玉である。５・６はまだ緑色を呈しているが、７は風化が激しく白色化しているものである。径１～1.2cmを測る。他に６個のガラス玉が出土しているが、破片であったり、風化が激しかったりしているので、図示していない。

その他の石製品（第49図、図版43）

紡錘車（１・２）いずれも滑石製と思われ、灰白色を呈するものである。２個とも半分しかない。２は復元径3.6cm、同じく孔径1.0cm、厚さ0.8cm、現在の重さ9.05ｇを測る。３は復元口径3.7cm、孔径0.75cm、厚さ1.8cm、重さ19.15ｇを測るものである。断面を見ると肩はあまりシャープではなく丸い。

鉄器（第50図、図版43）

刀子（１）現存長13.5cm、中央部付近の刃部幅1.0cmを測るものである。刃部断面は二等辺三角形を呈す。錆のため関の部分がはっきりしないが、切っ先から8.8cmの付近と思われる。茎の先端部付近には木質が残っている。

鋤先（２）耳部先端を欠くがほぼ完形に近いものである。現存長11.8cm、最大幅13.1cmを測る。木柄挿入部は前・背二面に分かれ、前面側の幅がやや狭い。刃部中央付近での刃部幅約2.4cm、挿入部幅約1.0cmである。

須恵器（第51～56図、図版44～46）

墳丘下出土須恵器（第51図）

既述のように、羨道左側の墳丘下で出土したもので、６号墳築造当初のものと考えられる一群である。

杯蓋（１～５）すべてＡタイプに属する。口径は11.8～13.0cmで形態的には似ている。天井部外面は回転ヘラケズリする。

杯身（６～９）これもすべてＡタイプに属する。口径10.7～11.3cm、受部径13.0～13.5cmの大きさである。底部外面の調整については、８がヘラ切り後ナデるだけの他は回転ヘラケズリする。

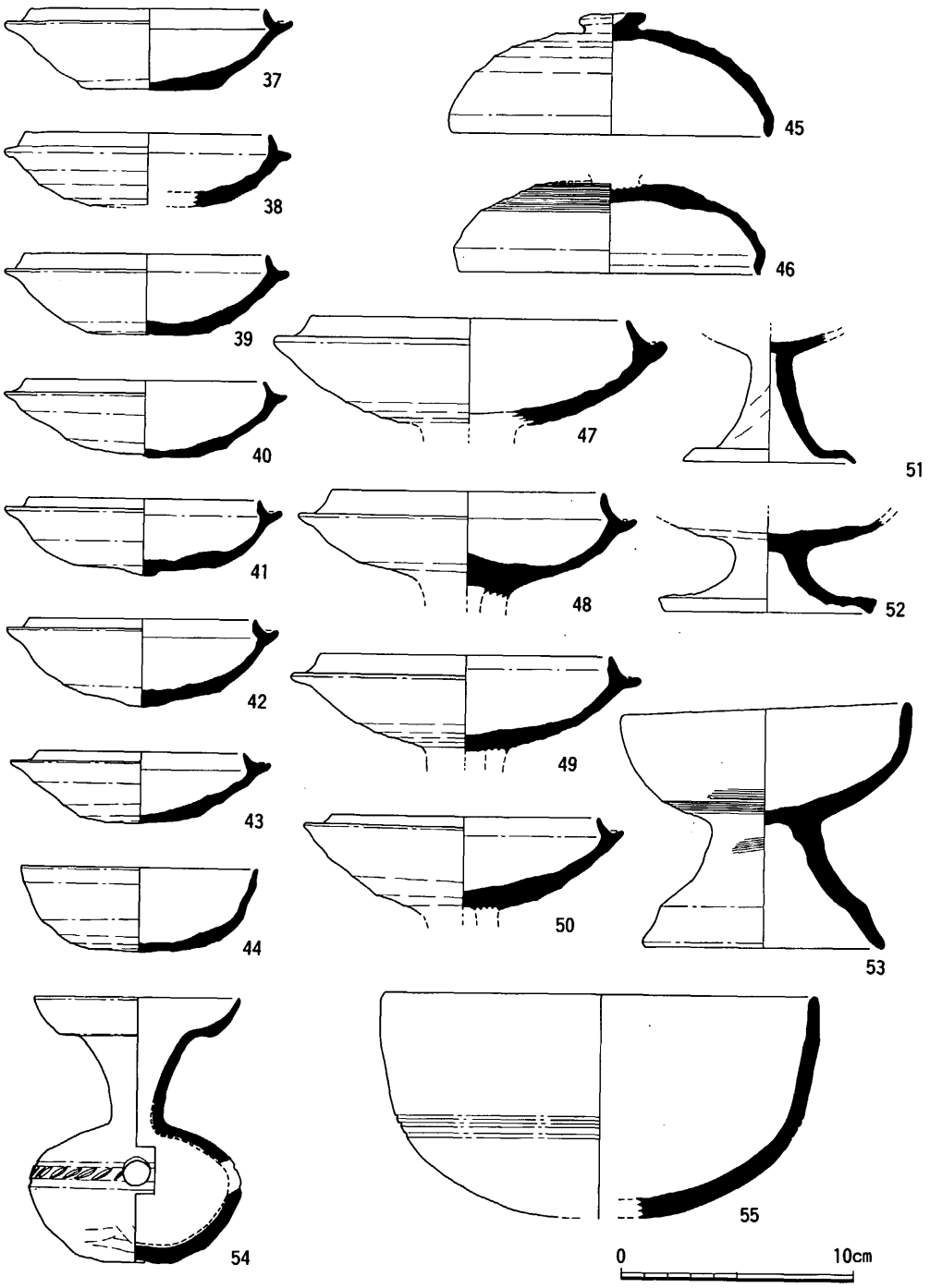
甕（10）口径17.1cm、胴部最大径29.0cmを測るもので、中型の部類に属する。胴部外面は平行叩きのあとカキ目を施し、内面には同心円の当て具痕が残る。

石室床面出土須恵器（第51図）

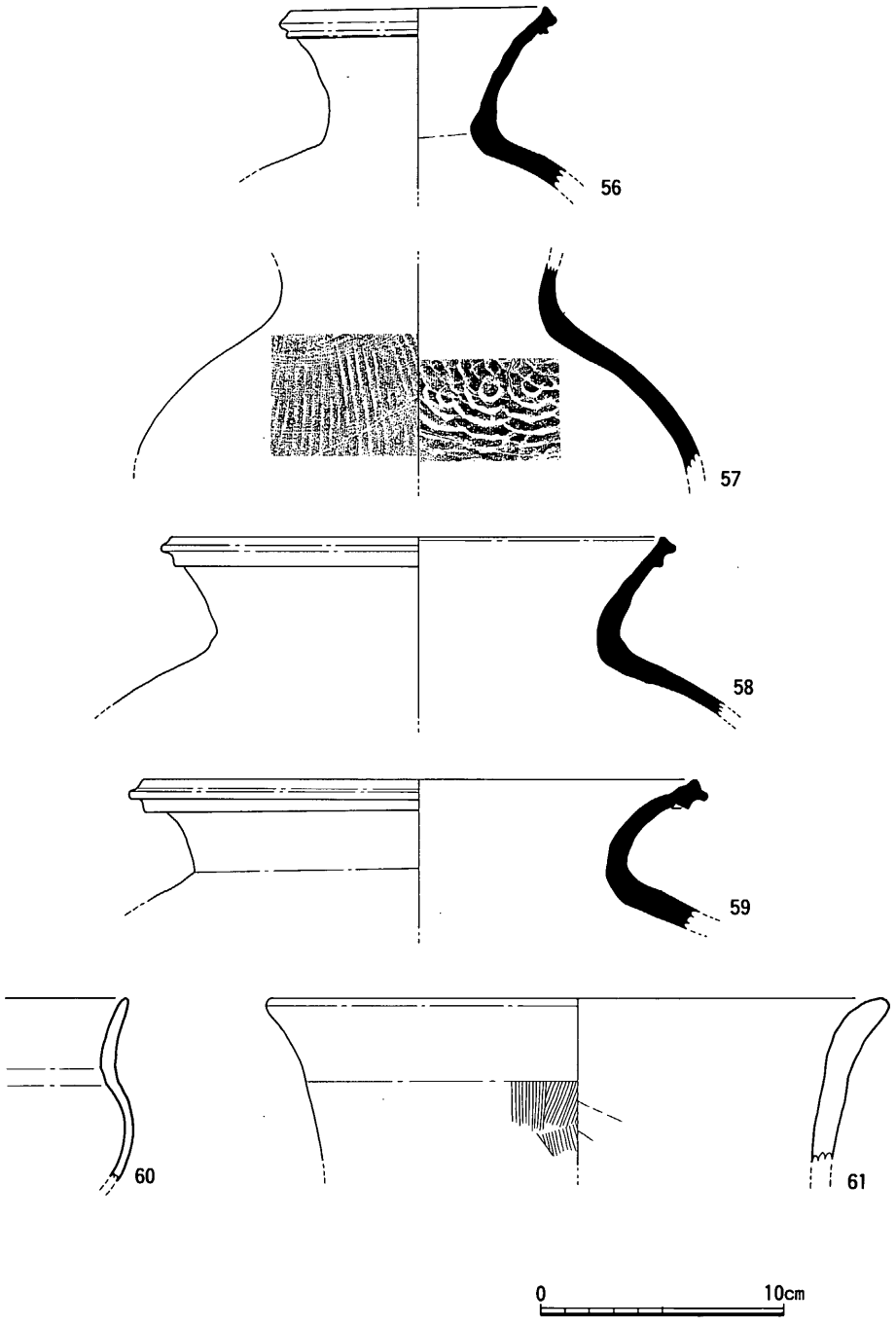
墳丘下出土須恵器が古墳築造当初のものであるならば、調査時に石室床面から出土したものは最終追葬時のものの可能性が高いため、特別に取り上げたものである。

杯蓋（11）Ａタイプのもので、口径11.9cm、器高4.0cmを測るものである。天井部外面はヘラ切り後ナデるだけである。

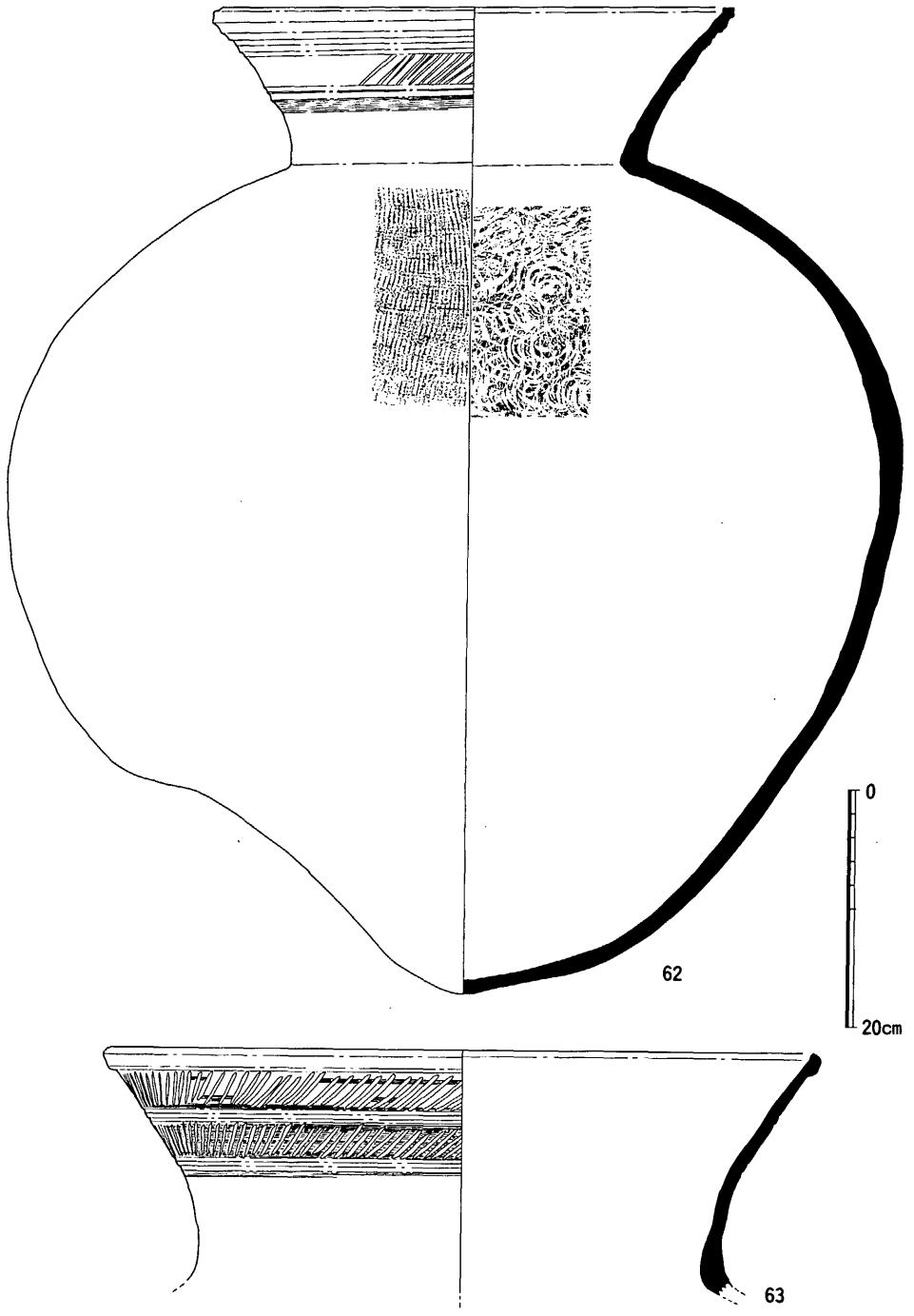
杯身（12・13）Ａタイプの杯身で、12は口径10.6cm、受部径12.7cm、13は口径10.2cm、受部径12.5cmを測る。底部外面はヘラケズリを行わない。



第53図　後田６号墳出土土器実測図②（1/3）



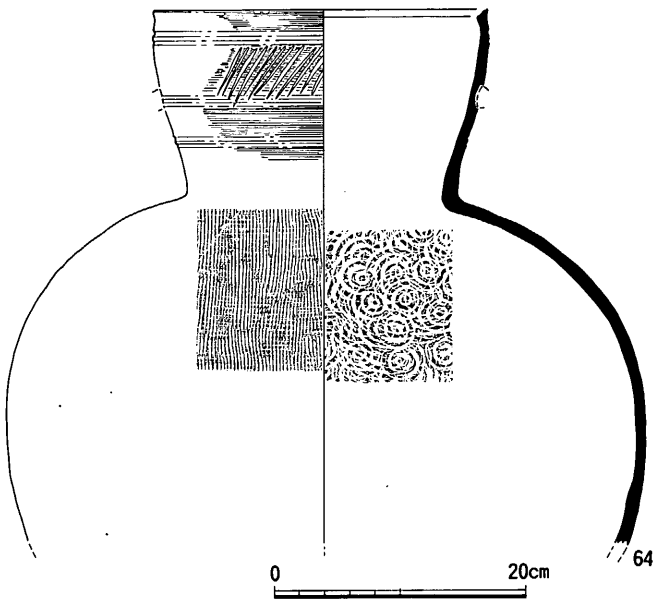
第54図　後田６号墳出土土器実測図③（1/3）



第55図　後田６号墳出土土器実測図④（1/6）

その他の須恵器（第52～56図）

杯蓋（14～26）14～23がAタイプ、24・25がB_1タイプ、26がB_2タイプである。Aタイプの口径は11.4～12.9cmの大きさである。器高の高いもの（15・17等）と低いもの（14等）があるが形態的にそれほど大きな違いはない。天井部外面の調整については14～22が回転ヘラケズリを行い、23は行わない。B_1タイプの24・25は最大径がそれぞれ11.0cm、10.1cmを測るもので、かえりは高く外に出る。24の天井部は回転ヘラケズリを行う。25は磨滅が著しく調整不詳である。B_2タイプの26は一見身とすべきか迷うものである。口径9.4cm、受部径11.5cmを測る。天井部はヘラ切り離し後粗くナデるだけである。



第56図　後田6号墳出土土器実測図⑤（1/6）

杯身（27～44）27～43がAタイプ、44がBタイプに属する。受部径を見ると最小の43が11.3cm、最大の27が14.5cmとかなり開きがある。14cm台が27～30の4個、13cm台が31～34の4個、12cm台が35～41の7個、そして11cm台が42・43の2個である。しかし、良く見ると27～34までの8個は14.5～13.5cmと少差であるが、35は12.6cmと約1cmの差があり、36以降はまた1～2mmの差で42の11.8cmまで小さくなっている。また、43は11.3cmで、ここでの差は5mmとなっている。つまり、口径的には14.5～13.5cm、12.6～11.8cm、11.3cmの3グループに分けられることになる。立ち上がりは低くて内傾しているが、27・28のように基部から先端まであまり厚味の変わらないものと、43のように基部が厚く先端部が細くなるものがある。底部外面の調整を見ると、回転ヘラケズリを行うものが27・29～31・33・34・38・43で、行わないものが35～37・39～42、磨滅のため調整不明のものが28・32である。比較的口径の大きいものはヘラケズリする率が高くなっているようである。口径で分けた3つのグループで言えば第1のグループと第3のグループである。

蓋（45・46）高杯の蓋と考えられるものである。中央が窪むボタン状のつまみが付く。45はゆるやかな曲線を描き、口縁部がわずかに内側に折れ曲がるが、46はその度合いが極端である。45の口径は13.7cm、46は12.9cmを測る。45の天井部はヘラケズリ、46はカキ目を施す。

高杯（47～53）杯部の残る47～50は有蓋高杯で、全容を知り得る53は無蓋高杯である。51・52は脚部のみであるが、無蓋高杯の可能性が高い。47は最大のもので口径13.6cm、受部径16.9cmを測る。48～50は口径11.4～12.4cm、受部径13.7～14.5cmを測る。4個とも杯部底部外面をヘラケズリする。51は小型のもので脚端部の形態はシャープではない。シボリ痕が残る。52は短脚で全体をヨコナデで仕上げる。53は脚付椀とも言えそうなものである。口径12.1cm、器高10.6cmを測る。杯部底部外面にカキ目を施し、その他をヨコナデ、ナデで仕上げる。明橙色を呈し、脚部内側にヘラ記号を付ける。

鬼（54）口径8.9cm、器高11.45cmを測るほぼ完形のものである。胴部は扁球気味で、底部は平底に近い。中央よりやや上位に円孔を穿ち、その高さに2条の沈線を入れて、その間に刻目をめぐらす。口頸部はラッパ状に開くが、口縁部の段はシャープではない。底部外面を手持ちのヘラケズリをする。その他はヨコナデである。

鉢（55）大型の鉢で、口径18.6cm、器高9.6cmを測る。内外面とも淡赤褐色を呈し、丸味のある底部を持つ。体部下位に3条の沈線を付ける。体部は内外面ヨコナデ、底部は内面がナデ、外面は磨滅のため調整不明である。

横瓶？（56）口頸部の3分の1ほどの破片である。口縁部の突帯が特徴的である。わずかに残る胴部に縦方向のカキ目が入っているため横瓶と推測できる。口径10.5cmである。

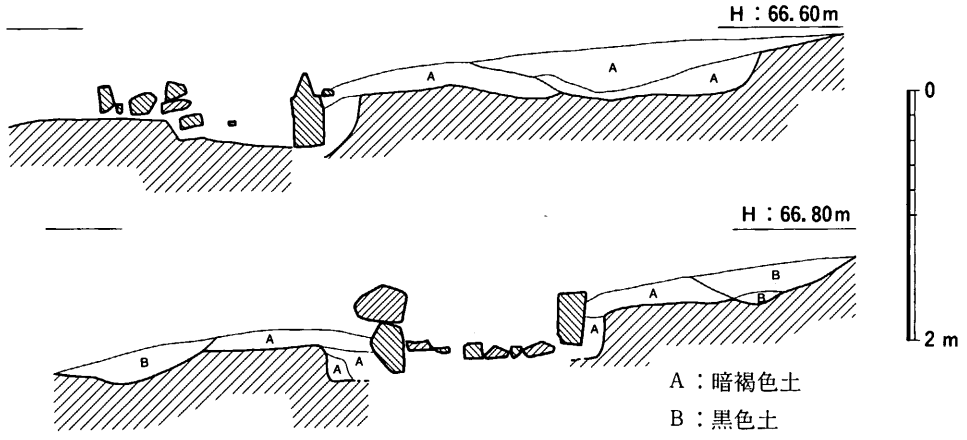
甕（57～59・62・63）57は口縁部を欠くため詳細を知り得ない。胴部内面に同心円の当て具痕を持つ。58・59はそれぞれ口径21.3cm、22.6cmを測る中型の甕である。胴部内面に同心円の当て具痕、外面に平行叩きが見える。ただし、平行叩きの後58はヨコナデ、59はカキ目を少し入れる。62は口径42cm、胴部最大径75cm、器高82.8cmを測る大型の甕である。底部近くが大きくひずんでいるが、焼成時のひずみと理解できる。口縁部は突帯があって断面には多くの段が生じている。頸部は沈線によって上下2段に区分けされ、上段にはヘラによる連続斜線文が施されている。下段の上位にはカキ目がある。最大径を上位に持つため肩の張る胴部は外面を格子目叩きする。内面には同心円文の当て具痕が残る。63は口縁部4分の1ほどの破片であるが、復元口径60cmを測る大型のものである。頸部上半分を沈線によってさらに2つに区分けし、それぞれにカキ目で調整した後連続斜線文をめぐらす。その他は、ヨコナデである。

壺（64）口頸部の形態から壺とした。口径23.5cm、胴部最大径50.8cmを測る大型のものである。口頸部は外開きに立ち上がり、中位よりやや上で逆に内湾し、内傾する平坦面を持つ口縁端部で終わる。中央付近に2.1×2.5cmの大きさの剝落痕が2ケ所ある。把手に似たものか装飾のためのものかはわからないが、口縁部全体で何ケ所かに何か貼り付けられていたと推測できる。口頸部は沈線によって上下に4区画に分けられて、上から2番目の区画にヘラによる連続斜線文がつけられている。また、それらに先だってカキ目で調整している。胴部は外面を平行叩きし、内面に当て具痕が残る。

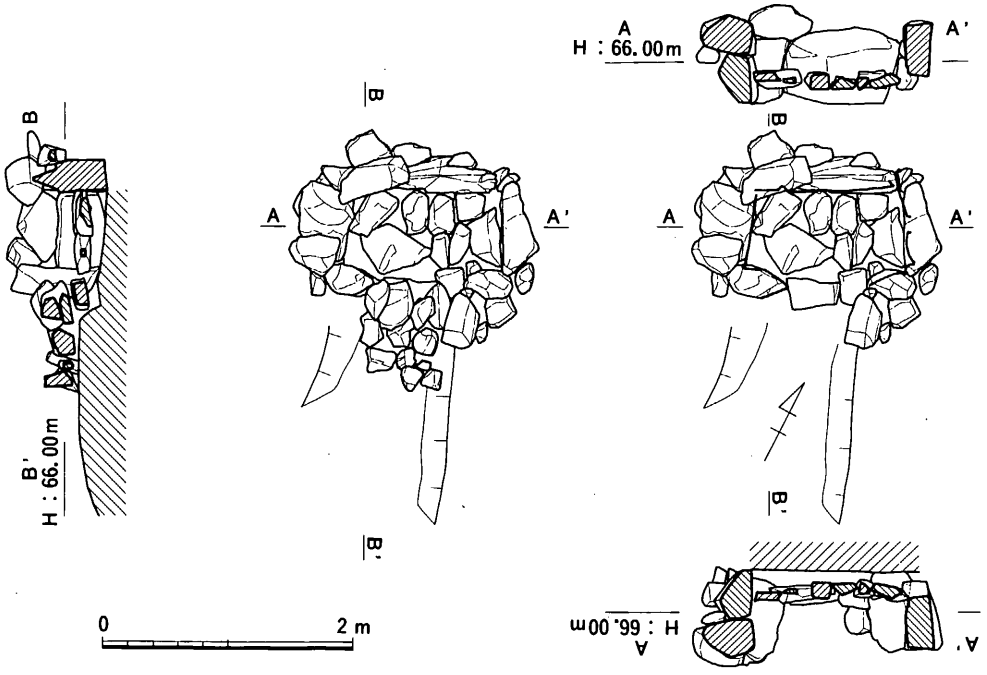
土師器（第54図）

壺（60）坩として良いだろう。小破片のため正確な法量は知り得ない。明褐色を呈するが、内外面とも磨滅が激しく調整不詳である。

甑（61）小破片である。形態から甑と考えた。明褐色を呈し、口縁部内外面をヨコナデ、体



第57図　後田７号墳墳丘断面実測図（1/60）



第58図　後田７号墳石室実測図（1/60）

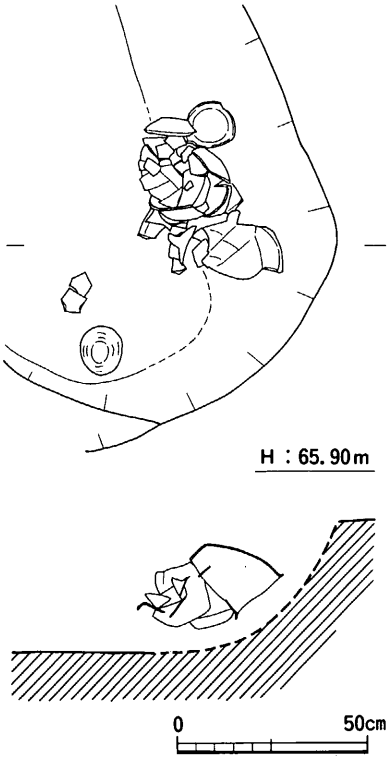
部外面をハケ目、内面をヘラケズリする。復元口径25.6cmを測る。

7．7号墳

1）．立地と現況（第3・36図）

6号墳の北西にあって、6号墳の周溝と接するような位置にある。また、4号墳の真下に当たる。玄室床面の標高は約65.9mである。立地の仕方を見ると、1・2号墳、3・4号墳、5～7号墳がそれぞれまとまっているが、3番めのグループの西端に当たる。

これも段々畑に完全に埋もれていて、盛土を除去して初めてわかったものである。墳丘、石室ともに残りが悪い。また、1～6号墳に比べて石室・墳丘ともに小型である。

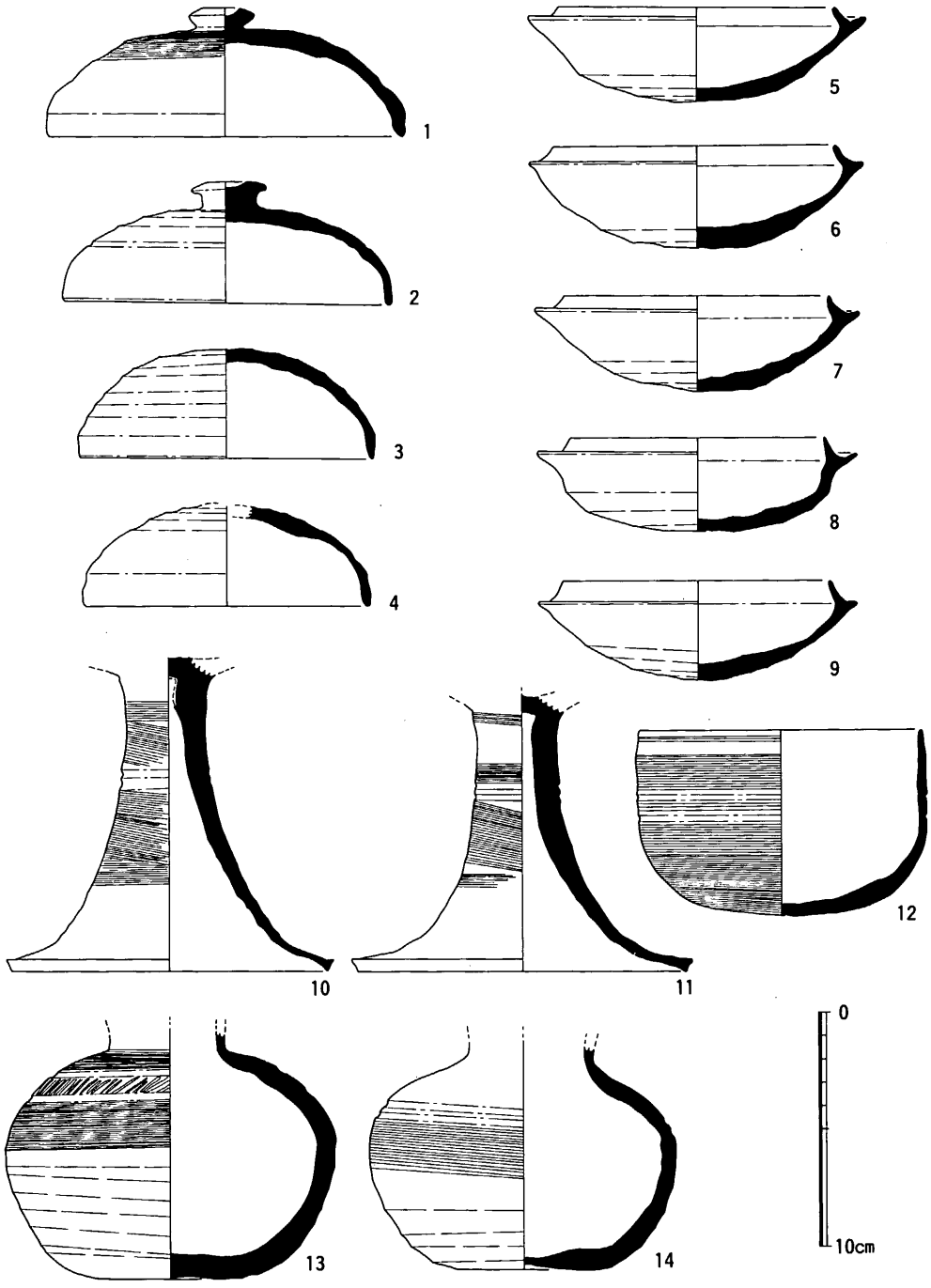


第59図　後田7号墳祭祀遺構遺物出土状態実測図（1/20）

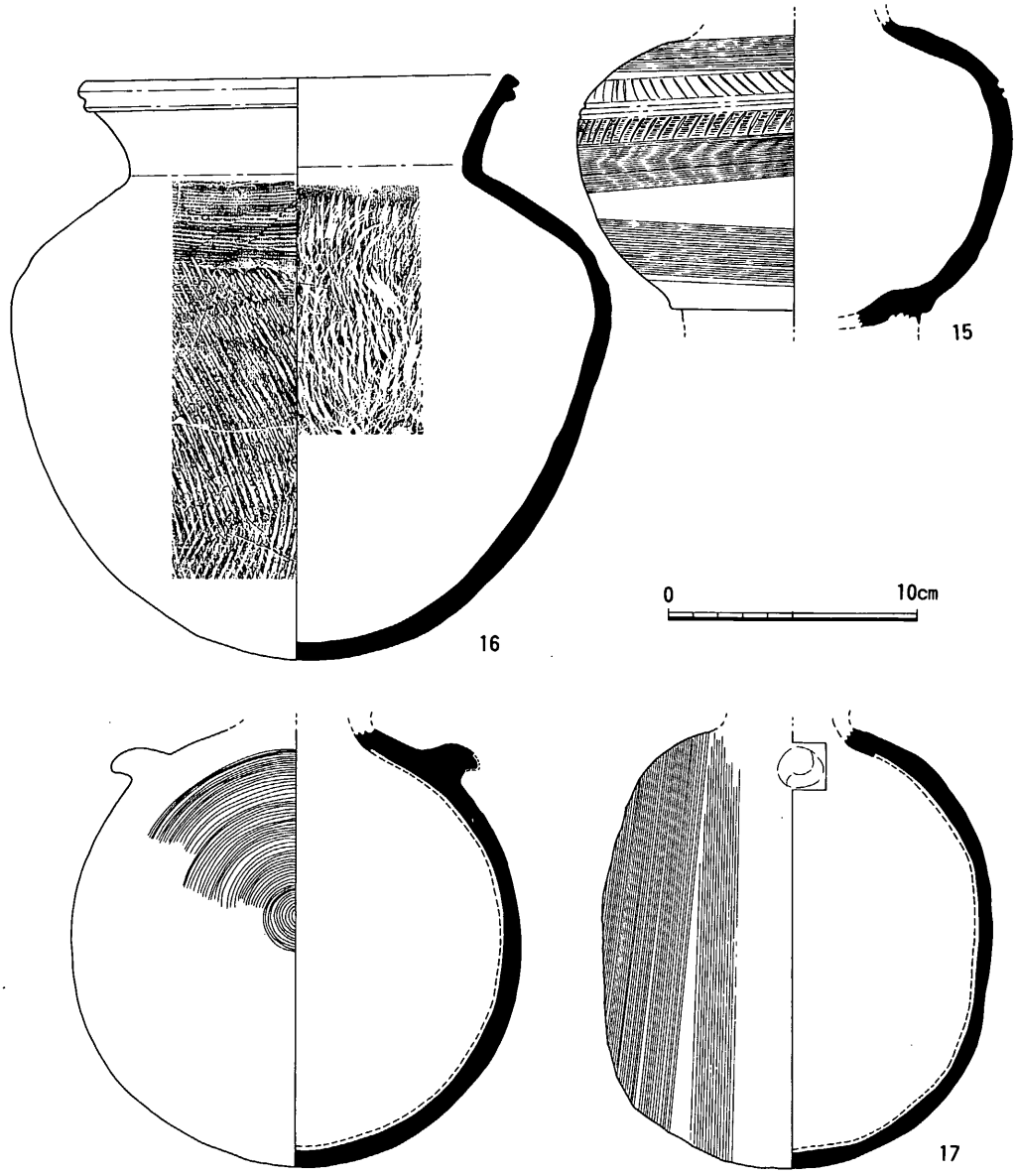
2）．墳丘（第57図、図版47）

極めて残りが悪い。しかしながら、わずかに認められる盛土と周溝として良い低まりの部分がある。石室の形態自体も判りにくいものであるが、後述するように小型の横穴式石室と考えられるが、その主軸方向（南北方向）とそれに直交するトレンチ（東西方向）の土層観察等によって墳丘規模を考える。まず、主軸方向のトレンチの土層を見ると石室中心から約4mの位置で周溝の外堤と思われる部位、約2.4mで周溝内側下端即ち墳裾になる。また、約2.45mの位置で周溝の内側の下端、即ち墳裾部分になると思われる。羨道側は6号墳の周溝もあって確認しにくい。次に主軸と直交する東西トレンチの土層を見ると、西側では約3mで周溝内側下端、約3.4mで周溝外堤に当たる。また、東側では約2mで周溝内側下端即ち墳裾、約3mで周溝外堤に当たる。したがって、この方向では墳丘の直径約5m、周溝を含めると約6.4mという規模が考えられる。主軸方向は必ずしもはっきりしないが、墳丘自体は主軸と直交するトレンチから考えた約5mに近い値が考えられる。周溝を入れた場合は6.4～8mぐらいの幅で考えられる。

盛土の仕方は、石室が小型ということもあってか、それほどていねいなものではない。墓坑も細かい層が見られず、ほとんど一気に埋めている。その上側も横に長い層が見られる。これは石を後からあまり押さえつけなくて良かったからであろう。石の後を埋めると同時に墳丘全

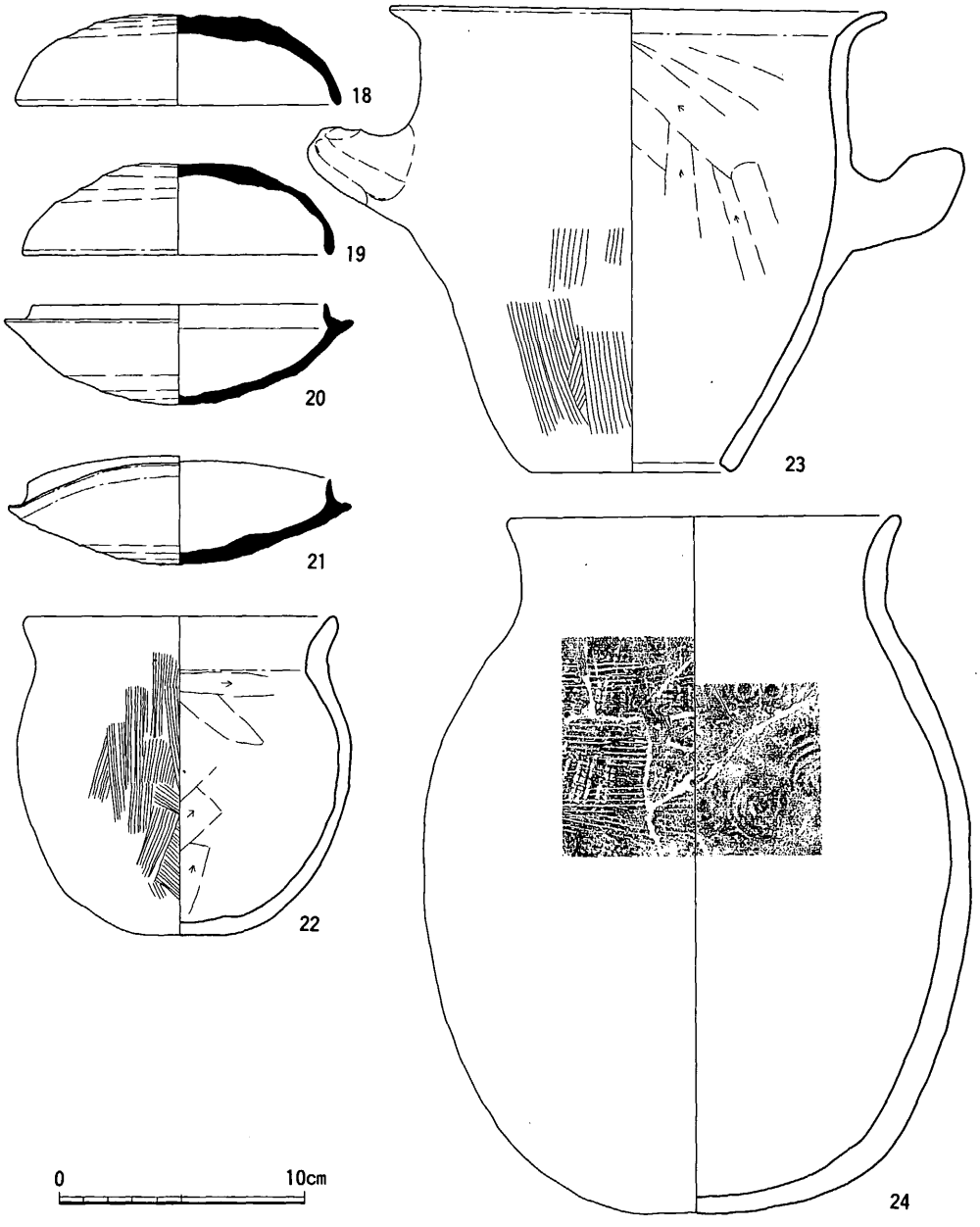


第60図　後田７号墳出土土器実測図①（1/3）



第61図　後田７号墳出土土器実測図②（1/3）

体の盛り上げを兼ねて積んでいったと思われる。土は暗褐色土を盛っている。周溝埋土は黒色土である。なお、西側周溝を拡張するような形で祭祀に関係するものではないかと考えられる土器群が検出された。



第62図　後田７号墳祭祀遺構出土土器実測図（1/3）

3）．石室（第58図、図版47・48）

形態的にやや迷うが、単室の両袖式石室と考えられる。玄室の主軸はＮ－27°－Ｗである。羨道はわずかに左（西側）へ振れる。

玄室は小型の台形状を呈する。右側壁長約0.7ｍ、左側壁長0.6ｍ、幅は奥壁側で1.1ｍ、玄

門側で1.3ｍを測る。敷石は30～40㎝大の比較的平坦な石を８個と小ぶりの石１個の９個を使っている。奥壁は大ぶりの石１個と調節のためか小ぶりの石１個の２個からなる。大ぶりの石は約90×60㎝を測り、敷石上端面から約25㎝埋め込んでいる。小ぶりの石の上に50×25㎝ほどの石を積んで２段目としているが、奥壁側はそれ以外の石はなかった。側壁は右側が２石、左側で１石を腰石としている。左側は比較的整った長方形の石を腰石としている。高さ約40㎝、横約40㎝の石であるが、約半分は埋め込んでいる。その上に高さ約30㎝の三角形に近い石を積み、奥壁の２段目の石をこの石に架けわたしている。また、玄門側にも、原位置を保っているか疑問があるが、角張った石をのせている。右側壁は玄門側の腰石として逆三角形状の石を据え、そのすき間を埋める形で小ぶりの石を奥壁側に据える。したがって、２石あるが、腰石としては１石とした方が正確かもしれない。袖石は左右とも石材を縦に用いている。高さは10㎝ほどしか違わないが、右側は腰石が高くほぼ同じ高さなので、あまり袖石という感じはもたせない。一方左側は左側壁の腰石が低く、２段目の石と似た高さになっているため、いかにも袖石という感じをもたせる。框石は敷石と同じような石を２石用いている。玄門幅は約65㎝である。石積みがどの程度なされていたかは不明だが既に２段目で奥壁と左側壁に架けわたす石の見られることと石室の大きさから考えてそう高くはなかったと推測される。

羨道としてとらえられるのはどこまでかという問題があるが、右側は石１個分、左側は２石がその位置から考えて側壁の石と見なされる。石組み墓道部分とした方が適当かもしれない。

墓道はやや西に振れ、羨道に続いて約１～1.5ｍ分が考えられる。

閉塞は框石上で行っている。框石と同じぐらい、あるいは人頭大よりやや小ぶりの石を用いていたと思われるが、羨道側に崩れたと思われる状態で検出された（図版48－１）。

出土遺物

列挙すれば以下のとおりである。

須恵器	杯蓋	7（図示４）
	杯身	12（図示７）
	高杯	5（図示２）
	椀	1
	蓋	3（図示２）
	平瓶	1（図示せず）
	壺	3
	甕	1
	提瓶	1
土師器	甕	2
	甑	1

出土状態

すべて周溝または拡張された土坑の出土である。前述したが、石室主軸上のトレンチ（北トレンチとする）とそれに直交するトレンチのうち西側のトレンチ（西トレンチとする）にはさまれた部分の周溝の一部に焼土を伴う祭祀行為の跡ではないかと考えられる土器の一群があったが、それを第62図に示した。その他の土器のうち、祭祀行為のあったと思われる付近の周溝出土土器が1・5・6～10・12～17とほとんどを占め、墓道と西トレンチの間の周溝から出土したものが3、そして2・4・11は墓道と東トレンチ（石室主軸と直交するトレンチのうち東側のトレンチ）の間の周溝出土である。以下第60・61図の土器（これらを7号墳祭祀遺構出土土器とする）を別々に記述する。

遺物

須恵器（第60・61図、図版50・51）

杯蓋（3・4）どちらもAタイプに属するもので、3は口径12.4cm、4は12.0cmを測る。どちらも天井部を回転ヘラケズリする。

杯身（5～9）これらもすべてAタイプに属するものである。口径10.8～12.0cm、受部径13.5～14.4cmを測る。立ち上がりの内傾度は大きく、高さも低い。立ち上がりの形態を見ると基部から先端部までほとんど厚さの変わらないもの（5・6・9）と基部が太く先端の細いもの（7・8）がある。底部外面は回転ヘラケズリする。

蓋（1・2）高杯の蓋と思われるもので、口径は1が15.0、2が13.9cmである。1は天井部にカキ目調整を行う。2は肩部に沈線を持つもので、天井部をヘラケズリする。

高杯（10・11）杯部の大半を欠くが、脚部の高さ10は12.7cm、11は11.2cmを測る比較的大型のものである。両者とも外面中位に2条の沈線を持ち、カキ目調整を行う。

椀（12）口径11.8cm、器高7.9cmを測るものである。体部に2条の沈線を持ち、ほぼ全体にカキ目調整する。内外面ともに淡灰色を呈する。

壺（13～15）13は平底で球形に近い胴部を持ち、上半分をカキ目、下半部から底部をヘラケズリする。さらに上半部には2条の沈線を入れ、その間を刻目で埋める。14は13よりやや小さいがよく似たものである。頸部接合部から肩部にかけてはヨコナデ、肩部に2条の沈線を入れて、中位付近にはカキ目を入れる。下位には回転ヘラケズリを行い、底部はヘラ切りのみである。15は台付壺と思われる。調整、文様は手が込んでいる。まず、ほとんど全面をカキ目調整し、肩部付近に沈線を入れ、その上下に刻目をめぐらす。胴部最大径17.4cmを測る。

甕（16）口頸17.0cm、器高23.5cmを測る小型の甕であるが、壺との区別は明確ではない。全体の3分の2の破片である。口縁部には突帯を持つ。口頸部内外面ともヨコナデする。胴部は最大径がやや上位にあり、肩が張るもので、最大径より上の部分をカキ目調整し、下位には格子目叩きをする。また、内面の叩きに対応する部分に同心円の当て具痕が見られる。

提瓶（17）口頸部を欠く。正面観は円に近く、側面観では前面、背面ともにふくらみがある。前面と背面半分ぐらいには同心円状にカキ目をめぐらす。その他の部分は灰かぶりのため調整不明である。また両肩に小さなカギ状の把手を付ける。

祭祀遺構出土土器（第59・62図、図版48・49・51）

出土状態についてやや詳しく記述する。7号墳の主軸上石室後のトレンチ（北トレンチ）と主軸と直交する西トレンチの間の周溝を掘り下げていたところ、その周溝が外に広がるような感じになり、外壁に添う形で焼土と土器群が現われた（第59図、図版48・49）。埋土に違いは見られなかったため、7号墳周溝と別の土坑などの遺構があったとは考えられない。土師器の甑が一番上でさかさに倒れた状態で、その下に土師器の甕と須恵器の杯身・杯蓋が崩れた状態で検出された。また、それら一群の土器から約20cm離れてかなり焼けひずんだ須恵器杯身と甕片が出土した。器種と焼土の関係から、ここで火を使った調理があったことが推測できる。さらに蓋杯の存在から飲食もあったことが考えられる。7号墳に関係した行為であるならば、死者にささげる食物を調理したものか、あるいは死者と参る者両者が飲食したものかわからないが、『古事記』などに見られる黄泉戸喫（よもつへぐい）を連想させて興味深い。

須恵器

杯蓋（18・19）Aタイプに属するもので、口径がそれぞれ13.0・12.4cmを測る。天井部外面を回転ヘラケズリする。

杯身（20・21）いずれもAタイプに属し、20は口径11.8cm、受部径14.2cmを測り底部外面をヘラケズリする。21は焼けひずみの激しいもので、推定口径12.2cm、受部径14.0cmを測り、底部外面をヘラケズリする。

土師器

甕（22・24）22は球形の胴部に短く外反する口頸部が付く。口径12.4cm、復元器高13.0cmを測る。口頸部内外面をヨコナデ、胴部外面にハケ目、内面をヘラケズリする。24は長胴の甕でやや平底気味の底部と短く外反する口頸部を持つものである。口径16.0cm、器高28.2cmを測る。口頸部の内外面をヨコナデ、胴部外面は格子目叩きの後カキ目、内面は同心円文の当て具痕が見えるが、その後ナデている。内外面とも明褐色を呈するが外面に黒斑がある。したがって、器形、焼成から見れば土師器であるが、技法的には須恵器の技法を取り入れたものである。

甑（23）口径20.2cm、底径8.1cm、器高18.9cmのもので、1対の把手を付ける。底部には桟などはない。口頸部内外面はヨコナデ、胴部外面はハケ目、内面はヘラケズリしている。

8．8号墳

1）．立地と現況（第3・63図）

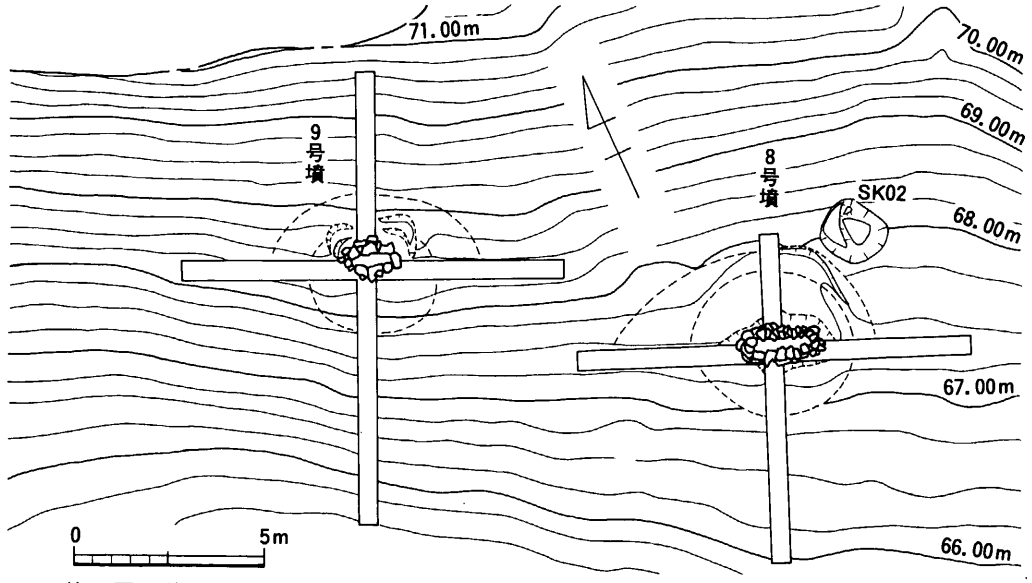
4号墳の西南西約7ｍ、7号墳の北西約10ｍに位置する。1～7号墳までは比較的接近して造られていたのに対して、8・9号墳はやや離れて造られている。高度的には、床面の標高が約66.90ｍを測り、最も高い位置にある4号墳と最も低い5号墳の中間地点に当たる。

これも段々畑に埋没していて、表土除去後に初めて判明した古墳である。墳丘の残りは良くなかったが、石室は蓋石の半分ほどが残っている状況だった。

2）．墳丘（第64図、図版53）

前述のように、あまり残りは良くないため本来の高さを知ることはできない。周溝は斜面上位である北側で顕著である。南側では確認できない。トレンチ土層などによって墳丘規模を考えてみたい。まず、石室の短軸方向（等高線に直角方向）に入れた南北トレンチを見ると、北側トレンチでは、石室中心から2ｍで周溝下端、即ち墳裾に至り、約2.4ｍで周溝外堤に至る。反対の南トレンチでは、石室中心から1.75ｍで墳裾と思われる場所に至る。したがって、南北方向では直径約3.75ｍ、周溝外側までは約4.15ｍと考えられる。一方、石室の長軸方向に入れた東西トレンチを見ると、西トレンチでは石室中心から約4.5ｍで周溝外堤、約3ｍで墳丘裾に至る。また、東トレンチでは約3.1ｍで墳裾に至る。したがって、東西方向では直径約6.1ｍ、周溝外側まで7.6ｍと考えられる。封土はかなり流失していると考えられるので正確なものかは疑問であるが、以上の結果から、東西6.1ｍ（周溝外側までは7.6ｍ）、南北3.75ｍ（同じく4.15ｍ）の楕円形の墳丘と考えられる。

次に盛土の仕方を見ると、北トレンチで顕著であるが、墓坑と石材の間は石を積み上げるに従って土を入れている様子がわかる。土は黒褐色土を使用している。また、盛土方法としては、



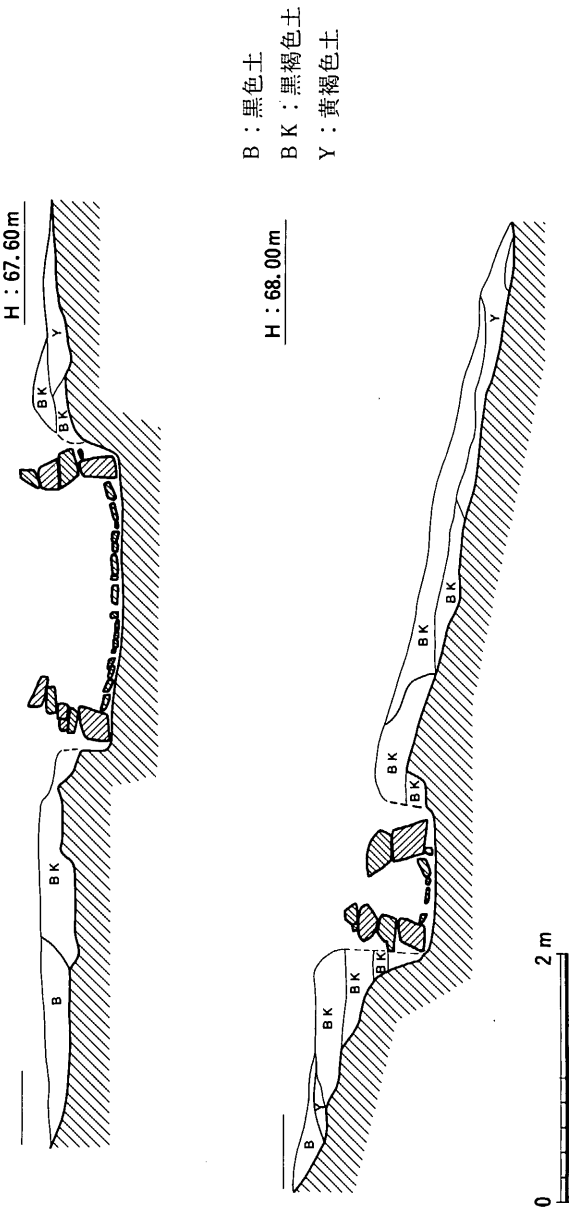
第63図　後田8・9号墳地形実測図（1/200）

石材固定のためと、墳丘の盛り上げという二段階に分けずに一度に行っている。

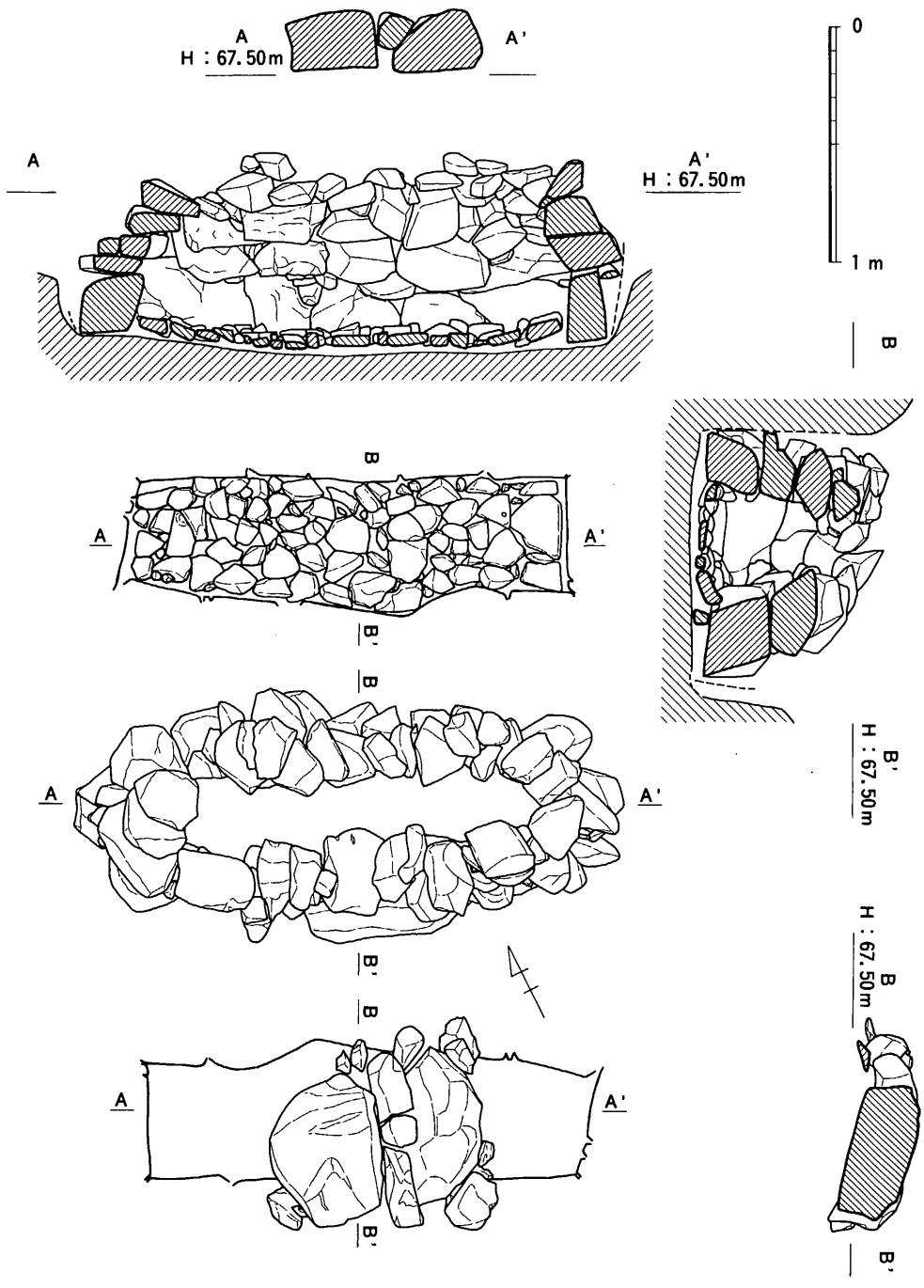
3）．石室（第65図、図版52）

横長のプランを持つ小石室である。長軸は等高線と平行で、N－64°－Wである。

石室プランはおおむね長方形状を呈する。長辺のうち北側（山側）は1.8m、南側（谷側）1.9m、短辺は東側が0.5m、西側は0.45mである。短辺の広い方を頭位とするならば東側と考えられるが、耳環が東側小口に近い部分で出土していることから見て妥当であろう。敷石はよく残っている。10～20cm四方ほどの比較的平坦な石をすき間なくびっしりと敷きつめている。石積みを見ると、長側壁側は長さ30～40cm、高さ20cmほどの石を多用し、1段目の石もその石もあまり変らない。ほとんどを横長に用いるが、1段目の石を特に深く埋め込むことはなく、せいぜい10cmほど埋めている状態である。このような石を2段目、3段目と積んでいるが、東小口近辺はそれらより小ぶりの石をやや乱雑に積んでいる。そして、4段めとして小ぶりの石を多く積み上げているが、これらは3段目の石と蓋石の間の調節をする役目を持っているようである。小口壁は東側

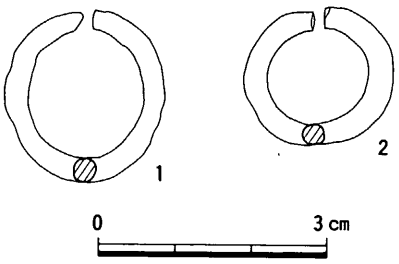


第64図　後田8号墳墳丘断面実測図（1/60）



第65図　後田８号墳石室実測図（1/30）

は1段目の石としてやや大きなものを1石まず据える。西側は大きめの石1個と調節用の小ぶりの石2個、3個が据えられる。東側の2段目以後は長側壁側で多用していた石とほぼ同大の石を横にして2段、次にそれらより小さな石を1段積む。両側はやや小ぶりの石を2～5段目まで積む。蓋石は中央部に架けられた2石が残っている。60×50cm、厚さ25cmほどの石と、60×40cm、厚さ25cmほどの石で、間に細長い石2個を詰めている。敷石から蓋石までの高さは約60cmとなる。



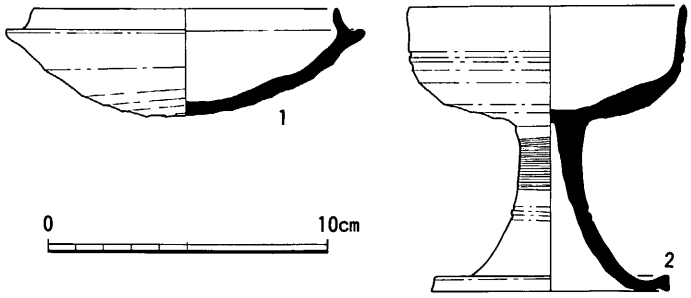
第66図　後田8号墳出土装身具実測図（1/1）

4）．出土遺物

以下のとおりである。

装身具　　耳環　2
　　小玉
　　（ガラス玉）　1
（風化激しいため図示せず）

須恵器　　杯蓋　1
　　（小片のため図示せず）
　　杯身　1
　　高杯　2（図示1）



第67図　後田8号墳出土土器実測図（1/3）

出土状態

耳環のうち1個（第66図1）は東小口近くの石室床面から出土したもので、原位置を保っていた可能性がある。もう1個も石室出土であるが、原位置は保っていなかった。須恵器は第67図1の杯身は北側のトレンチから出土したものであるが、周溝部分と考えられる。同じく2の高杯は北西側の周溝から出土したものである。

遺物

装身具（第66図、図版53）

耳環（1・2）本来は鍍金していたものであろうが、金は剝落して青銅部分だけが残る。だいぶ風化しており、表面は滑らかではない。外径は1が2.1×2.3cm、2が1.8×1.85cmを測る。断面は0.3×0.3cmと、0.25×0.3cmで円に近い。重さは1が2.2ｇ、2が1.92ｇである。

須恵器（第67図、図版53）

杯身（1）Aタイプの杯身で、口径10.8cm、受部径12.8cmを測る。底部外面をヘラケズリする。

高杯（2）口径9.7cm、器高10.3cmを測る無蓋高杯である。杯部には2条の沈線、脚部にも中位に2条の沈線を持ち、その上をカキ目調整する。その他をナデ、ヨコナデする。

9．9号墳

1）．立地と現況（第3・63図）

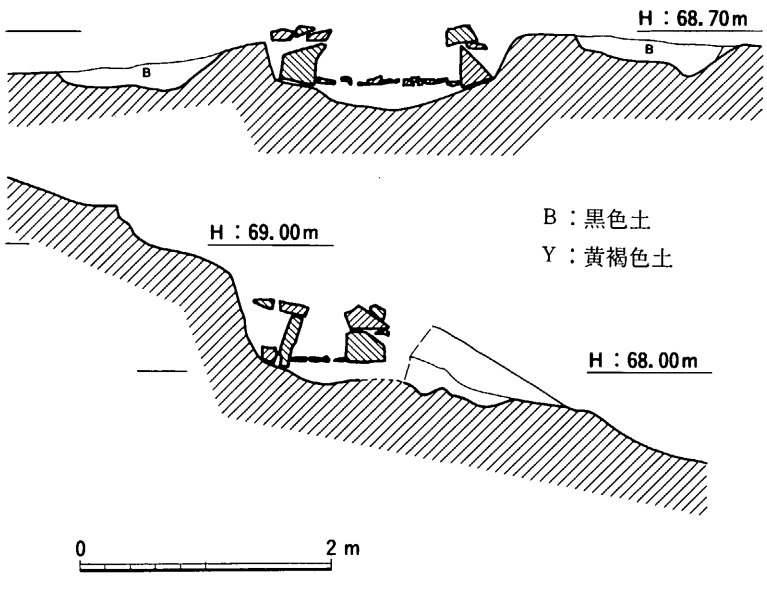
1～9号墳の中では最も西寄りに位置し、8号墳の北西約7mに当たる。高度的には石室床面の標高が約68.35mで、8号墳より約1.5m高い。

墳丘の残りは良くなかったが、石室は蓋石がほとんど残っている状況で良好であった。

2）．墳丘（第68図、図版55）

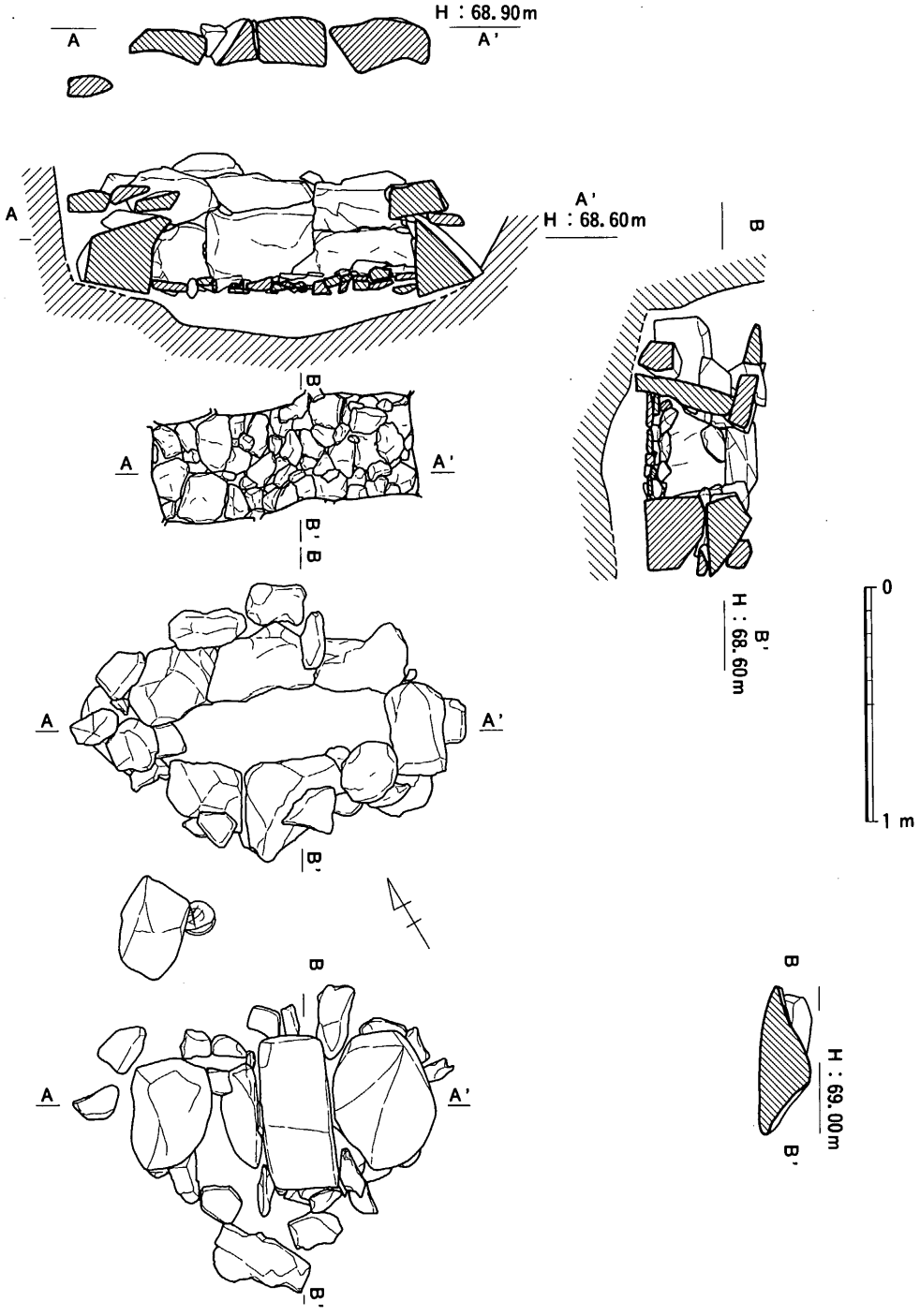
墳丘盛土は斜面上位である北側では既になく、石室下位である南側に少し残るだけである。このため、墳丘の本来の高さを知ることはできない。また、周溝は石室より上側ではっきりしているが、斜面下位の南側ではない。

墳丘規模をトレンチの土層観察等によって考えると、まず、等高線と平行な長軸方向（東西方向）では、西トレンチの場合、石室中心から周溝外堤まで2.75m、墳丘裾部まで1.85m、東トレンチの場合、同じく周溝外堤まで2.75m、墳丘裾まで1.45mである。したがって、この方向では、直径3.3m、周溝を含めると5.5mである。一方、等高線と直交するトレンチ（南北方向）では、北トレンチの場合、周溝外堤まで1.7mを測るが、墳裾はわからない。また、南トレンチの場合、墳裾と考えられる地点まで1.85mである。したがって、周溝まで含めた径は3.55mである。以上からすれば、墳丘そのものの規模はわからないが、周溝まで含めて考えると、長径5.5m、短径3.55mほどの楕円形の古墳と考えられる。



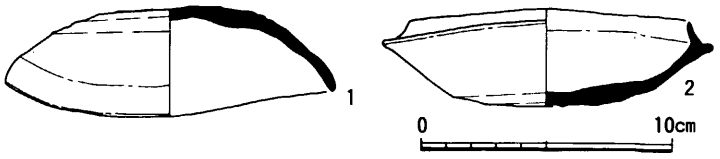
第68図　後田9号墳トレンチ断面実測図（1/60）

石室を築くための墓坑は東・北・西に切り込み線が認められるが、



第69図　後田９号墳石室実測図（1/30）

南側は低いため、ただ地ならししただけのようだ。墓坑と石材の間は一気に埋めている。わずかに残る盛土は粘質の淡黄茶褐色土、暗黄褐色土を用いている。



第70図　後田９号墳出土土器実測図（1/3）

3）．石室（第69図、図版54）

ゆがんだ長方形状のプランを持つ小石室である。蓋石がほとんど残存していたため、蓋石がかけられた状態で決めた主軸はＮ－60°－Ｗであるが、石室床面プランから考えられる主軸はＮ－65°－Ｗである。長側辺は２辺ともほぼ同じで約1.1ｍ、短側辺（小口幅）は２辺とも約0.4ｍである。敷石は全面にわたってよく残っている。西側は一辺20㎝ほどの石を使っているが、東側は10～15㎝の石を使っている。北側の長側壁は比較的長方形に近い石を２石横にしたものと、その半分ほどの石をたてた石の３石を第１段目としている。まん中の石は厚さ10㎝ぐらいの薄い石なので、後に根固めの石を置く。１段目の石はせいぜい10㎝ほどしか埋めていない。２段目はほとんど重箱積みと言える状態で３石積む。ただ、１段目が板石を横長に用いて立てた状態であるのに対し、２段目は寝かせた状態で積む。蓋石の重量に耐えるためであろう。短側壁、つまり小口はどっしりした石を１段目に据え、２段目は長側壁同様板状の石を寝かせた状態で積む。この上に蓋石がのる。蓋石は大ぶりの石２石とそれらよりは小さめの石２石から成るが、すき間のあることから小さめの石がもう一石あった可能性が高い。敷石と蓋石との高さは約35㎝と低い。

4）．出土遺物

出土遺物は須恵器のみである。

須恵器　　杯蓋　1

　　杯身　1

出土状態（図版54）

石室から約50㎝北側の角張った石に隠れるようにしてセットで見つかったものである。

須恵器（第70図、図版55）

杯蓋（１）Ａタイプに属する。焼成時のひずみが激しいが、口径約13㎝で天井部を回転ヘラケズリする。

杯身（２）やはりＡタイプに属する。これもひずみが激しいものであるが、口径約11㎝、受部径13㎝ほどの大きさである。底部外面をヘラケズリする。

10. 10号墳

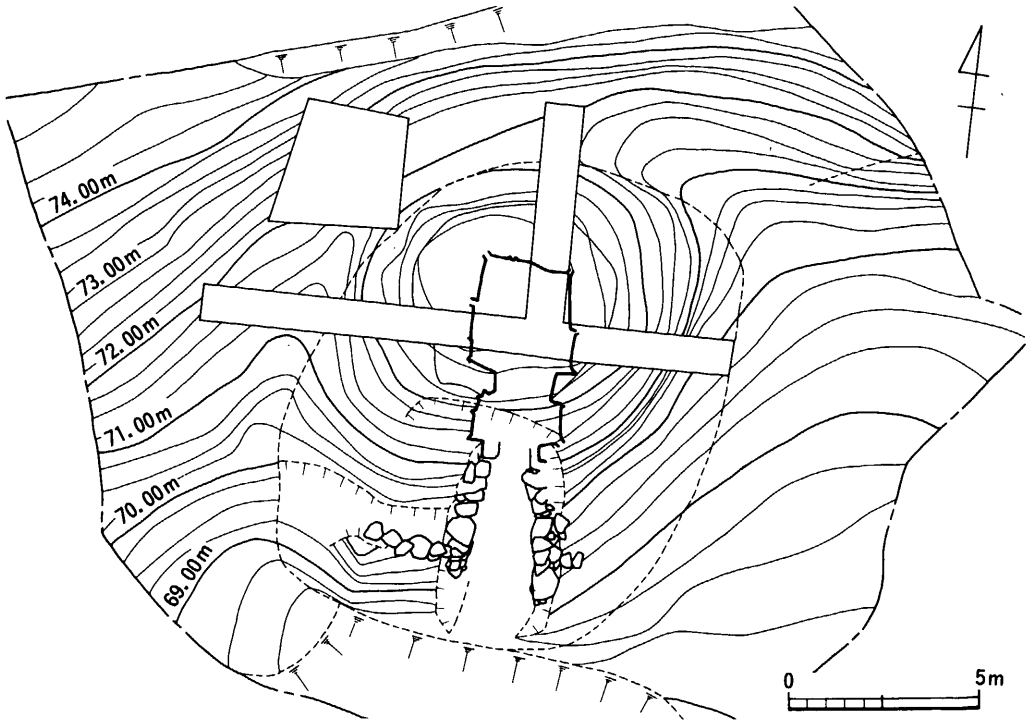
1）. 立地と現況（第71図、図版56）

1～9号墳が標高84cmほどの低い北西向きの丘陵の西南麓に立地していたのに対し、10号墳はその丘陵が西側でやや下がり鞍部を作り出し、西南方向に向きを変えて高まる部分の東南斜面に立地する。このため、最も近い9号墳からでも西へ約80m離れた場所に位地する。規模などから考えて後田古墳群の中でも盟主的な古墳と考えられるが、盟主墳が他と同じ墳形でかなり離れて立地するというあり方は、既述したとおり牛頸中通古墳群でも見られたことである。また、標高的には玄室床面が約68.8mの位置にある。

1～9号墳が段々畑の中に埋没していたが、10号墳もあまり墳丘がわからないような状況であった。ただ、開口して石が見えていたため古墳の存在が確認されていたものである。しかし開口していたため、石室内の遺物の出土状況はかんばしいものではなかった。

2）. 墳丘（第71・73図、図版56・61）

石室天井石も封土中に没していたが、薄い所では封土が10cmしかなかった。このため本来はもう少し高かったのではないかと思われる。現況では最も低い墓道先端部からは約4.45m、主軸直交のトレンチ東端の墳裾から約2.95mを測る。



第71図　後田10号墳地形実測図（1/200）

周溝については、10号墳が斜面をだいぶ切り込んで造っているため、古墳背面とも言うべき北東側から北側そして南西側まで見られる。ただし、背面の斜面をなだらかに切り崩しているため、周溝外側の肩が明確でない。このため、あくまで墳丘の裾だけを追うと第72図のような範囲となりゆがんだ楕円形とでも言うべきプランとなる。玄室主軸方向で約13m、それと直交して玄室中心を通る方向で約10.5mの大きさである。

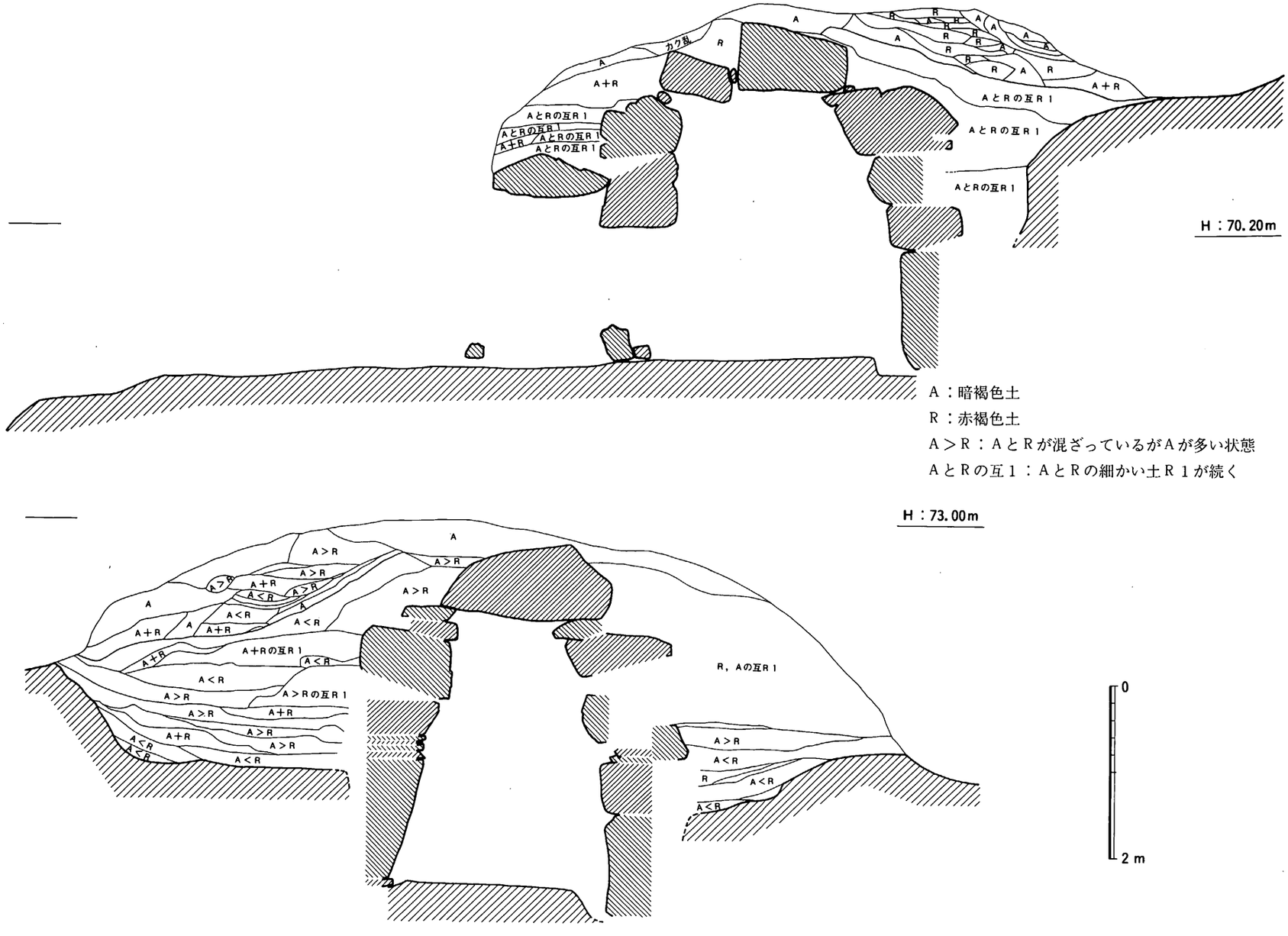
石室を構築するための墓坑を掘っているが、背面の北側では1段掘りだが、東西方向のトレンチで見ると、2段掘りをしているようだ。盛土は極めてていねいに行われている。粘性のある暗褐色土と砂を厚さ約2cmぐらいずつ版築状に積んでいる。第73図にはそれらすべてを表わすことはできなかったので、大きなまとまりの線だけを入れた。また、10号墳の場合、石積みを補強する盛土と、墳丘を盛り上げるための盛土とを意識して分けている。第73図に示した盛土中の太い線がその境界である。10号墳の場合は、規模だけでなく、墳丘盛土の仕方も他の古墳に比べ格段のていねいさが看取できる。

3). 石室（第72・74図、図版56～61）

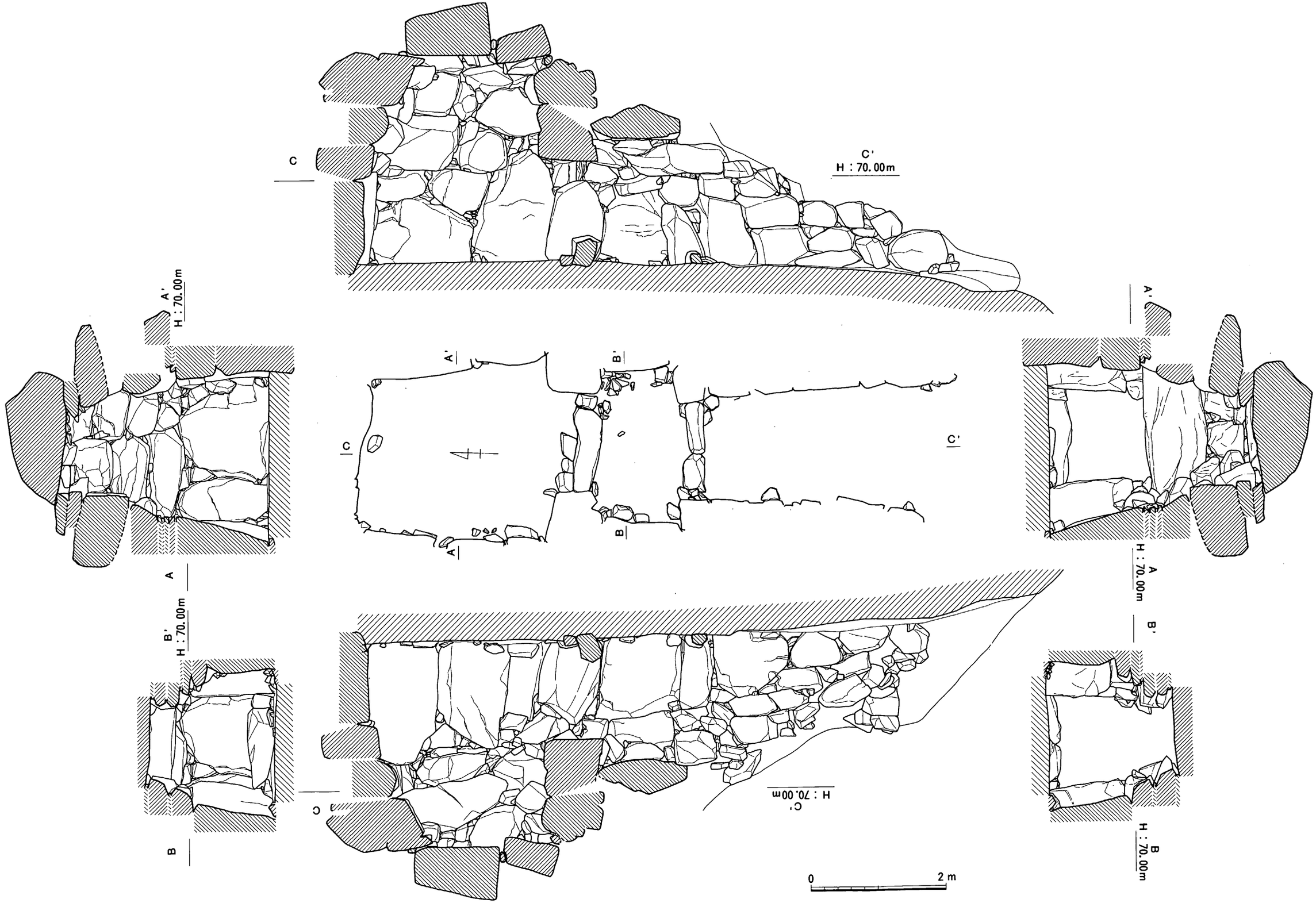
ほとんど真南に開口する複室の横穴式石室である。前室・羨道とも主軸は変わらず、正確な設計の下に造られたことがうかがえる。主軸はN－1°－Wである。

玄室は玄門側がわずかに開く台形状のプランを持つ、右側壁長約2.6m、左側壁長約2.8m、幅は奥壁側で約2.2m、玄門側で約2.75mである。また、敷石はほとんどないが、床面から天井までの高さは約3.05mである。奥壁は幅が違うが高さをそろえた大石2個からなる。床面からの高さ約1.3mである。2段目以降は向かって左側に大ぶりの石を横にして3段、右側にその半分程度の石を4段それぞれ重箱積みで積み上げる。そして小ぶりの石をはさみ込んで天井石がのる。天井石は2.0×1.5m、厚さ約0.9mの大石である。側壁を見ると右側では大ぶりの石を1つは横にして1つは縦にして据えている。奥壁側の横にした石の上には2段目3段めとして2個ずつ積み上げる。そして奥壁側には4・5段目にも大きさは違うが整った石を積む。その一方玄門側は不整形でかつ大きさも違う石を小ぶりの石で調整しながら積み上げる。左側壁は、大きさは違うが大ぶりの石を縦に3石据えて腰石とする。これらは上端が平でないため小ぶりの石で調節しながら大ぶりの石、やや小ぶりの石を乱雑に積み上げる。袖石は床石からの高さ約1.2mの石を右側では約50cm、左側で約70cm内側にせり出させ、その上に1石積んで楣石をのせる。框石は細長い石1個と調節用と思われる小ぶりの石の2個である。この結果、玄門幅は約1.5m、高さ約1.1mとなる。

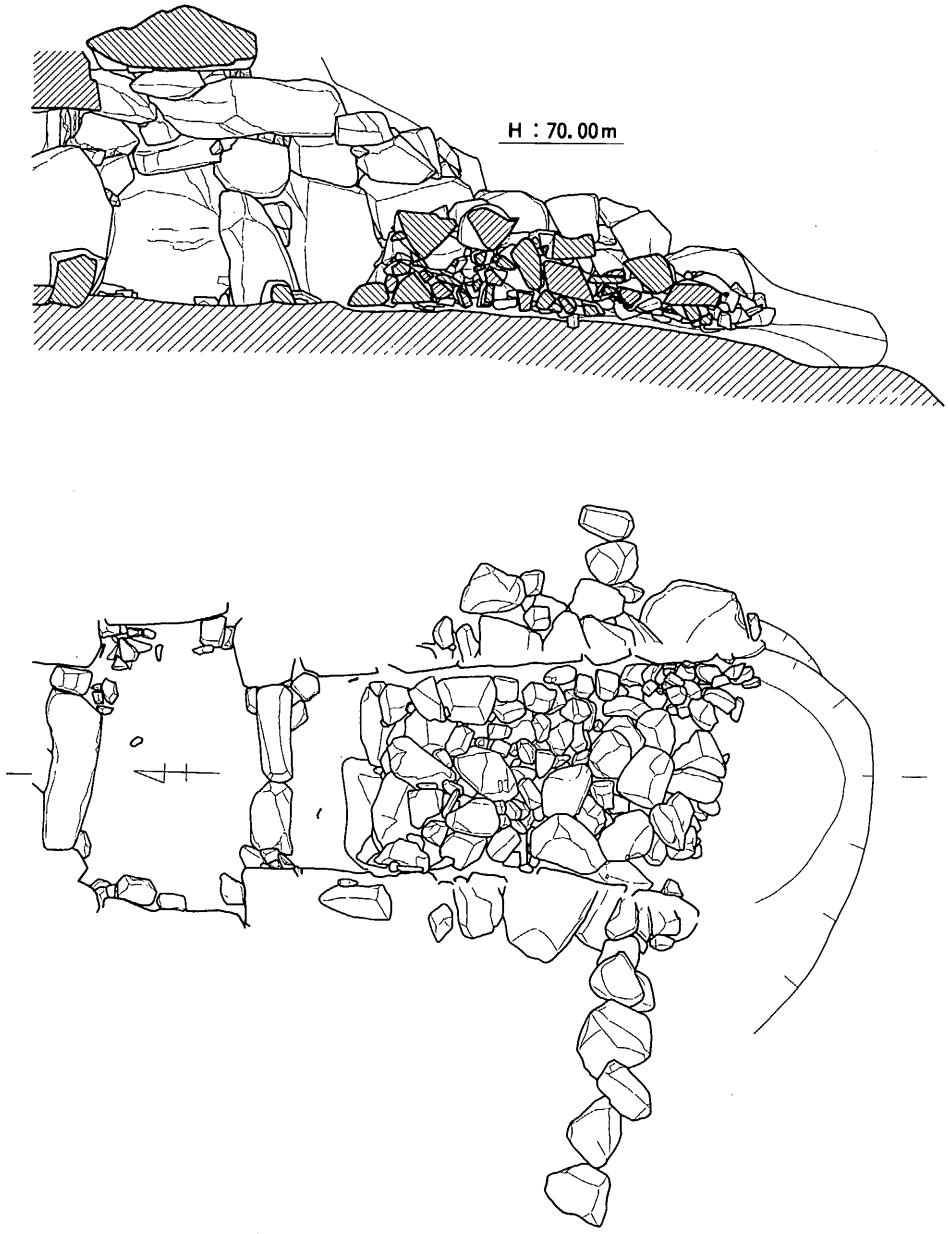
前室は右側壁長約1.05m、左側壁長約1.2m、幅は奥側で1.2m、羨道側で2.4mを測る。また、敷石はほとんどないが、床面から天井までの高さは約1.8mである。側壁は左右とも大ぶりの石の1石を腰石として据え、右側壁はやや乱雑に、左側壁は比較的整った石を整然と積んでいる。袖石は玄室のものよりはだいぶ小ぶりではあるが、石材を縦に用い、はっきりそれと



第72図　後田10号墳墳丘断面実測図（1/60）



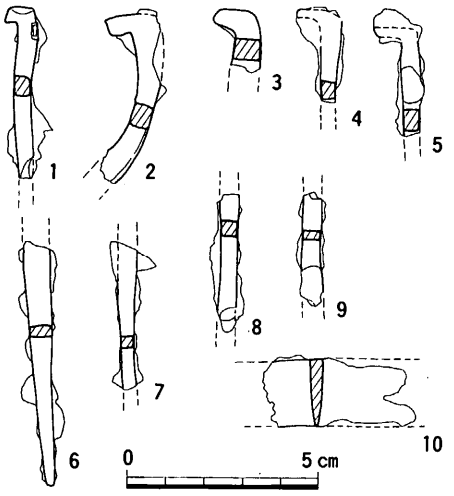
第73図　後田10号墳石室実測図（1/60）



第74図　後田10号墳閉塞状況実測図（1/60）

わかる。左右ともその上に2石積んで前室の天井石の端がかかる。本来は楣石としてもう1石あったものであろう。ただそれは状況から見て幅の狭い石であっただろう。框石は細長い石2個を用いている。袖石間で約1.45mを測る。

羨道は右側で袖石の外側から約1.5m、左側で1.1～1.5m程度が考えられる。幅は前室側で1.55mを測り、外へやや開き気味となる。羨道は前室袖石内側ラインに合わせる形に始まっており、袖石はそれらしく見えない。側壁は大ぶりの石をしっかりと積んでいる。



第75図　後田10号墳出土鉄器実測図（1/2）

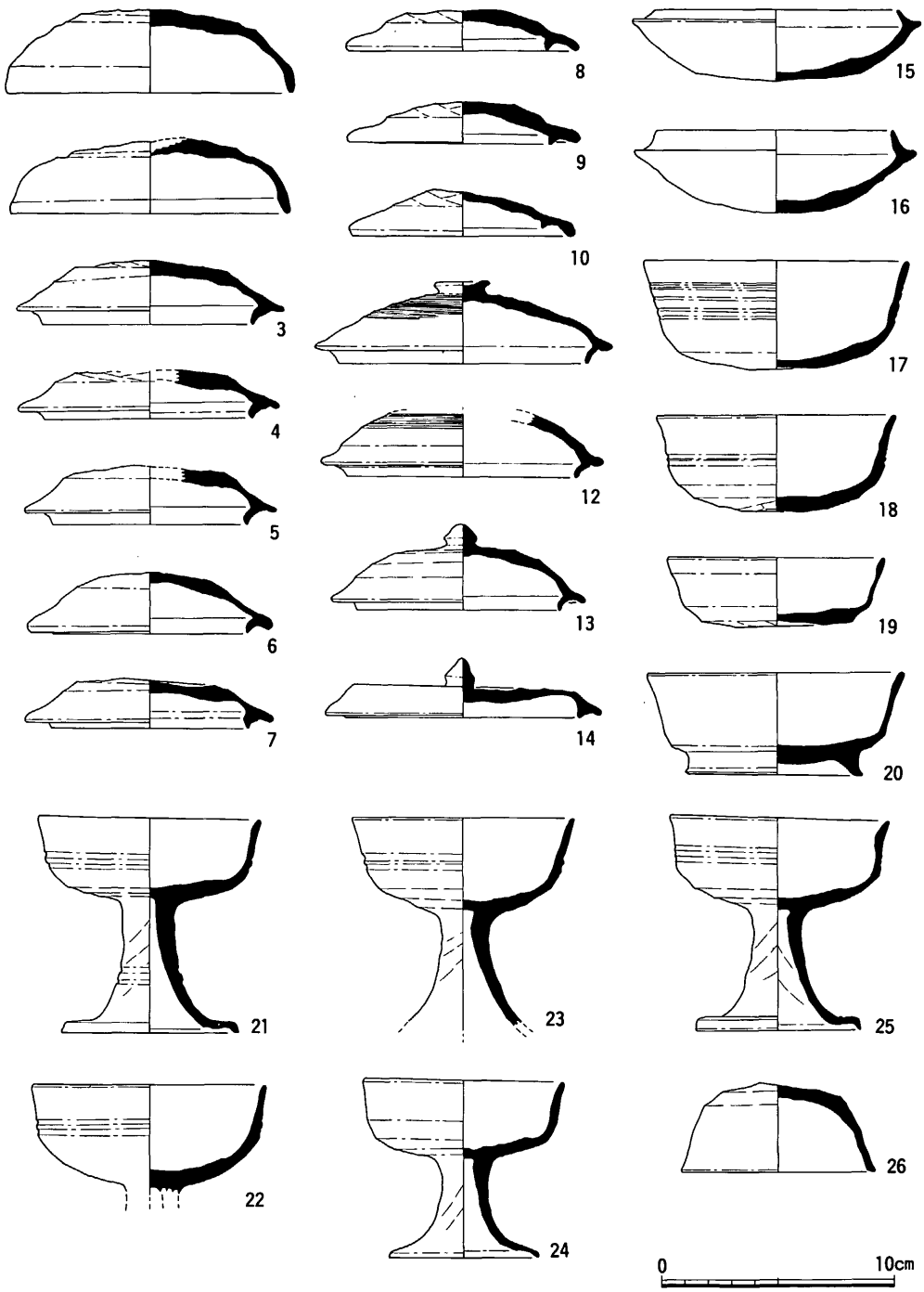
墓道は最初石組み墓道となり、さらに素掘り部分へと続く。わずかながら「八」の字型に開く石組み部は石室の石に比べてやや小ぶりの石が多くなる。

閉塞は前室框石から約40cm墓道側に寄った所から約3mにわたって石積みが見られた。前室側の大ぶりの石は本来の位置を保っていると考えられるが、他はかなり崩れたものであろう。

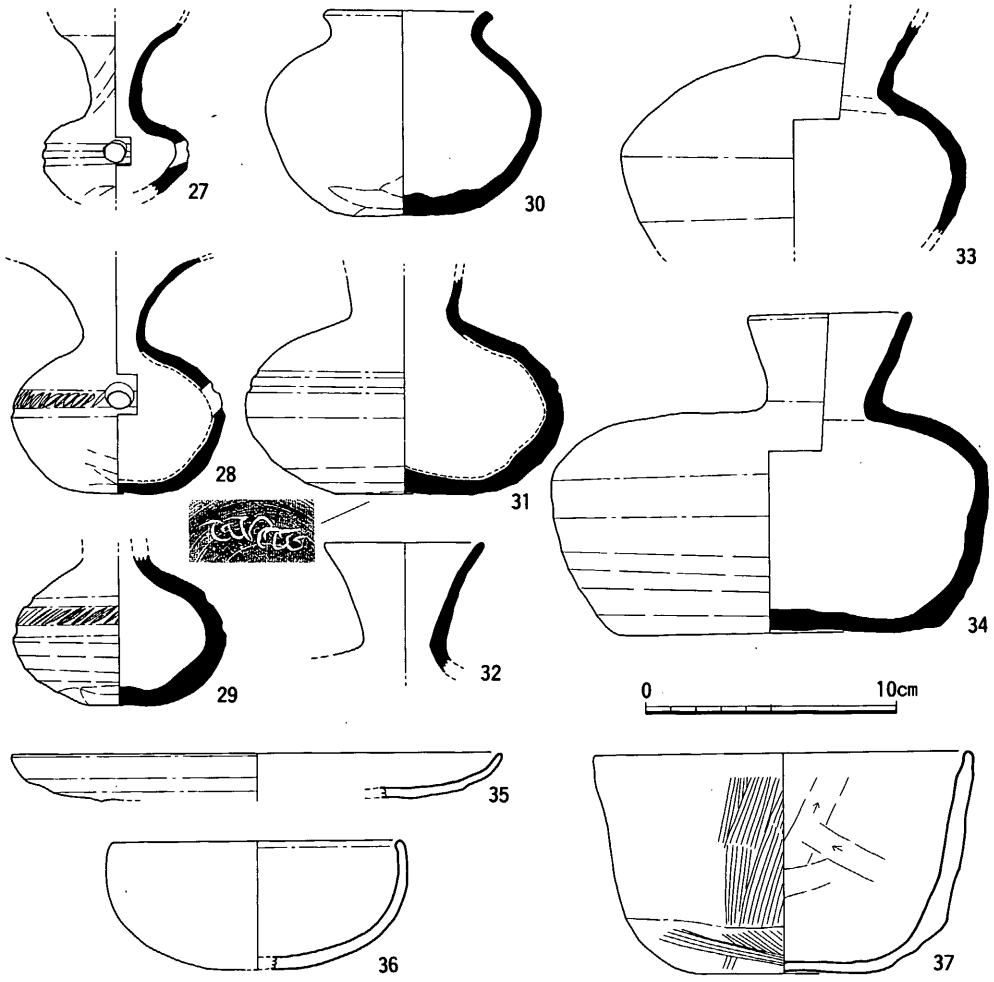
出土遺物

列挙すれば以下のとおりである。

鉄　器	釘	5以上
	刀子	1
	鏃	1以上
須恵器	杯蓋	22（図示14）
	杯身	10（図示6）
	高杯	6（図示5）
	蓋	1
	𤭯	2
	壺	3
	平瓶	3
	皿	1
	椀	1
	甕	2（図示せず）
土師器	鉢	1
弥生土器	甕	1（図示せず）



第76図　後田10号墳出土土器実測図①（1/3）



第77図　後田10号墳出土土器実測図②（1/3）

出土状態

鉄器類はすべて閉塞の周囲からの出土である。床面からも出土しているが、原位置は保っていない。土器は第77図30の壺が前室床面からの出土で、残りすべてが閉塞石の上やその周囲から出土したものである。

遺物

鉄器（第75図、図版62）

釘（1～5、7～9）頭部を直角に折り曲げたものである。身の断面は方形を呈す。

鏃（6）一部分のため全容は不明である。断面は長方形を呈す。茎の部分と思われる。

刀子（10）刃部の一部分である。断面は二等辺三角形である。

須恵器（第76・77図、図版64）

杯蓋（1～14）1・2がAタイプ、3～10がB_2タイプ、11～14がB_1タイプである。ただし、11・12についてはつまみの形態などがB_1タイプとしてはやや変わっており、B_1タイプとして良いか、あるいは杯蓋として良いか問題がある。また、14をB_1タイプとしたが、口径上問題があるがC_1タイプとした方が良いかもしれない。Aタイプの1は口径12.3cm、2は11.9cmを測り、天井部を回転ヘラケズリしないものである。B_2タイプの場合は、最大径が9.7～11.6cmを測るもので、かえりが外に出るもの（3～7・9）と出ないもの（8・10）がある。10はかえりがかなり退化している。3・4・8～10の天井部外面は手持ちのヘラケズリをしている。5～7はヘラ切り後ナデるだけである。B_1タイプとしたもののうち、11・12天井部外面をカキ目調整するもので、12はつまみを欠くが、11と形態、技法ともに似ており、11と同様の中央が凹むボタン状のつまみを持つものではないかと考えられる。13は宝珠形のつまみを持つもので、口径8.8cm、最大径10.9cmを測る。天井部をヘラケズリする。14も同様のつまみを有するが、天井部が平でかえりの短いものである。最大径11.9cmで、天井部をヘラケズリする。

杯身（15～20）15・16がAタイプ、17～19がBタイプ、20がC_1タイプである。Aタイプの15・16は口径10.5cm、10.1cm、受部径12.4cm、12.1cmを測るものであるが、磨滅が激しく調整方法がわからない。Bタイプとしたものは法量がかなり違う。口径は17が11.4cm、18が10.1cm、19が9.2cmである。17・18は体部に沈線を持つ。底部の調整は17が磨滅していて不明だが、18は手持ちヘラケズリ、19はヘラ切り後ナデるだけである。C_1タイプとした20は高く外へ踏んばる高台を付けるもので、口径10.9cm、器高4.5cmを測る。底部はヘラ切り後ナデを行い、体部はヨコナデ、ナデである。

高杯（21～24）すべて小型の無蓋高杯である。24が1回り小さい外はほぼ似た大きさで、口径9.3～9.9cm、器高9.3cmを測る。24は口径8.4cm、器高7.7cmである。24を除いて杯部に沈線を持つ。22は磨滅のため不明だが、21・23・25の杯部の底部外面はヘラケズリする。

蓋（26）壺の蓋と思われるもので、口径8.3cm、器高3.8cmを測る。内外面とも明褐色を呈し、天井部と体部の境をヘラケズリする。天井部はヘラ切り後ナデる。

𤭯（27・28）いずれも口縁部を欠く。27は小型で円孔も不整形である。円孔と同じ高さに2条の沈線を持つ。底部外面を手持ちのヘラケズリをする。28は底部がやや平底気味である。円孔の下端の高さに沈線を入れ、その上位に刻目をめぐらす。やはり底部外面を手持ちのヘラケズリする。

壺（29～31）29は胴部のみであるが、完全に残っており、円孔のないことから壺として扱った。肩部に幅の広い2条の沈線を入れ、その間を刻目で埋める。胴下半部を回転ヘラケズリし、底部を手持ちのヘラケズリする。30は短頸壺の一種として良いであろう。口径6.4cm、器高8.3cmを測るものである。底部外面を手持ちヘラケズリし、その他をヨコナデで仕上げる。31はやや扁球形の胴部を持ち直口壺のような形態を示すものかと思われる。底部をヘラケズリする。

また、拓本で示したように複雑なヘラ記号を有する。

平瓶（32～34）32は口頸部のみの破片で、口径6.2cmを測る。33は口縁部と底部を欠くもので、胴部最大径13.7cmを測る。胴部の底部周囲はヘラケズリする。34はやや角張った胴部を持つ平瓶で、口頸6.3cm、器高13.0cm、胴部最大径17.4cmを測る。胴部下半はヘラケズリし、底部はナデる。

土師器（第77図、図版64）

皿（35）内外とも淡明褐色を呈す。口径19.3cmを測る。外面は磨滅のため調整不明である。内面はナデ、ヨコナデである。

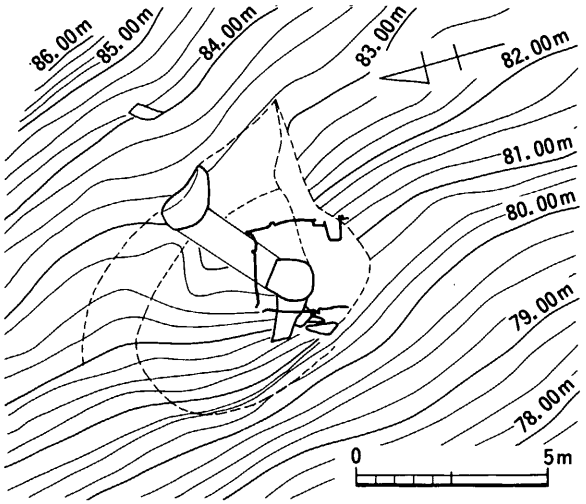
椀（36）口径11.4cm、器高5.2cmを測るもので、内湾する端部は丸く終わる。内外面ともに明褐色を呈する。外面のほとんどは磨滅のため調整不詳で、内面はヨコナデ、ナデを行う。

鉢（37）口径4.9cm、器高8.9cmを測るもので、底部を含めて外面をハケ目、口縁内外面をヨコナデ、そして内面をヘラケズリするものである。明橙色を呈する。

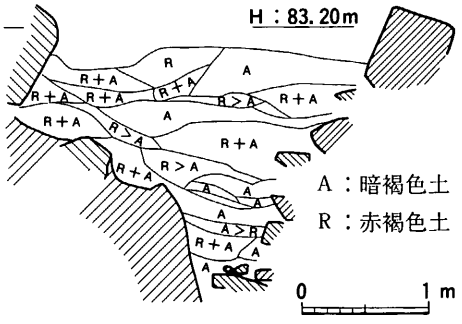
11. 11号墳

1）. 立地と現況（第78図、図版65）

1～10号墳が連続する丘陵斜面に立地したのに対し、11号墳はその丘陵の南にあって、南北方向に長い別の丘陵の西斜面にある。10号墳から見ると、南々東の方向に約150m行った地点である。また、先に報告した後田45－Ⅰ号窯跡の斜め左下方約14mの位置でもある。したがって、さらに古墳があれば別の支群設定が必要になるところであるが、1基しか検出されなかったため、11号墳として扱った。丘陵の最高所が約94mであるのに対し、石室床面標高が約80.5mの位置である。

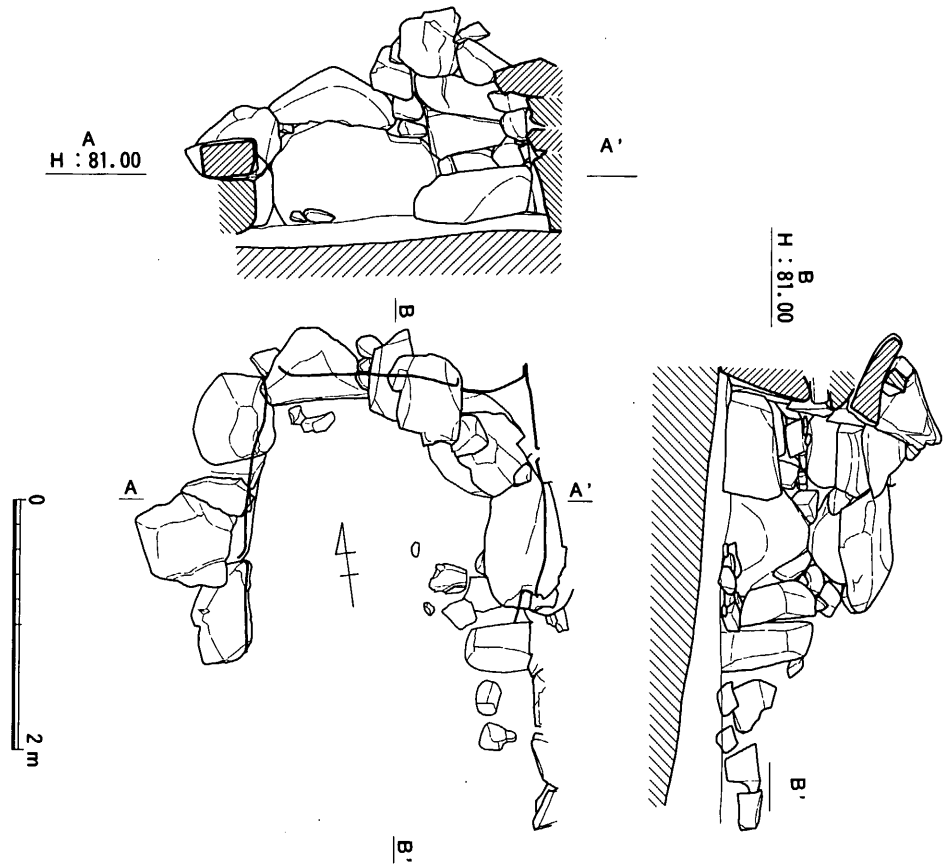


第78図　後田11号墳地形実測図（1/200）



第79図　後田11号墳墳丘断面実測図（1/60）

図版65に示すように、石室が半裁されたような形で残っていたものである。墳丘も一部を除いてほとんど流失していた。石室内を精査するに際して危険を感じたため、墳丘の調査終了後石室上部



第80図　後田11号墳石室実測図（1/60）

の石を崩して調査した。

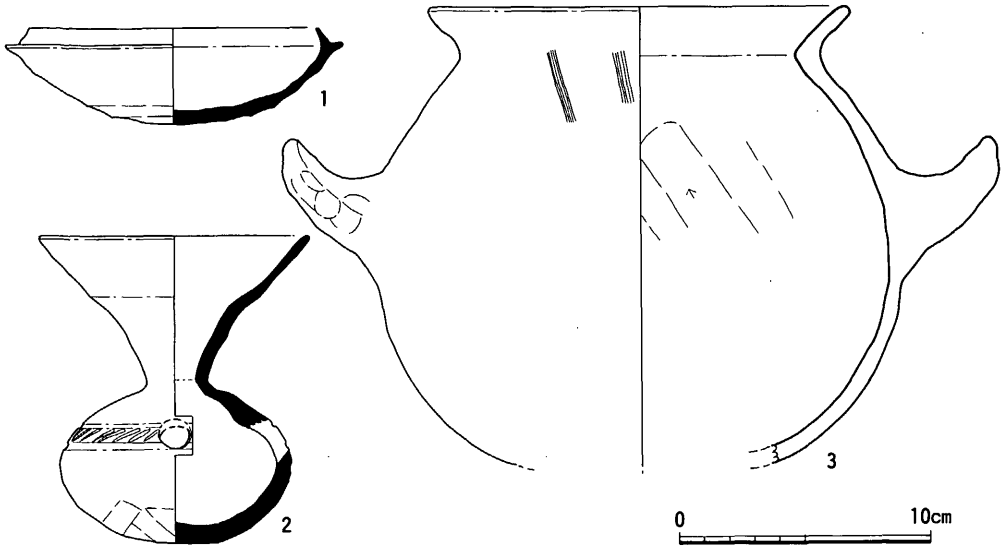
2）．墳丘（第78・79図、図版67）

前述のように封土はかなり流失していたため古墳本来の高さを知ることはできない。周溝は古墳背面に当たる東側から北側にかけて検出された。玄室中心から周溝外側まで3.9m、内側下端まで約2.2mである。これから考えて、直径４～５m、周溝外側まで入れても６～７m程度の円墳と想定できる。

墳丘に入れたトレンチの土層観察では、墓坑を掘り込み、石を積み上げるに従って比較的ていねいに土を盛ったことがわかる。暗褐色土と赤褐色土を多用している。

3）．石室（第80図、図版66）

主軸をＮ－７°－Ｅに持つ、ほとんど真南に開口する横穴式石室である。残りが悪いため正確ではないが、単室であると思われる。右側に袖石らしい石があるが、左側にはそれと対応す



第81図　後田11号墳出土土器実測図（1/3）

る位置にはそれらしい石がない。単袖式とも考えられるが、断定は避けたい。しかし、一応この石を右袖石と考えて規模などについて記述する。

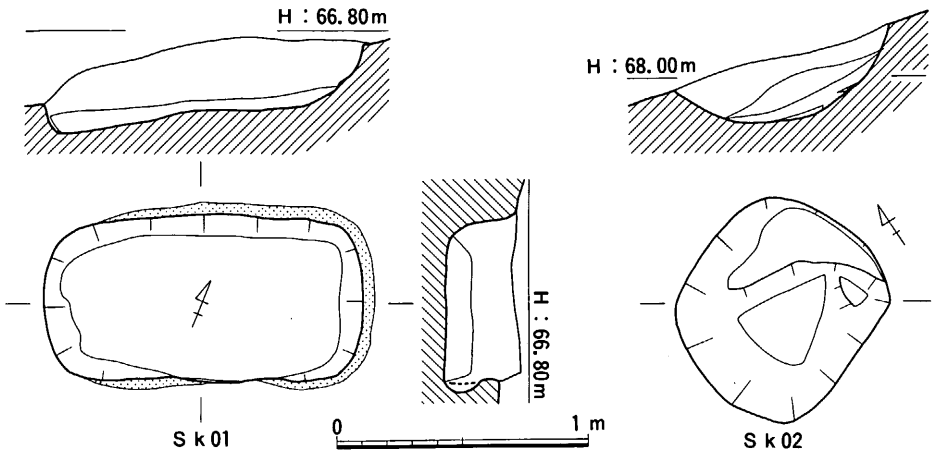
玄室は横長の長方形に近く、また、やや胴張り気味である。右側壁長は約1.95m、幅は奥壁側で2.1m、中央で2.4m、玄門側で2.3mである。また、天井石を落とす前の石室の高さは約2.4mである。敷石はほとんどないが、右奥隅に1.15×0.7m、厚さ約0.4mの大石がある。床面に接地して、かつ奥壁と右側壁に接するような状況で、崩れて偶然ここに落ちたとは考えられないような状態である。石室内側の支えに置いたものではないかという疑いがある。奥壁は幅1.5mの大ぶりの石と小ぶりの２石を据えている。その上は左右に横長の石、その間に小ぶりの石を積み重ねる。側壁も２石を腰石として据える。右側壁の場合は玄門側に大ぶりの石、奥壁側に小ぶりの石を置く。奥壁側の石が低いため、小さめの石で高さを調節した後２段目以降は２石ずつ重箱積みに積み上げる。袖石は床面から約0.7mの高さの石を用い、側壁から約50cm内側にせり出させる。

羨道部は流失のため明確ではない。

4）．出土遺物

斜め上に後田45－Ⅰ・Ⅱ号窯跡があるため、須恵器の出土は多く、どちらに所属するか迷うものがあった。ここでは石室内出土遺物のみを扱った。それらを列挙すれば以下のとおりである。

須恵器　杯身　1
　　瑞　1
土師器　把手付甕　1



第82図　焼土坑 SK01・02実測図（1/30）

出土状態

前述のように石室内埋土中からの出土で、原位置は保っていない。

遺物

須恵器（第80図、図版67）

杯身（1）Aタイプに属するもので、口径11.4cm、受部径13.5cmを測る。底部外面を回転ヘラケズリする。

甕（2）ラッパ状に大きく開く口縁部は胴部最大径よりも大きい。口径10.8cm、胴部最大径9.2cm、器高12.2cmを測る。円孔と同じ高さに2条の沈線をめぐらし、その間に刻目をめぐらす。底部とその周囲を手持ちヘラケズリする。

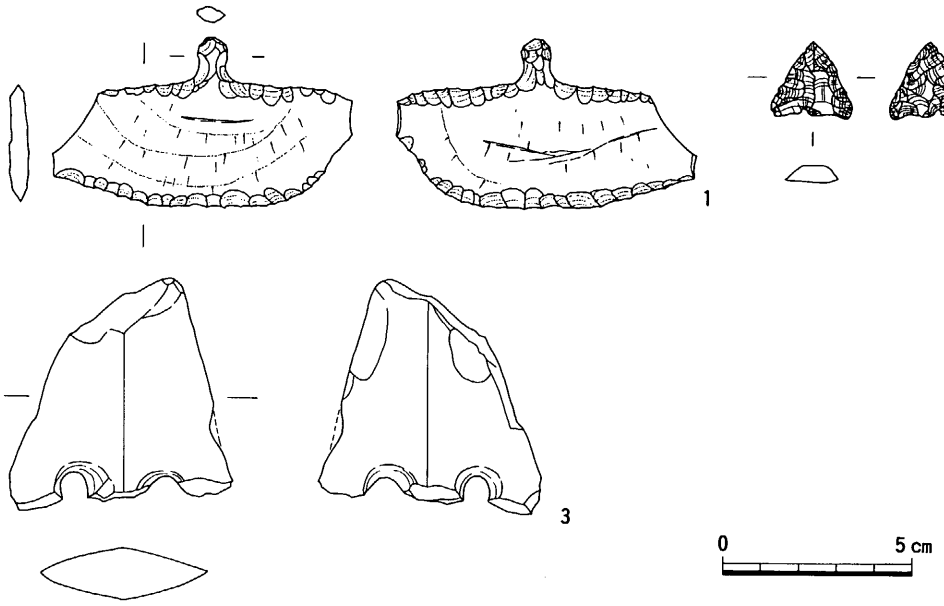
土師器（第80図）

把手付甕（3）球形の胴部に短く外反する口頸部を持ち、胴部中位に1対の把手を付けるものである。口径16.8cm、現存長18.2cmを測る。胴部上半部には縦方向のハケ目が見えるが、その他は磨滅のため調整がわからない。胴部内面はヘラケズリする。

12. 焼土坑

SK01（第82図、図版68）

2号墳の北側周溝底で検出されたものである。隅丸の長方形状を呈し、上端での長軸長1.32m、短軸長0.66m、深さ約0.3mを測る。底面はおおよそ平坦であるが、長軸方向は地形に合わせて北東側が高く南西側が低くなっている。主軸はN－68°－Eである。側壁のうち西



第83図　後田古墳群出土石器実測図（1/2）

側の短辺を除いて上部が熱のため赤褐色、壁面が黄褐色になっている。底面には変化が見られない。内部は黒色炭化物がぎっしり詰まった状態であったが、出土遺物はなかった。

周溝埋土を掘り上げた段階で検出されたもので、造られた時期としては2号墳とほぼ同時かそれに先だっての時期か2通りの場合が考えられる。

SK02（第82図、図版69）

8号墳周溝の北東約1mの斜面で検出されたもので、隅丸長方形状を呈する。断面はゆるやかな舟底状を呈し、平坦面を作らない。規模は長軸長0.82m、短軸長0.72m、深さ約0.25mを測る。斜面上位に当たる北側から東側にかけての側壁が熱によって赤変している。底面は変化が見られない。埋土下層には黒色炭化物を多く含む。埋土、側壁の状態から考えて、SK01とともにここで火をたいたことは間違いない。

13. その他の遺物（第83図、図版68）

出土状態

1の石匙は5号墳西南側周溝から、2の石鏃は9号墳の墓坑内埋土中から、そして3の石戈は2号墳を段々畑から掘り出す際に天井石の下付近から出土したものである。

遺物

石匙（1）サヌカイトの横長剝片を素材として、表裏とも全周にわたり、押圧剝離を行い、

刃部及び背部、つまみ部を作り出している。残存長7.9cm、幅4.5cm、厚さ0.6cm、重さ19.35ｇを測る。

石鏃（２）黒曜石製で平基式のほぼ正三角形を呈する打製石鏃である。長さ2.1cm、幅2.15cm、厚さ0.45cm、重さ1.3ｇを測る。

石戈（３）援の大半と紐孔を含む、胡（関）の一部を欠損する。鏑は明瞭でない。断面は菱形を呈する。石材は明らかではないが、軟質の灰褐色を呈するものである。

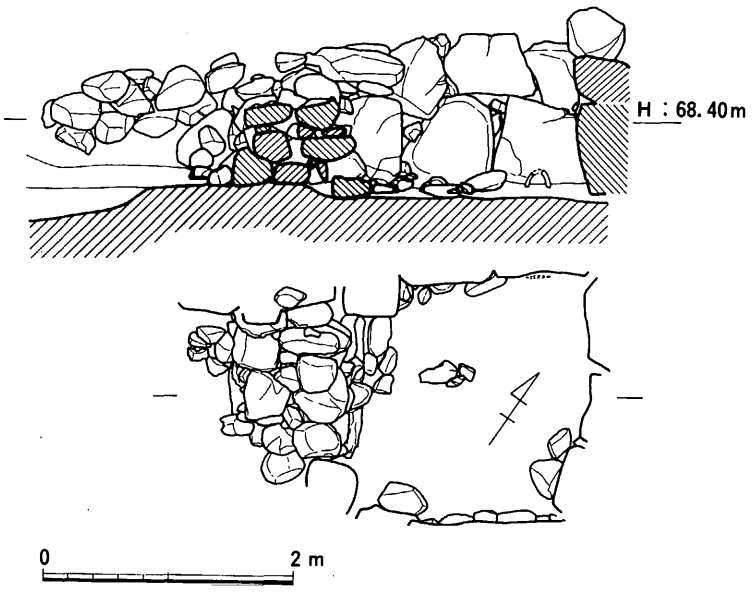
(3) 小田浦古墳群

後田古墳群が人家から離れた山の中にあったのに対し、小田浦古墳群はそこから東南500ｍに位置し（第１図37地点）、民家のすぐ裏山にある。小田浦37－Ⅰ・Ⅱ号窯跡の下位である。今回調査したのは２・３号墳の２基だが、1976年（昭和51年）に立正大学によって１基が調査されている。それを１号墳とする。２・３号墳は１号墳の北東に位置し、２号墳は墓地として造成された平地の崖面に石室の一部が露出した状態で、また、３号墳は墓地の上の斜面に開口した状態で検出されたものである。

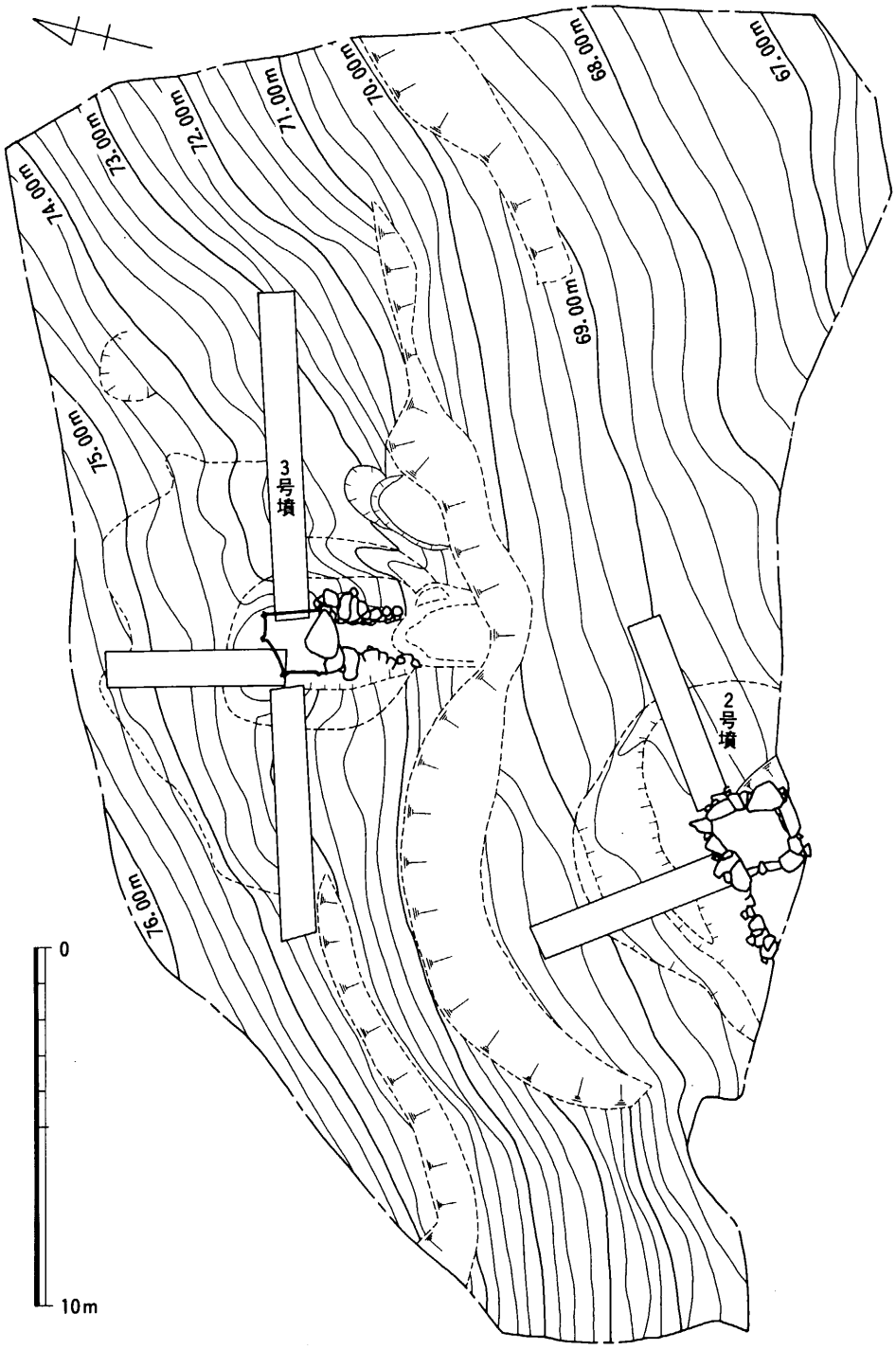
１．２号墳

１）．立地と現況（第85図、図版70）

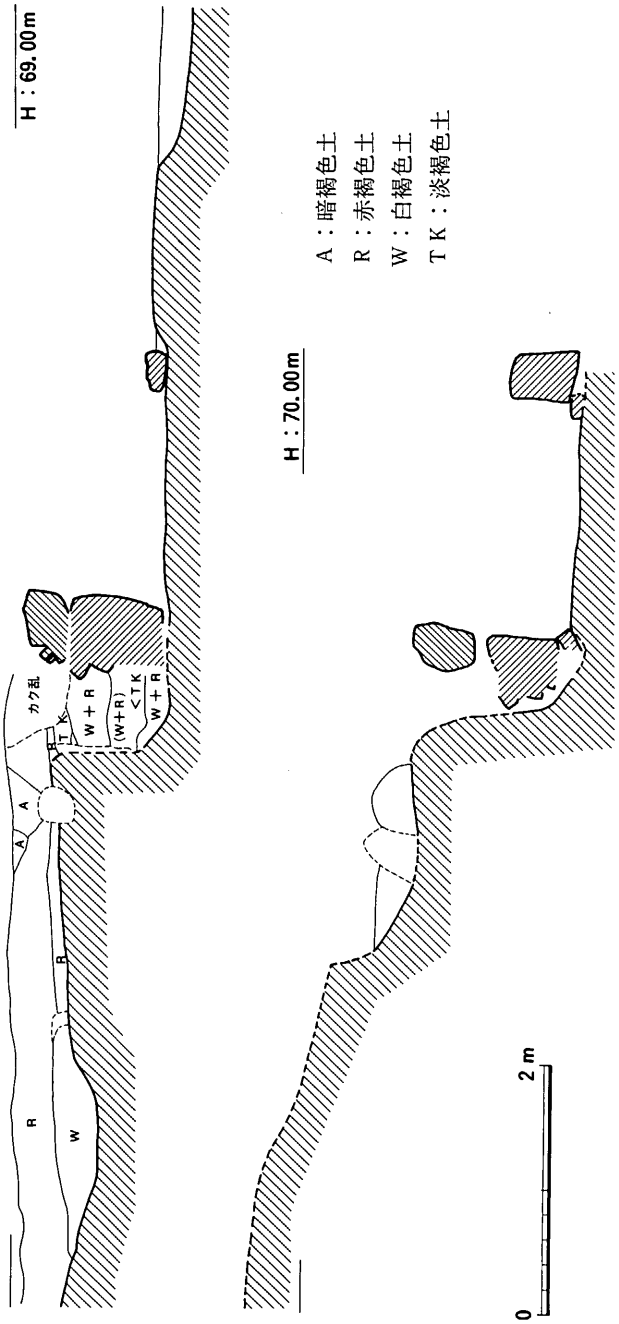
標高約101ｍを最高所とする低丘陵の東南山麓、標高65～75ｍ付近に立地する。２号墳の北東の斜面上には37－Ⅰ・Ⅱ号窯跡があった。すぐ下には民家があるが、そこから続いている山道の崖面（上は削平されて墓地となっている）に大石が露出していて古墳の存在が推定され、掘り下げた結果、右側壁の後側と判明したものである。墓地として造成されていたため、図版72図に示すように玄室下位と羨道左側が残るだけであった。玄室床面の標高約67.80ｍである。



第84図　小田浦２号墳閉塞状況実測図（1/60）



第85図　小田浦古墳群地形実測図（1/200）



第86図　小田浦２号墳墳丘断面実測図（1/60）

２）．墳丘（第86図、図版72）

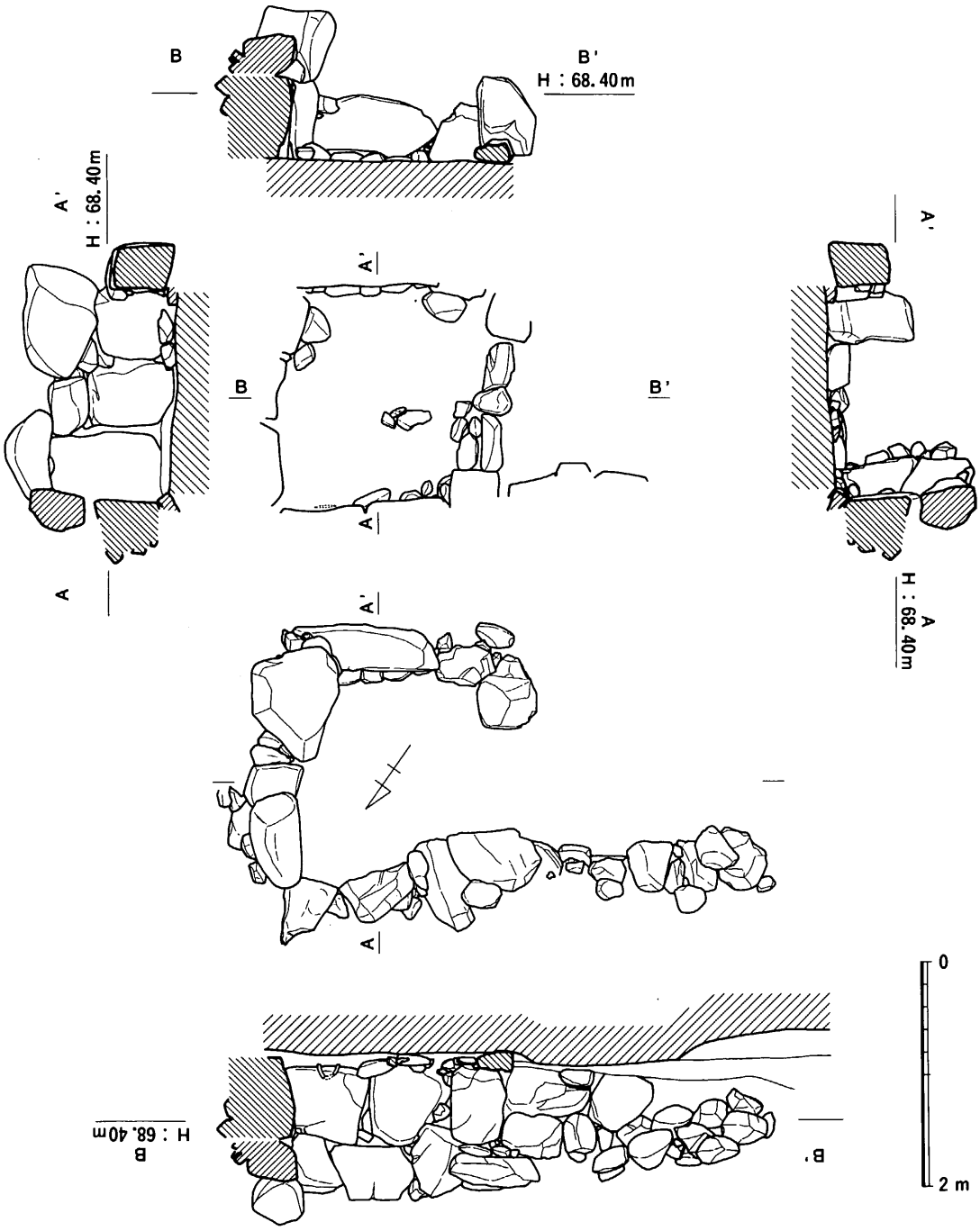
ほとんど墳丘は失われた状態で、本来の高さを知ることはできない。また、周溝は北側から北西にかけて少し残る。玄室中心から周溝外側まで約4.5ｍである。斜面下位である南側に周溝はないと考えられるので、規模として直径８～９ｍほどの円墳と推定できる。

斜面上位である北西側では墓坑を掘り込んでいるのが明確であるが、墓地であったため、その墓坑が多くあってかく乱が著しい。わずかに残る盛土はていねいな盛り方をしていない。

３）．石室（第87図、図版72・73）

南西へ開口する単室の両袖式石室である。主軸はＮ－66°－Ｅである。

玄室は横長の平行四辺形状を呈する。右側壁長1.55ｍ、左側壁長1.45ｍ、幅は奥壁側で約2.0ｍ、玄門側で約1.8ｍを測る。敷石はほとんどなくなっている。奥壁は高さが違うが長方形状の石を３石腰石として据える。あまり深く掘り込まない。中央の腰石上には幅の似た石を積み、右側壁寄りの石には腰石よりも大きい石を２段目として積む。また、左側壁寄りの腰石上には中央の腰石の２段目の石に架けわたす形で中位の石をのせる。側壁は右側では大きな石と



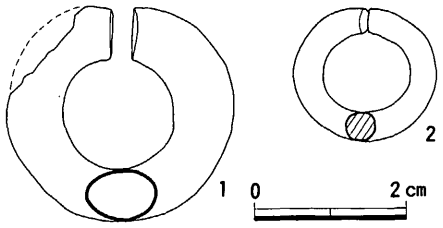
第87図　小田浦２号墳石室実測図（1/60）

その半分ほどの石の２石を腰石として据える。２段目以降は失われている。左側壁の場合、大きさの似た石２個を腰石として据え、２段目も３石をほぼ高さをそろえて積む。袖石は左右とも同じような大きさで、右側で約30㎝、左側で約20㎝内側にせり出させる。框石は長めの石２個と丸い石１個の３石を組み合わせている。玄門幅は約1.2ｍである。

羨道は左側壁しか残っていないが、袖石寄りには大きくて長方形状の石を２石横にして積み上げる。袖石の外側約1.3ｍほどが考えられる。

墓道は人頭大の石を乱雑に積む石組墓道が約1.1ｍ検出されている。

閉塞は玄門で行う。框石上に小口をそろえるようにして整然と積み上げる(図版71)。小口は垂直にそろえるのではなく、上に行くにつれて後退するよう斜めに積み上げる。

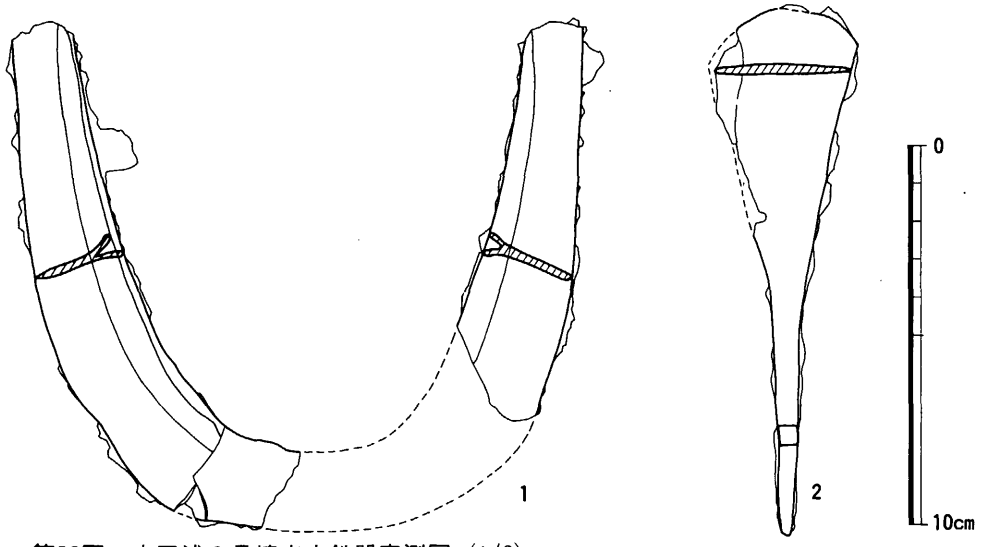


第88図　小田浦２号墳出土装身具実測図（1/1）

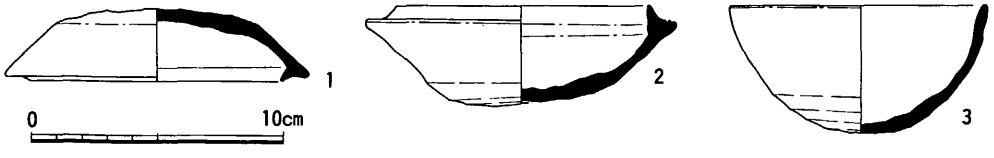
４）．出土遺物

列挙すると以下のとおりである。

装身具	耳環	2
鉄　器	鋤先	1
	鏃	1



第89図　小田浦２号墳出土鉄器実測図（1/2）



第90図　小田浦２号墳出土土器実測図（1/3）

須恵器　杯蓋　2（図示１）
　　杯身　4（図示１）
　　壺　　1（図示せず）
　　甕　　1（図示せず）

出土状態

耳環２個は玄室埋土中の出土で、床面から浮いた状態で検出された。鉄鋤先は図版74(1)に示すように、左側壁の奥壁側腰石に刃部を上にしてもたせかけた状態で出土した。鉄鏃は玄室埋土中の床面近くから見つかった。須恵器は杯蓋１（第90図）が閉塞周辺、杯身２が羨道かく乱土中から、３が玄室と周溝の埋土からの出土である。

遺物

装身具（第88図、図版75）

耳環（１・２）１は外径3.0×2.9cmのほぼ円に近いもので中空である。断面は0.95×0.65cmの楕円形を呈し、4.9ｇの重さである。青銅管に鍍金している。２は外径1.9×1.8cm、断面も0.4×0.4cmの円形に近い。青銅の芯に鍍金している。重さは2.85ｇである。

鉄器（第89図、図版75）

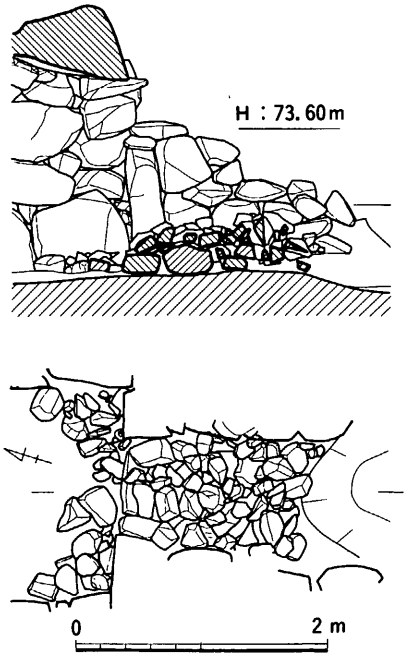
鋤先（１）刃部先端と耳端部を欠く。現存長13.3cm、最大幅15.0cmを測る。木柄の挿入部は前・背の２面に分かれる。刃部中央に近い所で挿入部幅0.8cm、刃部幅1.8cmである。

鏃（２）円頭広根斧箭式に属するもので、全長14.2cm、幅3.8cmを測る。

須恵器（第90図、図版75）

杯蓋（１）B_2タイプに属し、最大径12.0cmを測る。かえりはわずかに外に出る。外面は灰をかぶっているため調整不明である。

杯身（２・３）２はＡタイプ、３はＢタイプに属し、２は口径10.2cm、受部径12.5cmを測る。底部外面はヘラケズリする。３は口径10.1cm、器高5.1cmを測る。底部外面はヘラケズリする。

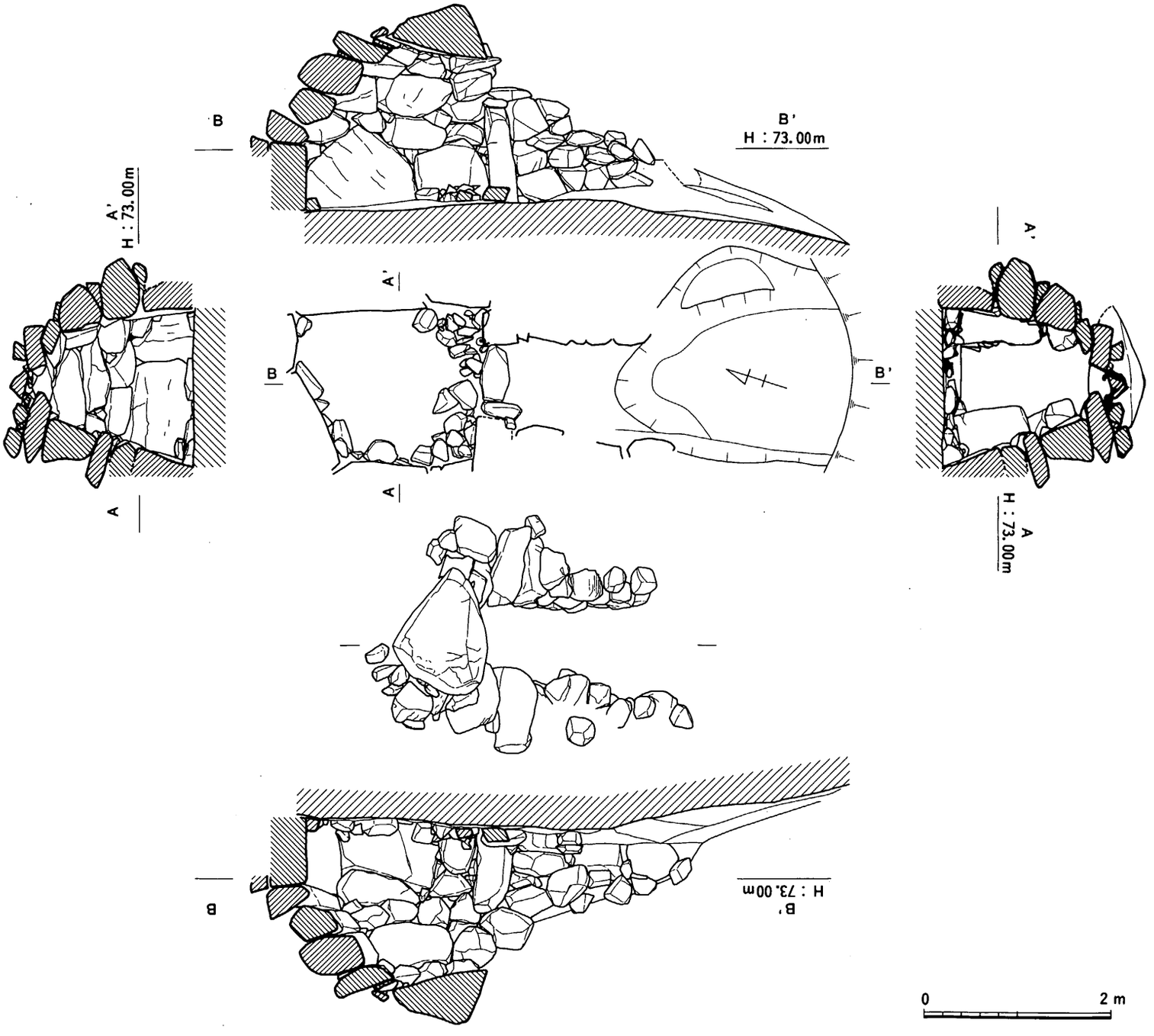


第91図　小田浦３号墳閉塞状況実測図（1/60）

２．３号墳

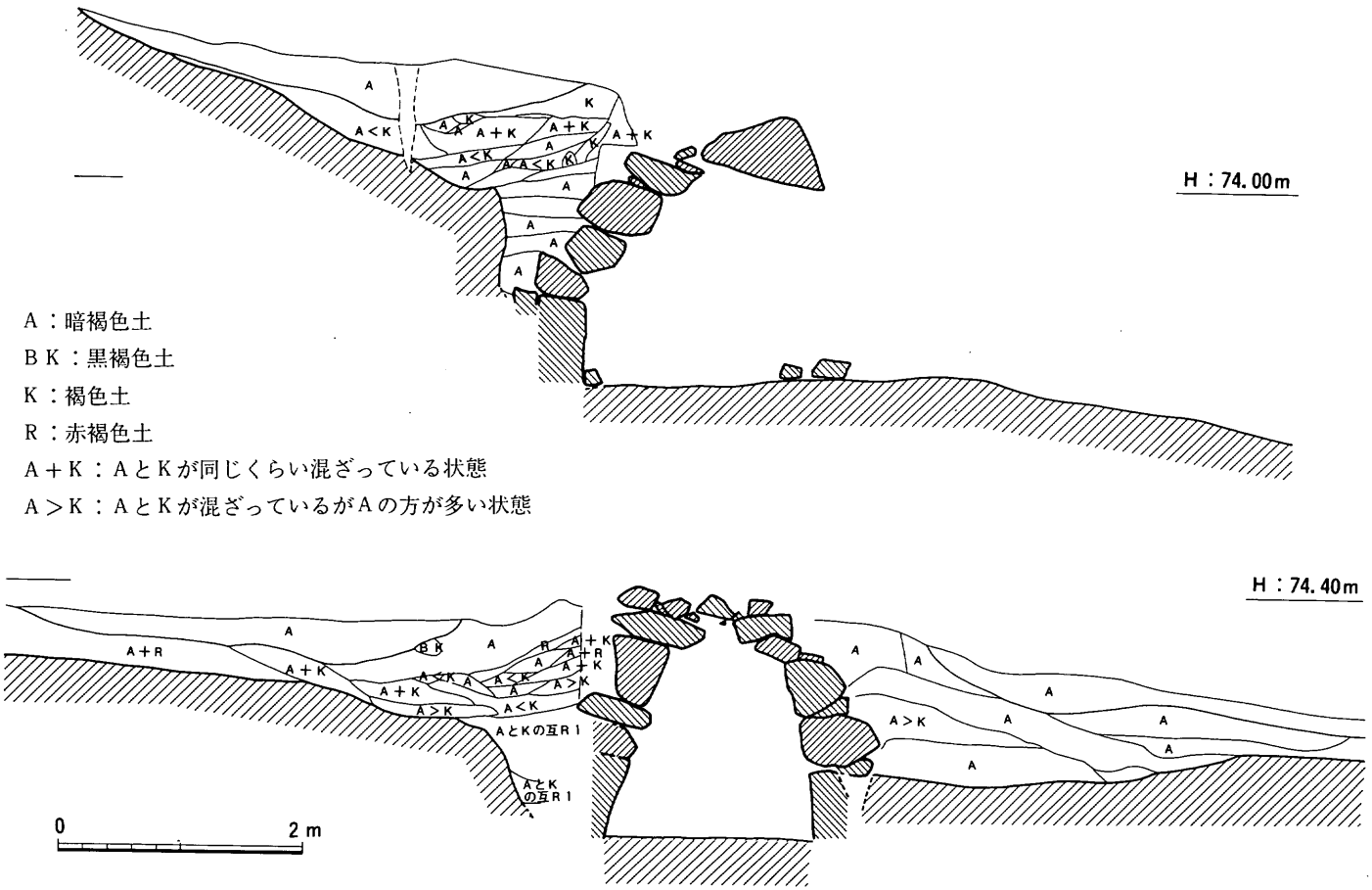
１）．　立地と現況（第85図、図版70）

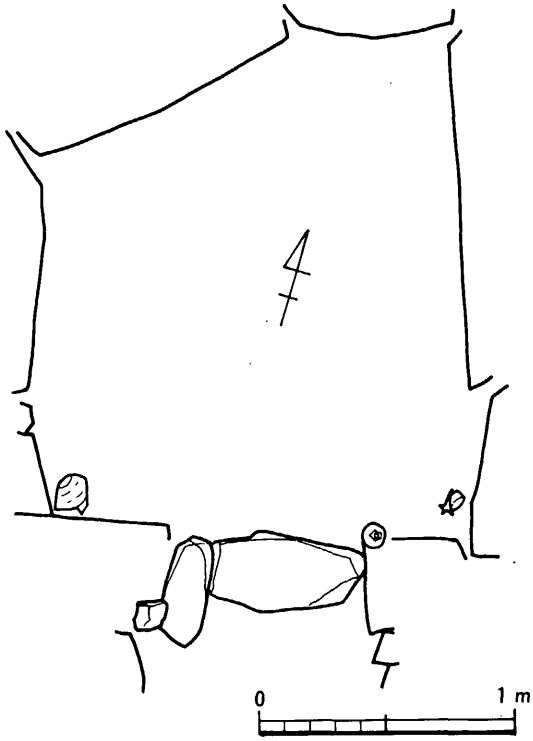
２号墳の北北東約６ｍに位置する。また、高低差で言えば約５ｍ上にある。玄室床面の標高が約



第92図　小田浦３号墳石室実測図（1/60）

第93図　小田浦３号墳丘断面実測図（1/60）





第94図　小田浦３号墳遺物出土状態実測図（1/30）

72.40ｍである。

当初から開口していたものであるが、天井石は露出している状態であった。石室の残りは良い。墳丘は本来の高さは保っていないが、下側は比較的残っている。

２）．墳丘（第85・93図、図版76）

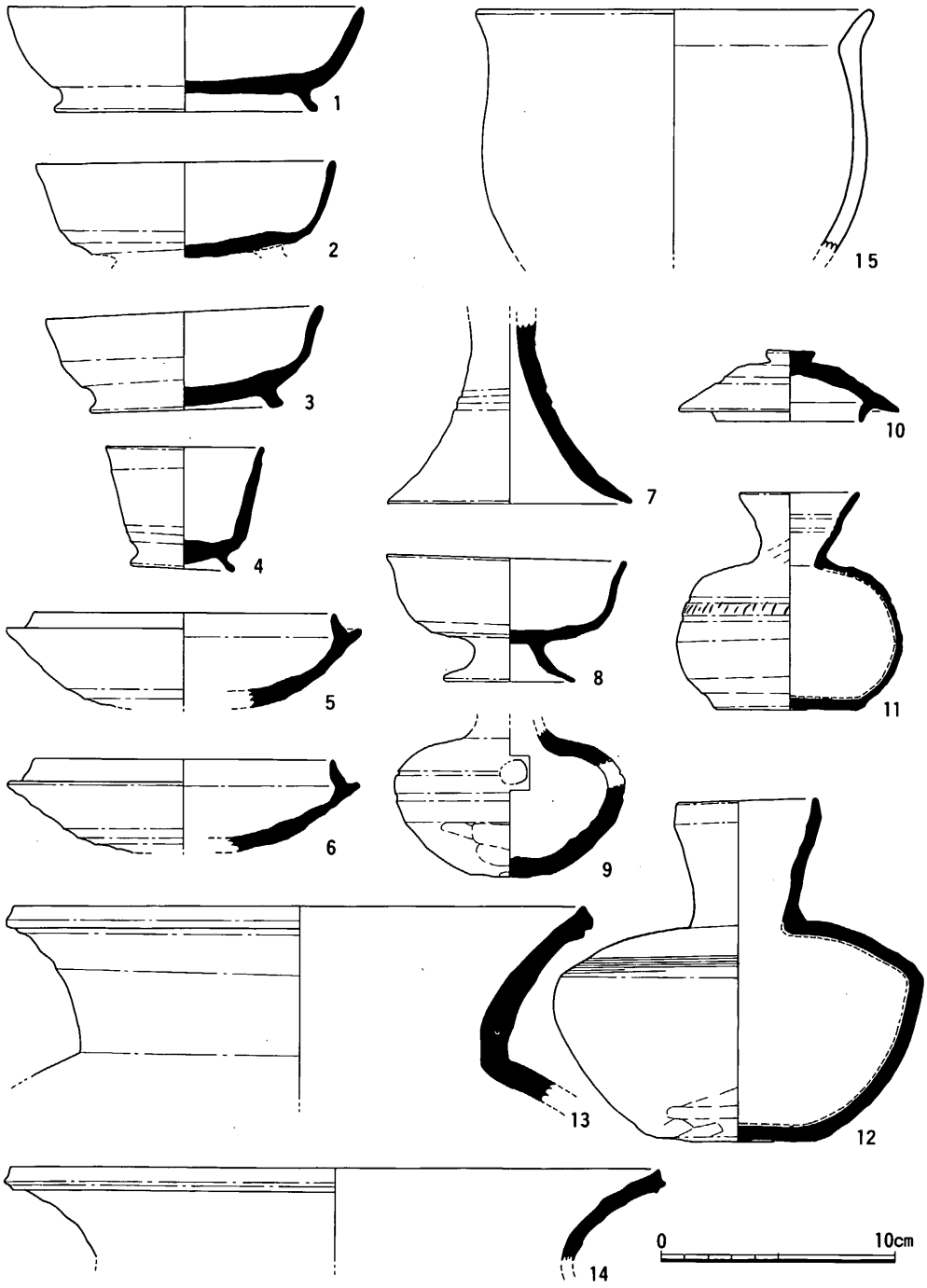
墳丘上部は失われているので本来の高さを知ることはできない。周溝は東側で明瞭である。北側は斜面を切り込んでいるが、斜面の傾斜とほとんど変わらないため、周溝外堤部をどこにするか決めがたい。この北側で墳丘裾と考えられる部分と玄室中心の距離は約2.35ｍ、墓道側の墳裾までは約3.5ｍである。したがって、主軸長は約5.85ｍとなる。一方、主軸と直交する方向では、玄室中心から西側墳裾まで約３ｍ、東側で約2.7ｍ、周溝外側まで約3.5ｍを測る。したがって、この方向での直径は約5.7ｍとなり、ほぼ主軸長と合う。以上から２号墳は直径5.7～5.85ｍ、周溝外側まで含めると直径７ｍ前後の円墳と考えることができる。

盛土は比較的ていねいに積んでいる。石を固定する作業と墳丘規模を大きくする作業の２工程あったことが、北と西のトレンチ土層図から推測できる。

３）．石室（第92図、図版76）

南々東に開口する単室両袖式の横穴式石室である。主軸はＮ－15°－Ｗにとる。

玄室は奥壁の腰石の１つが斜めに据えられているため、五角形状を呈する。右側壁長約２ｍ、左側壁長1.4ｍ、幅は奥壁側が0.6ｍ、北西側の隅切り状に置かれた腰石の幅1.2ｍ、玄門側1.6ｍを測る。また、天井までの高さ約1.8ｍである。奥壁は大小２石を腰石として据える。左側が大きいが、玄門と平行でない。腰石の大きさは違うが高さがほぼそろっているため、２段目も横並びに高さをそろえて積む。３段目、４段目は比較的大ぶりの石を横にして積み上げる。５段目の石を１石のせて天井石となる。奥壁の３段目以降の持ち送りは大きい。天井石は1.35×0.95ｍ、厚さ約0.55ｍの大きさである。奥壁の整然さに比べると左右側壁はそれほどでもない。右側壁の場合は、腰石として２石用いるが、整った石ではない。その２石に架けわたす形



第95図　小田浦３号墳出土土器実測図（1/3）

で中位の石を２石と小ぶりの石を１石積み上げ、その右側には小ぶりの石を４石積み上げる。いずれも重箱積みである。左側壁の場合は大きな腰石を１石据え、その石と袖石との間に小ぶりの石を積み上げ、両方の高さを調節しながら大石を上の方に用い、小ぶりの石をはさんで天井石をのせる。袖石は側壁から約0.4～0.45ｍ内側にせり出させて玄門を造り出している。框石は細長い石を１つは横長に、１つは縦に並べている。玄門幅0.75ｍ、高さ約1.35ｍである。なお、天井石が楣石を兼ねているようでもあるが、楣石としてあった石が崩れ、奥壁から全体的に前に倒れてきた可能性が高い。

羨道は袖石外側から右側で0.5ｍ、左側で0.8ｍ続いている。右側壁を見るとやや大きめの石を袖石にもたせかけるように積み上げている。左側は似たような大きさの石を横にして袖石にもたせかけるようにして積む。

墓道は初め石積み部分を持つが、その後素掘りになり約2.8ｍにわたって、やや開き気味になりながらも直線的に検出された。その先は削られている。

閉塞石は框石の外側に大きめの石が、その上と墓道側に約1.5ｍにわたって小ぶりの石が乱雑な状態で検出された。本来は框石上で行われていたものが崩されたものと推測される。

４）．出土遺物

列挙すれば以下のとおりである。

須恵器	杯蓋	1（図示せず）
	杯身	5（図示４）
	高杯	5（図示４）
	𤭯	1
	蓋	1
	壺	2
	甕	3（図示２）
土師器	甕	2（図示１）

出土状態（第94図）

石室床面から出土したものとして第95図の４・８・11・12、墓道埋土中から１・３、周溝から２、墳丘から周溝にかけての出土が５～７・９・10・13～15である。

遺物

須恵器（第95図、図版77）

杯身（１～４）すべてＣ$_1$タイプに属するものである。口径は１が15.1㎝、２が12.7㎝、３が11.7㎝、４が6.7㎝である。高台は高く外へ踏ん張る。２は底部と体部の境付近をヘラケズリした後ナデを加える。４はヘラケズリしている。他はヨコナデ、ナデである。

高杯（５～８）５・６は脚部を欠くが、有蓋高杯の杯部とわかるものである。２個ともほぼ

同じ大きさで、5の口径12.8cm、受部径15.2cm、6はそれぞれ12.8cm、15.0cmを測る。底部をヘラケズリするが、その後ナデを加える。7は脚部のみの破片であるが、中位に2条の沈線を持ちヨコナデで仕上げる。8はBタイプの杯部に短脚を付けるもので、杯部底部をヘラケズリする。口径10.2cm、器高5.5cmを測る。

鉢（9）胴部のみの破片であるが、肩の張るタイプである。肩部に2条の沈線を持つ。下半部を手持ちヘラケズリする。

蓋（10）壺の蓋と思われる。口径6.2cm、最大径9.4cmを測る。扁平なボタン状のつまみを持ち、かえりは高い。天井部の一部を回転ヘラケズリする。

壺（11・12）直口壺の部類に入れられるものと考えられる。11は口径5.0cm、胴部最大径9.6cm、器高9.3cmを測る。胴部上位に2条の沈線を入れ、その間に爪で付けたと思われる刺突文をめぐらす。底部近くをヘラケズリし、底部はヘラ切り後ていねいなナデを行う。12は口径5.9cm、胴部最大径15.8cm、器高14.7cmを測る完形品である。胴肩部をカキ目調整し、下部3分の1と底部を手持ちヘラケズリする。

甕（13・14）13は口径24.5cm、14は27.8cmの大きさのもので、大きい部類の中型の甕と言えるだろう。口縁端部に突帯を持ち、内外面をヨコナデする。13の胴部は外面を平行叩き、内面に同心円の当て具痕が残る。

土師器（第95図）

甕（15）口径17.0cm、現存長10.4cmを測るもので、口頸部は短く外反するものである。磨滅が激しく調整は不明である。

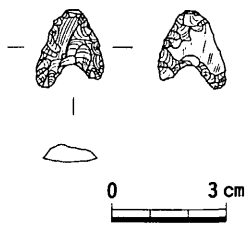
3．その他の遺物（第96図）

出土状態

表土を剝いだ段階で出土したものである。

遺物

石鏃（1）黒曜石製で、凹基式のほぼ二等辺三角形を呈する打製石鏃である。抉りはそれほど深くない。残存長2.05cm、幅1.8cm、厚さ0.45cm、重さ0.45ｇを測る。



第96図　小田浦古墳群出土石器実測図(1/2)

Ⅳ．まとめ

後田古墳群11基と小田浦古墳群2基の調査結果は前述したとおりである。以下にまとめを行いたい。

(1) 古墳の造営時期と使用期間

後田８・９号墳を除いてはすべて横穴式石室を持つものであった。横穴式石室の性格上、追葬があって、先の埋葬跡は破壊されることがある。さらに盗掘を受けやすく、当初の様相は残っていないのがほとんどである。このため出土土器にしても偶然性に左右されることが多い。しかしながら、細かい時期決定は出土遺物にほとんど頼らざるを得ない。上記のことを前提にしながら各古墳の出土遺物から造営時期、使用期間を考えていきたい。なお、須恵器蓋杯で使用するＡ、B_1、B_2、Ｃタイプの分類については後田２号墳の出土遺物の項で述べたとおりである。それらは須恵器の編年で言えば、ＡタイプはⅣ期まで製作されたもの、ＢタイプはⅤ期、ＣタイプはⅥ期に製作されたものと考えられているものである。ただし、Ｂタイプの蓋杯はＡタイプの蓋杯と同時焼成されていた時期のあったことが確認されたので、(註1)便宜的に以下のような時期設定を行いたい。

Ａ期――小田富士雄氏編年のⅣ期のうちＢタイプの蓋杯が現れない時期（６世紀末～７世紀初め頃)。

ＡＢ期―同じくⅣ期だがＢタイプの蓋杯が現れてＡタイプと共伴する時期（７世紀初め頃)(註2)。

Ｂ期――同じくⅤ期に当たるもの（７世紀前半)。

Ｃ期――同じくⅥ期に当たるもの（７世紀中頃～後半)。

１．後田古墳群

１号墳

蓋杯はＡタイプとＢタイプが出土しているが、玄室床面から出土したのはＢタイプのみである。このことからＢ期に最後の追葬があったものと考えられる。造墓時期は確定できないが、出土しているＡタイプ蓋杯は杯蓋がヘラケズリを行うが、杯身は行わないものである。ヘラケズリを行わない蓋杯はＡＢ期のものの可能性が高いので、それほど古い時期に造られたものではないかもしれない。また、第11図13の台付長頸壺はＣ期の所産の可能性が高い。墓道付近から出土しているので、追葬は終わっても祭祀は行われていたことを物語るものかもしれない。以上から７世紀前半～中頃にかけての時期に使用されたことが推測される。

２号墳

前室から多くの須恵器が出土したが、蓋杯は35個のうちＡタイプ６個（17％)、Ｂタイプ20個（57％)、Ｃタイプ９個（26％）であった。これらは図版13のとおり、すべてまざった状態で出土した。これらが追葬の結果を示すものであるならば、Ａタイプの蓋杯はヘラケズリしないものなので、ＡＢ期～Ｃ期の所産とすることができる。前室以外の出土須恵器も同じ様相を

示している。以上から、2号墳は7世紀初め頃から7世紀後半に使用されたと考えられる。ただし、1号墳の墓道の曲がり具合などから、1号墳に先だって造られたものと思われる。

3号墳

玄室から出土したものとして第27図30の高杯、前室床面からは第26図13の杯蓋（Cタイプ）、21の杯身（Bタイプ）、26の杯身（Cタイプ）が出土している。また、墓道からではあるが、Aタイプの蓋杯が8個出土している。このことからA～C期、即ち6世紀末～7世紀後半の造墓、使用期間が推測される。ただし、土師器高杯や第26図23の杯身は8世紀代と考えられるので、再利用されたこともあったと思われる。

4号墳

出土した蓋杯はAタイプとBタイプがほとんどであるが、Cタイプも1点含まれる。Aタイプの蓋杯はヘラケズリしている。以上のことから造墓、使用期間はA～C期、即ち6世紀末頃～7世紀後半頃と考えられる。

5号墳

A～Cタイプの蓋杯が出土している。Aタイプの蓋杯はヘラケズリするものが多いが、しないものも含まれる。出土状態を見ると、A、Bタイプのもので石室内出土はない。前室から比較的出土しているが、Cタイプのみである。Aタイプのものは羨道や墓道から出土するものが多い。以上より、C期に追葬が終了し、造墓時期はA期にさかのぼる可能性があるということになる。即ち、6世紀末～7世紀後半頃使用されたと考えられる。

6号墳

同古墳の場合、墳丘下から須恵器が出土しているので、その時期が造墓時期と考えられる。墳丘下出土蓋杯はすべてAタイプに属し（第51図）、ヘラケズリを行うものである。したがってA期の所産と考えられる。一方、玄室床面から出土した蓋杯は最後の追葬時期を示す可能性があるわけだが、これもAタイプの蓋杯のみである。しかし、出土した3点（第51図11～13）ともヘラケズリは行わない。したがって、AB期の所産の可能性が強い。その他の地点の出土遺物を見てもほとんどこれらの時期のものと考えられるが、Bタイプの杯蓋（第52図24～26）が若干ある。ただし、これらは墳丘や墓道からの出土である。以上から、造墓、使用期間はA～AB期で、B期まで祭祀行為があったと推測できる。6世紀末～7世紀前半頃と考えられる。

7号墳

出土蓋杯はすべてAタイプのもので、ヘラケズリを行うものである。したがってA期の所産と思われる。A期は須恵器編年のⅣ期に属するものと考えたが、ここでは法量的にⅢB期に含めても良さそうな大型のものも含まれる。絶対年代としては6世紀末頃と考えられる。7号墳は横穴式石室を持つが非常に小型のもので、追葬が行われたか疑わしい。

8号墳

出土した杯身はヘラケズリをするAタイプのものである。1個体しかないがA期の所産と考えられる。高杯も同時期として良い。6世紀末頃と考えられる。8号墳の主体部は小石室で本来追葬をしないものであろうから、この時期の造墓と考えられる。

9号墳

蓋杯は報告したように主体部からやや離れて出土したもので、Aタイプに属する。ヘラケズリを行っており、A期の所産と考える。これも追葬はされないものと思われ、造墓時期として須恵器が示す6世紀末頃が考えられる。

10号墳

出土蓋杯にはA～Cタイプのものが見られるが、Bタイプのものが最も多く、Aタイプ、Cタイプのものは少ない。Aタイプの蓋杯のうち、磨滅で調整不明のものを除けば、ヘラケズリは行っていない。したがって、AB期～C期の所産と考えられる。7世紀前半～後半の時期である。

11号墳

出土遺物は少ない。杯身はAタイプに属し、ヘラケズリを行う。したがって、A期の所産と考えられるが、蓋は口頸部の段がほとんど失われたもので退化した形態を示し、AB期頃の所産と考えたい。以上より、A～AB期、即ち、6世紀末～7世紀初め頃の年代と考えられる。

2．小田浦古墳群

2号墳

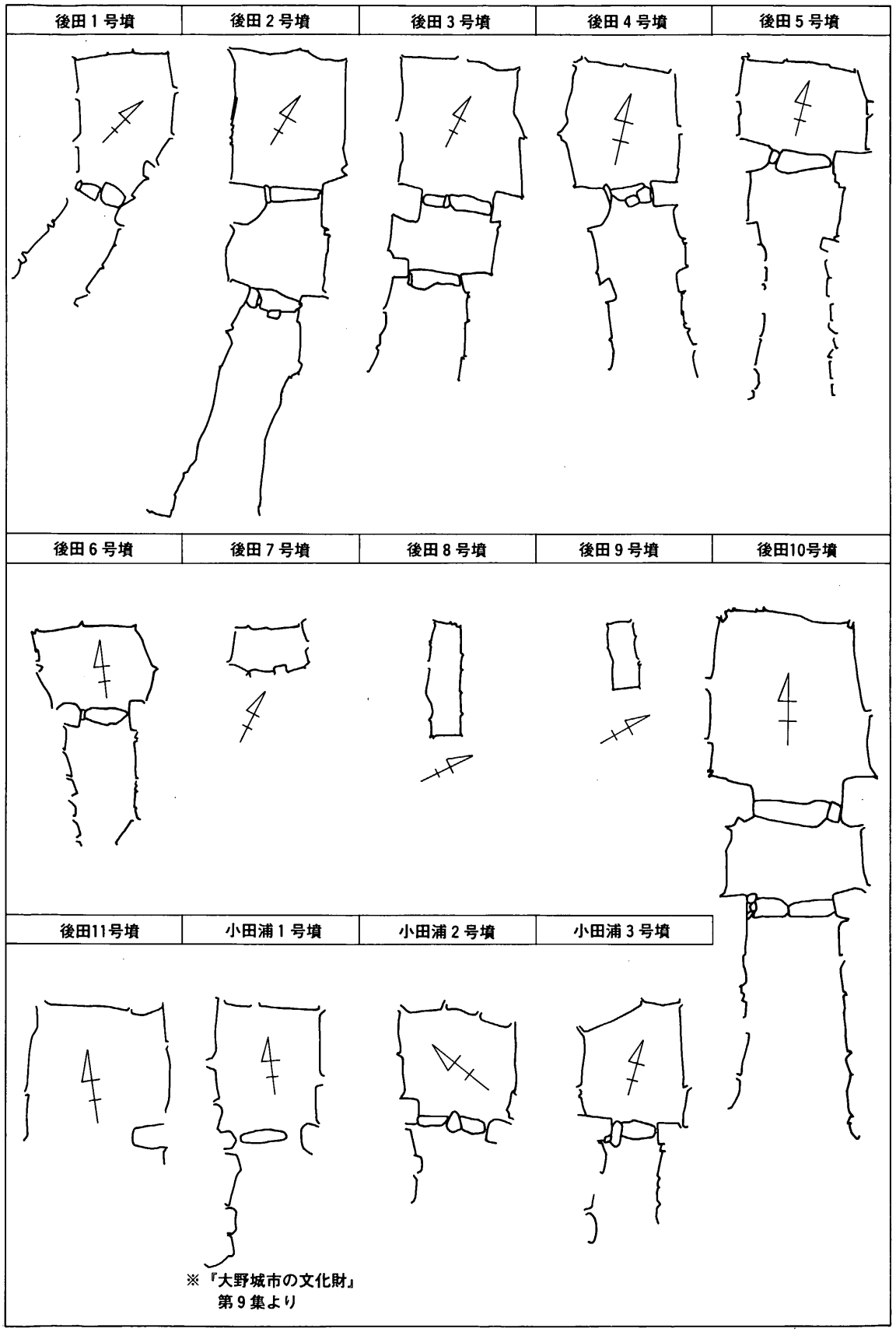
出土須恵器は少ない。第90図、杯蓋1はBタイプ、杯身2はAタイプ、3はBタイプである。2はヘラケズリしない。また、3は丸い形のものでAB期に属する小田浦37－Ⅰ号窯跡出土杯身によく似ている。1をAB期の所産とするかB期の所産にするかは決めがたいので、ここではA～B期と考えておきたい。6世紀末～7世紀前半頃の造墓と使用期間が考えられる。

3号墳

蓋杯はすべてCタイプに属し、C期の所産である。しかし、有蓋高杯はA期の所産と考えられる。また、高杯脚部もAまたはAB期に属するものと考えられる。したがって、A～C期の使用期間が考えられる。6世紀末～7世紀後半頃である。

〈註1〉牛頸小田浦37－Ⅰ号窯跡で確認。『牛頸小田浦窯跡群』大野城市教育委員会　1992

〈註2〉Ⅳ期は6世紀末～7世紀初め頃と考えているが、A期とAB期を600年を境として把える根拠はなく、あくまで便宜的な把え方である。



第97図　後田小田浦古墳群石室プラン一覧表

(2) 後田古墳群について

各古墳の築造時期について述べたが、後田古墳群についてそれをまとめると右表のようになる。また、各古墳の主体部の形態についてまとめると第97図のようになる。後田古墳群の構造についてはまだ検討しなければならないので、ここではそのための簡単なまとめを行っておきたい。

① 古墳間の関係

各古墳の立地を見ると、1・2号墳、3・4号墳、5～7号墳が小グループを成しているのではないかと考えられる。出土須恵器から見ると、右表のように小グループ内では各古墳が同一時期に築造されていて、追葬の終わりの時期に差がある。また、単次葬しか行い得ないと考えられる8・9号墳がやや離れて位置していて、古墳群が形成され始める時期の遺物しか出土しない。一方、盟主墳と考えられる10号墳が他の古墳と離れて立地し、しかも、古墳群形成の初期の遺物はなく、次の段階からの遺物しか出土しない。

② 出土遺物の問題

後田古墳群からの出土遺物の中で特に注目したいのは鉄製鋤先である。3～6号墳から1個ずつ出土している。また、小田浦2号墳からも1個出土した。原位置を保ったと考えられる後田6号墳、小田浦2号墳では玄室のどちらかの側壁に刃部を上にしてもたせかけていた。牛頸中通S4号墳[註1]でも出土しており、須恵器窯体内壁面にたまに残る工具痕から推定して、窯を掘る工具として使用したものであろう。もちろん、須恵器窯跡周辺以外でも出土しているが、被葬者が須恵器工人と考える根拠の1つである。

③ 7号墳祭祀遺構

既述したが、7号墳の周溝の一部を拡張するような形で土坑状の落ち込みがあり、外壁添いに一群の土器が見つかった。土師器甑、甕、須恵器蓋杯セットが出土した。焼土があり、そこで調理、飲食のあったことが推定される。『古事記』等に見られる黄泉戸喫[註2]を連想させる。しかし、一般的な事例ではないので、意義付けには類例、その他の祭祀形態を勘案する必要がある。

〈註1〉『牛頸中通遺跡群Ⅱ』大野城市教育委員会　1982

〈註2〉小林行雄「黄泉戸喫」『古墳文化論考』　1976

最後に、調査に従事していただいた方々のお名前を記して、その労をねぎらいたい。

横川浩

赤星年子、浅川郷子、伊藤和子、岡本正枝、岡本妙子、梶原三治、梶原チヨノ、鹿児島トシ子、岸原藤雄、倉重丑之助、篠原東美子、高木冴子、高野皓代、田島幸子、田中フミ子、中島和子、中村淳子、原田敬子、林田弘、播磨博子、福永志津子、船越エミ子、宮川登志子、宮崎

美智子、村上アイ子、村上エミカ、村上エミ子、村上キヨエ、村上シゲ子、森山美代子、山口慶子、山崎三枝子、山部イキエ、湯川玲子、横山幸治、吉嗣波津子、吉原京子、吉原満義、池田幸子、河波安重、辻野富佐子、町井裕子、松岡邦子、松岡信子、山本恒子



後田古墳群使用期間

図　　版



(1)　後田古墳群調査前全景



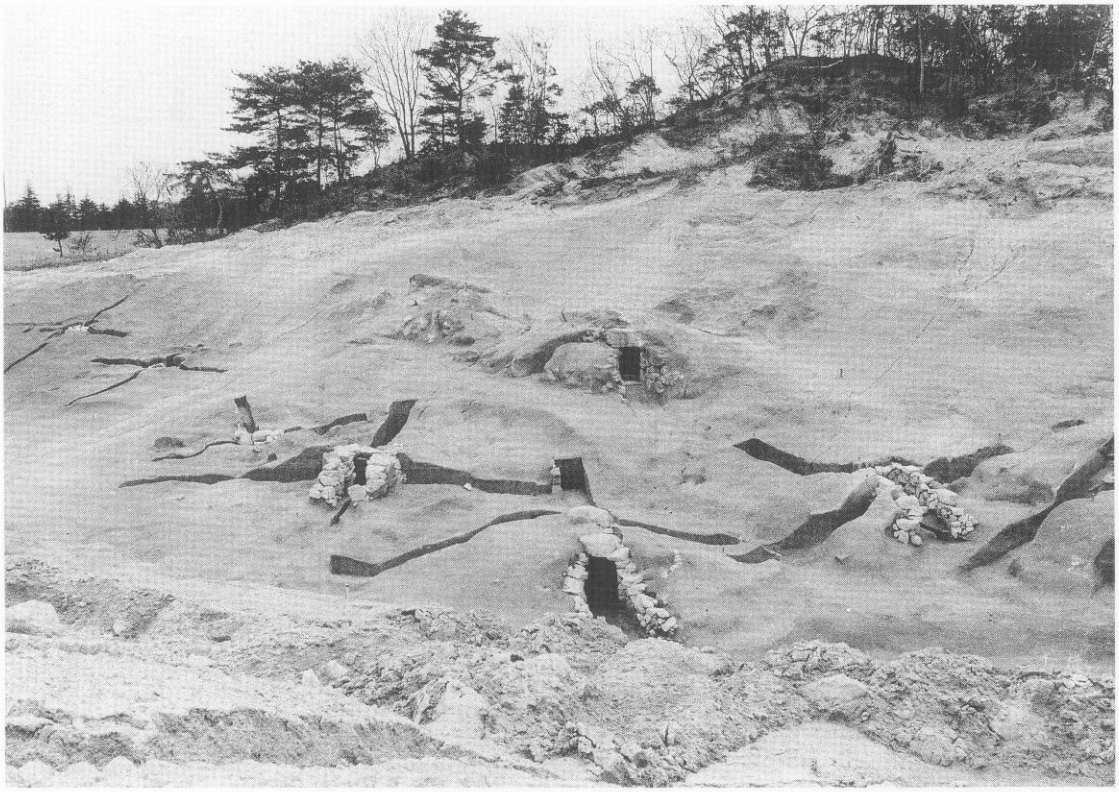
(2)　後田古墳群調査前全景



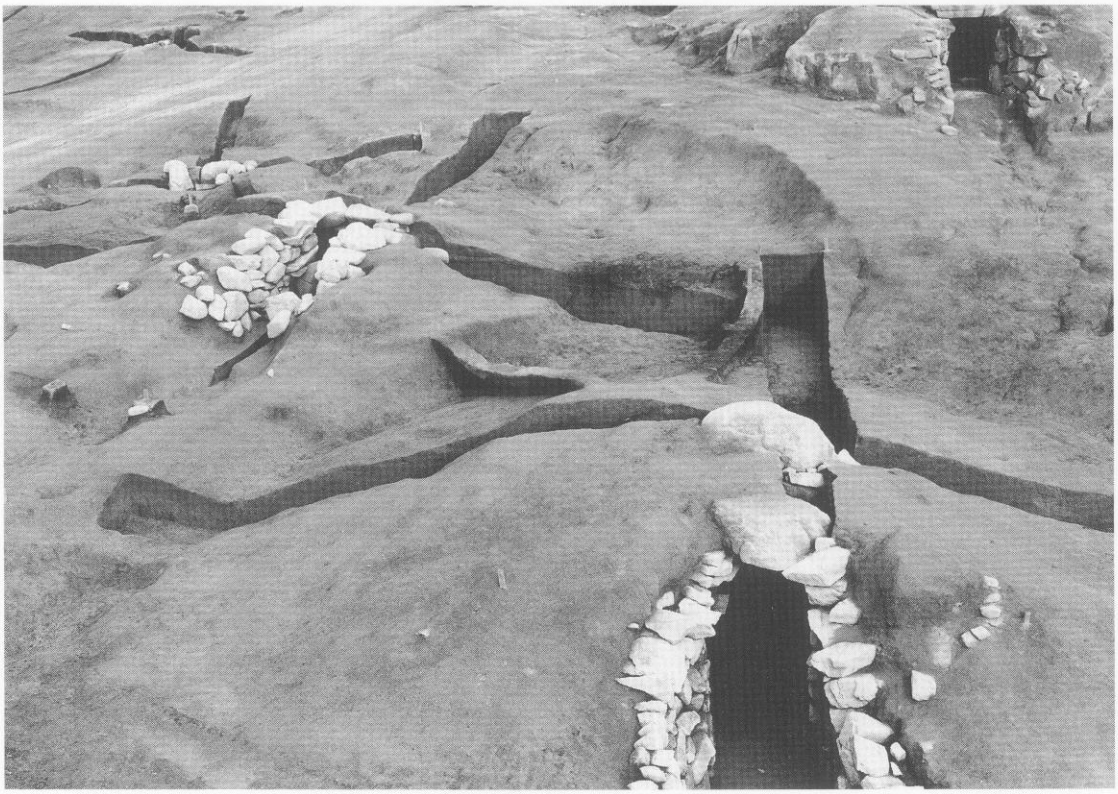
(1)　後田古墳群調査前全景



(2)　後田古墳群第 2 次調査開始時全景



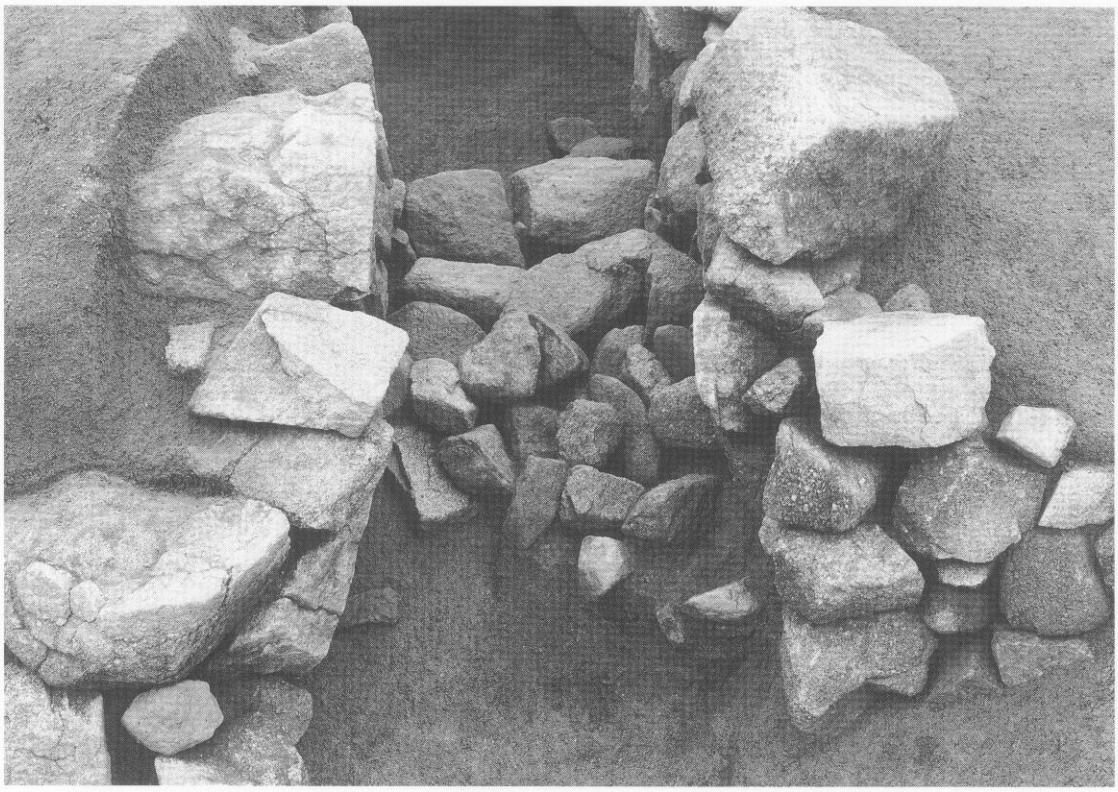
(1)　後田古墳群 1 ～ 9 号墳



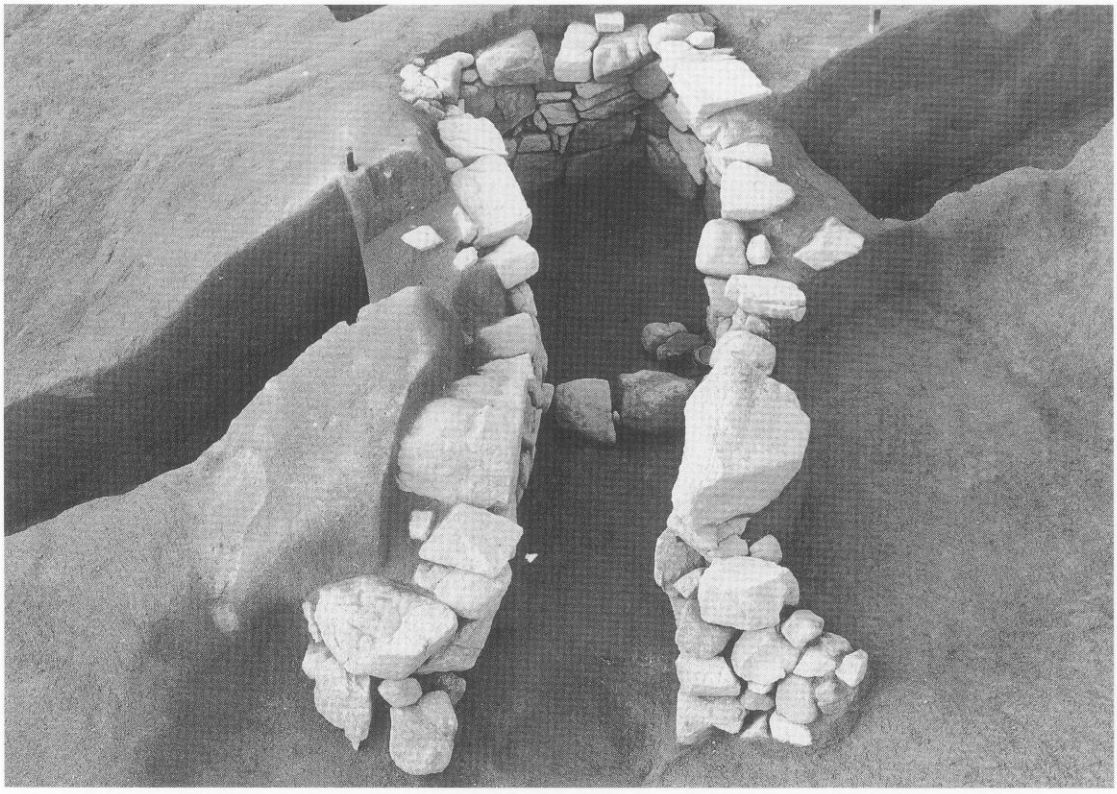
(2)　後田古墳群 5 ～ 8 号墳



(1)　後田 1 号墳閉塞状況全景



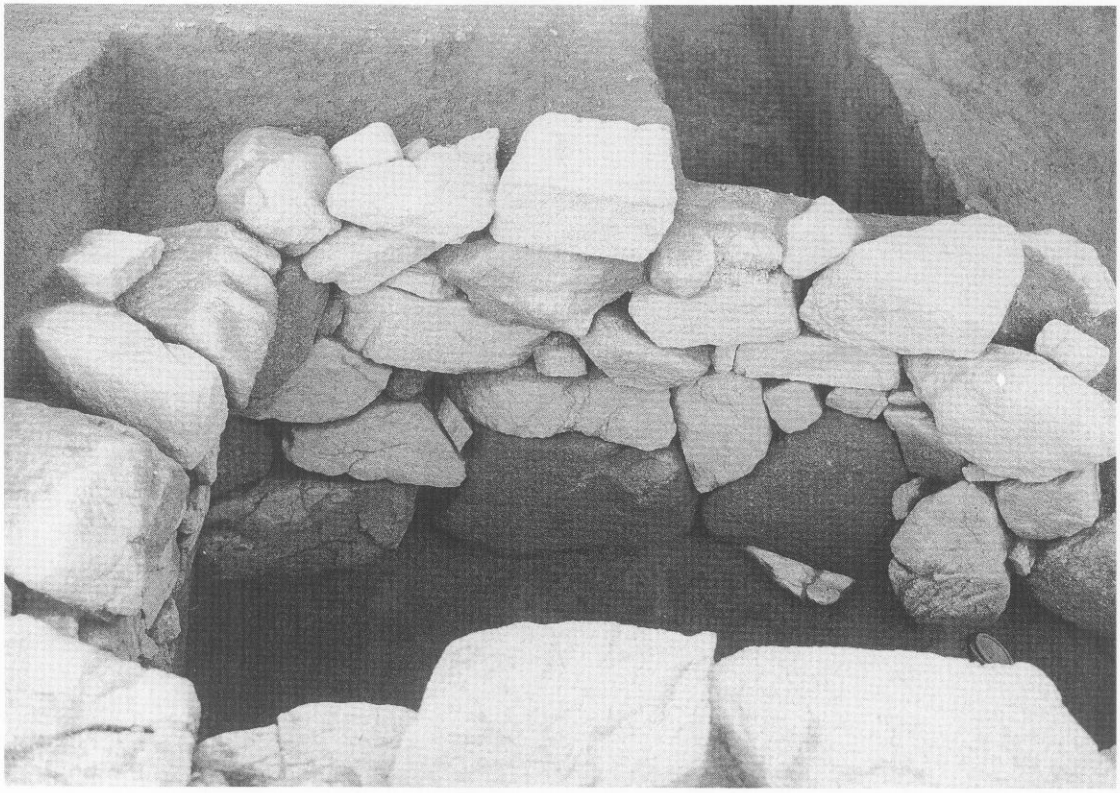
(2)　後田 1 号墳閉塞状況



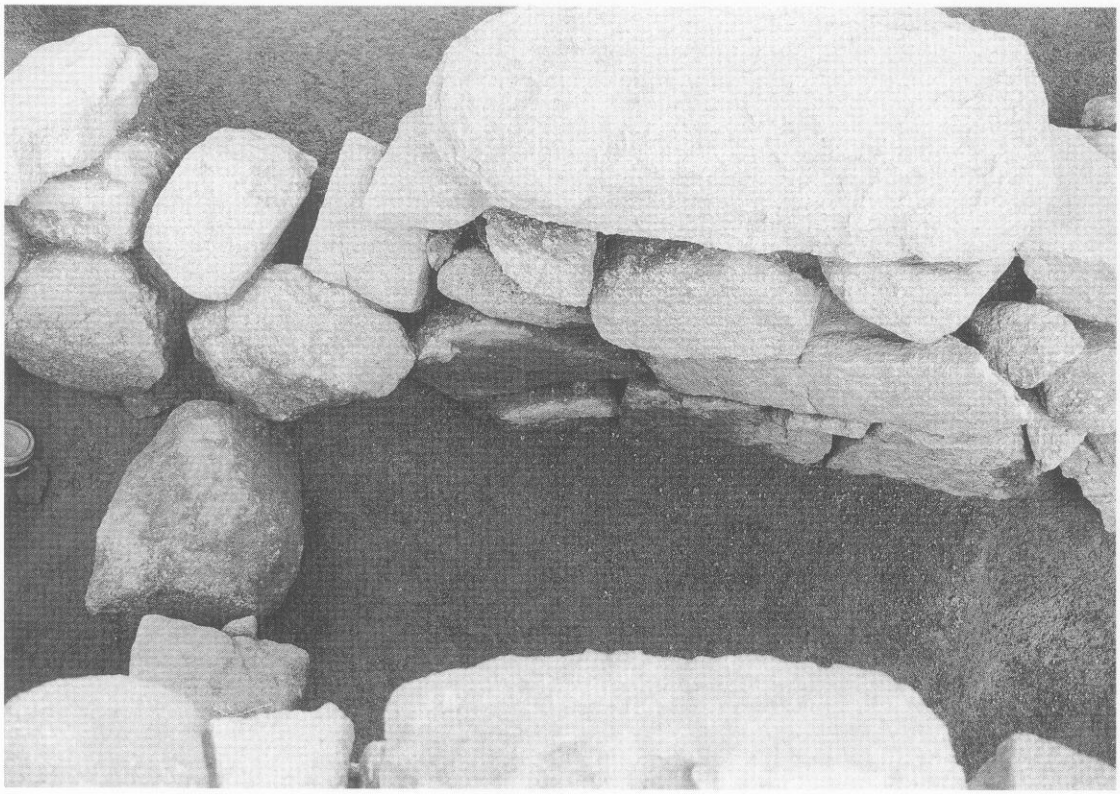
(1)　後田 1 号墳石室全景



(2)　後田 1 号墳石室（墓道より）



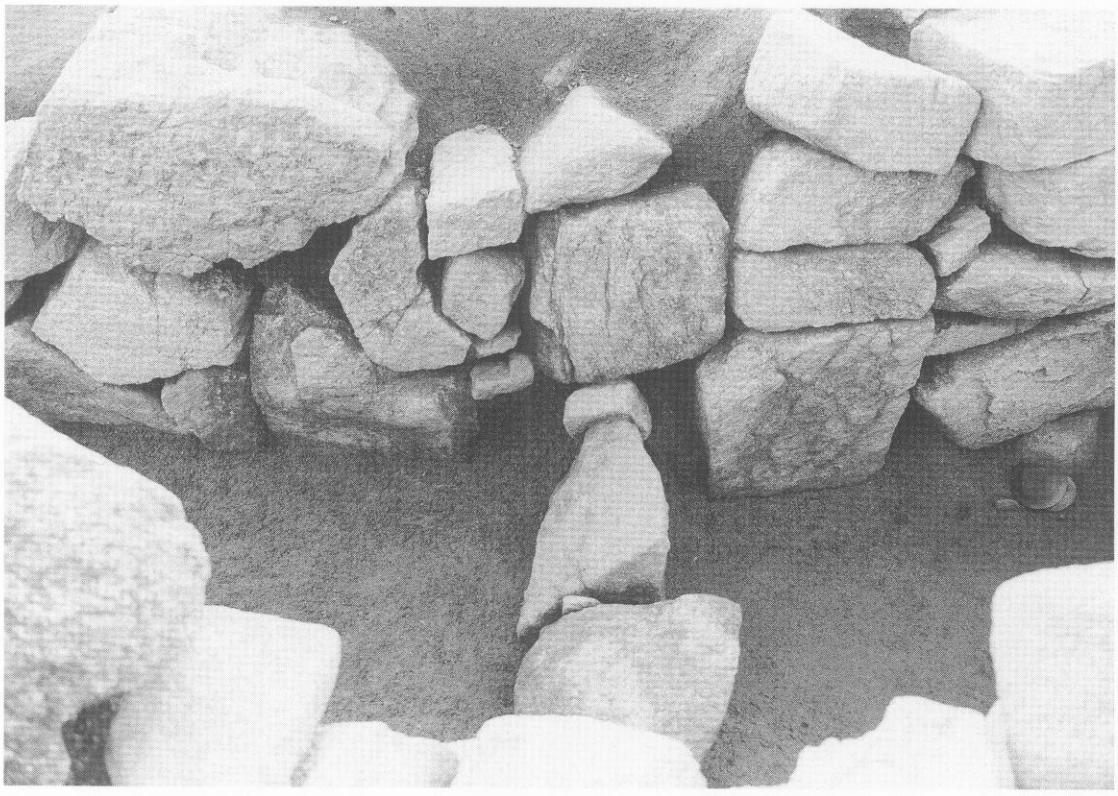
(1)　後田 1 号墳玄室右側壁



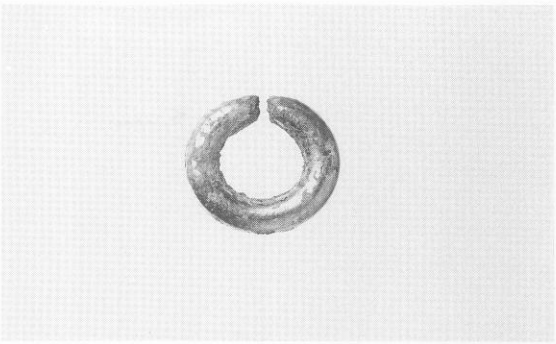
(2)　後田 1 号墳羨道右側壁

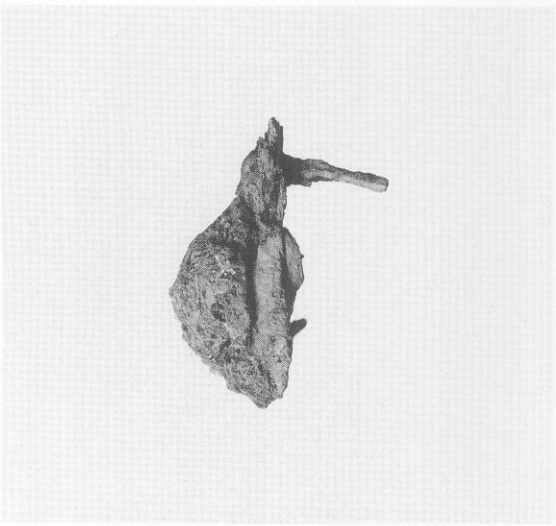


(1)　後田 1 号墳玄室左側壁



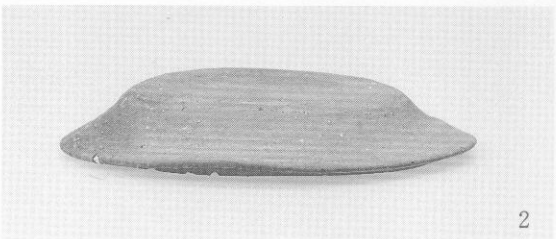
(2)　後田 1 号墳羨道左側壁



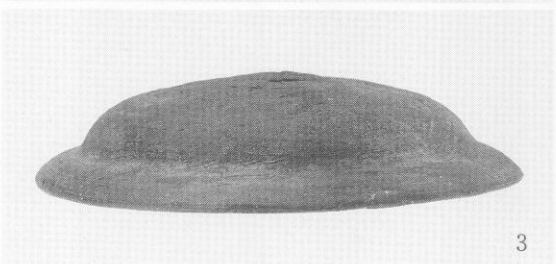




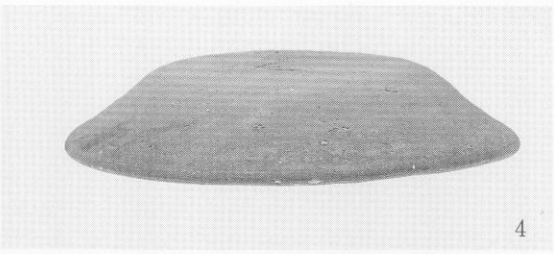
1



2



3



4



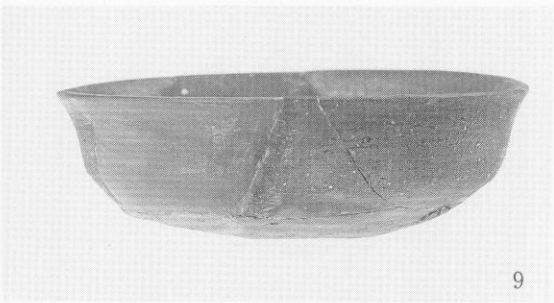
5



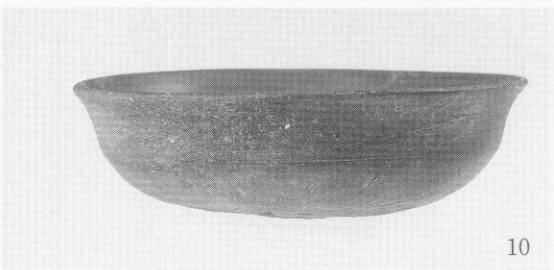
7



8

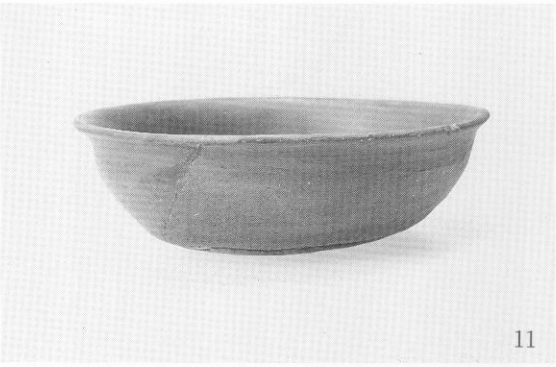


9



10

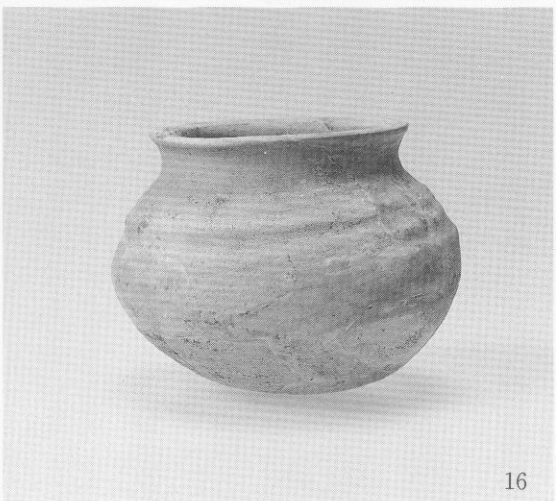
後田 1 号墳出土装身具・鉄器・土器

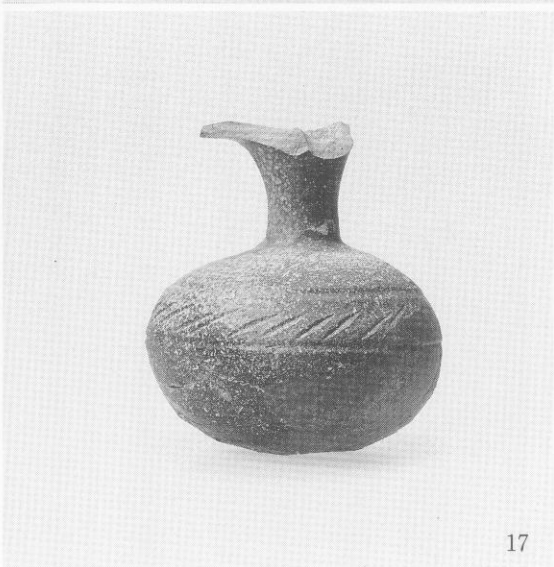

11


12


13


15

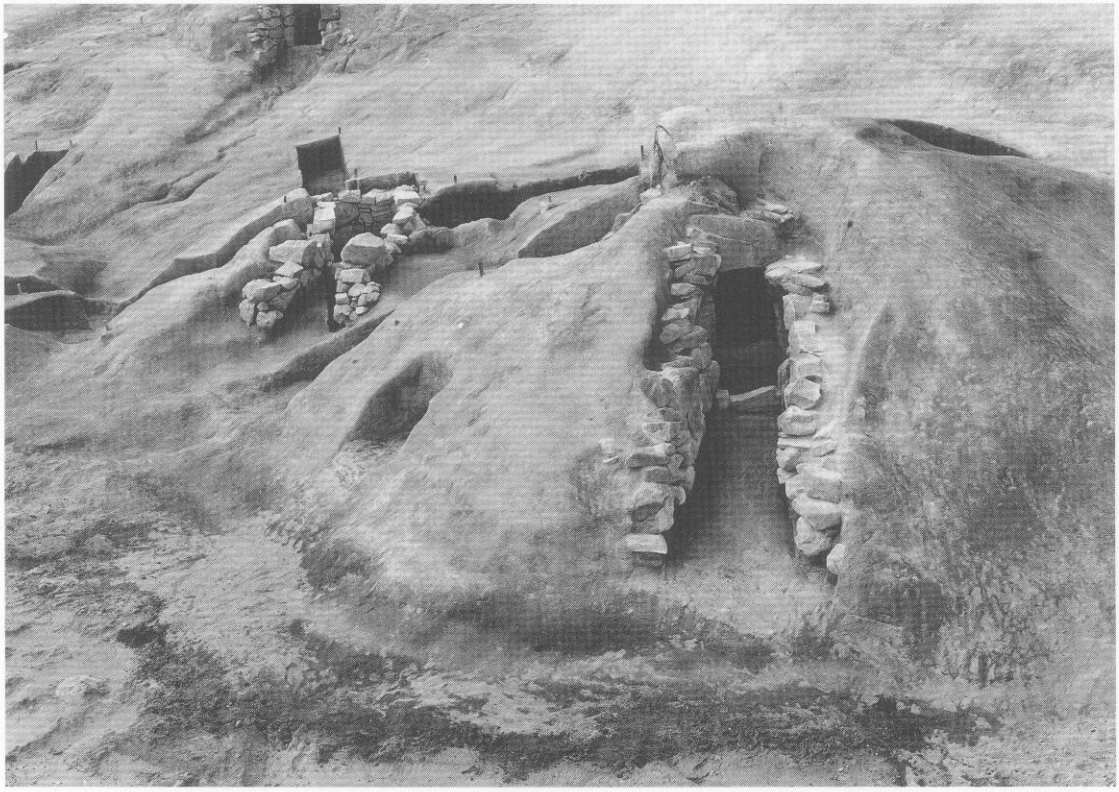

16


17

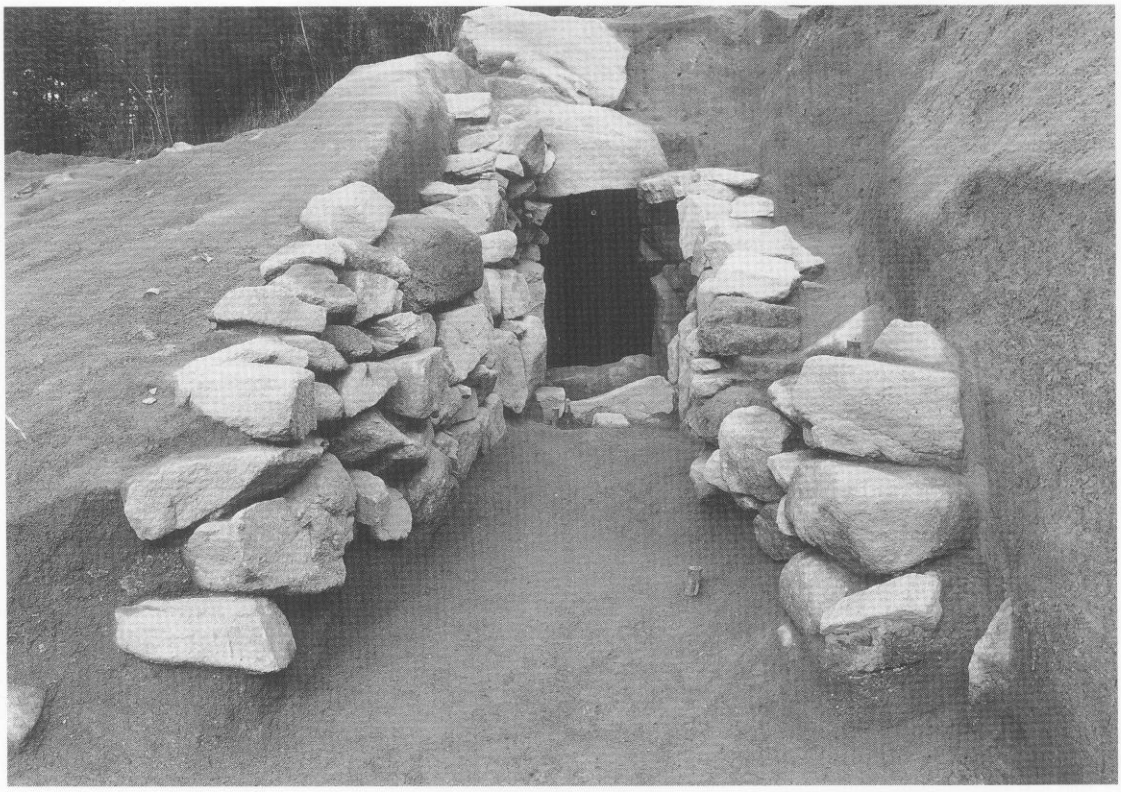
後田 1 号墳出土土器



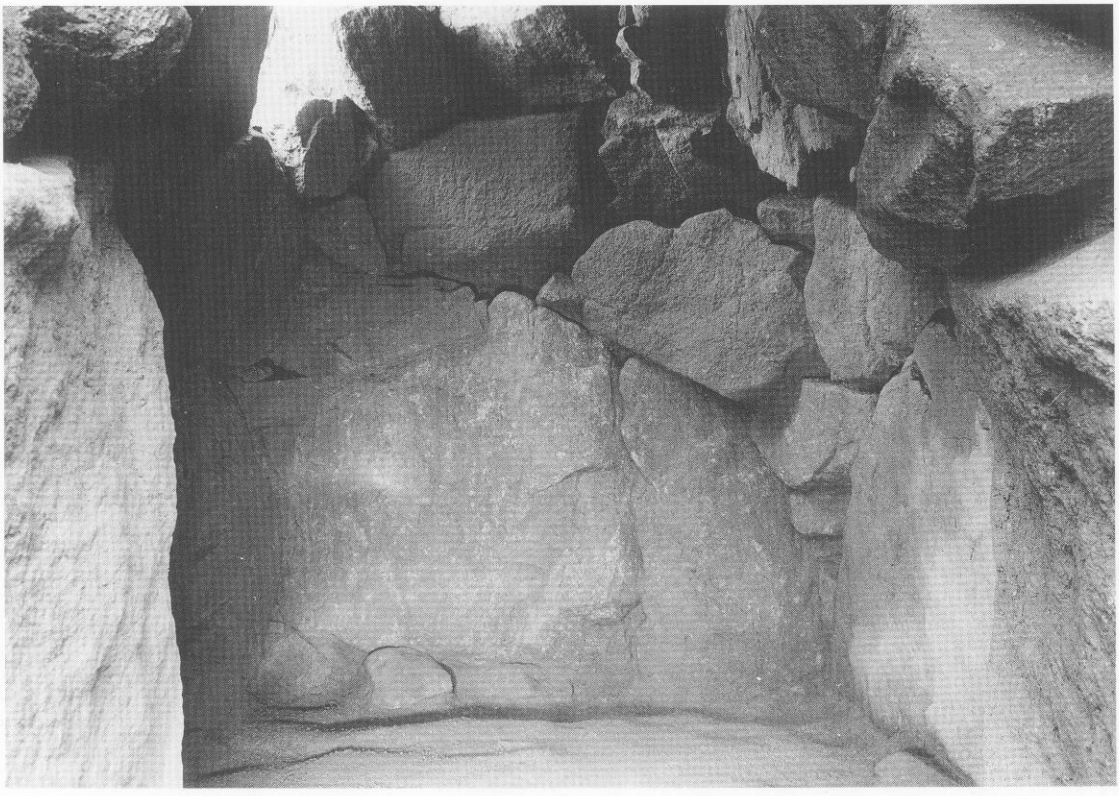
(1)　後田 2 号墳全景（第 1 次調査時）



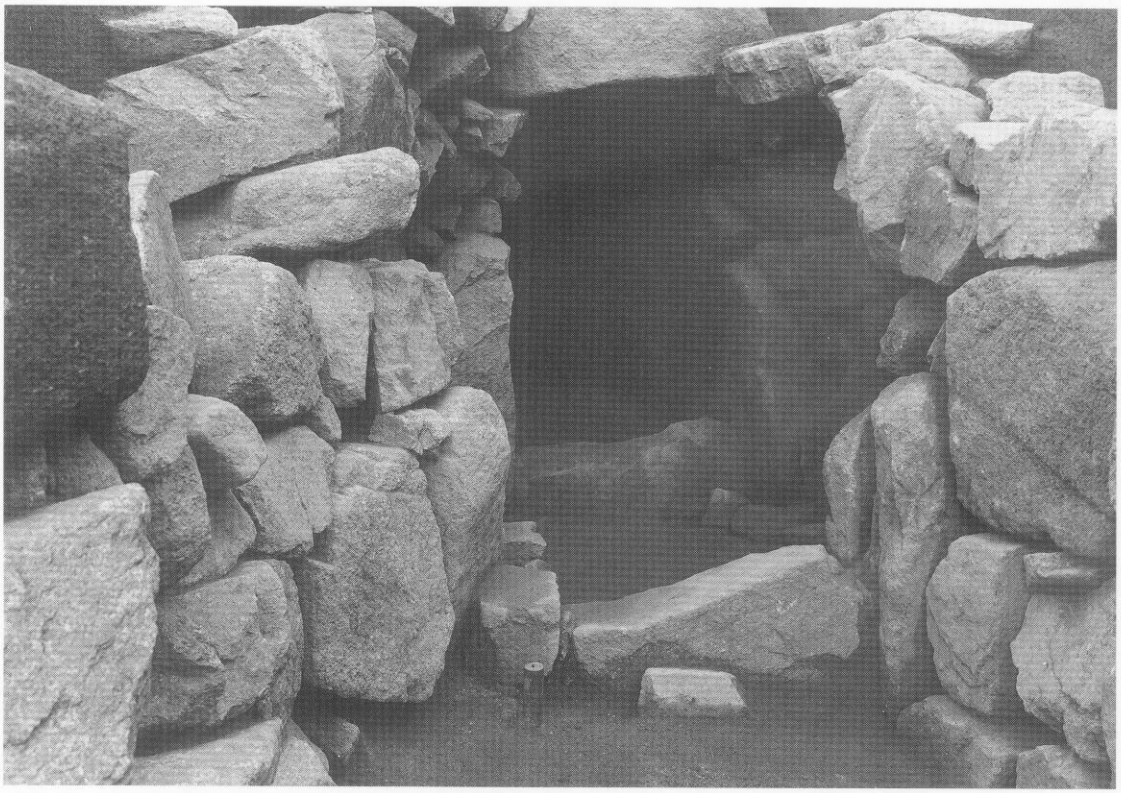
(2)　後田 2 号墳全景（第 2 次調査時）



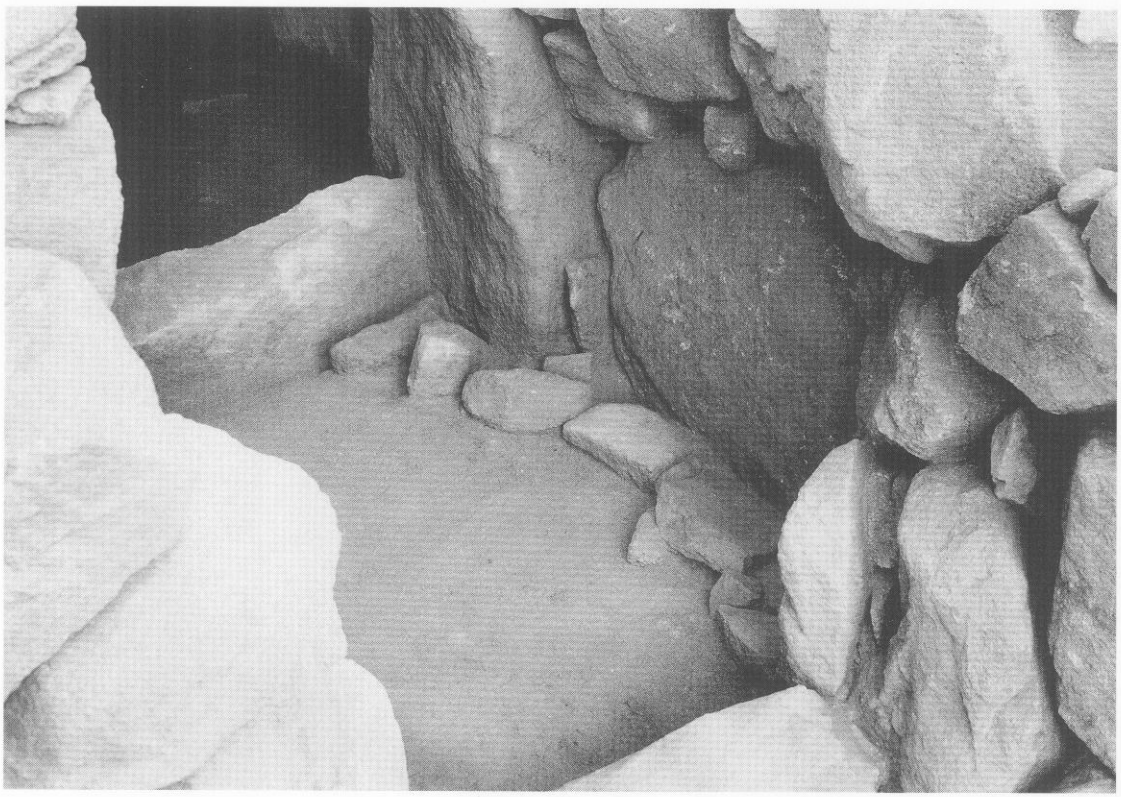
(1)　後田２号墳（墓道側より）



(2)　後田２号墳玄室奥壁



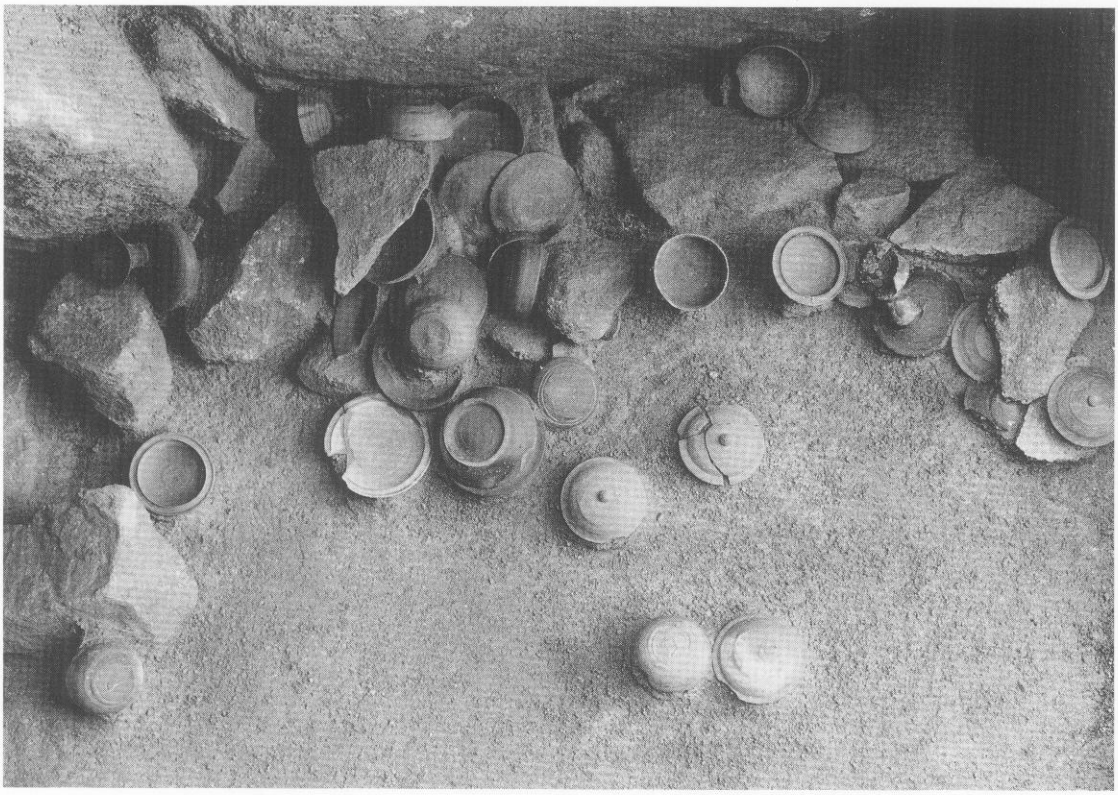
(1)　後田 2 号墳前室



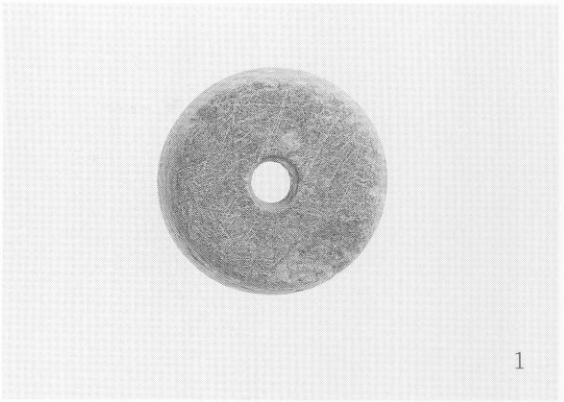
(2)　後田 2 号墳前室

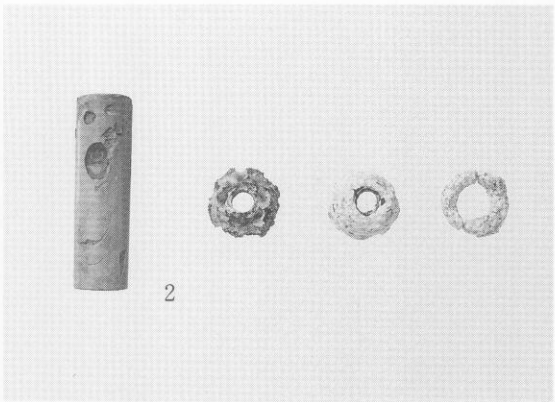


(1)　後田 2 号墳前室遺物出土状態

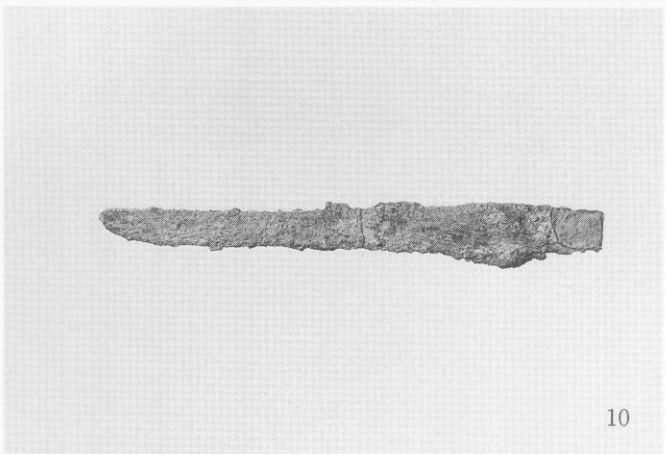


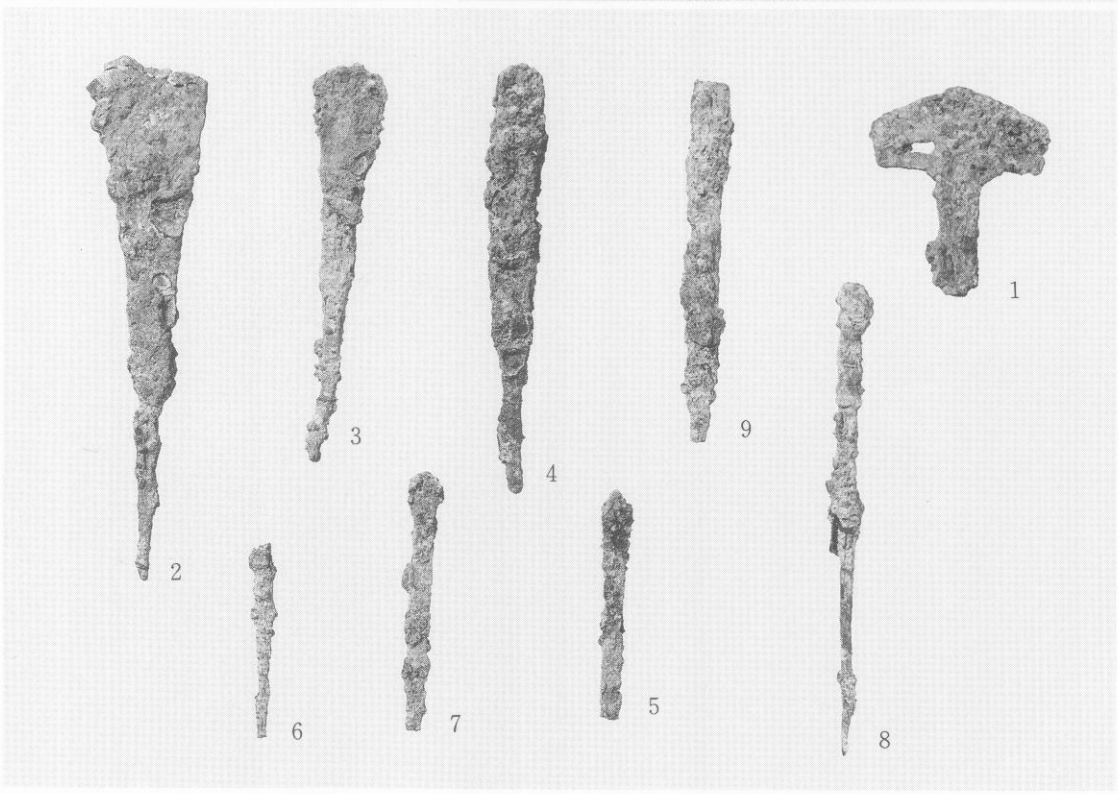
(2)　後田 2 号墳前室遺物出土状態


1


2

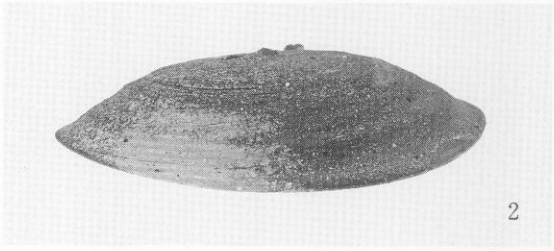

3

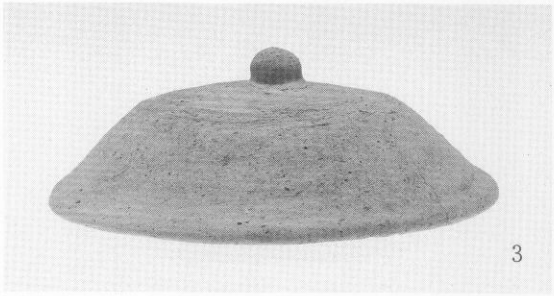

10

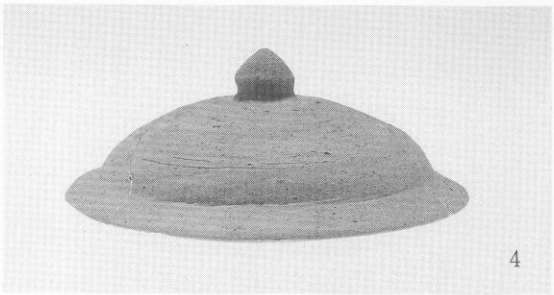


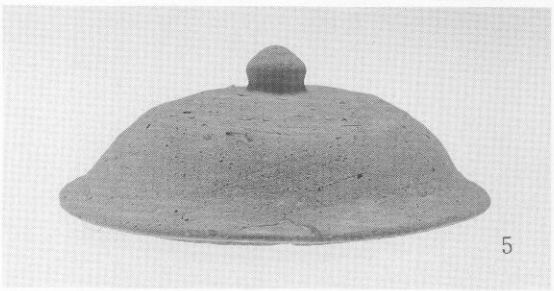
後田２号墳出土装身具・鉄器

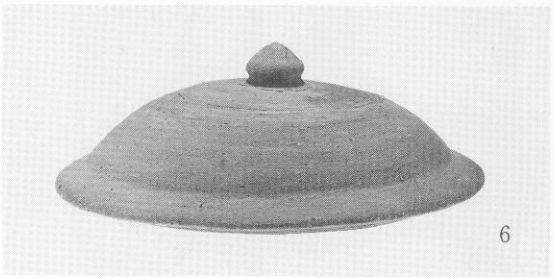

1

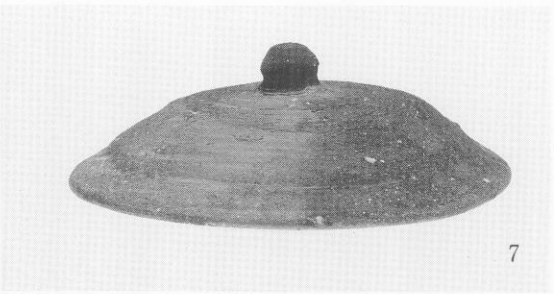

2


3

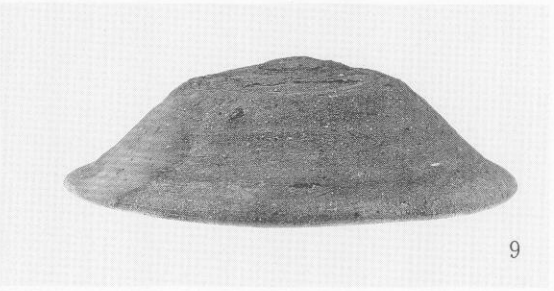

4

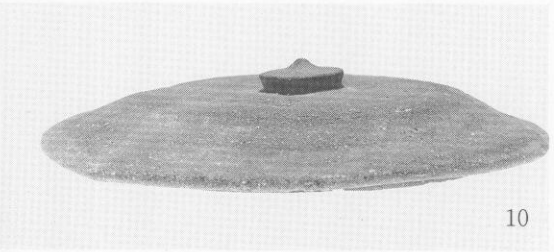

5

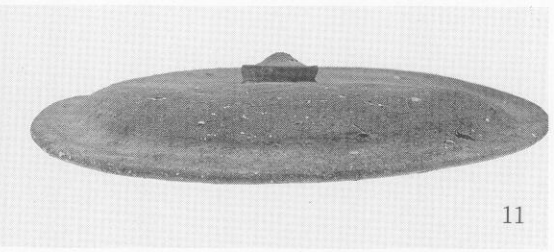

6

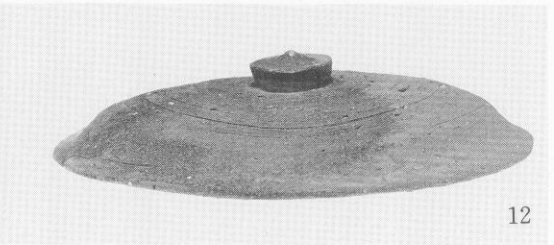

7


8

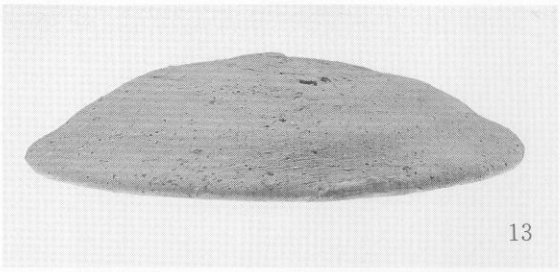

9


10


11

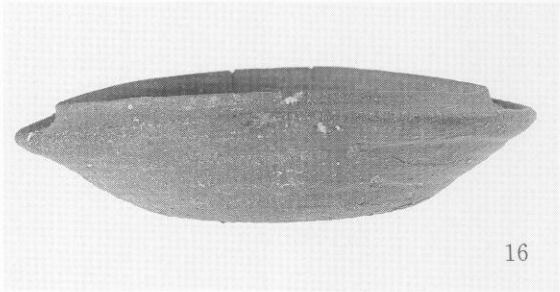

12

後田２号墳出土土器

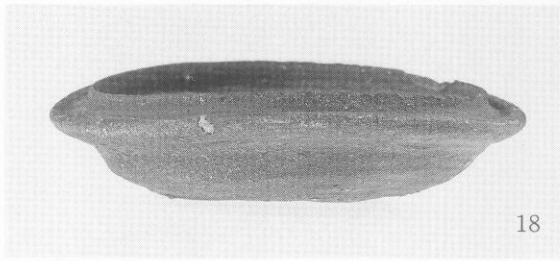

13

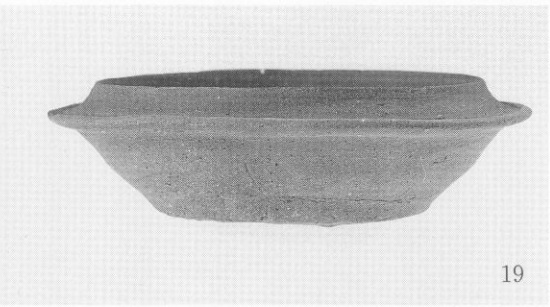

14

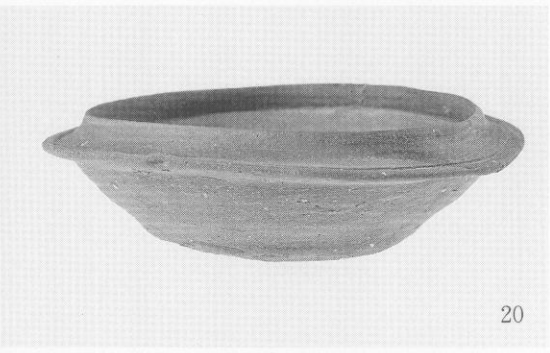

15

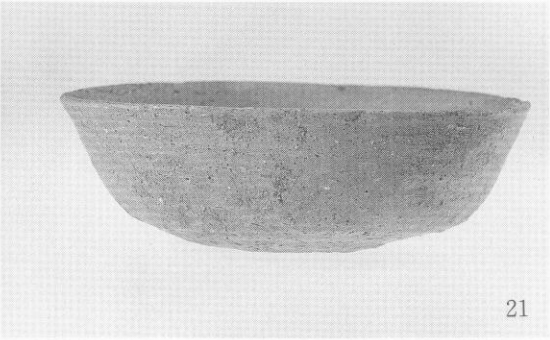

16


17


18


19


20


21


22


23

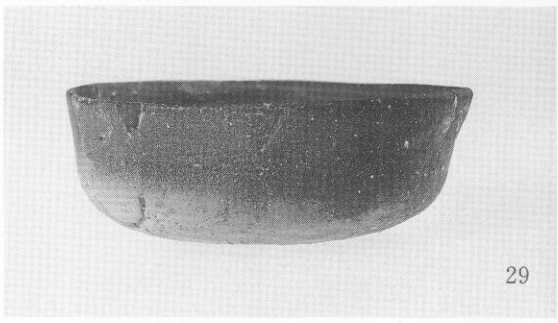
後田２号墳出土土器


24


25


27


28


29


30

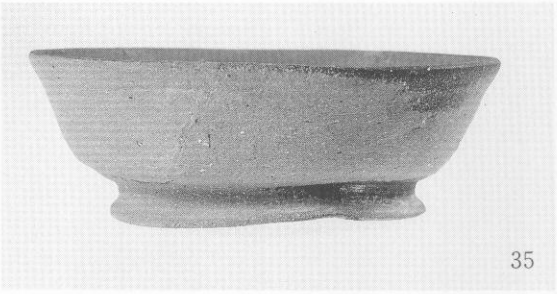

31


32


33


34

後田２号墳出土土器


35


36

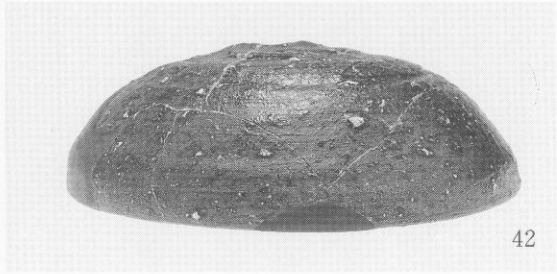

37


38

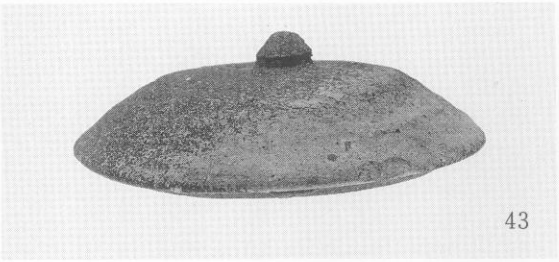

39

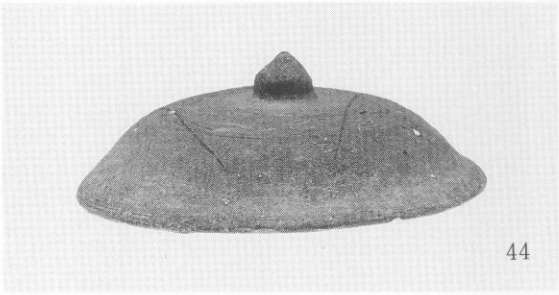

40


41


42

後田 2 号墳出土土器

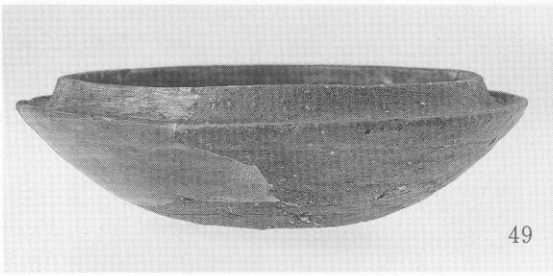

43


44


46

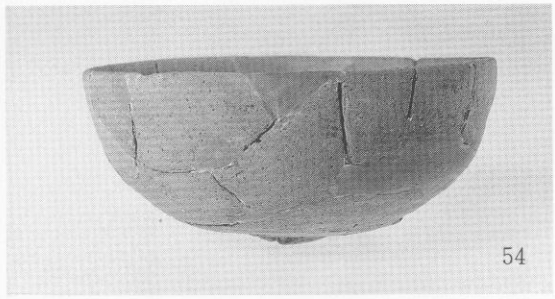

47

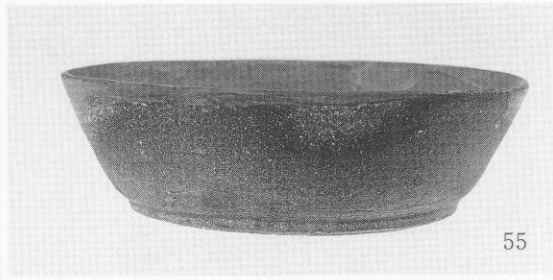

48

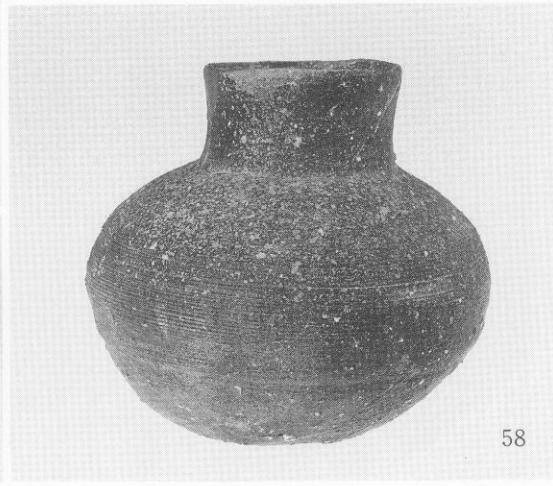

49


52

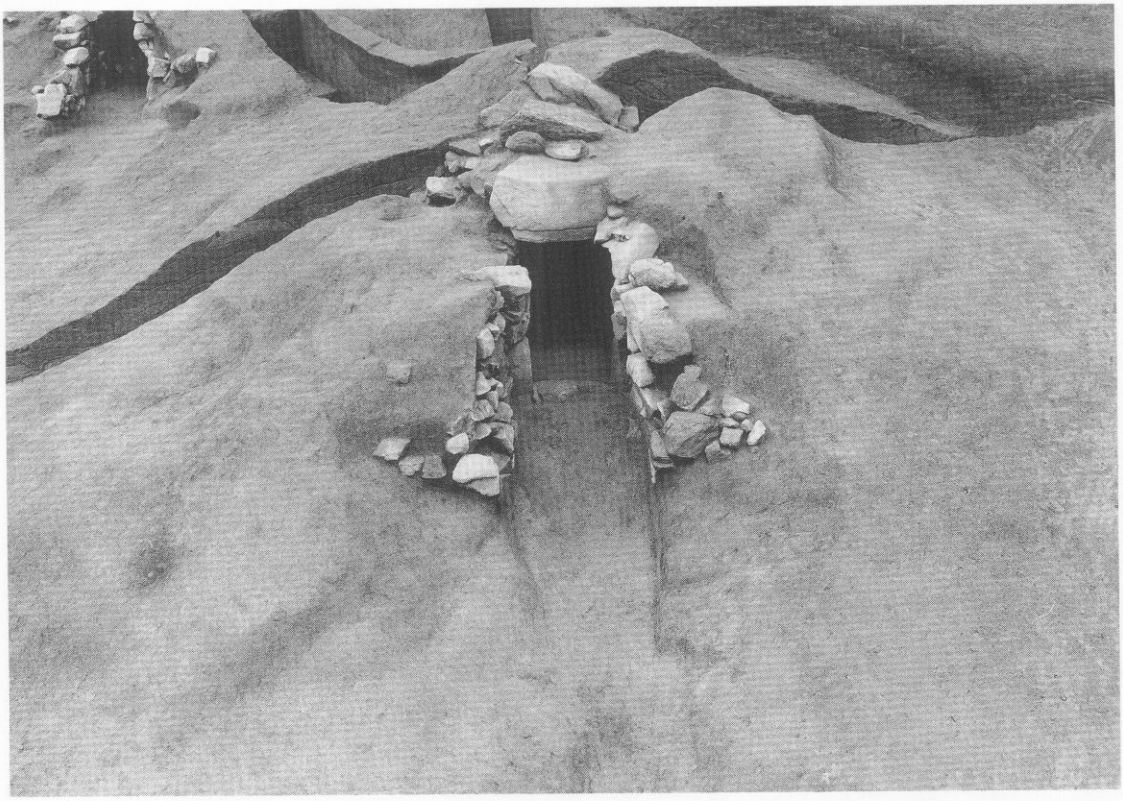

53


54

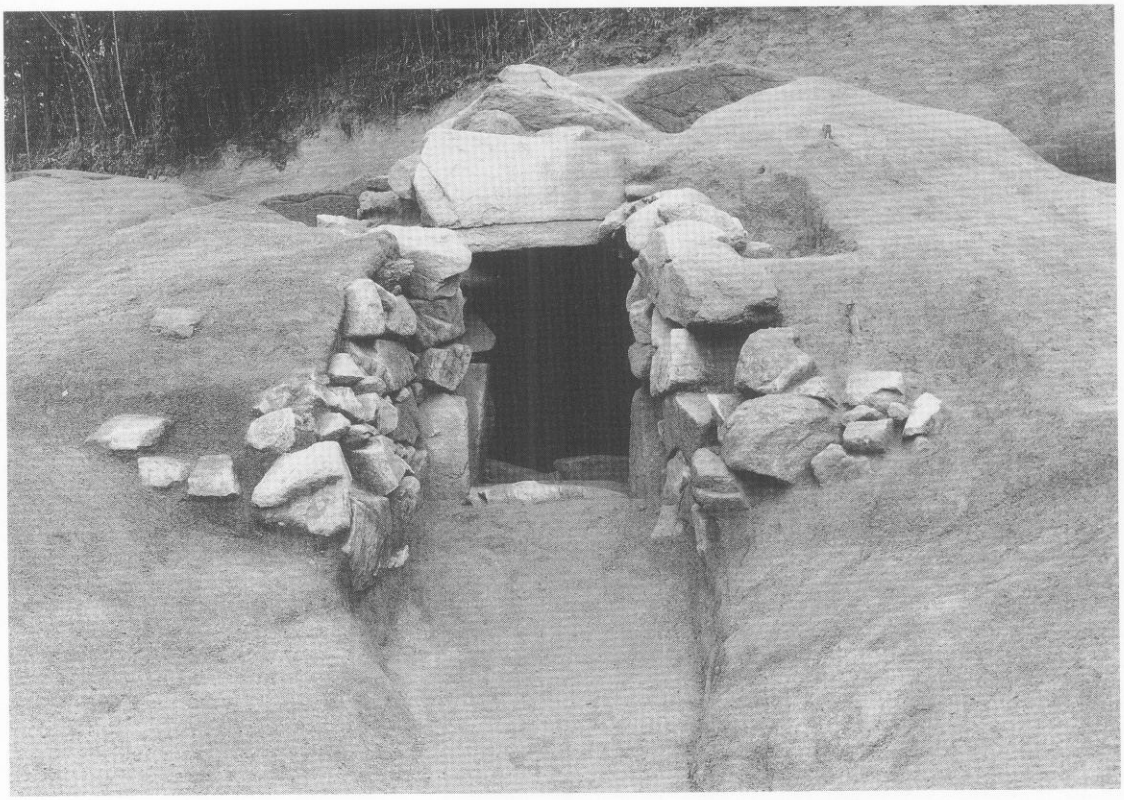

55


58

後田 2 号墳出土土器



(1)　後田 3 号墳全景



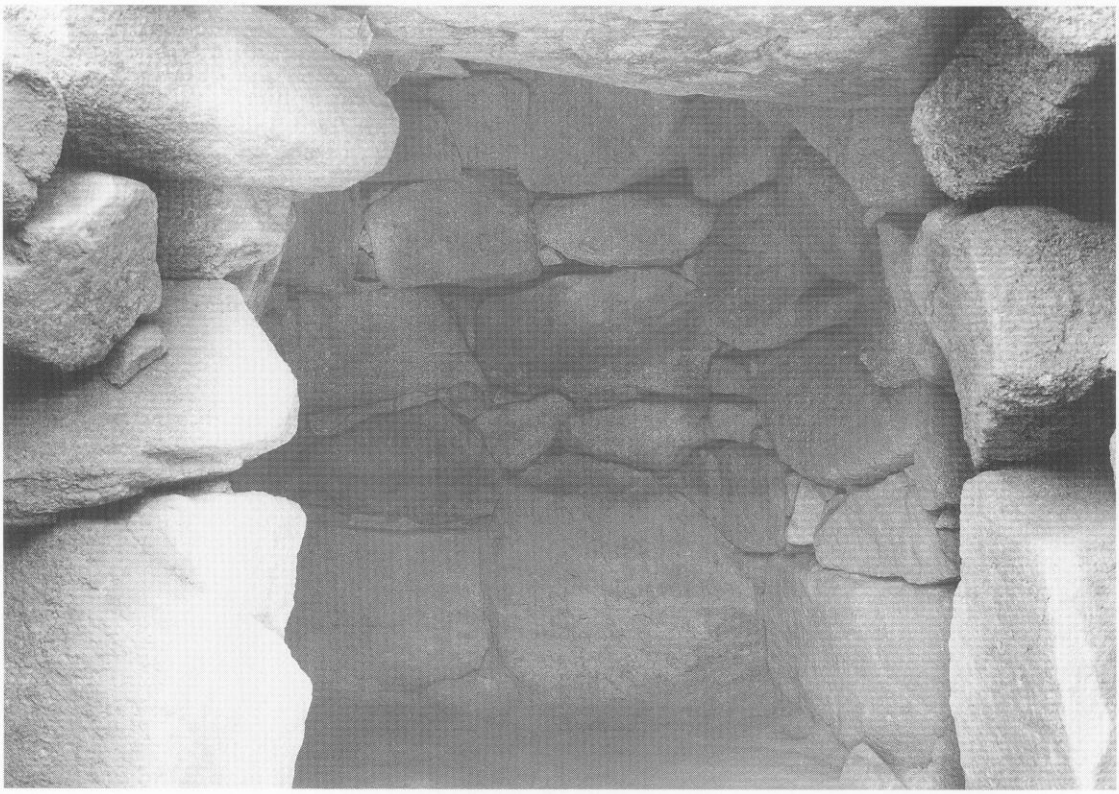
(2)　後田 3 号墳全景（墓道より）



(1)　後田３号墳（西側より）



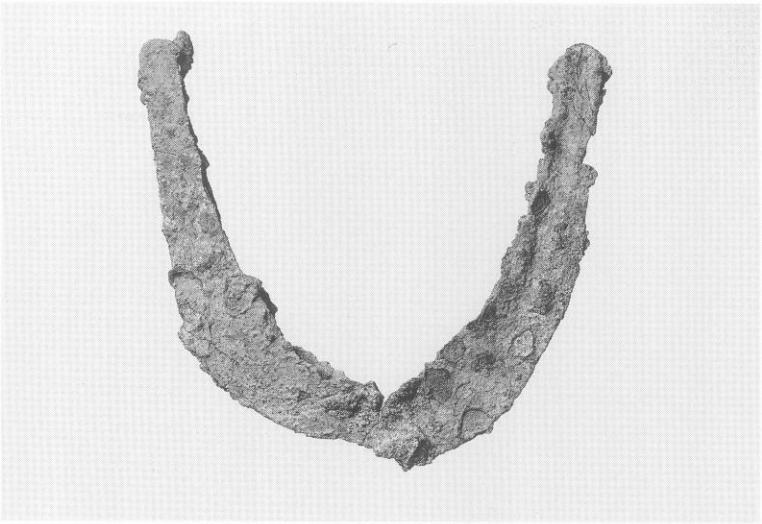
(2)　後田３号墳羨道左側壁

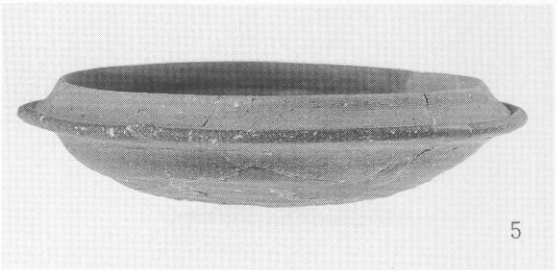


(1)　後田 3 号墳石室奥壁



(2)　後田 3 号墳石室奥壁細部



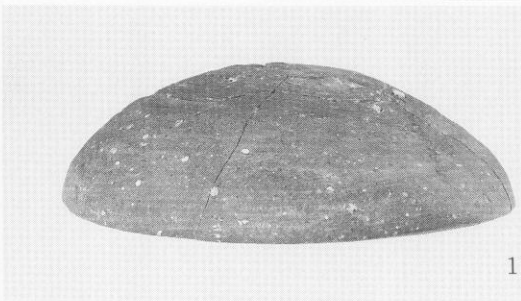

5


6

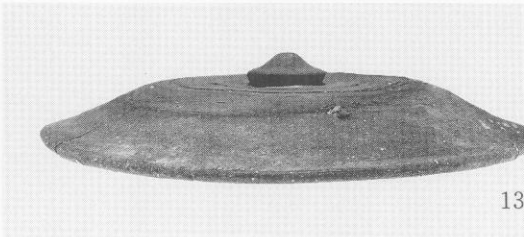

7


8

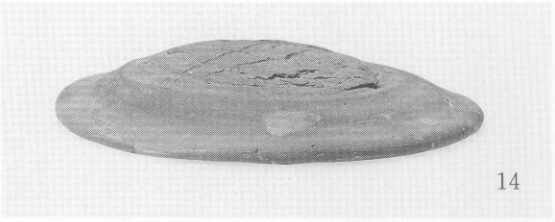

10

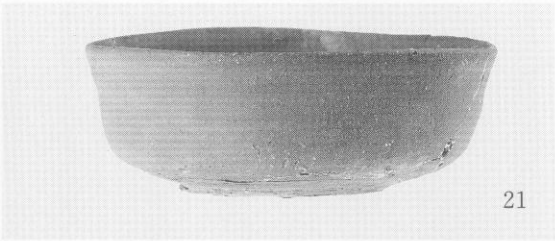

11

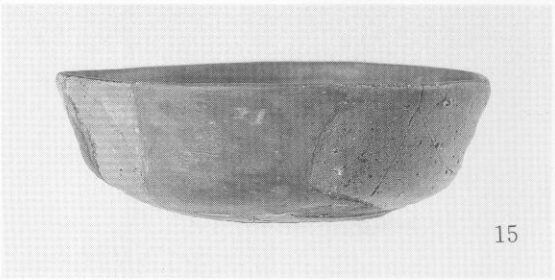

12


13

後田 3 号墳出土鉄器・土器

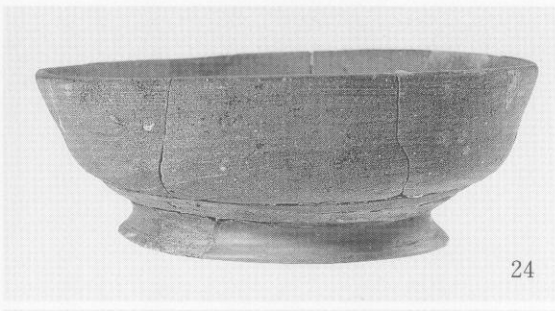

14


21


15


23


16


24

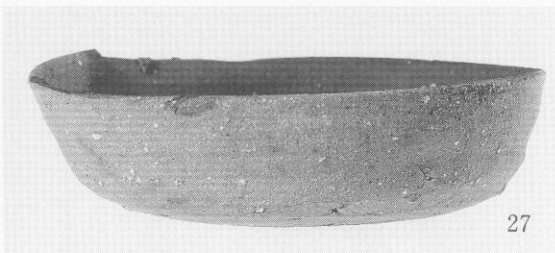

18


25


19


26


20


27

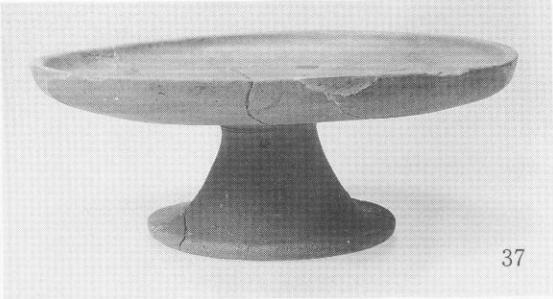
後田 3 号墳出土土器


32

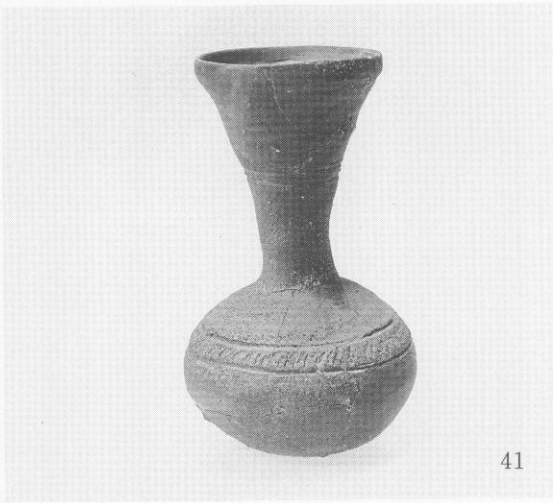

33


34


35


37


40

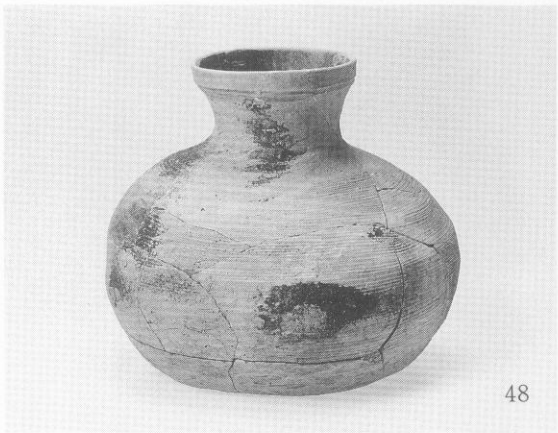

41


42

後田 3 号墳出土土器


43


45


48


49

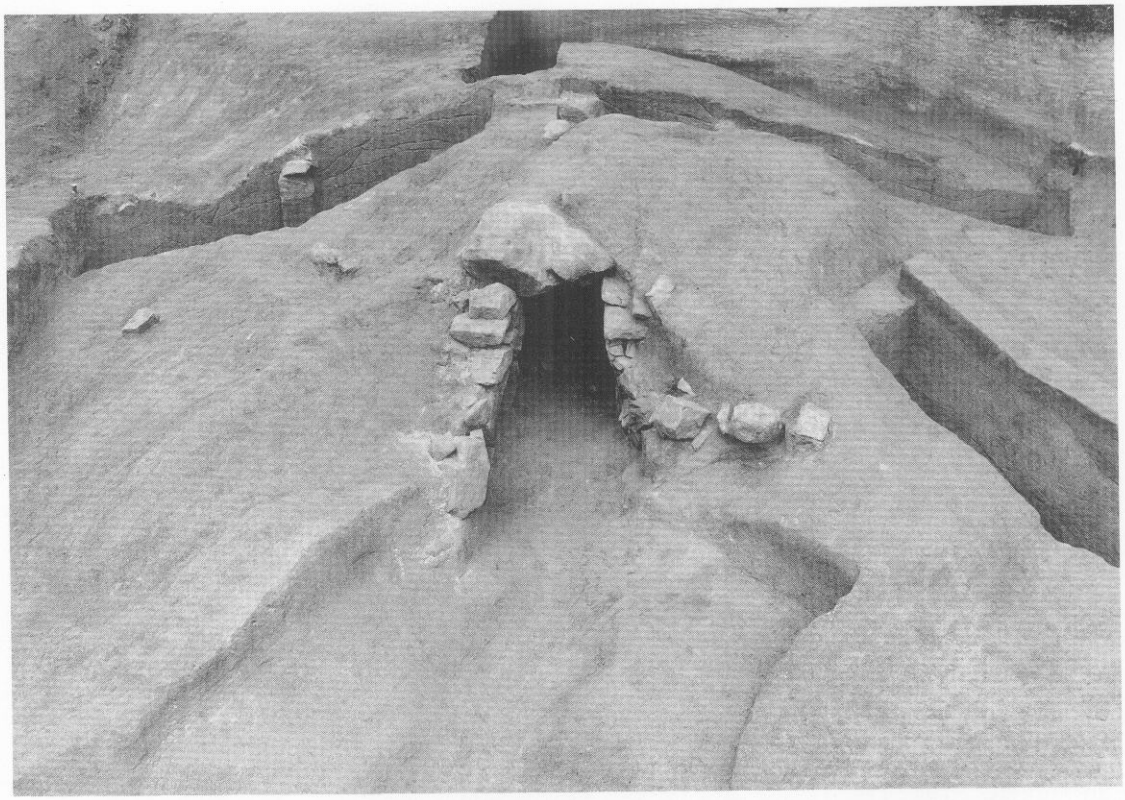

50


51

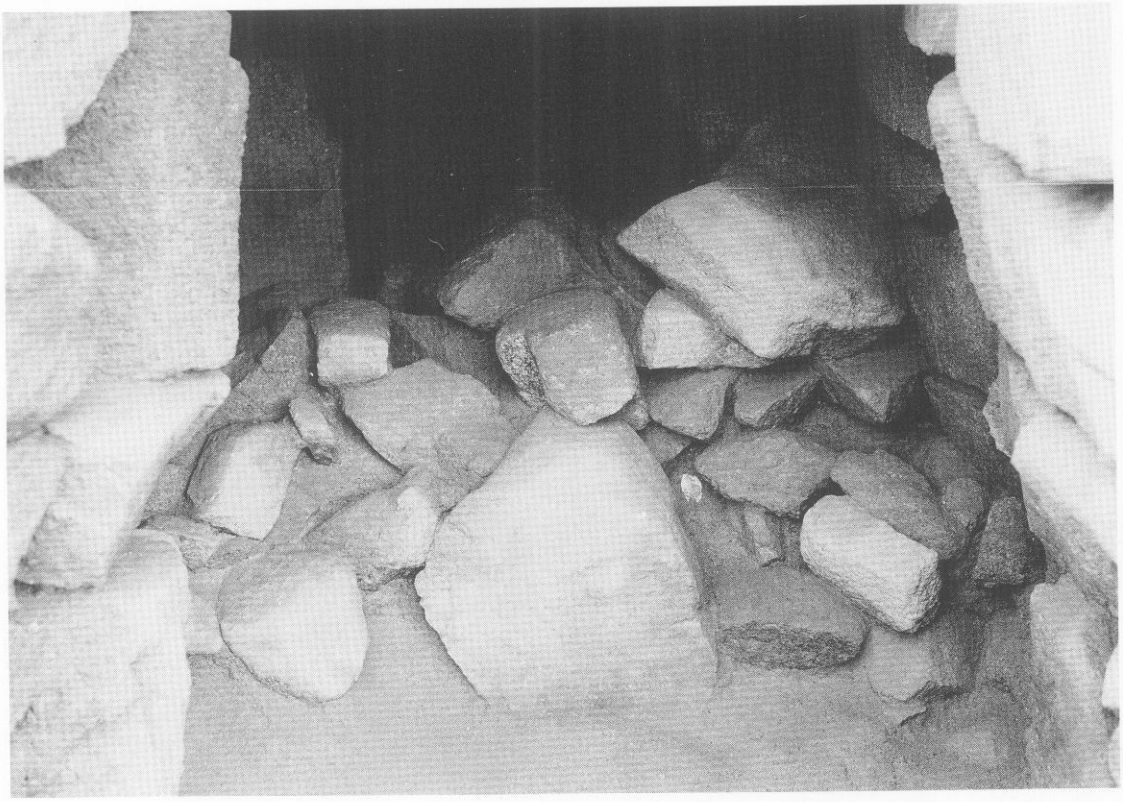

52


53

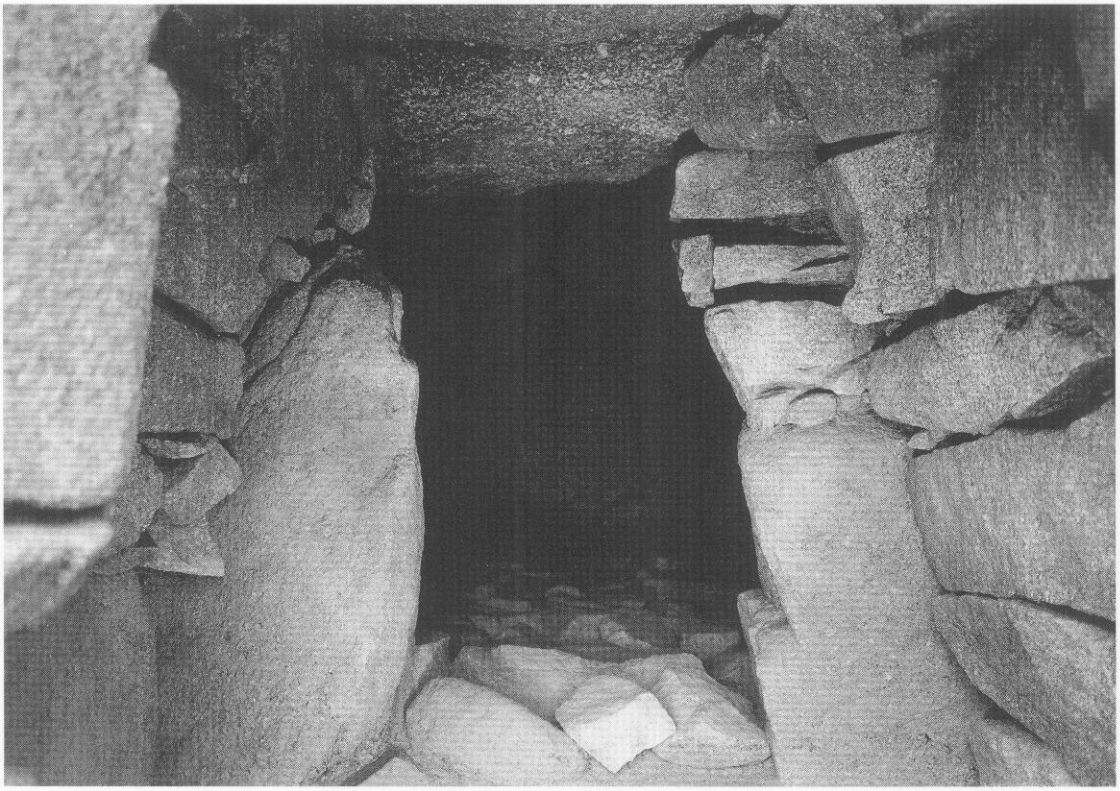
後田 3 号墳出土土器



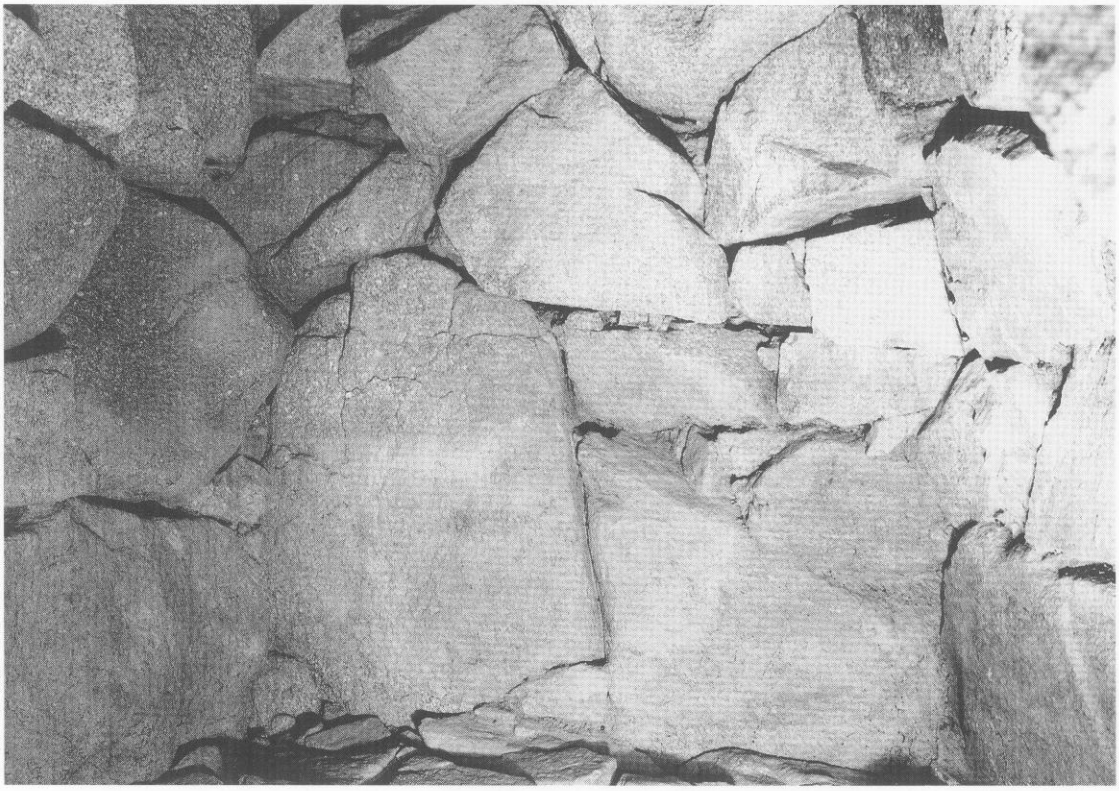
(1)　後田 4 号墳全景



(2)　後田 4 号墳閉塞状況



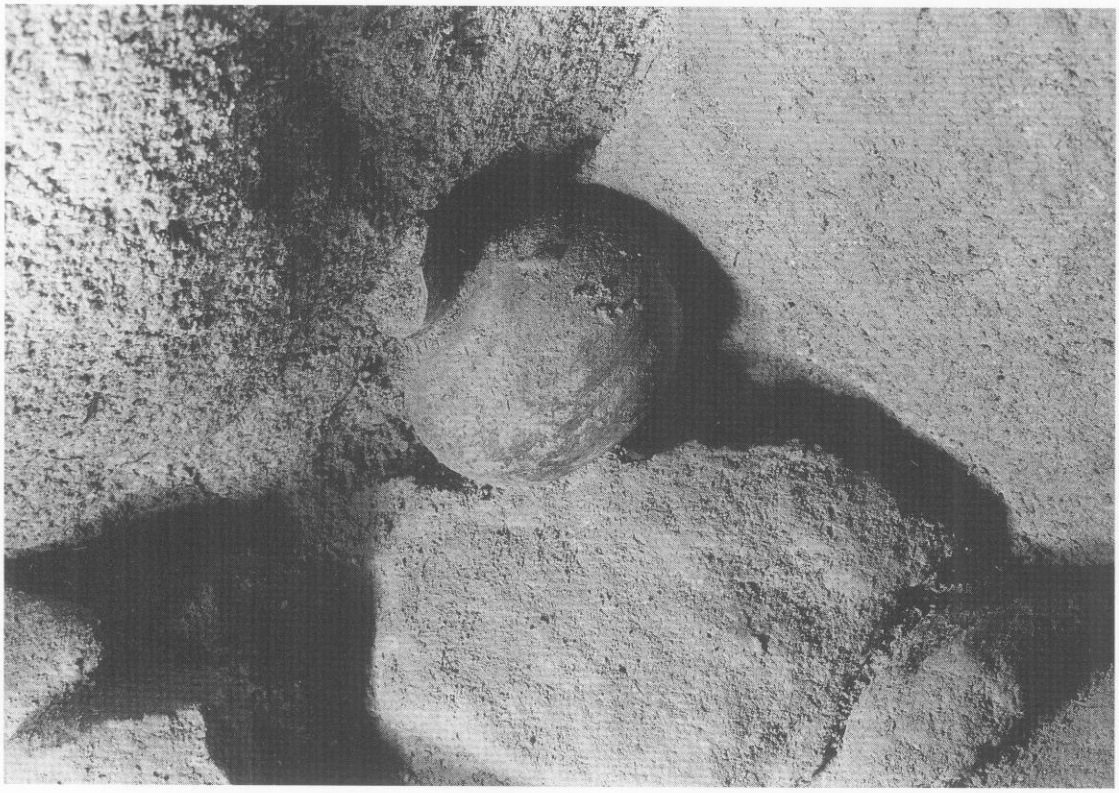
(1)　後田 4 号墳玄室



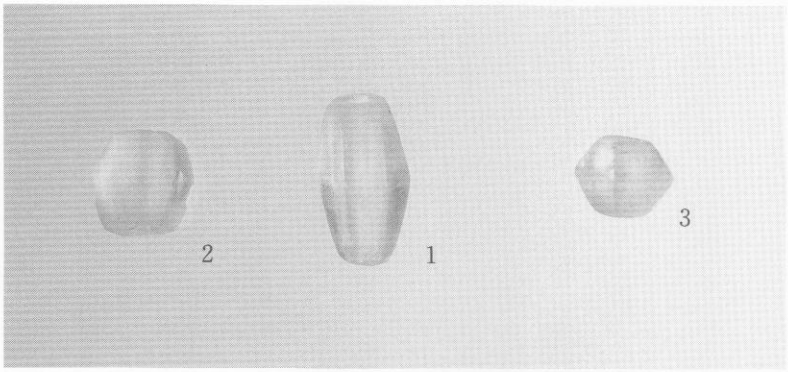
(2)　後田 4 号墳玄室奥壁

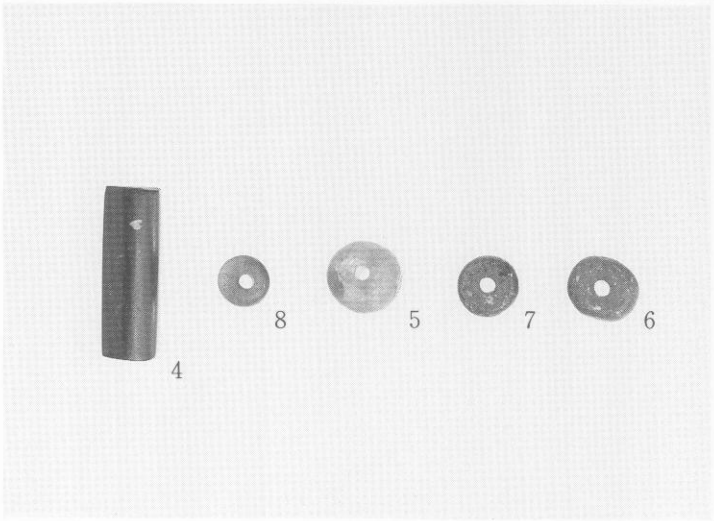


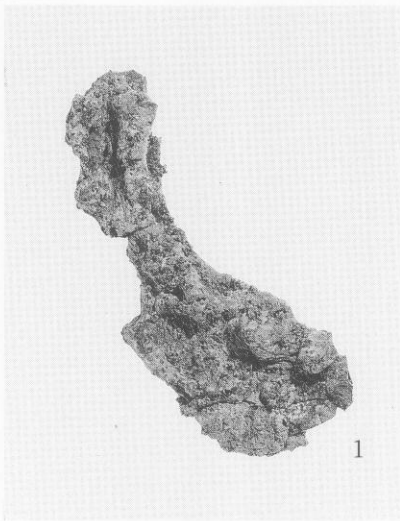
(1)　後田 4 号墳羨道左側壁



(2)　後田 4 号墳玄室遺物出土状態

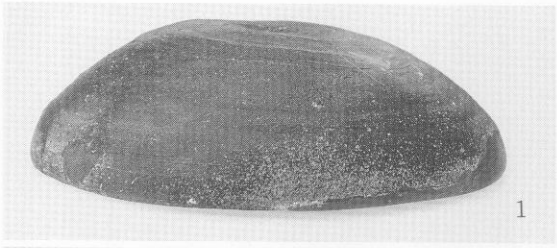


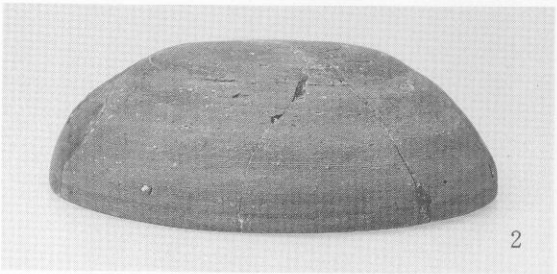


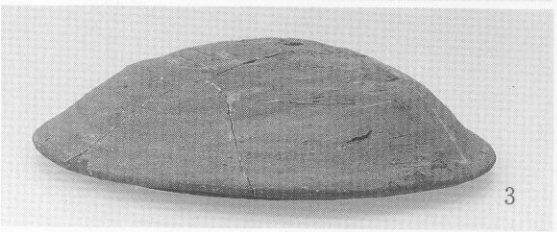




後田4号墳出土装身具・鉄器

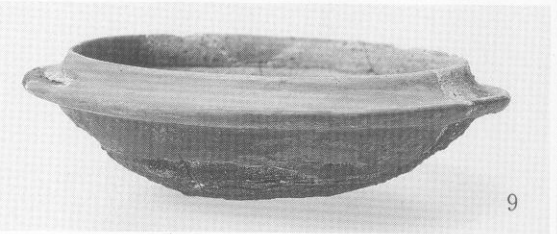

1


2

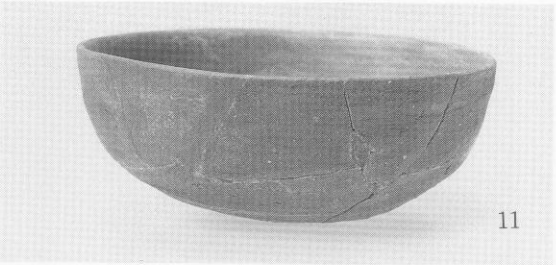

3

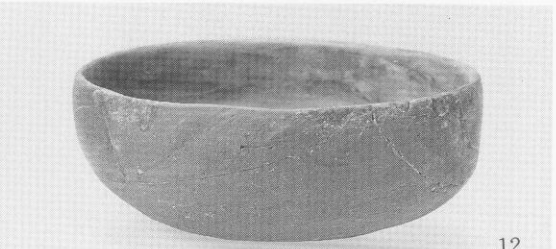

4

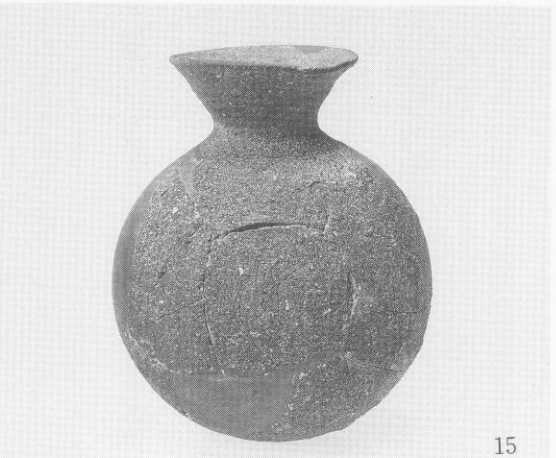

5

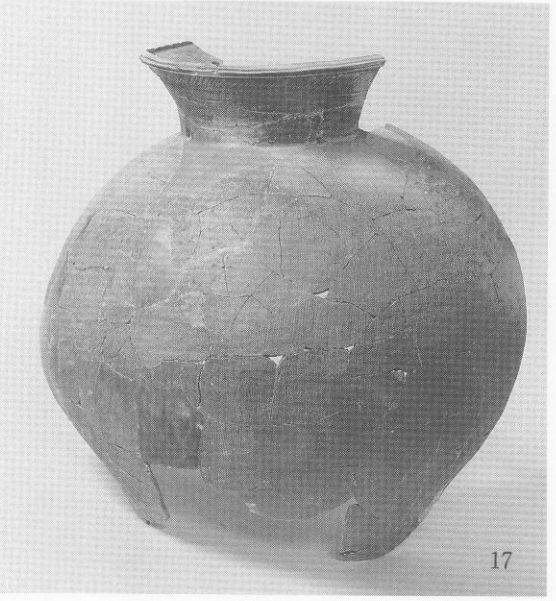

9


10

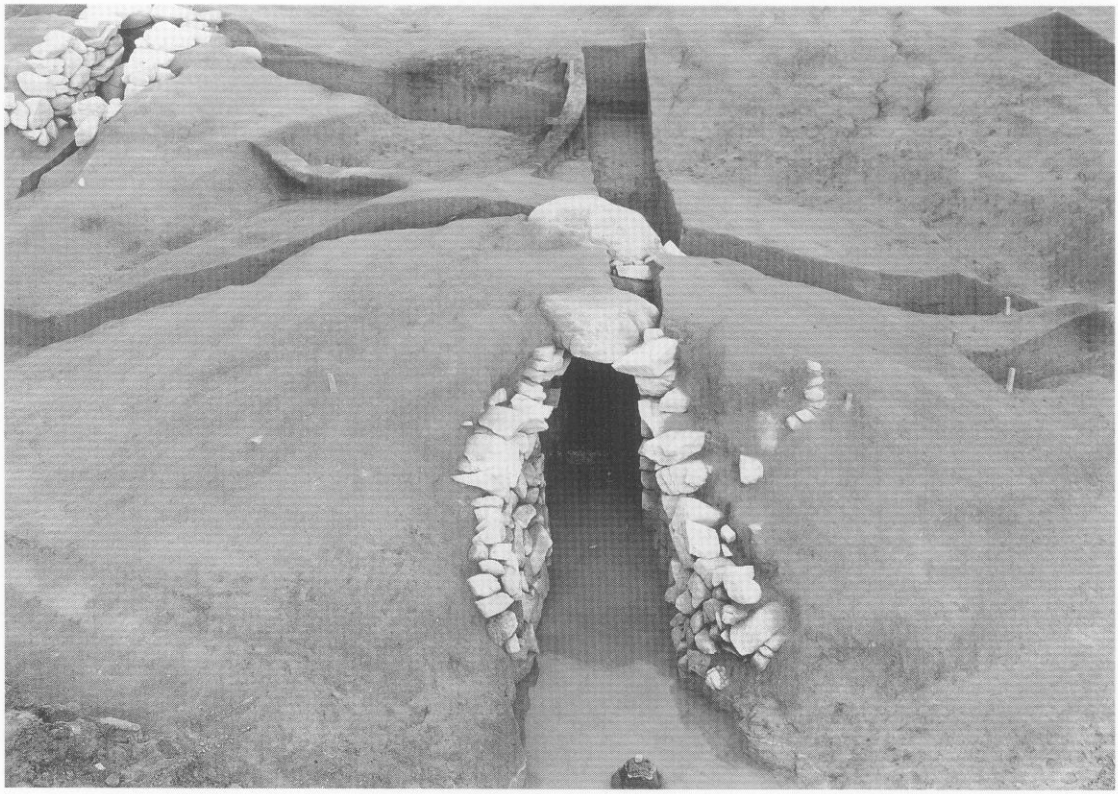

11


12


15


17

後田 4 号墳出土土器



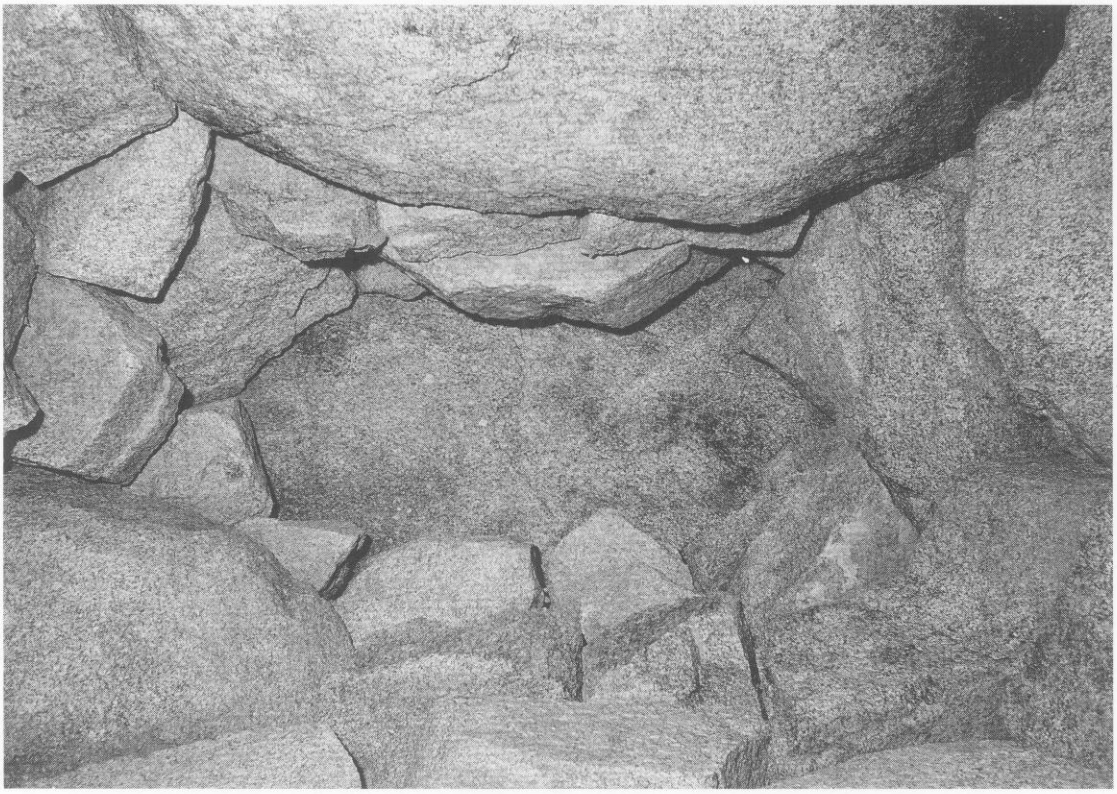
(1)　後田 5 号墳全景



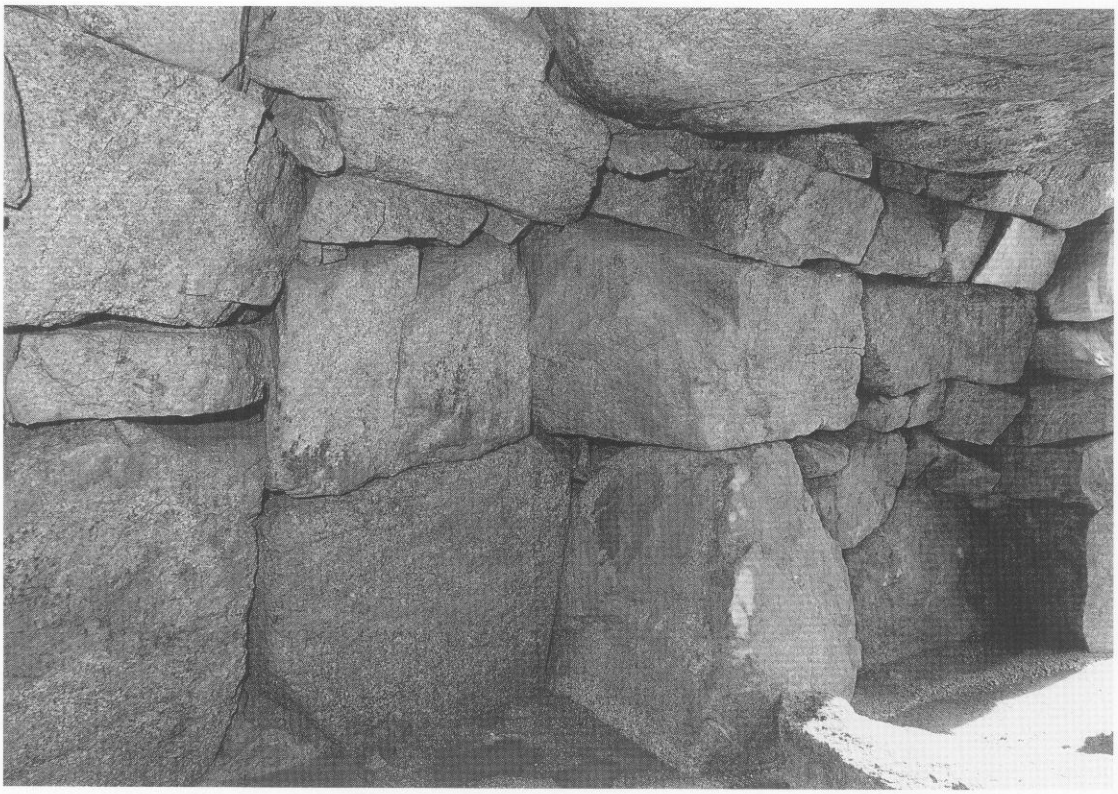
(2)　後田 5 号墳閉塞状況



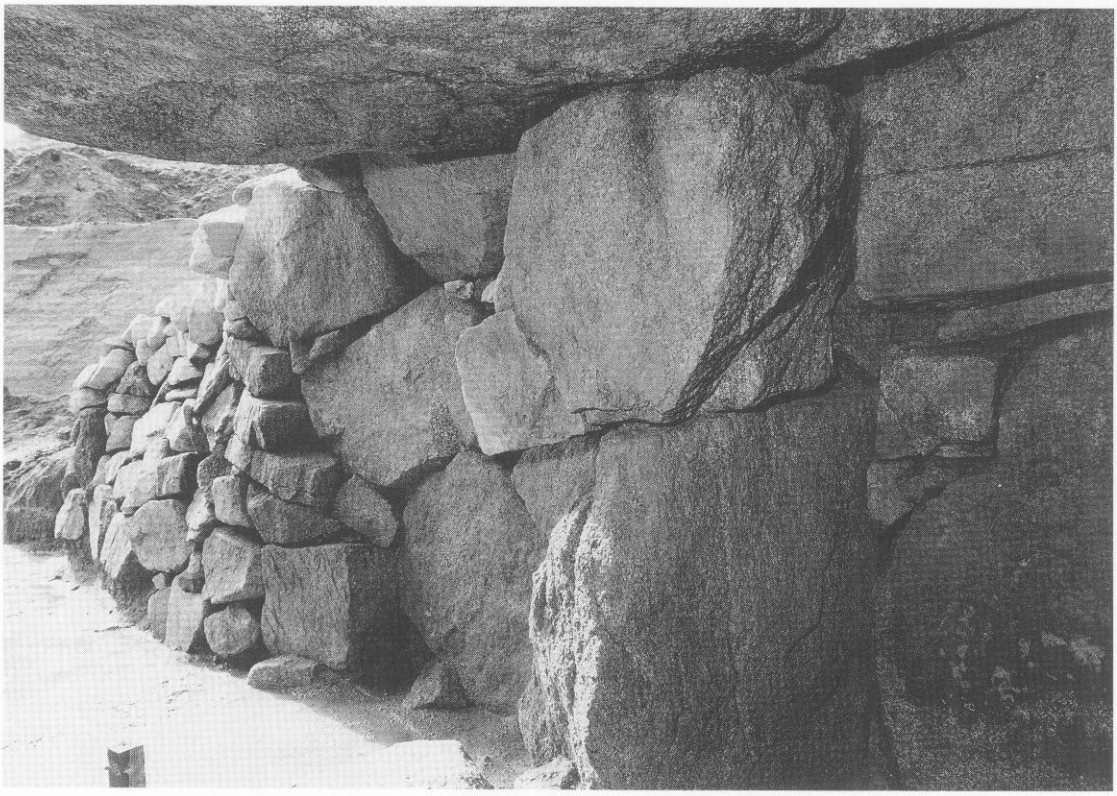
(1)　後田 5 号墳玄室



(2)　後田 5 号墳玄室天井



(1)　後田 5 号墳石室右側壁（奥壁より）



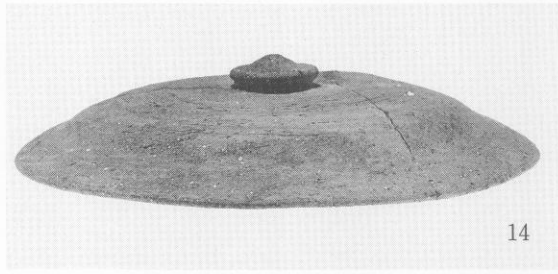
(2)　後田 5 号墳石室左側壁（奥壁より）

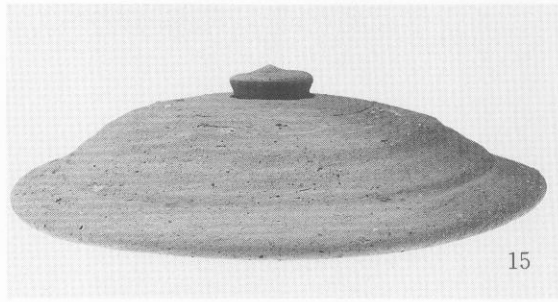

6

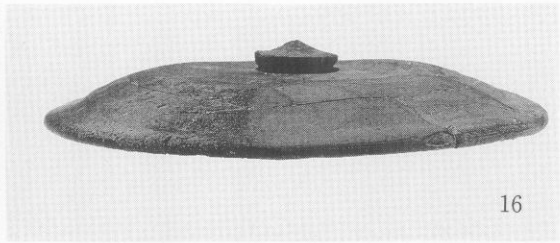

8

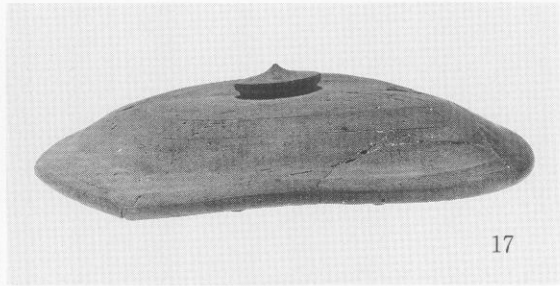

9

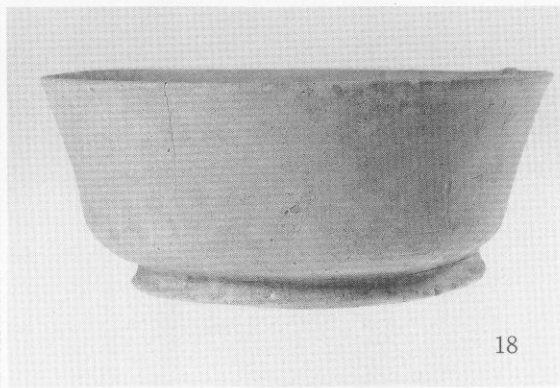

12


14


15


16

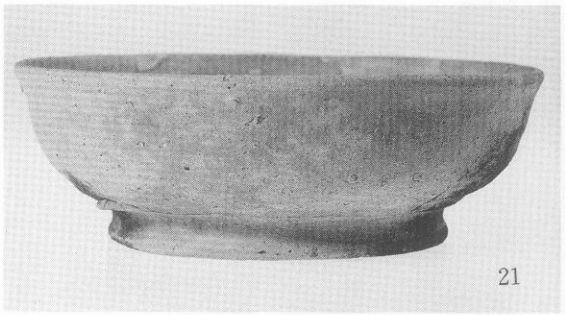

17


18


19


20

後田 5 号墳出土土器


21

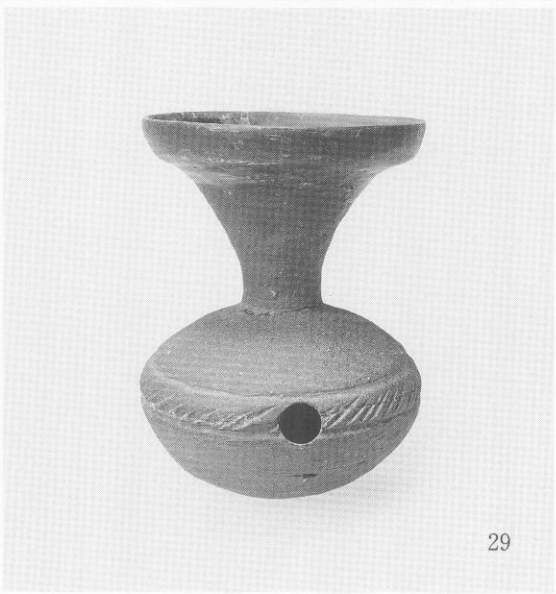

23


24

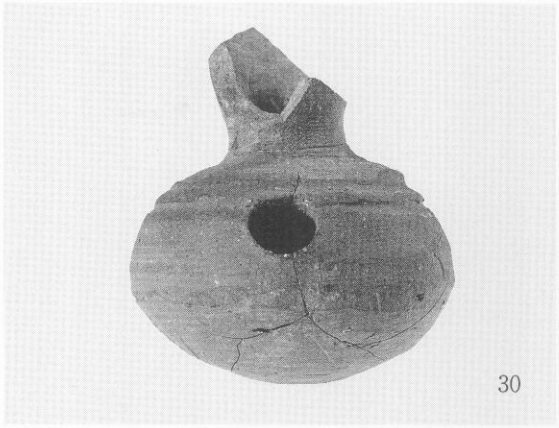

25


26


28

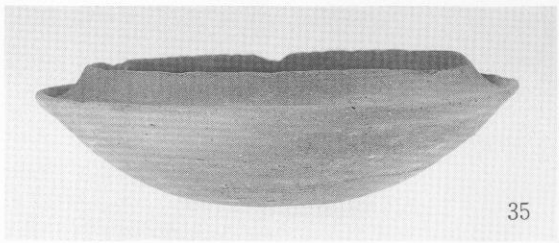

29

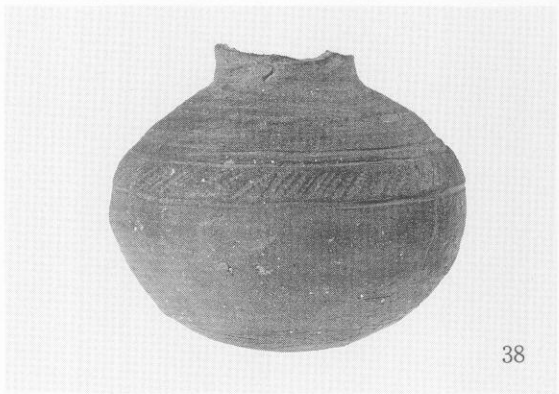
後田 5 号墳出土土器


30


31


32

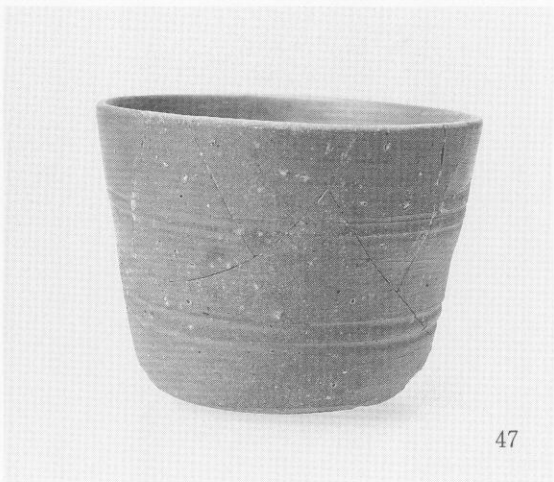

35


38

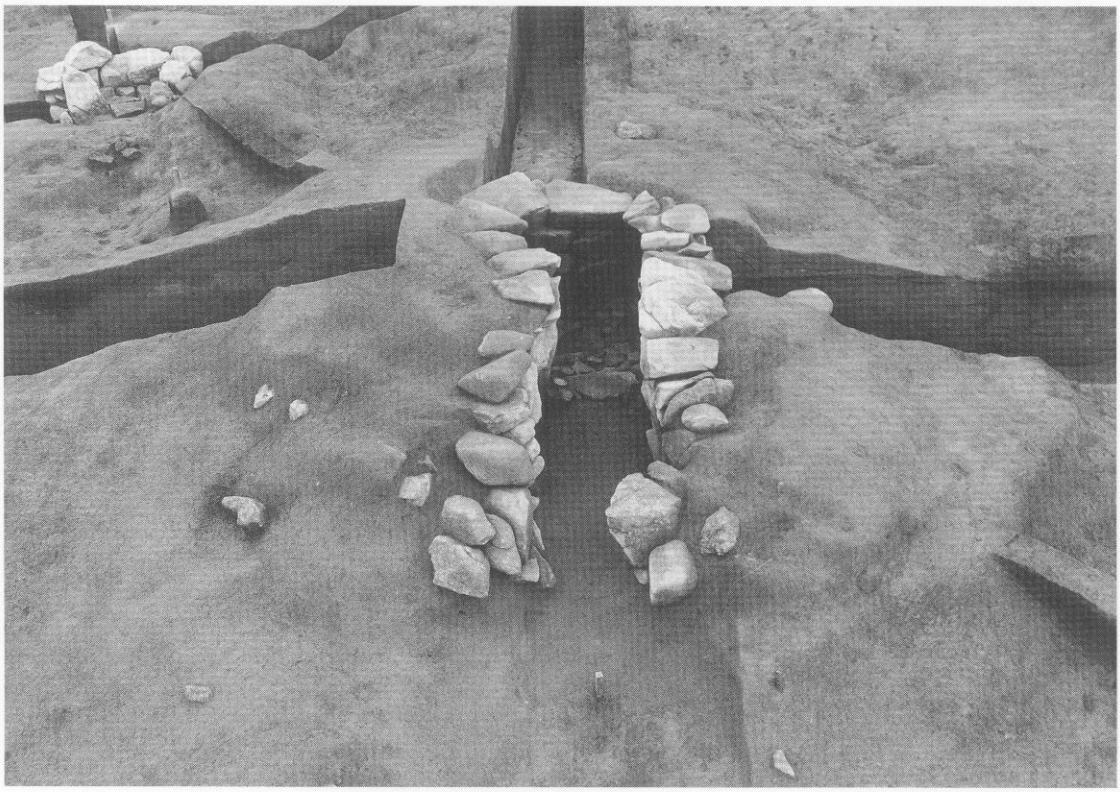

39


41

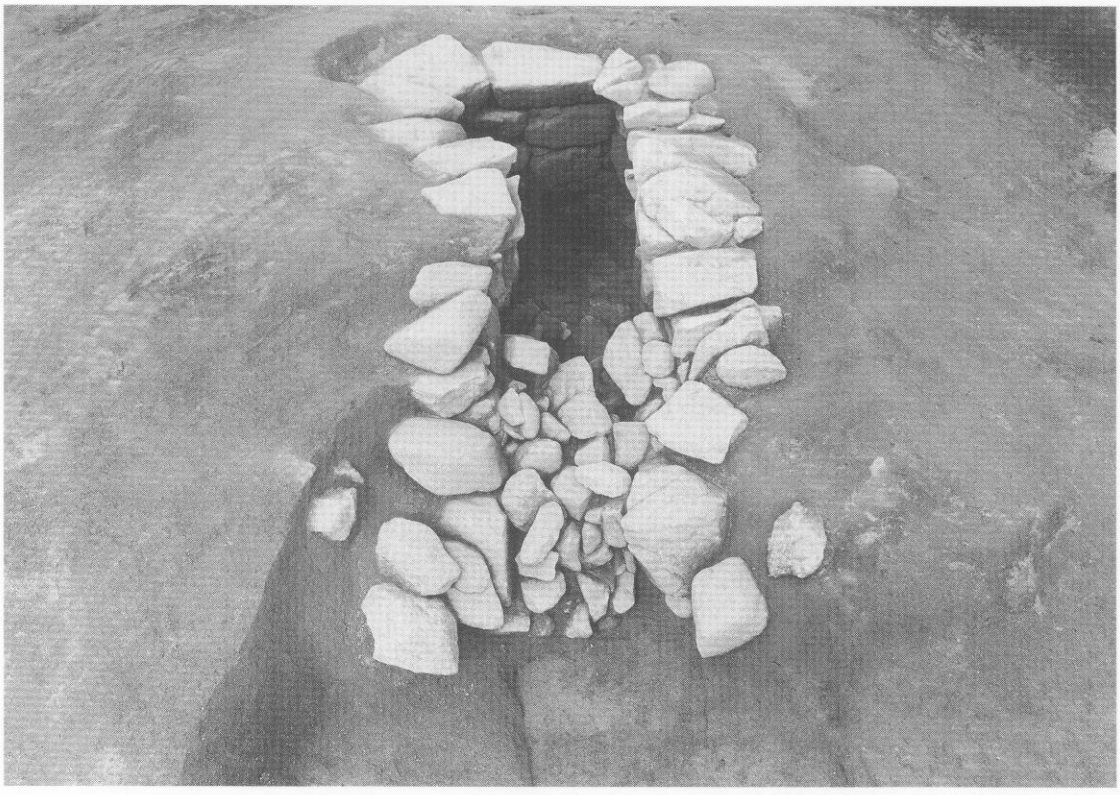

46


47

後田 5 号墳出土土器



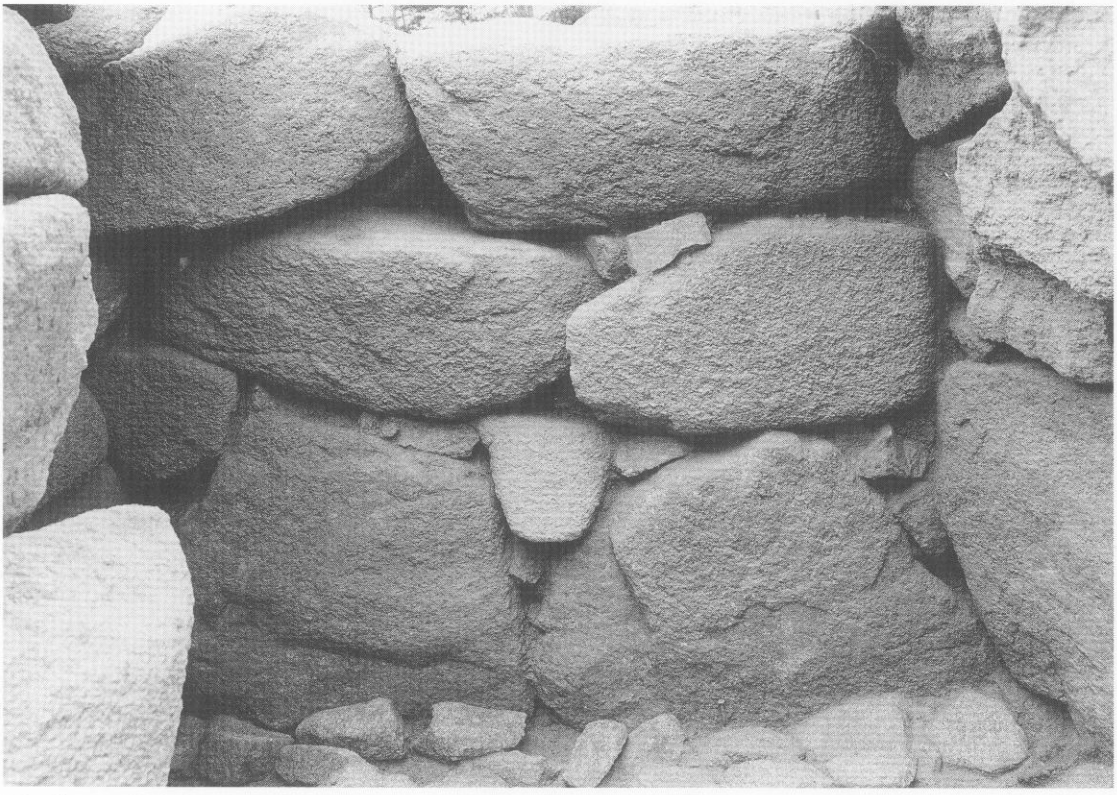
(1)　後田 6 号墳全景



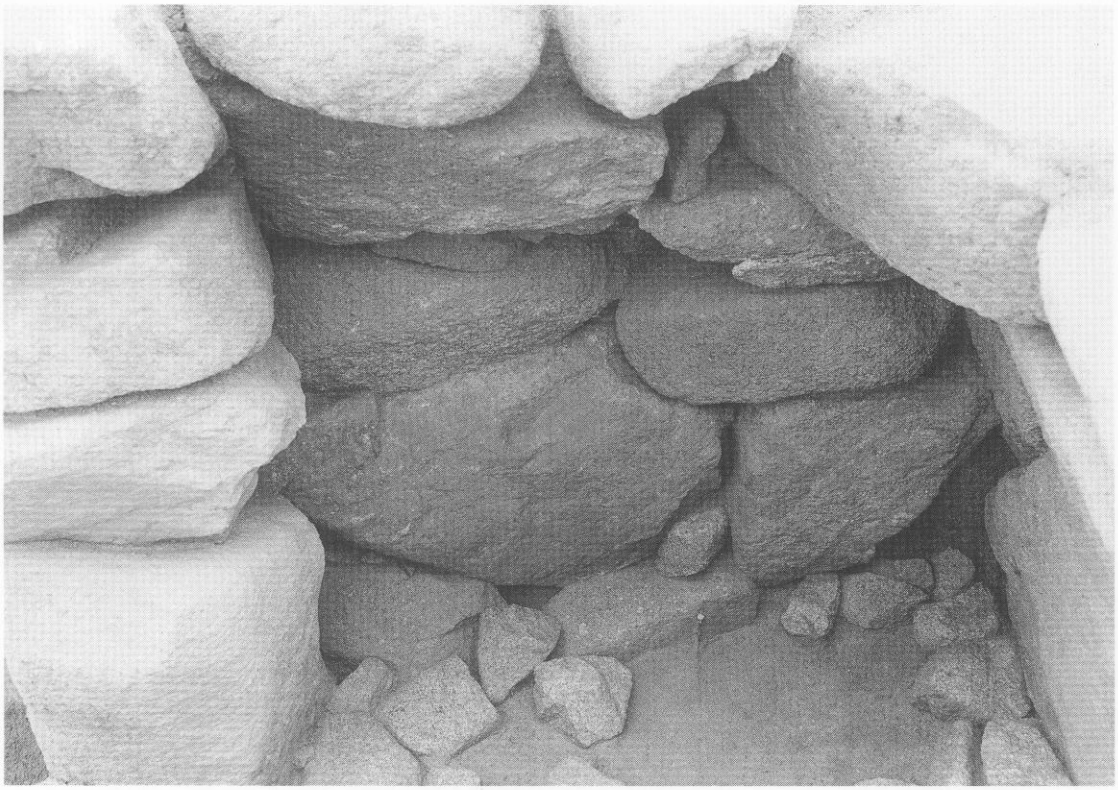
(2)　後田 6 号墳閉塞状況



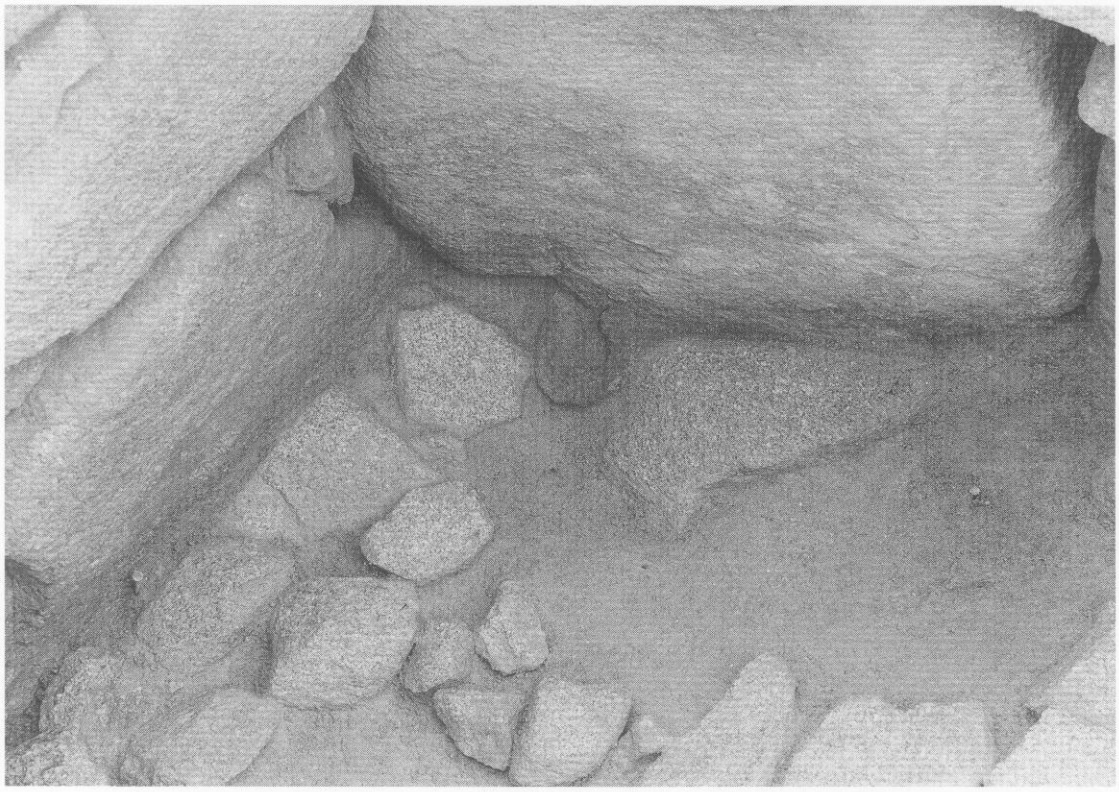
(1)　後田 6 号墳（墓道より）



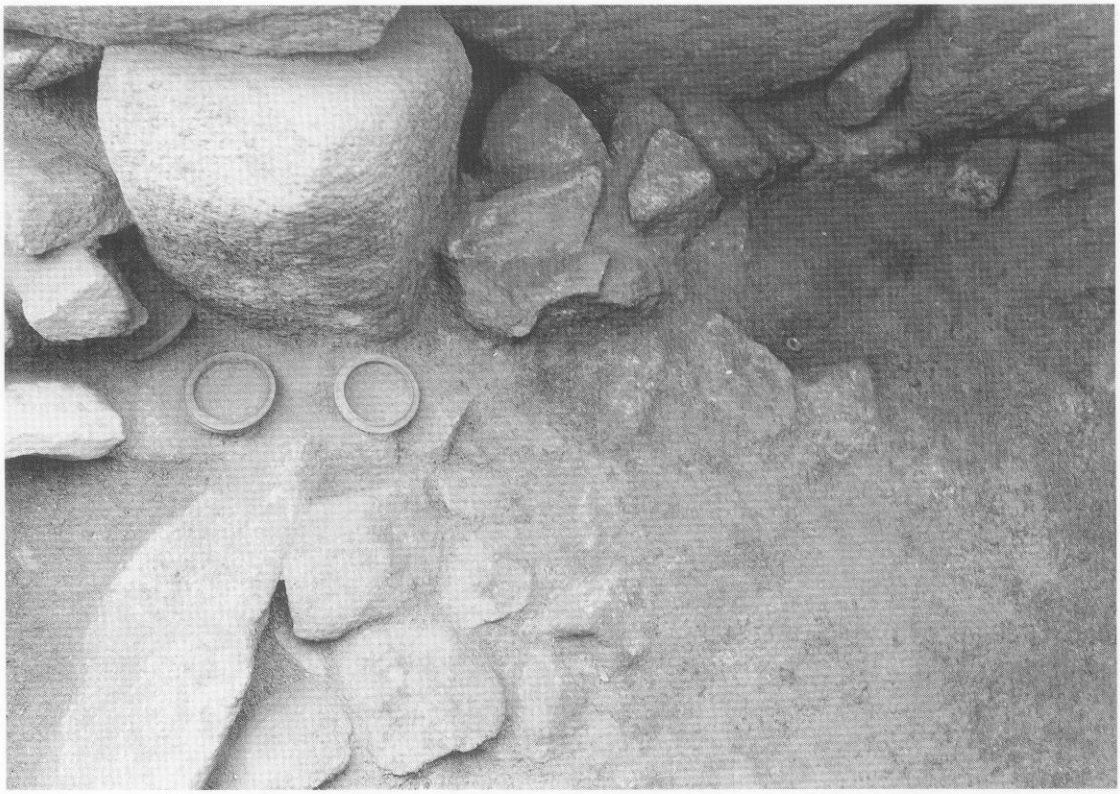
(2)　後田 6 号墳玄室奥壁



(1)　後田 6 号墳玄室左側壁



(2)　後田 6 号墳玄室遺物出土状態



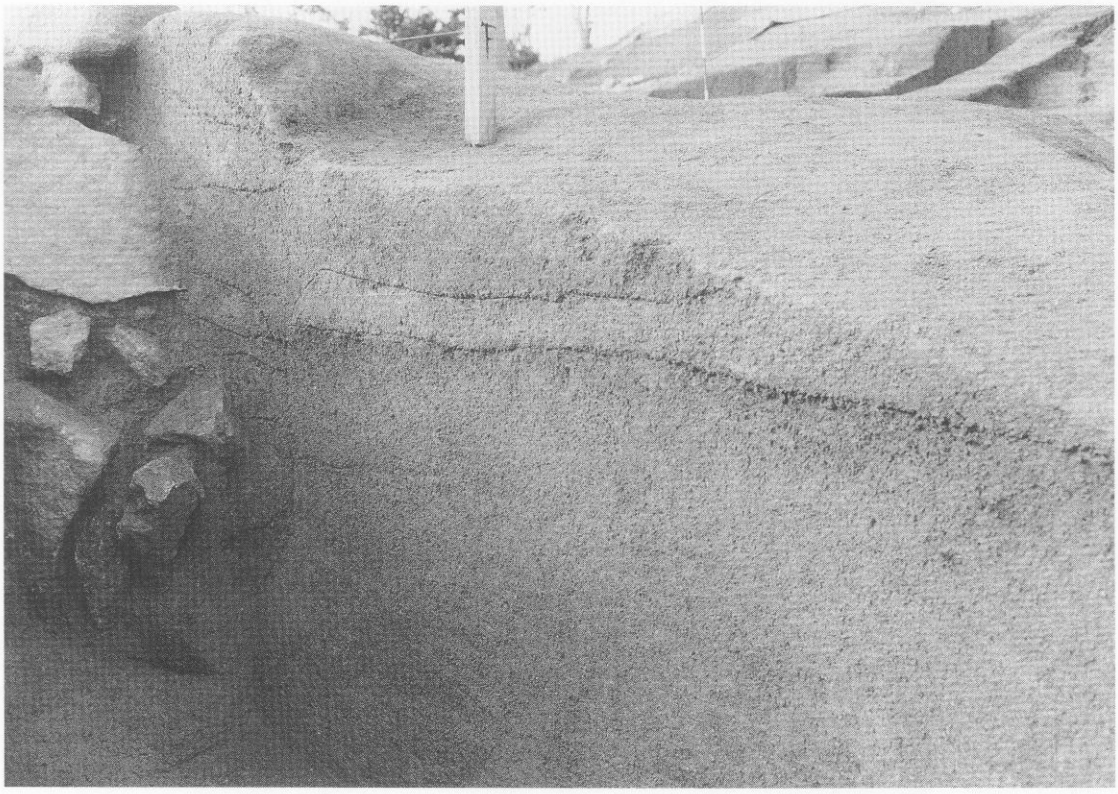
(1)　後田 6 号墳玄室遺物出土状態



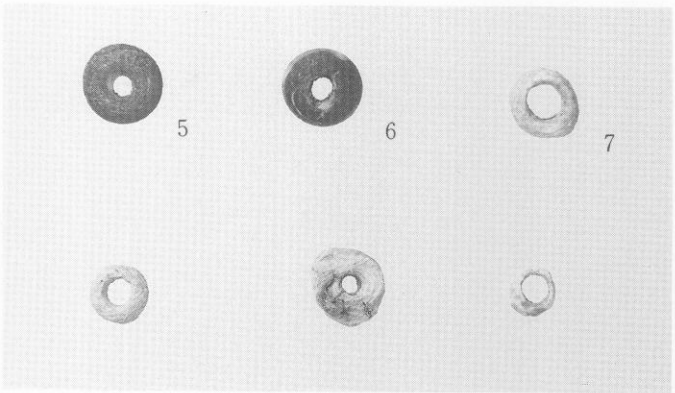
(2)　後田 6 号墳玄室遺物出土状態

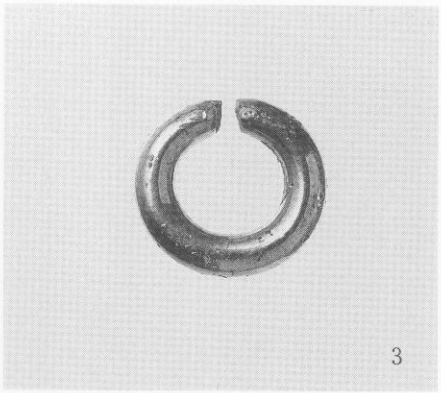


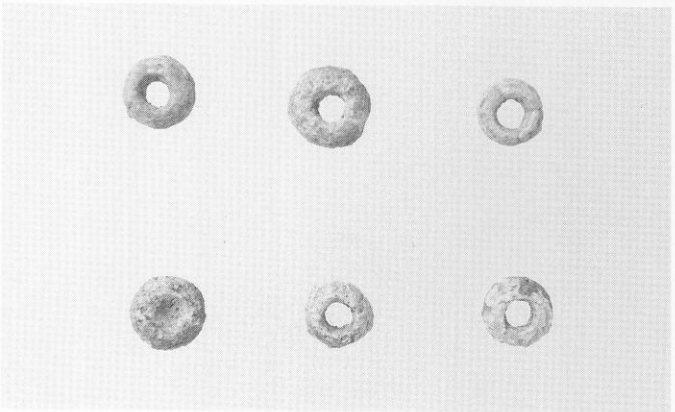
(1)　後田 6 号墳墳丘下遺物出土状態

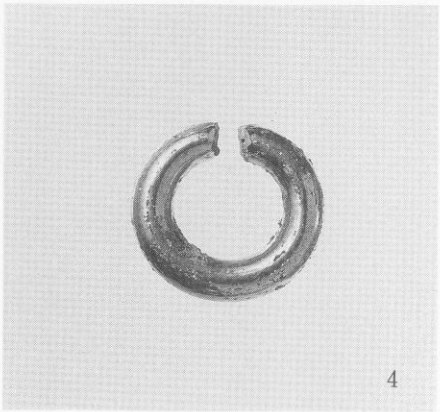


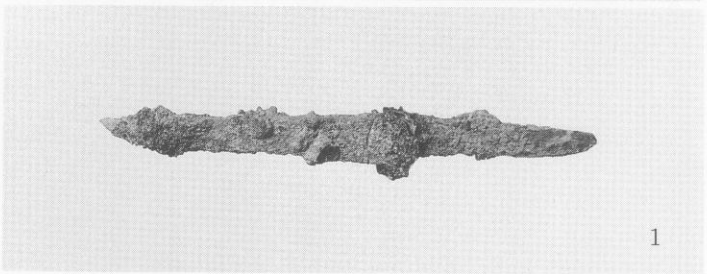
(2)　後田 6 号墳墳丘断面

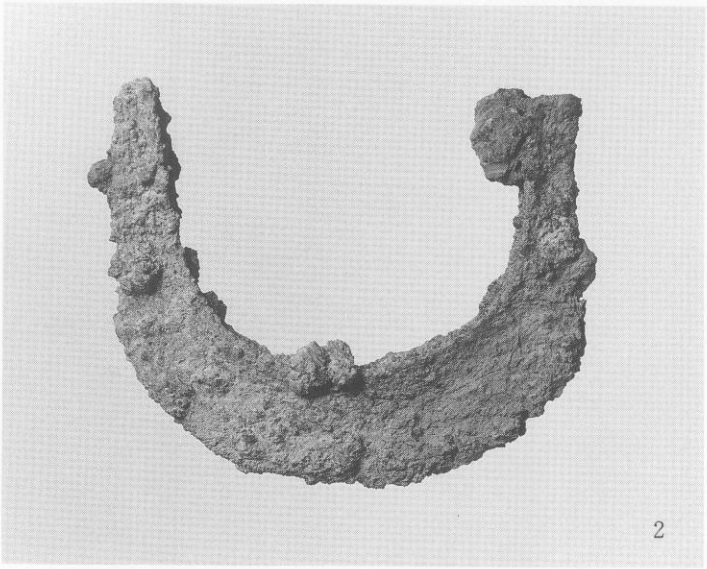








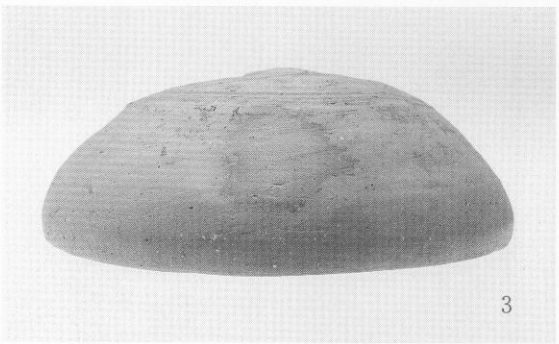


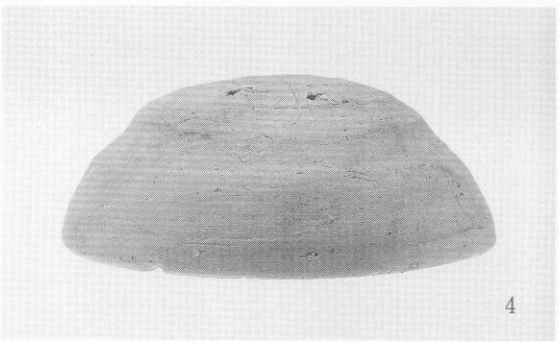


後田 6 号墳出土装身具・鉄器


1


2


3


4


5


8

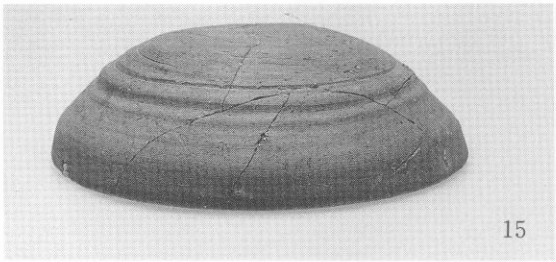

9

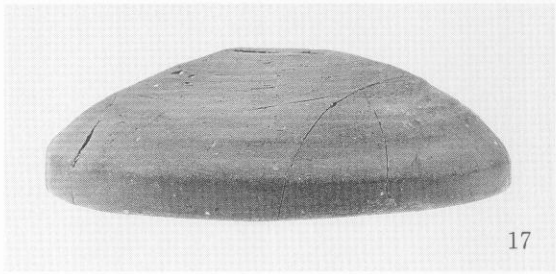

11

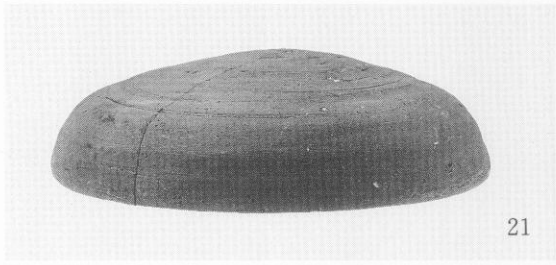

12


13

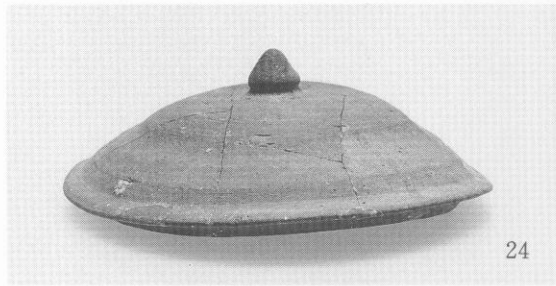
後田 6 号墳出土土器


15

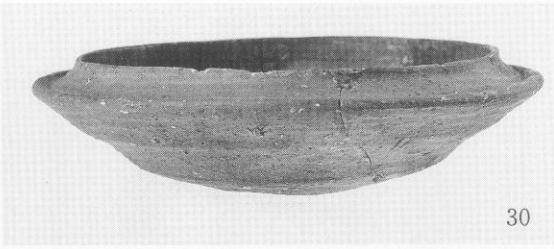

17


21


23


24


25


30


33


34


36


37


39

後田 6 号墳出土土器


40

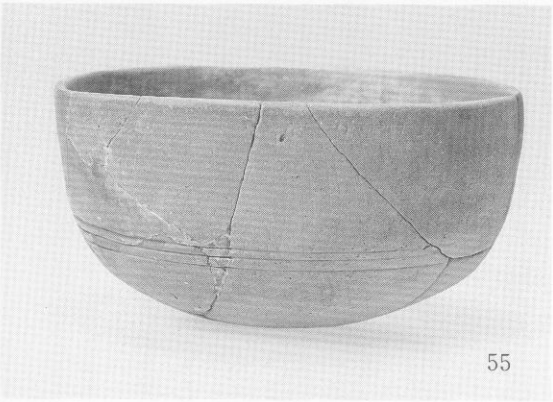

43

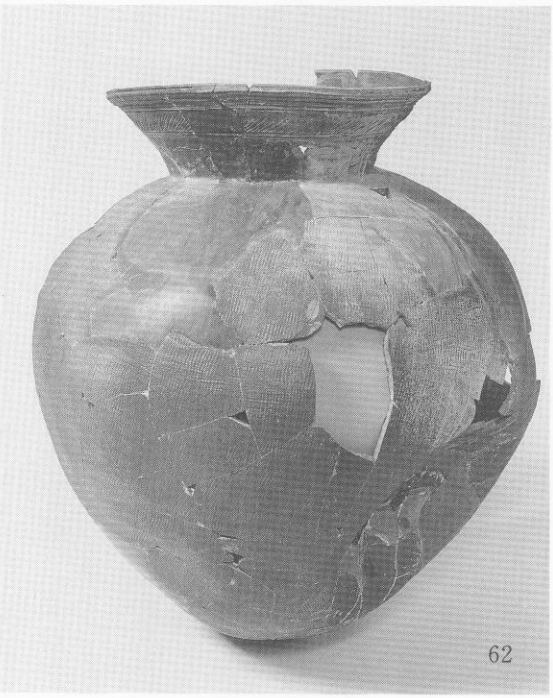

44


45

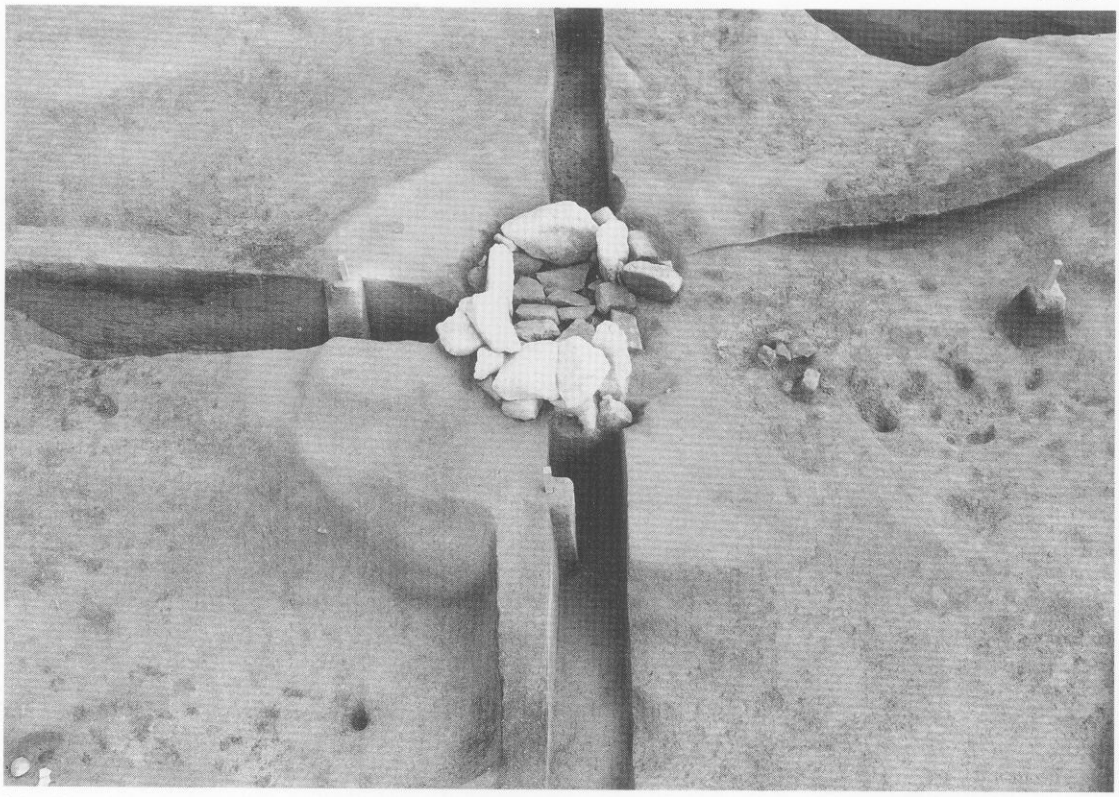

53


54


55


62

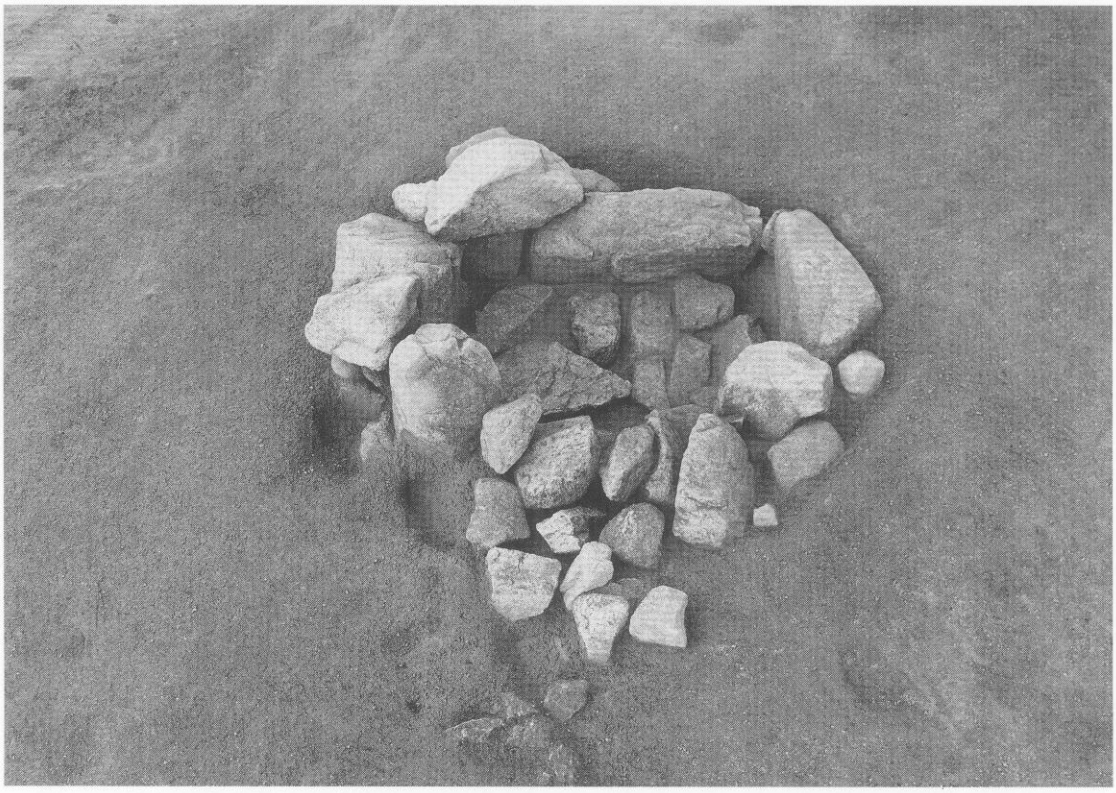
後田 6 号墳出土土器



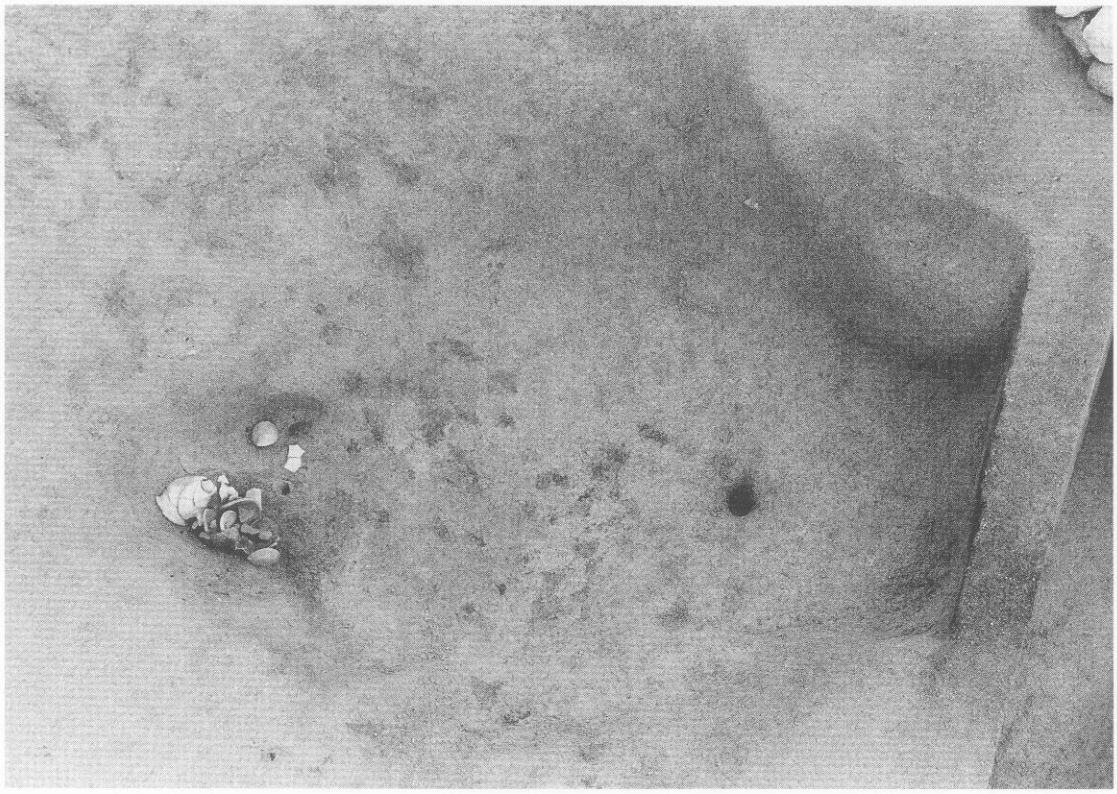
(1)　後田７号墳全景



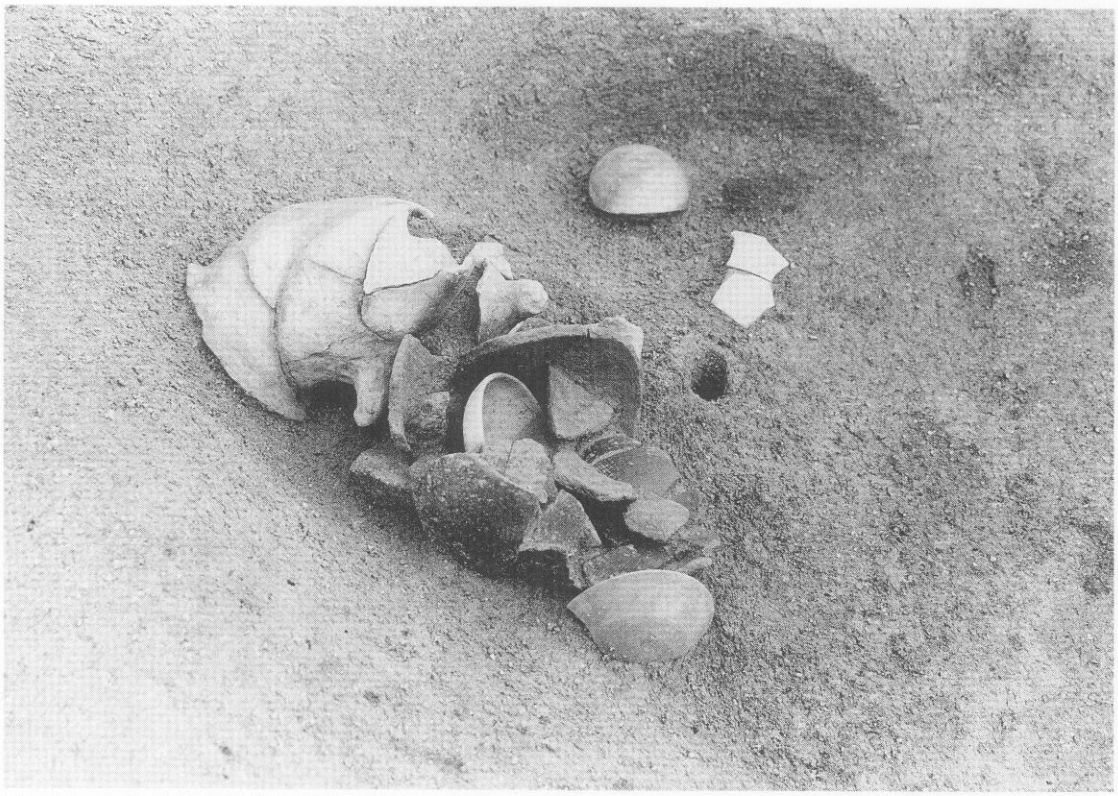
(2)　後田７号墳閉塞状況全景（西側より）



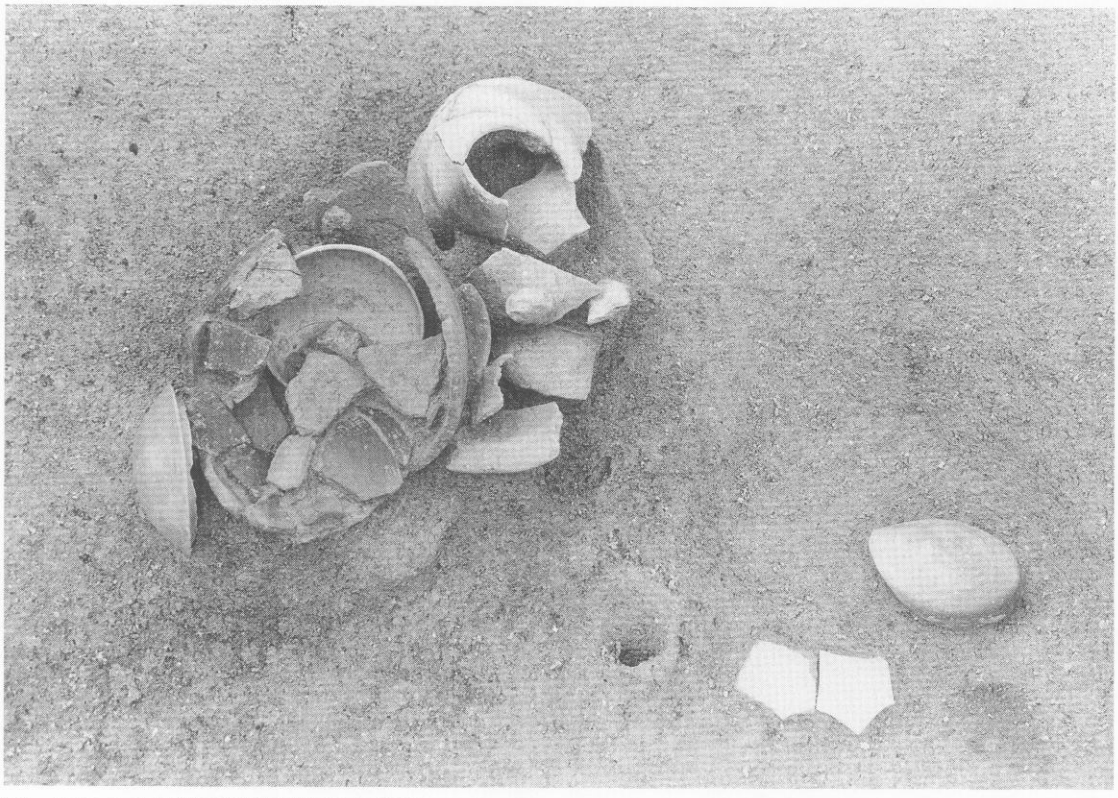
(1)　後田７号墳閉塞状況全景（東側より）



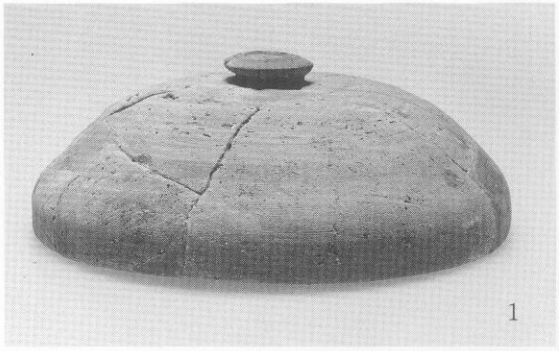
(2)　後田７号墳祭祀遺構遺物出土状態遠景



(1)　後田 7 号墳祭祀遺構遺物出土状態



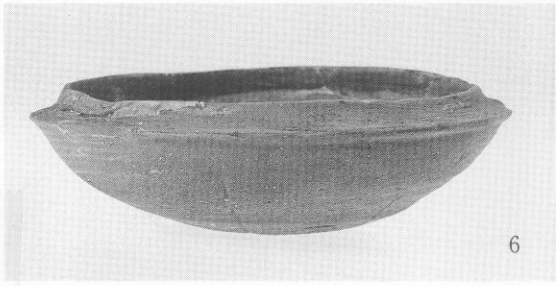
(2)　後田 7 号墳祭祀遺構遺物出土状態


1

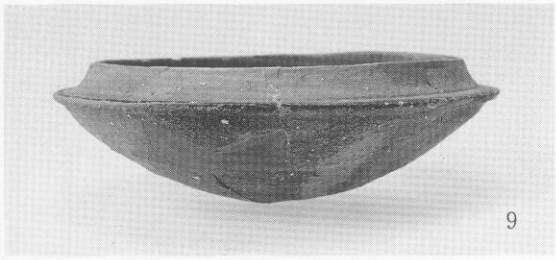

2


3


4


6


7


9

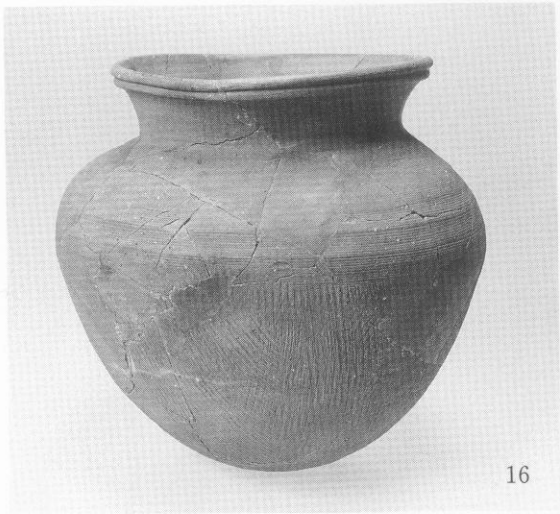

12

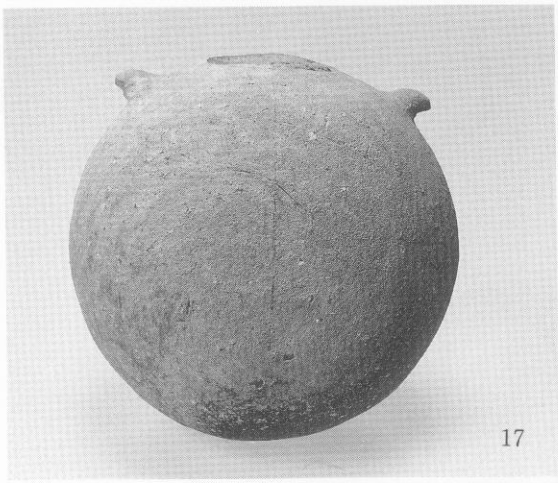

13

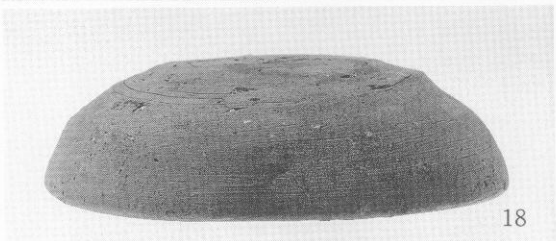

14

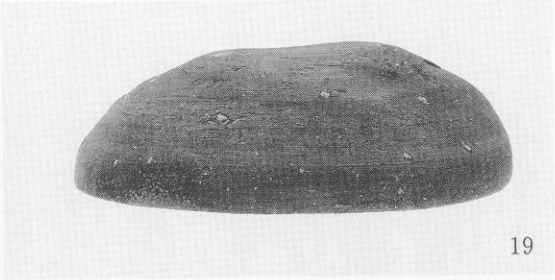
後田7号墳出土土器


15

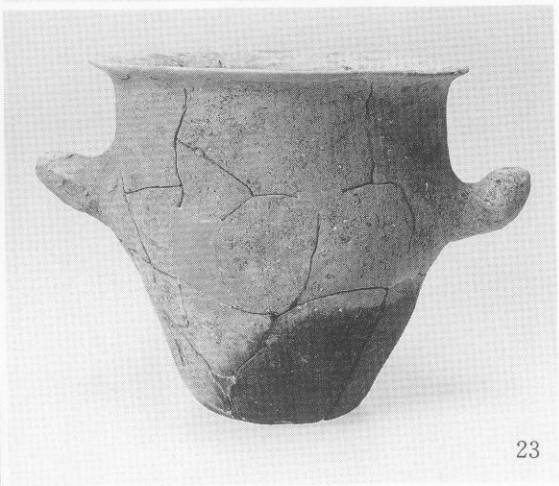

16


17


18

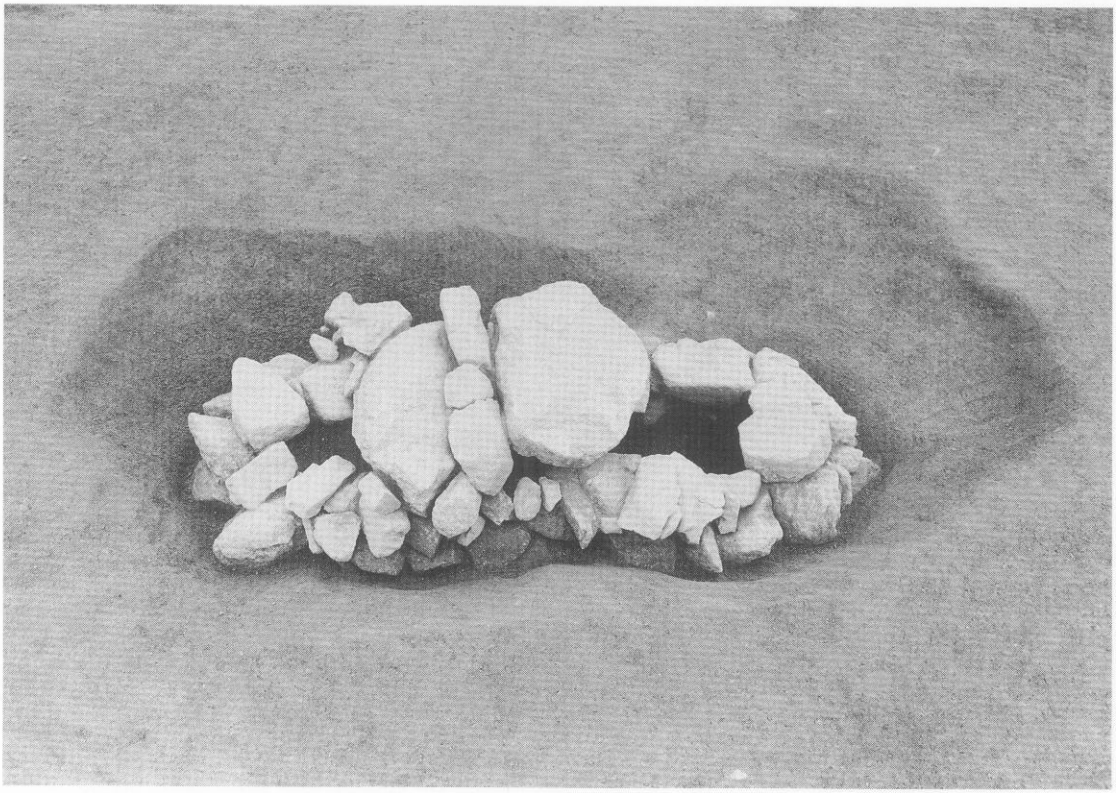

19


20

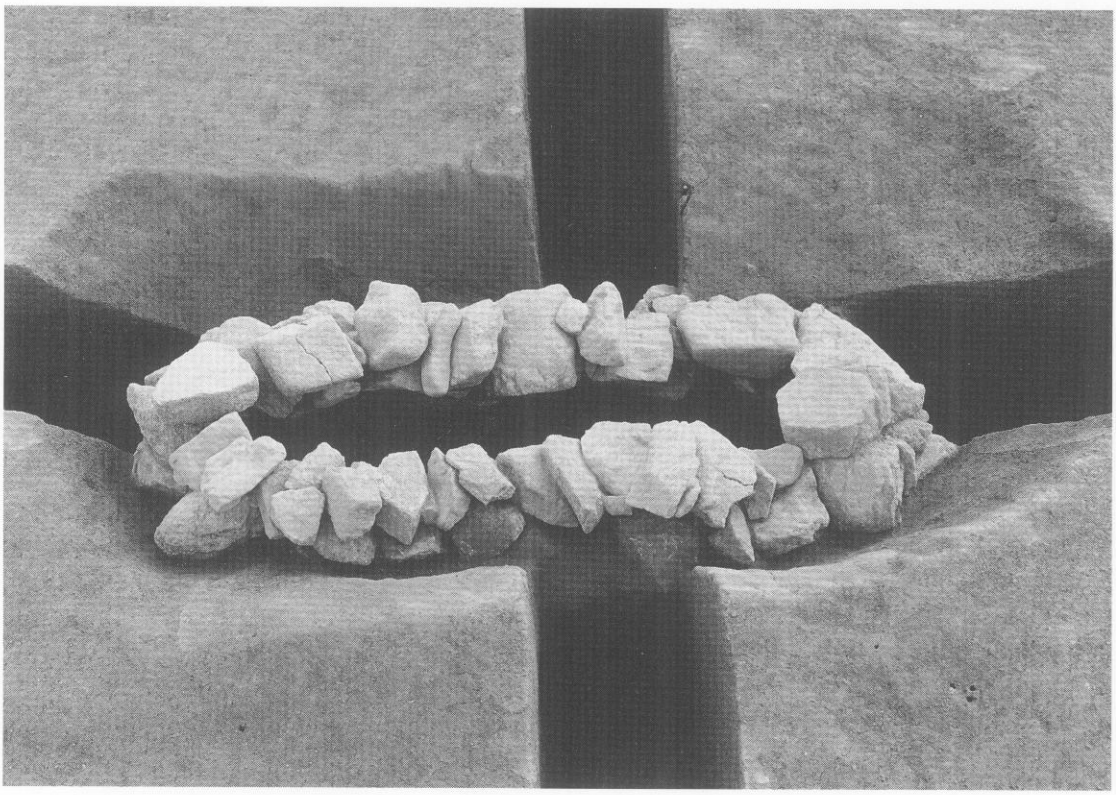

23


24

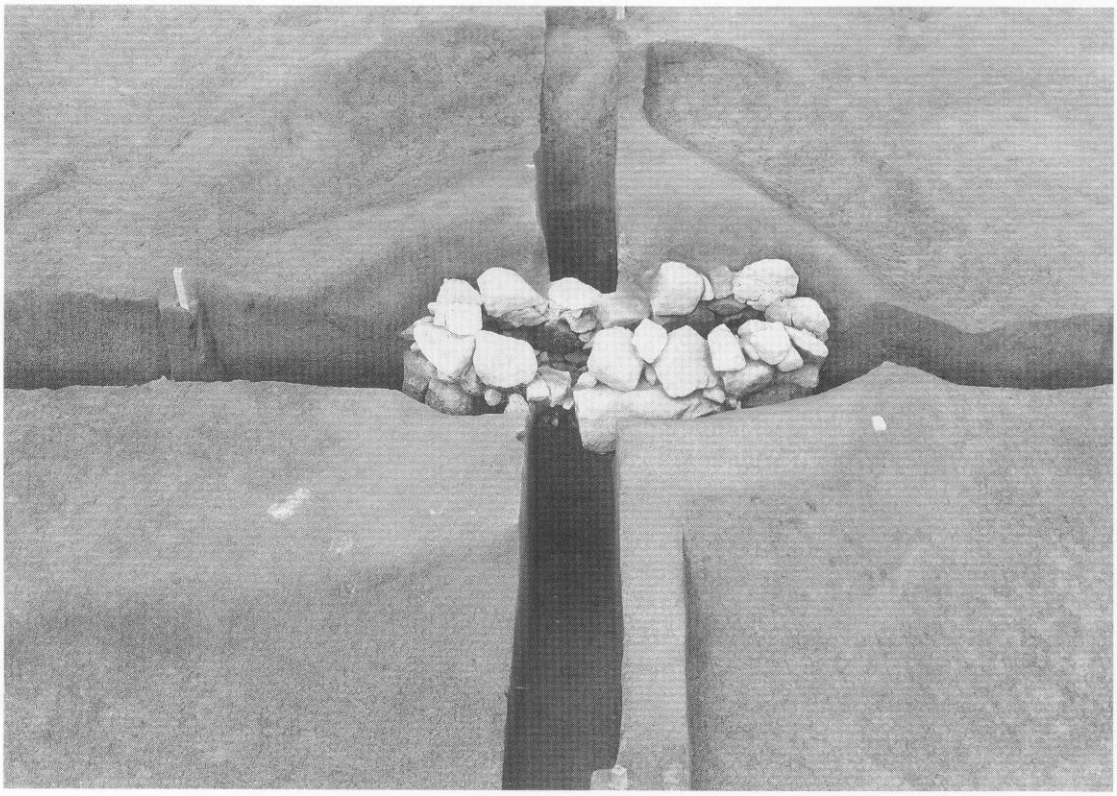
後田 7 号墳出土土器



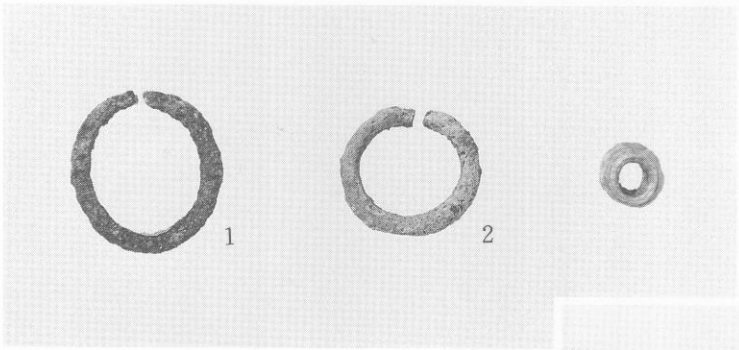
(1)　後田８号墳石室（蓋石除去前・北から）



(2)　後田８号墳石室（蓋石除去後・北から）



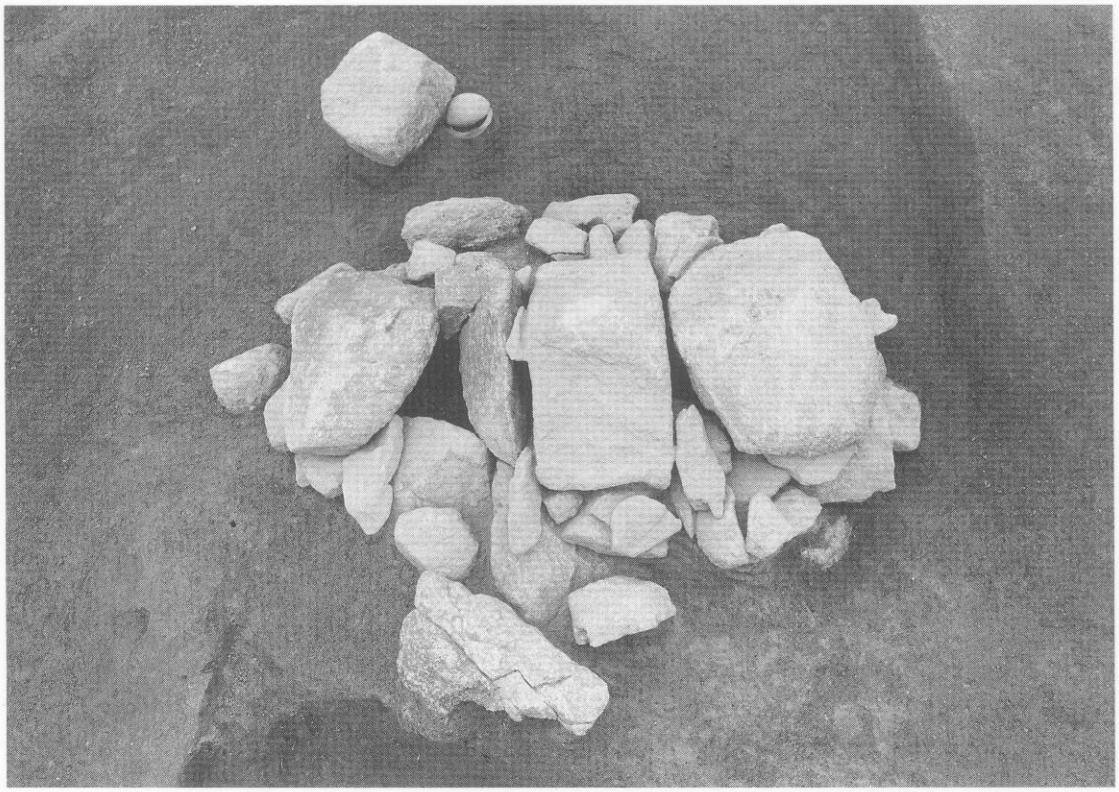
(1)　後田８号墳全景（南から）



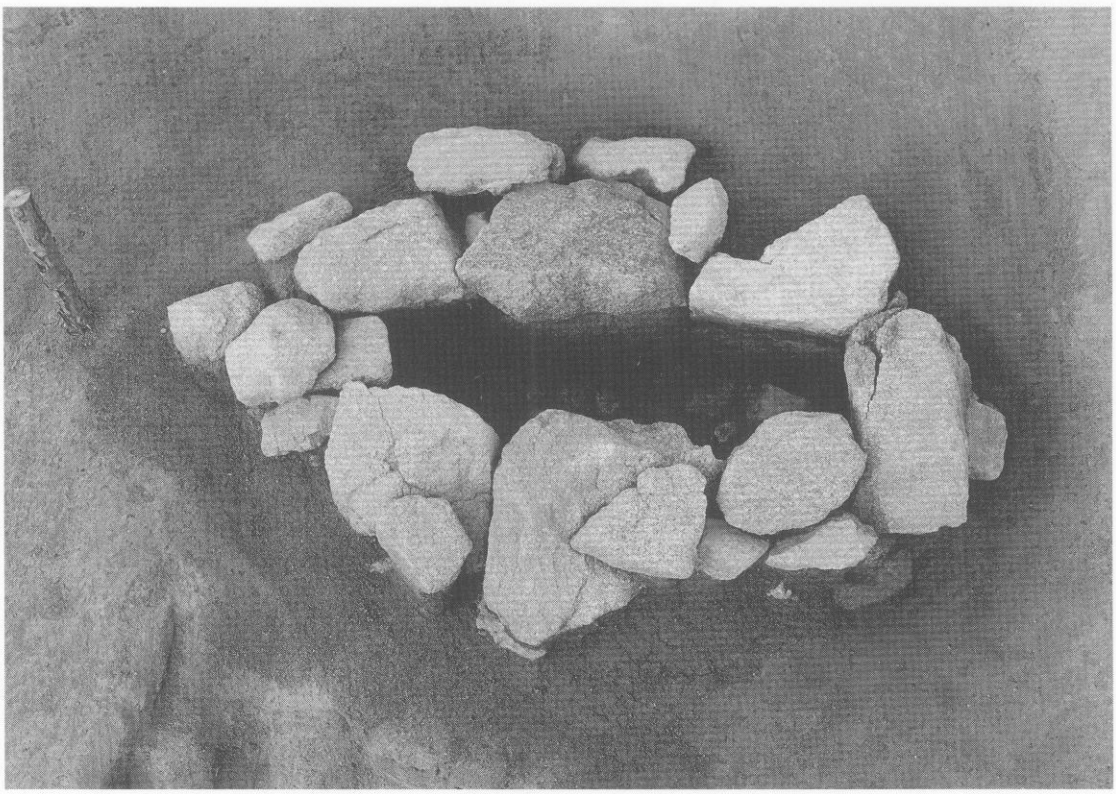




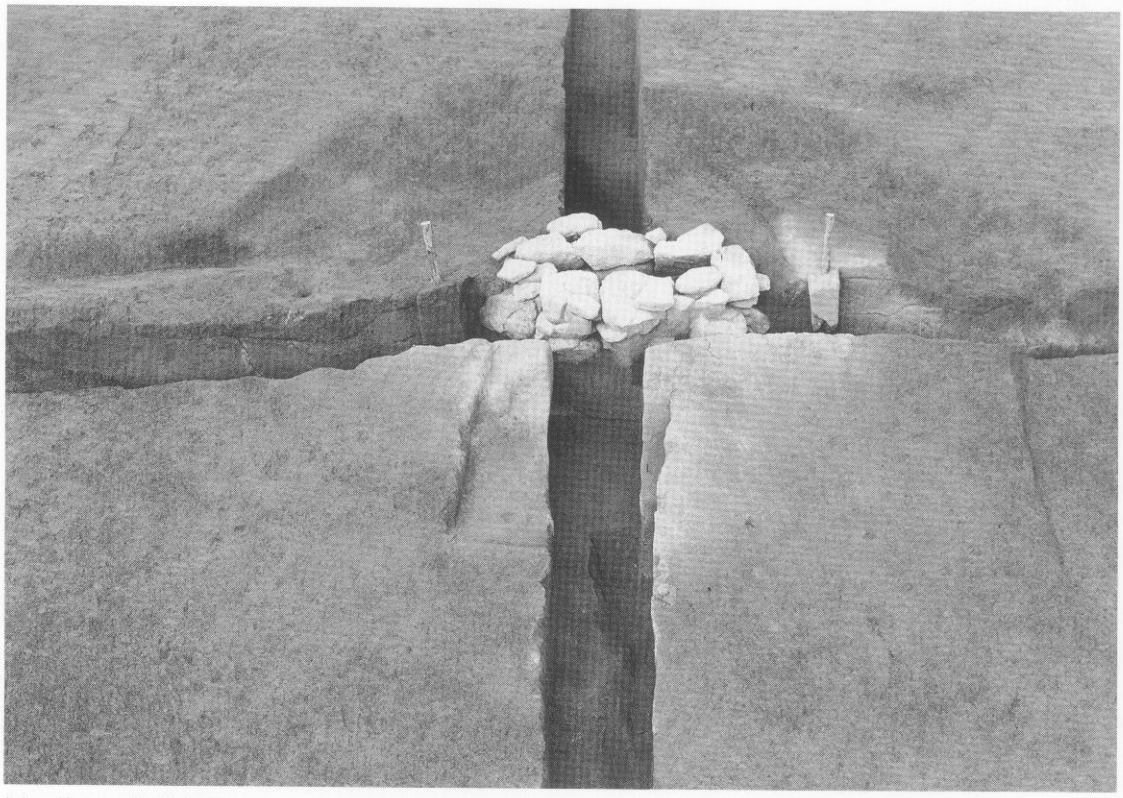
(2)　後田８号墳出土装身具・土器



(1)　後田 9 号墳石室（蓋石除去前）



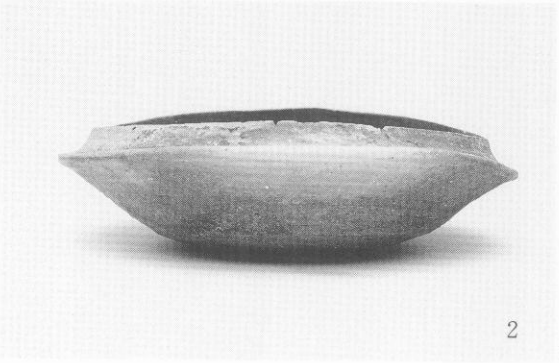
(2)　後田 9 号墳石室（蓋石除去後）



(1)　後田 9 号墳全景



1



2

(2)　後田 9 号墳出土土器



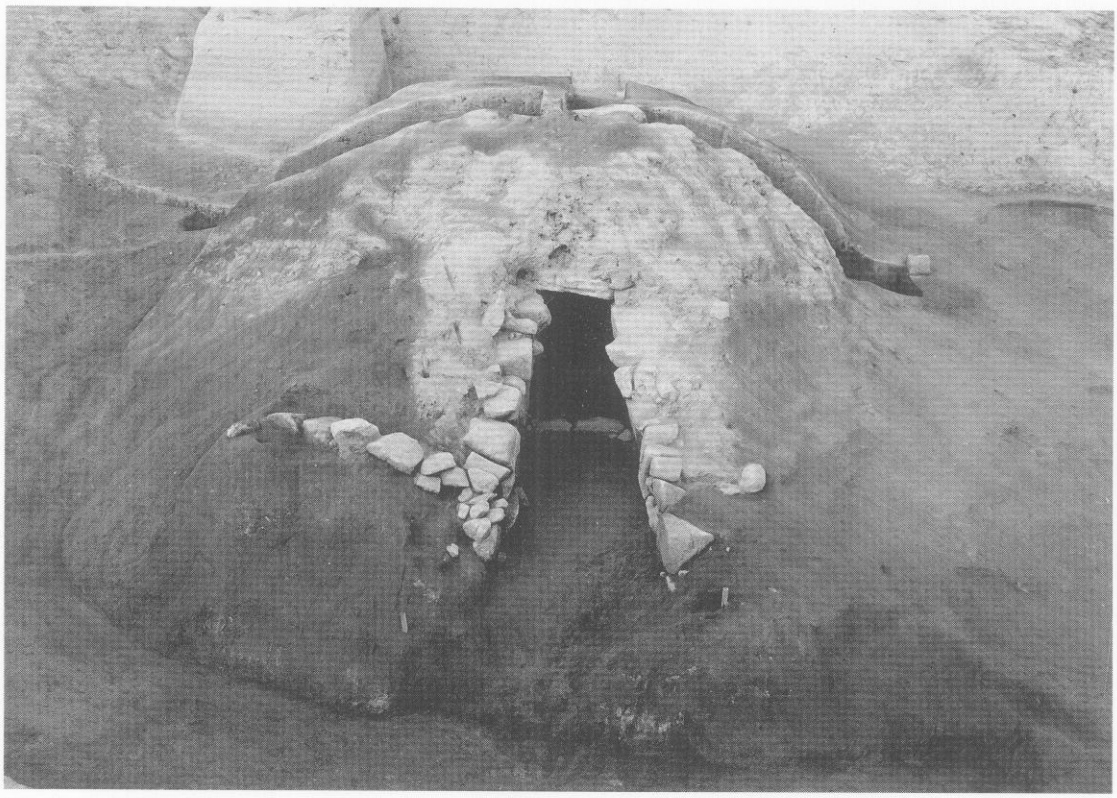
(1)　後田10号墳調査前全景



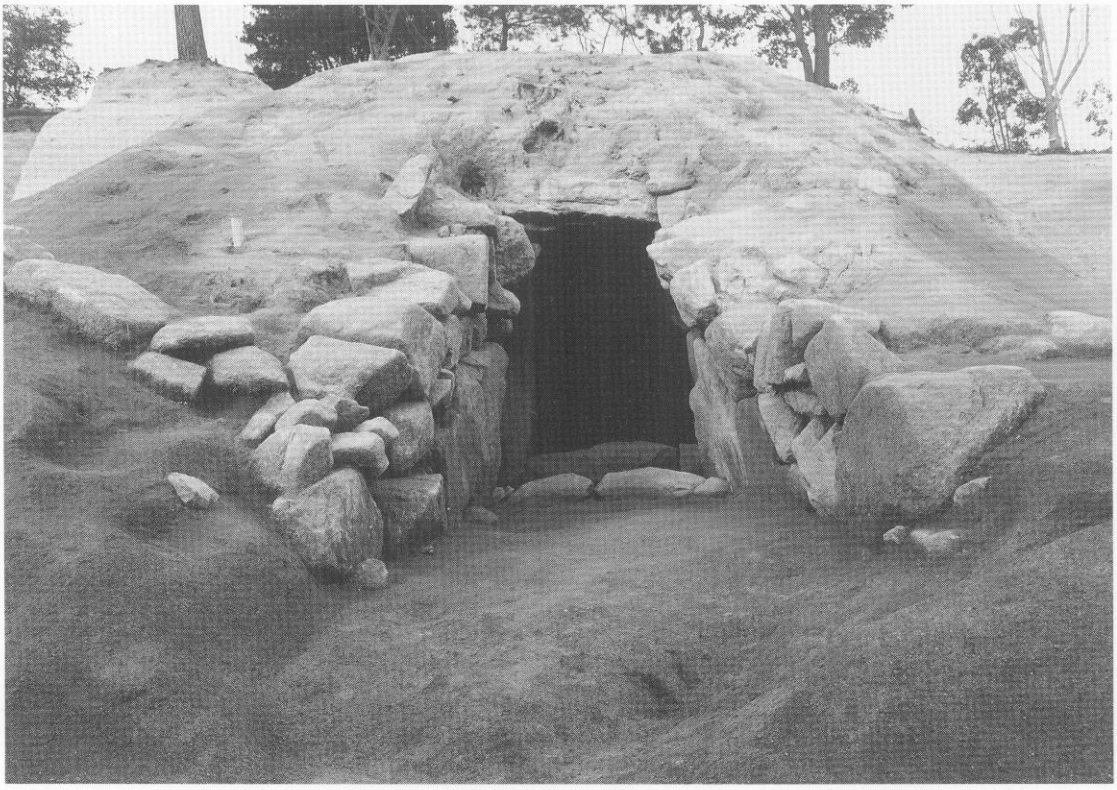
(2)　後田10号墳全景（調査終了後）



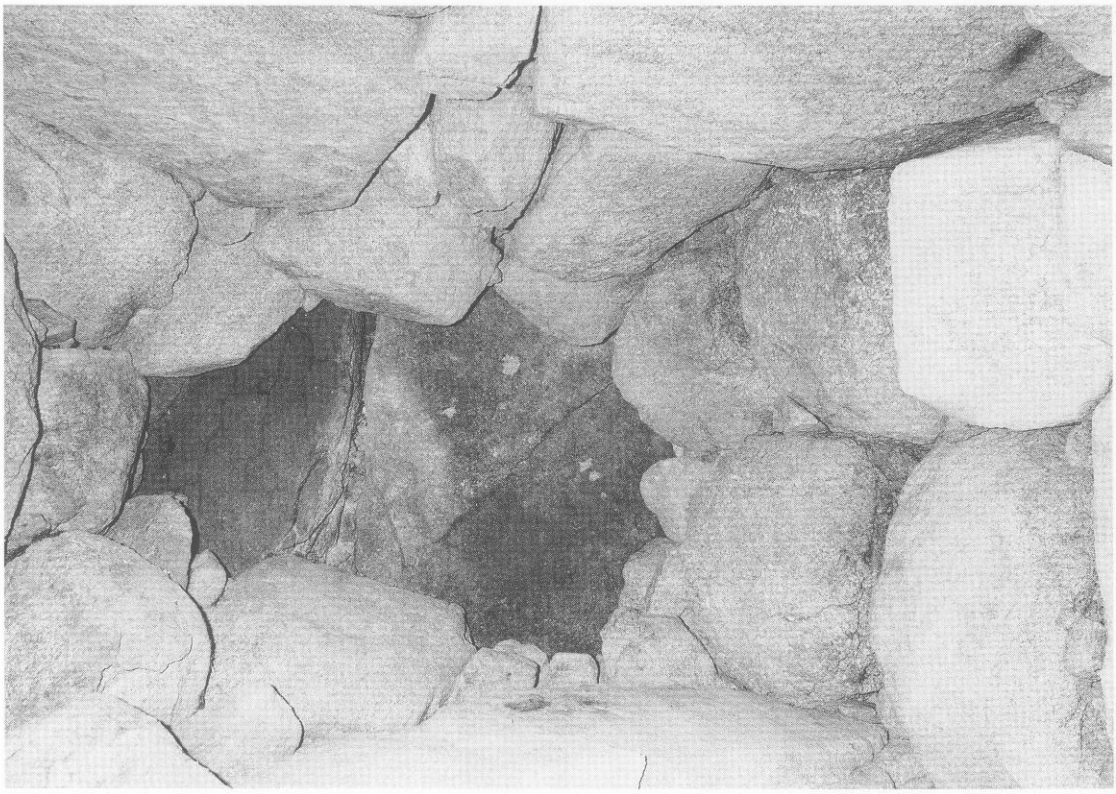
(1)　後田10号墳閉塞状況



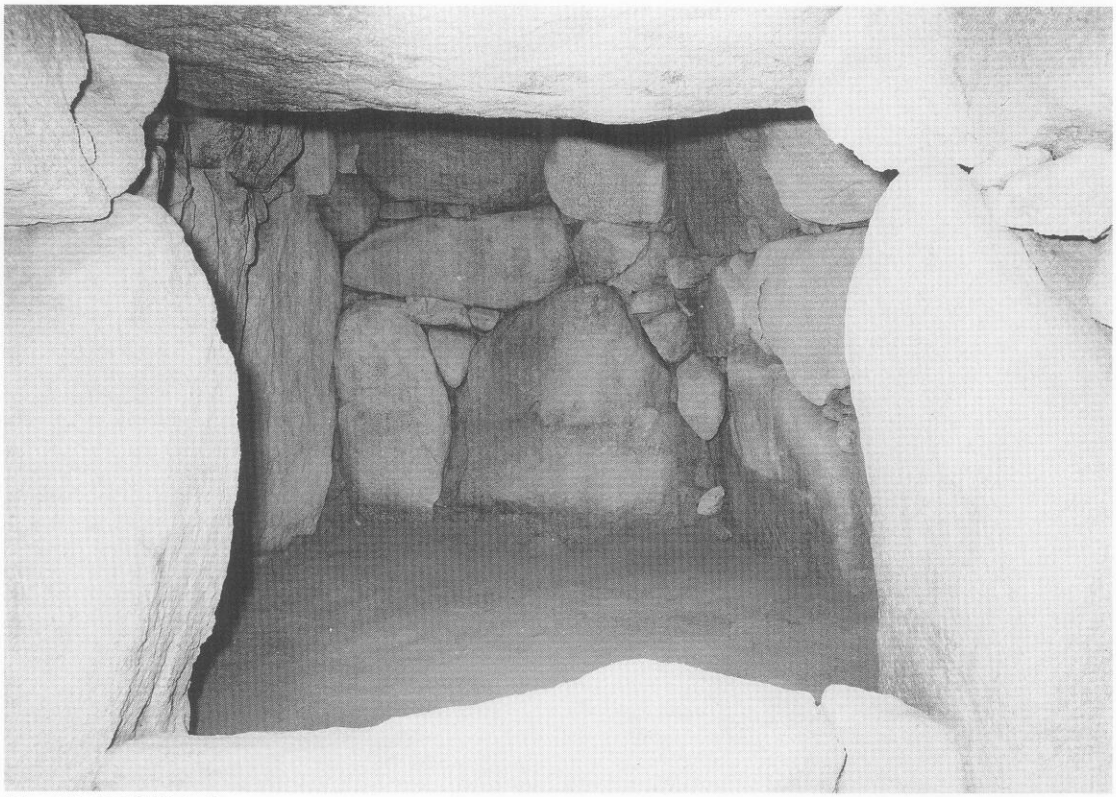
(2)　後田10号墳全景



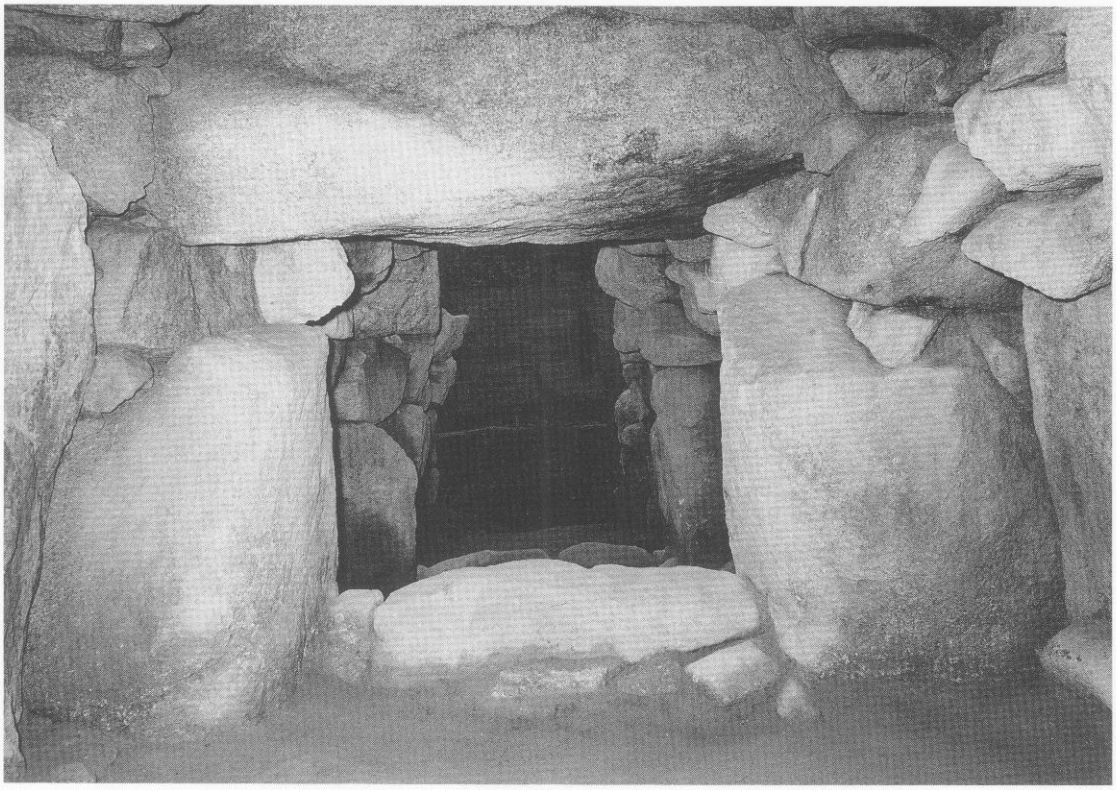
(1)　後田10号墳（墓道より）



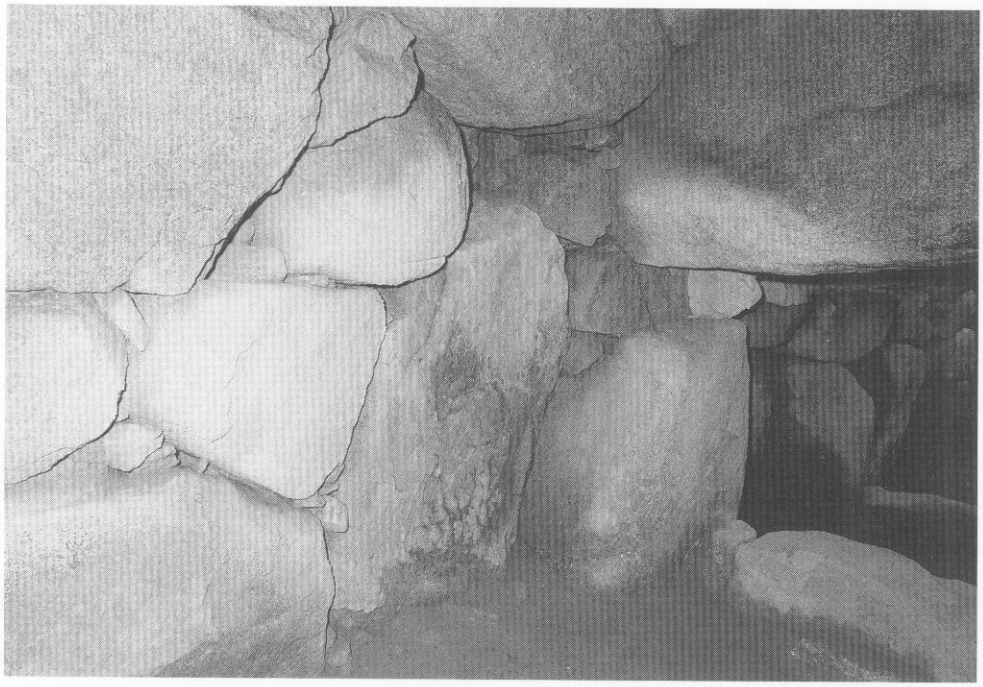
(2)　後田10号墳玄室天井



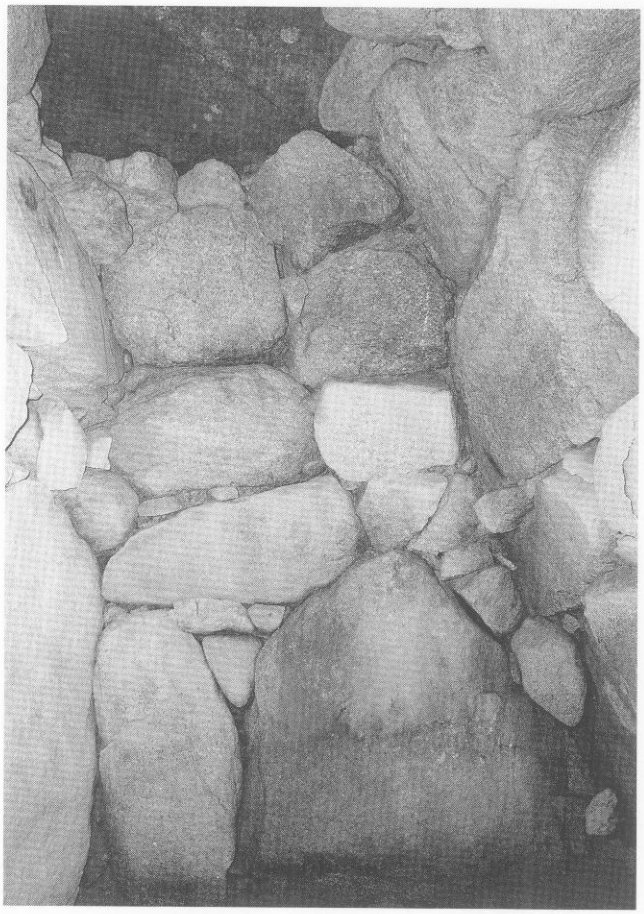
(1)　後田10号墳玄室



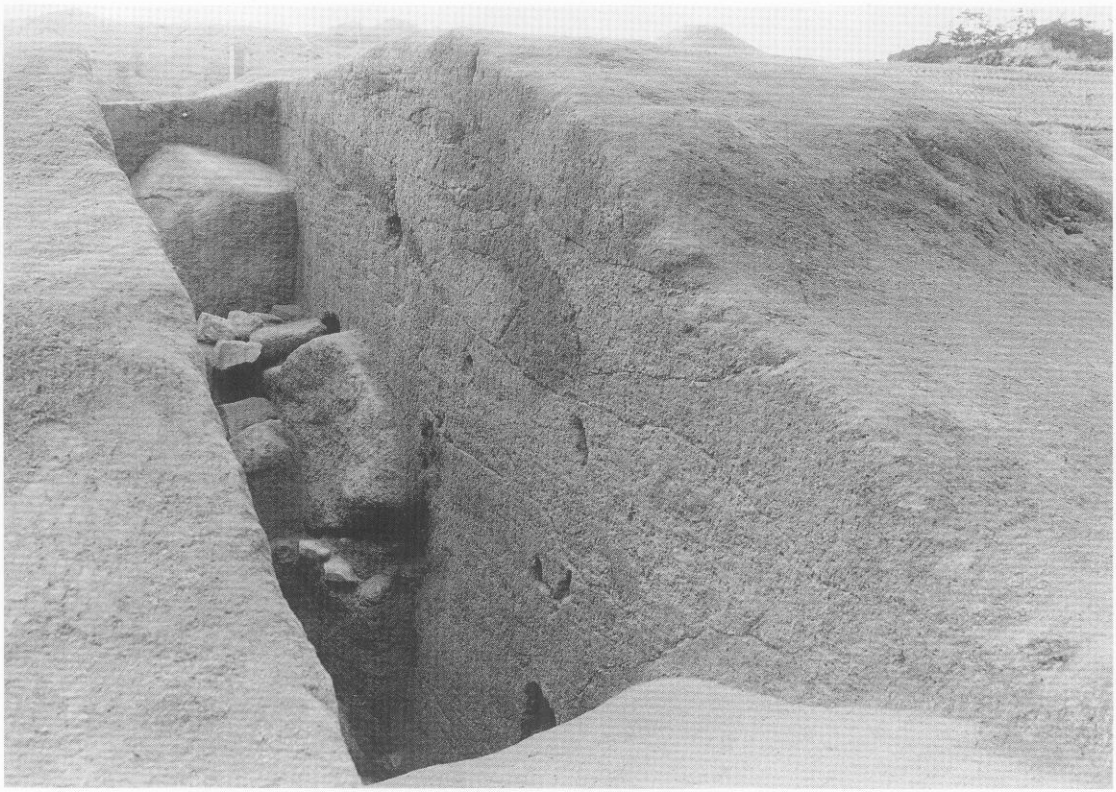
(2)　後田10号墳（玄室より）



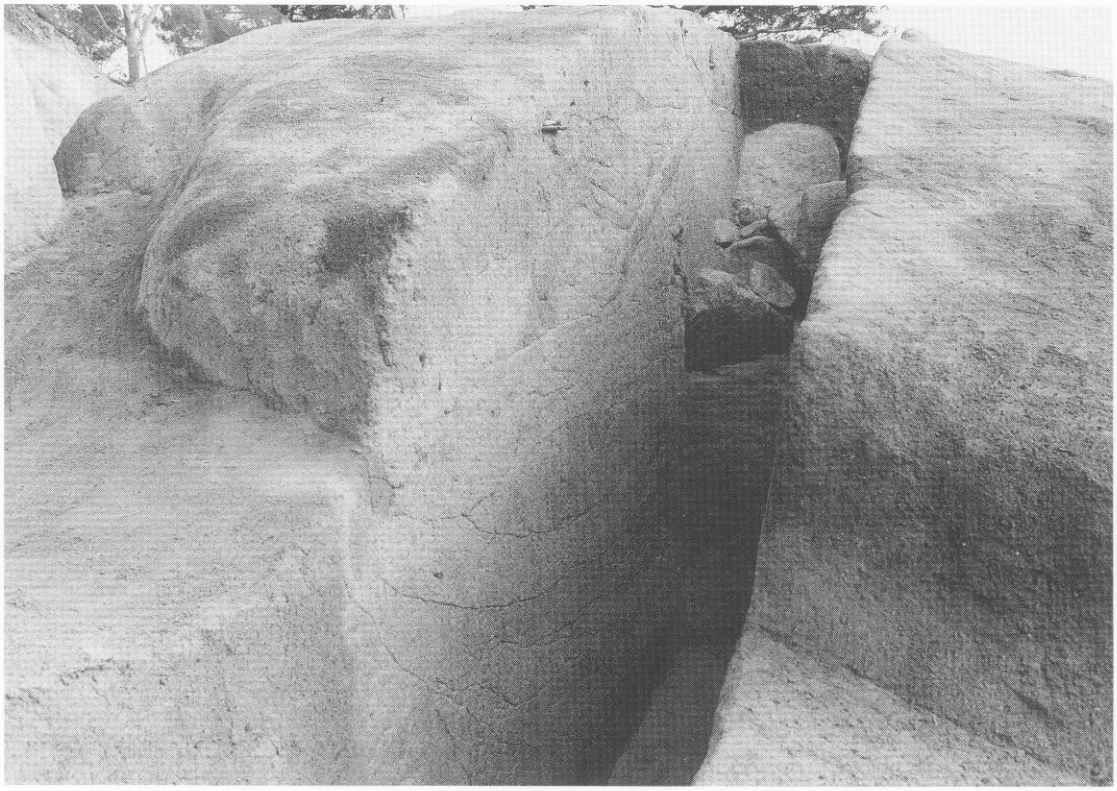
(1)　後田10号墳右側壁（奥壁側より）



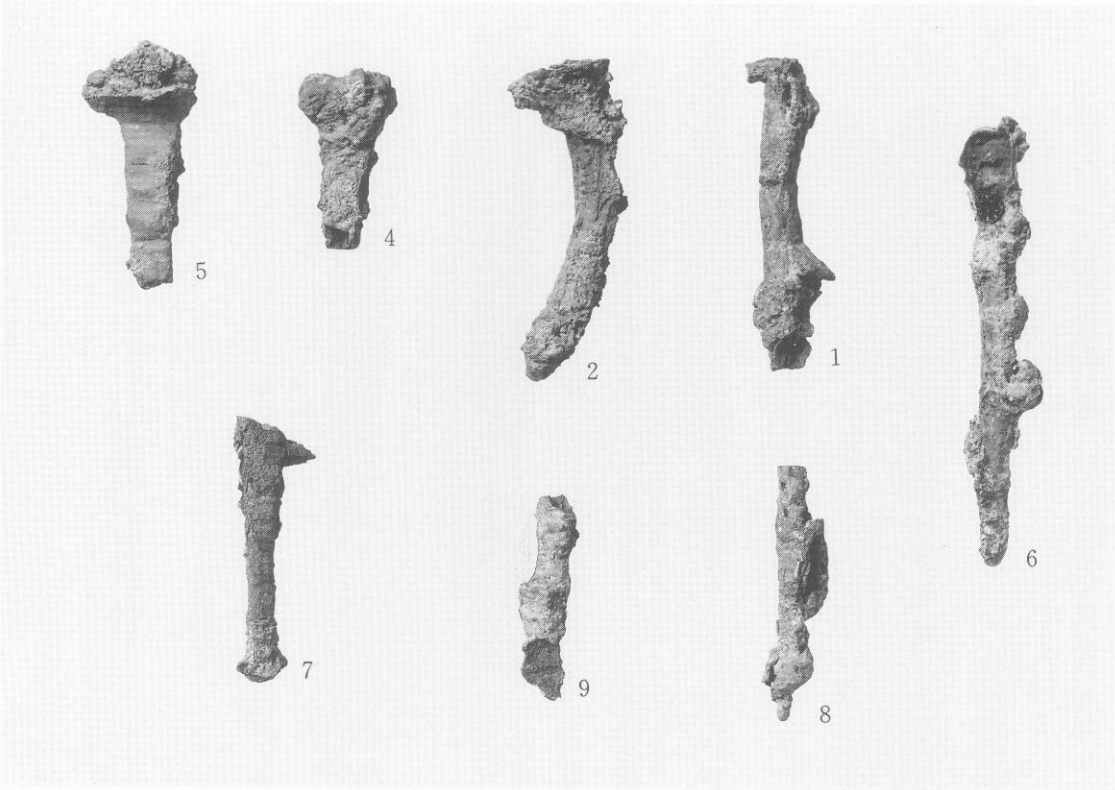
(2)　後田10号墳奥壁

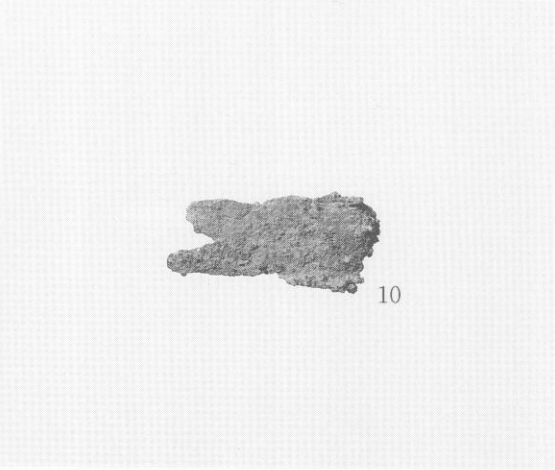


(1)　後田10号墳墳丘断面（Ｎトレンチ）



(2)　後田10号墳墳丘断面（Ｗトレンチ）

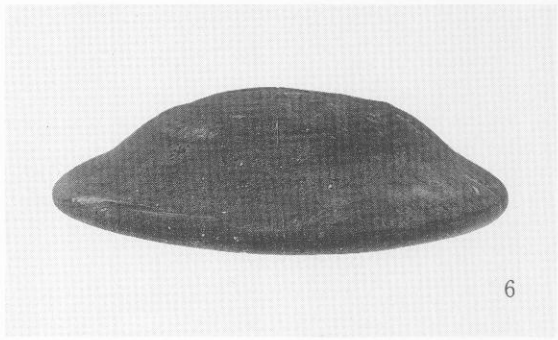


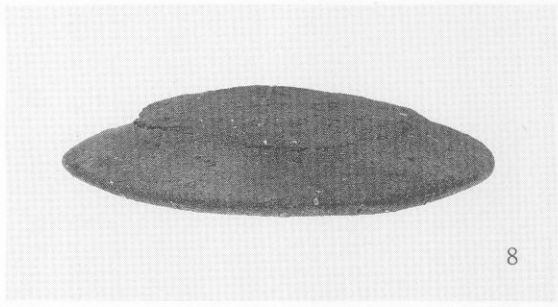


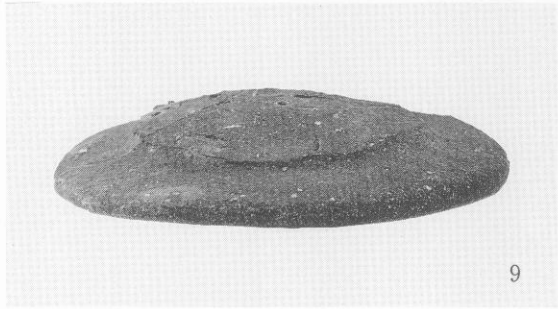
後田10号墳出土鉄器

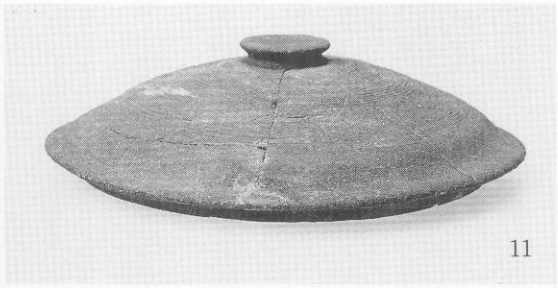

1

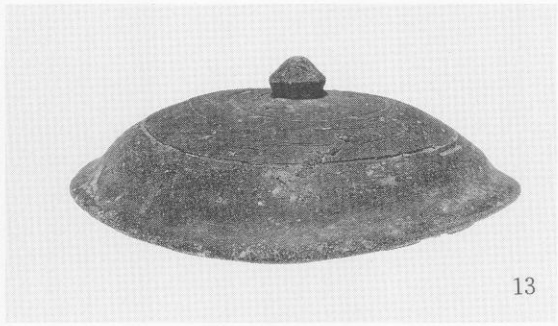

3

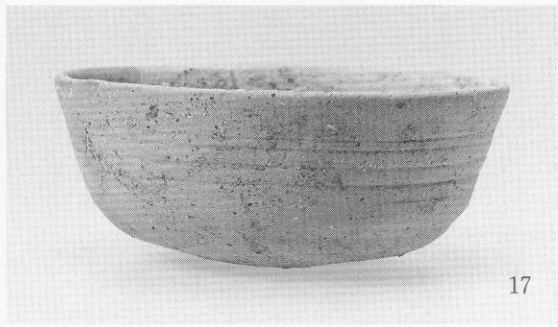

6


8


9


11


13


17


19

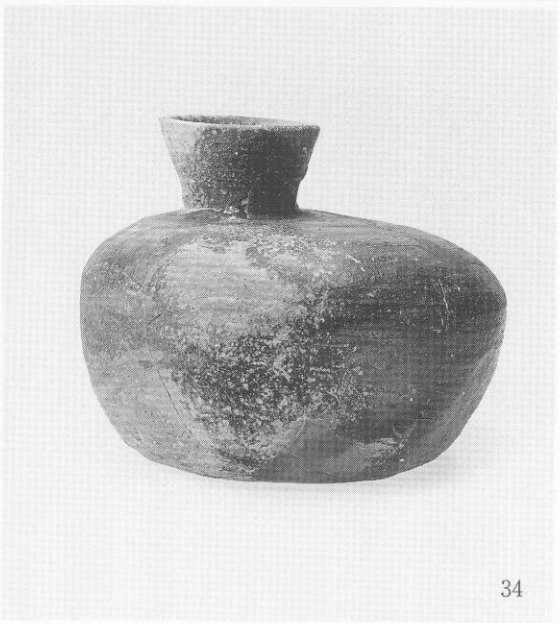

21

後田10号墳出土土器

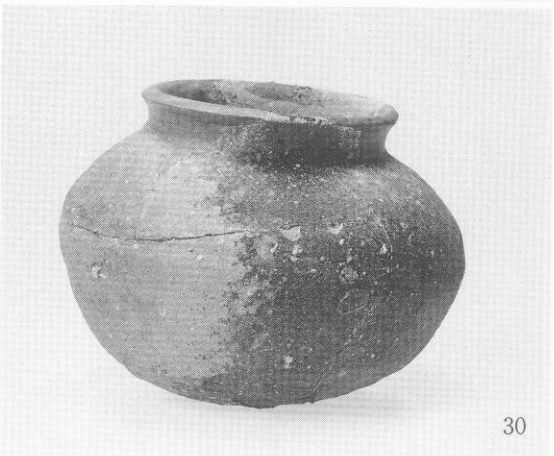

24

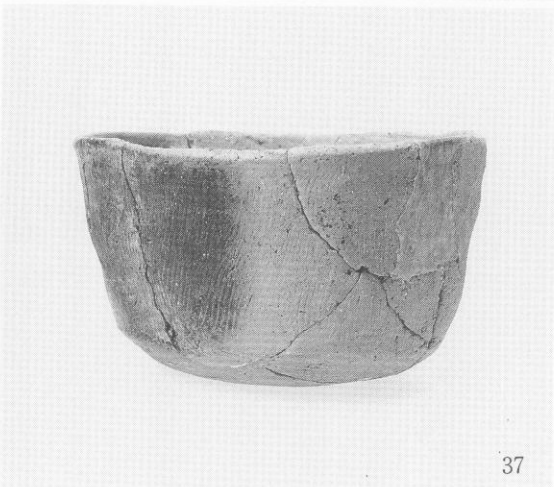

31


26


34


29


30


37

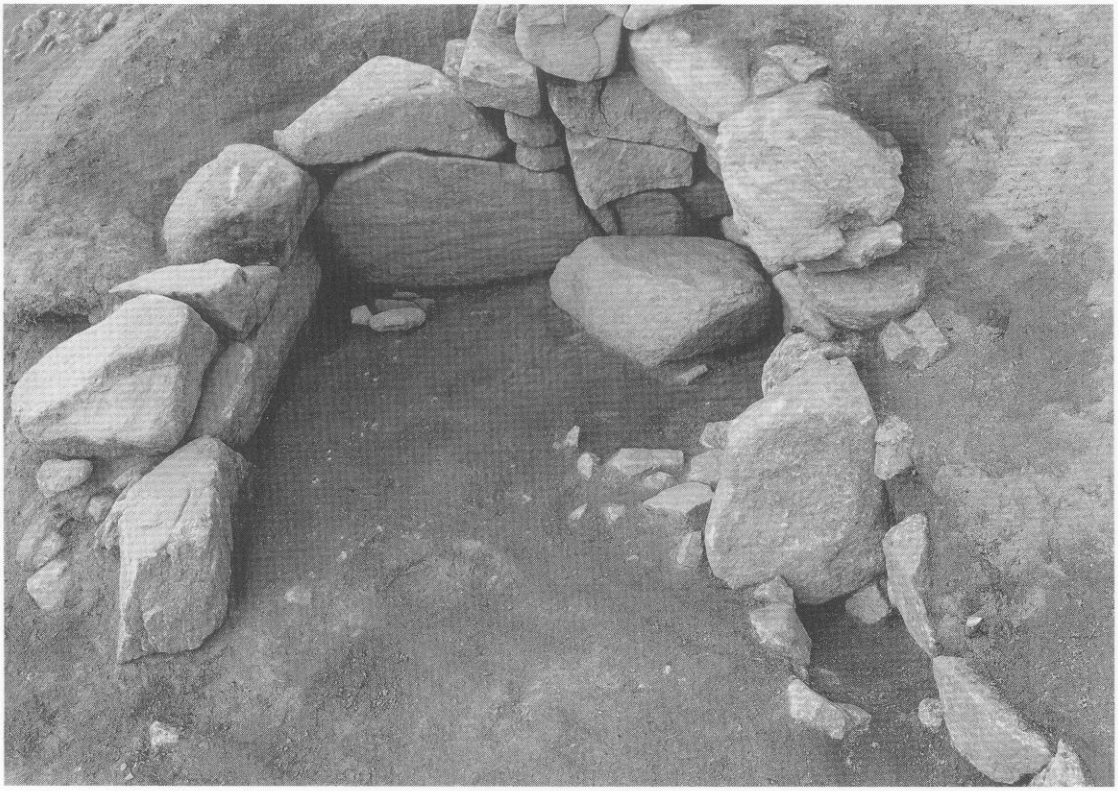
後田10号墳出土土器



(1)　後田11号墳調査前全景（西側より）



(2)　後田11号墳調査前全景（南側より）



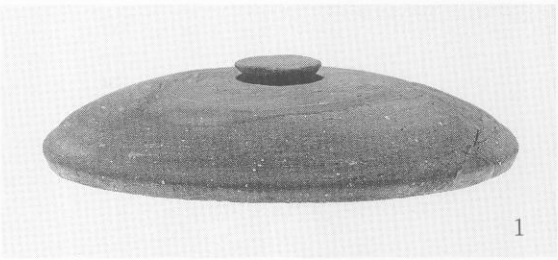
(1)　後田11号墳石室全景

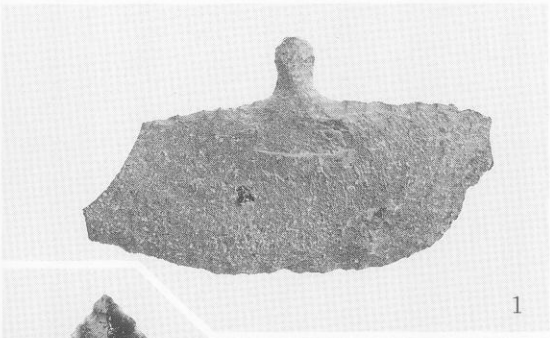


(2)　後田11号墳石室（南東より）



(1)　後田11号墳（調査終了後）



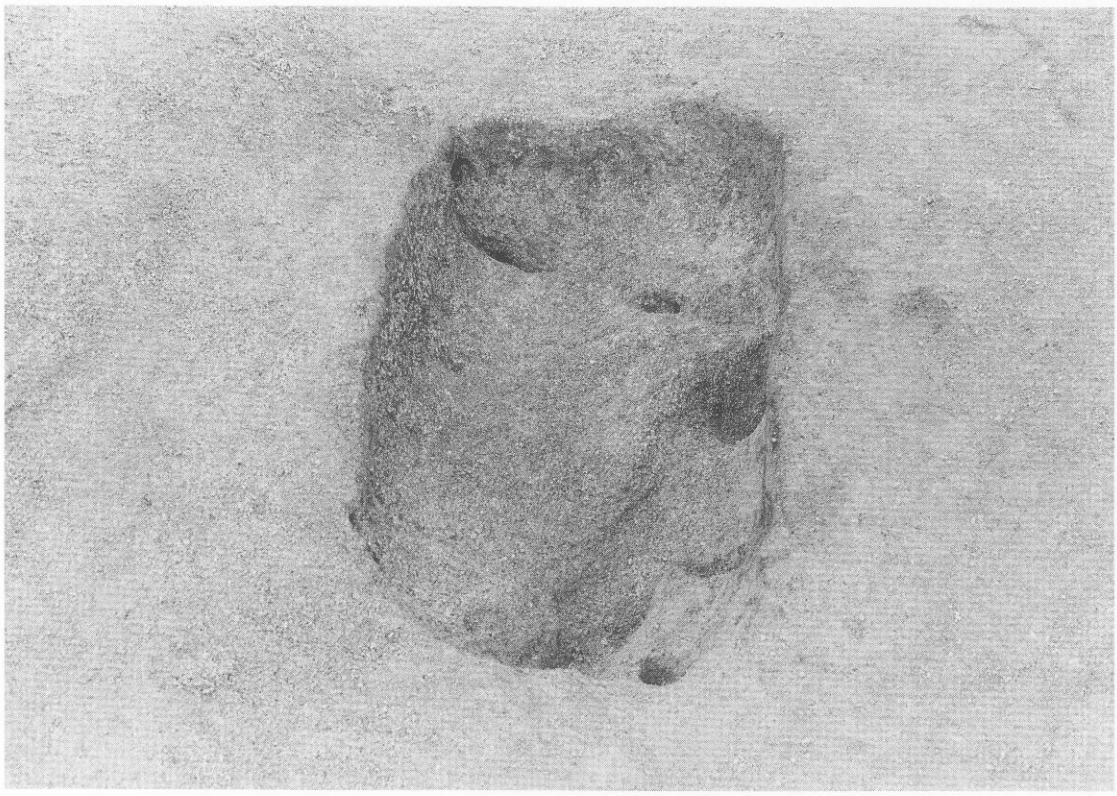




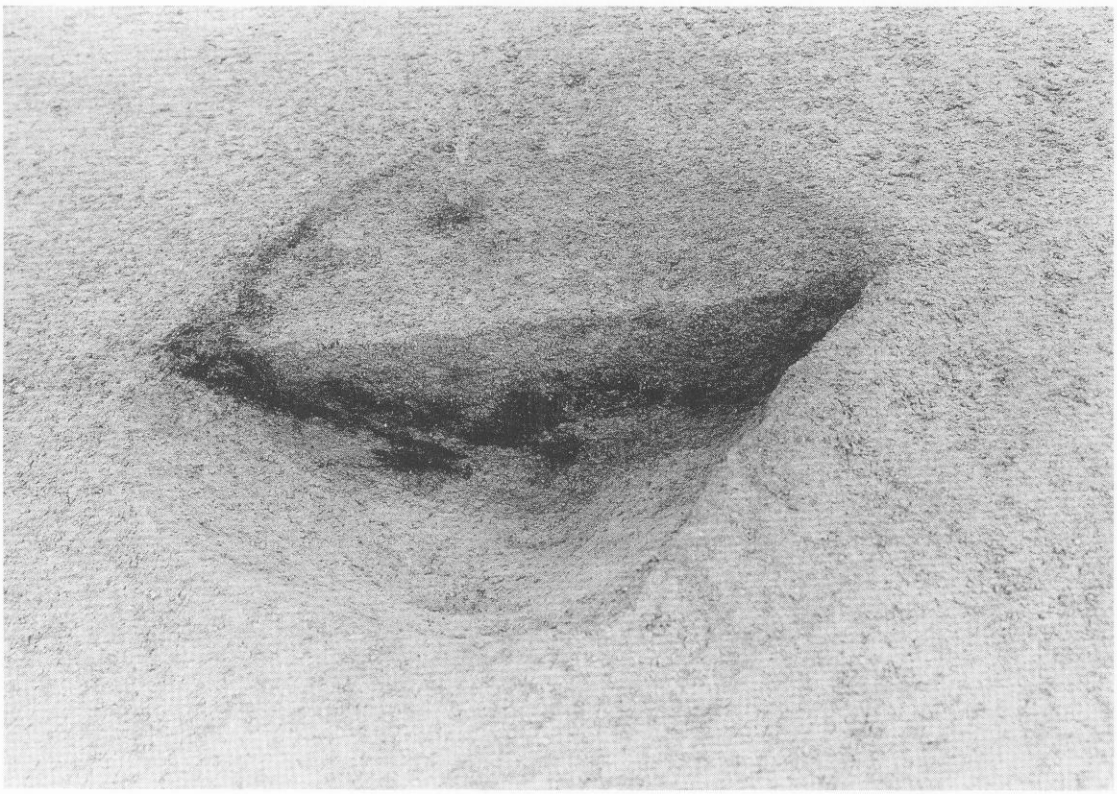
(2)　後田11号墳出土土器、　後田古墳群出土石器



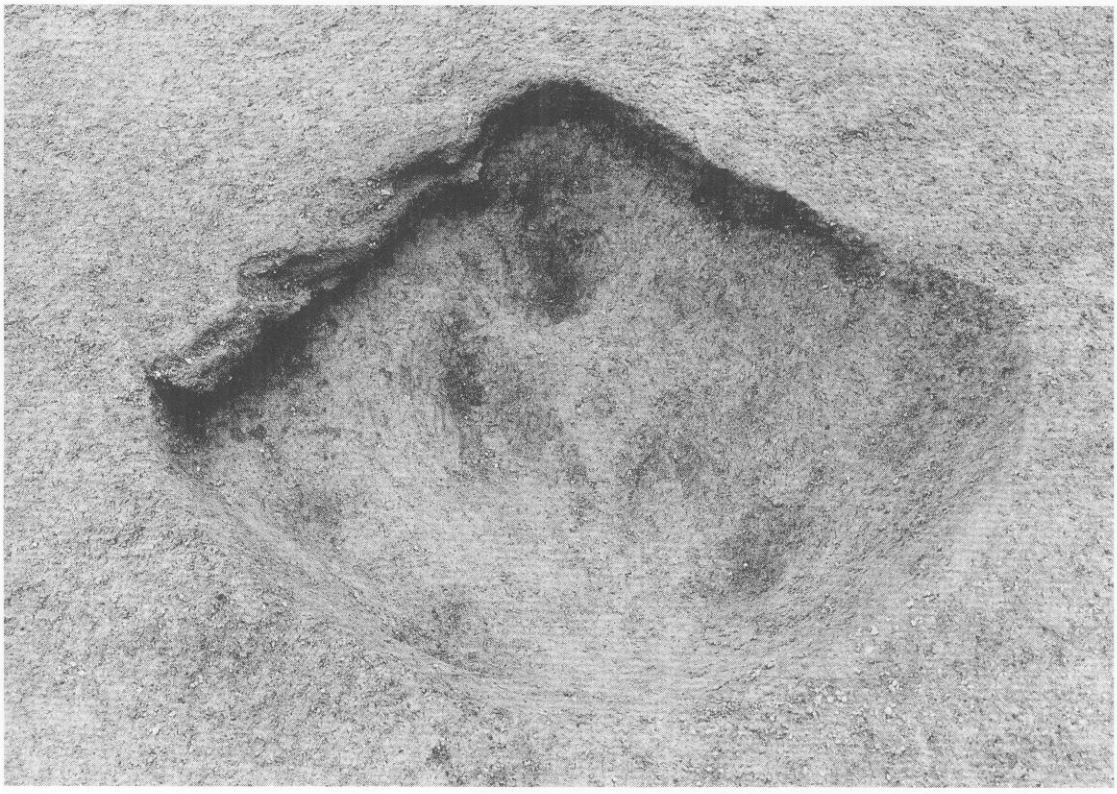
(1)　焼土坑 SK01（精査前）



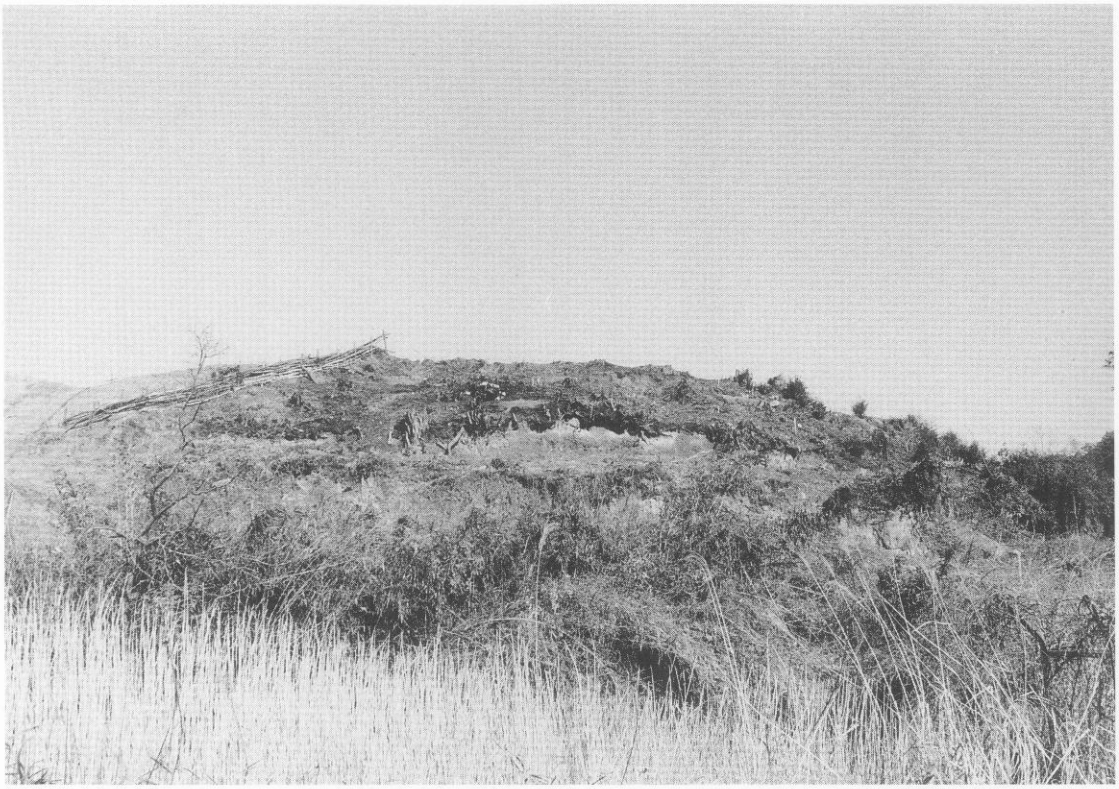
(2)　焼土坑 SK01（精査後）



(1) 焼土坑 SK02（半裁）



(2) 焼土坑 SK02（完掘状態）



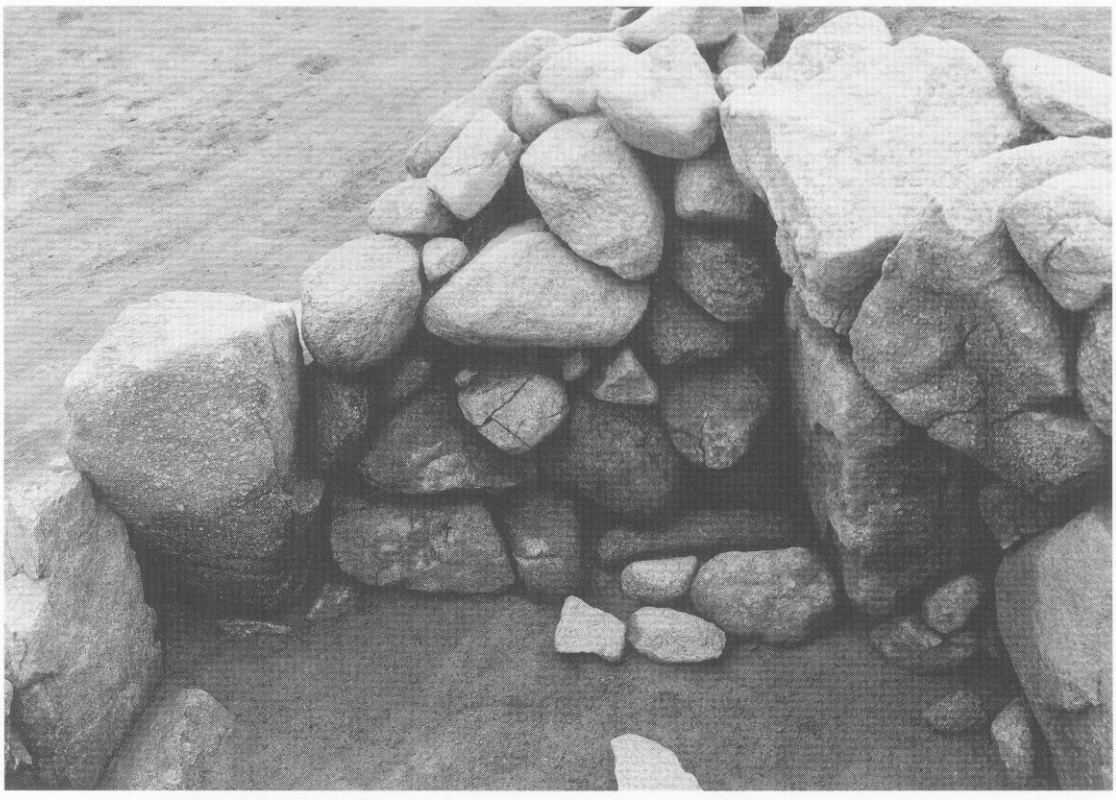
(1)　小田浦古墳群調査前全景



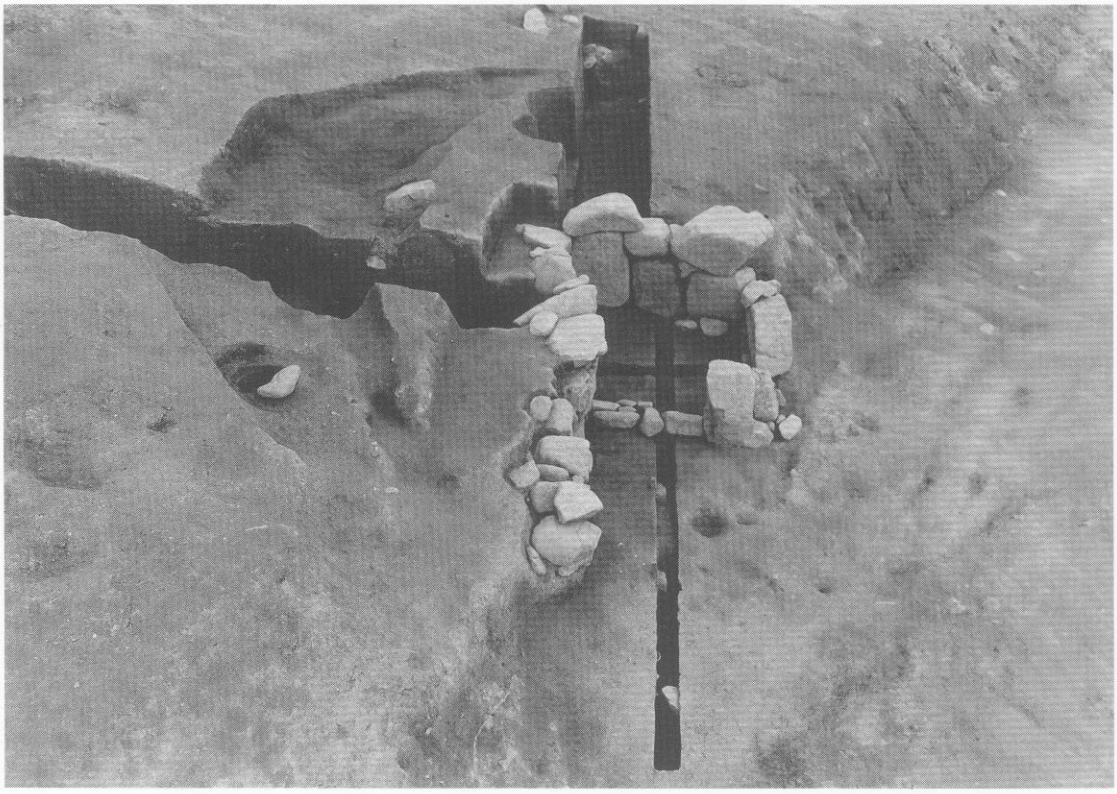
(2)　小田浦古墳群調査後全景



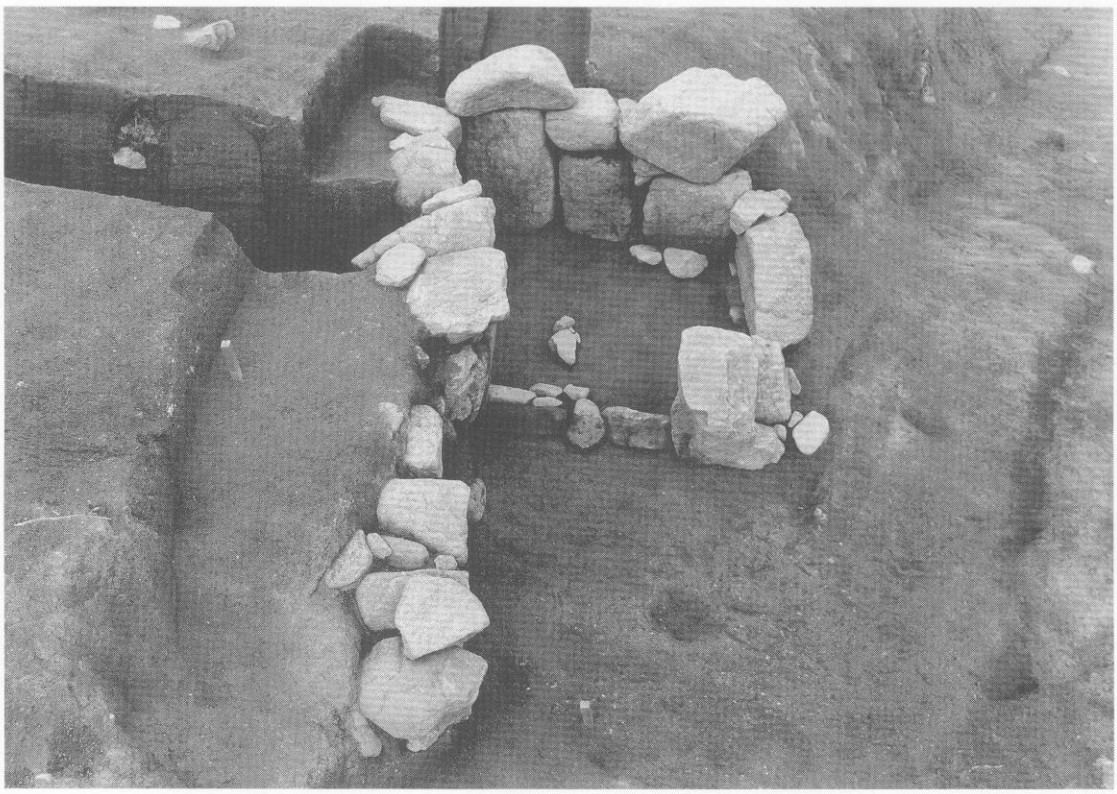
(1)　小田浦 2 号墳閉塞状況（墓道側より）



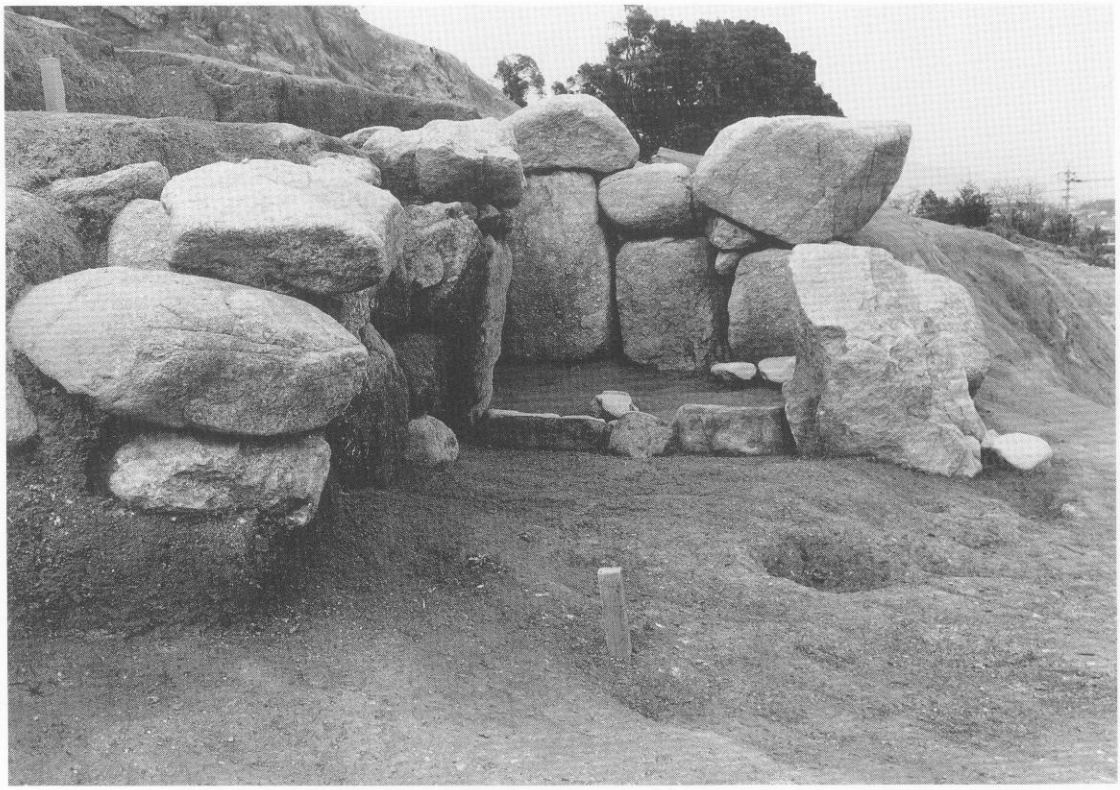
(2)　小田浦 2 号墳閉塞状況（玄室側より）



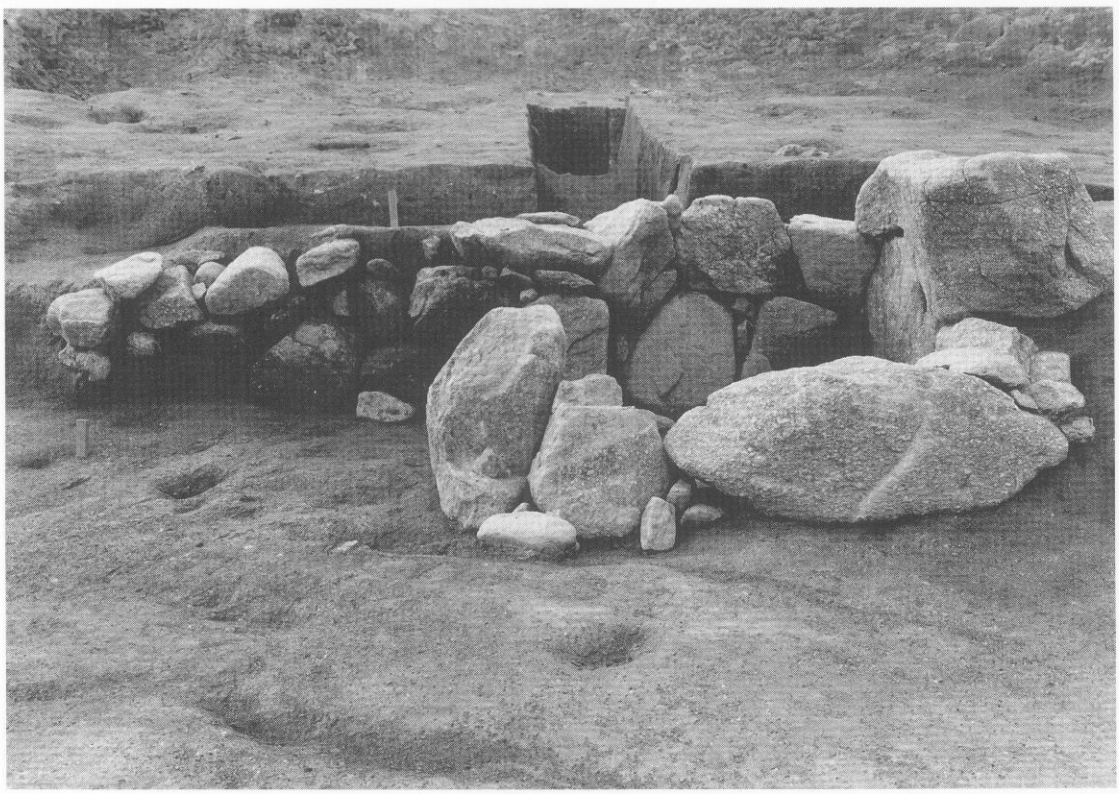
(1)　小田浦 2 号墳全景



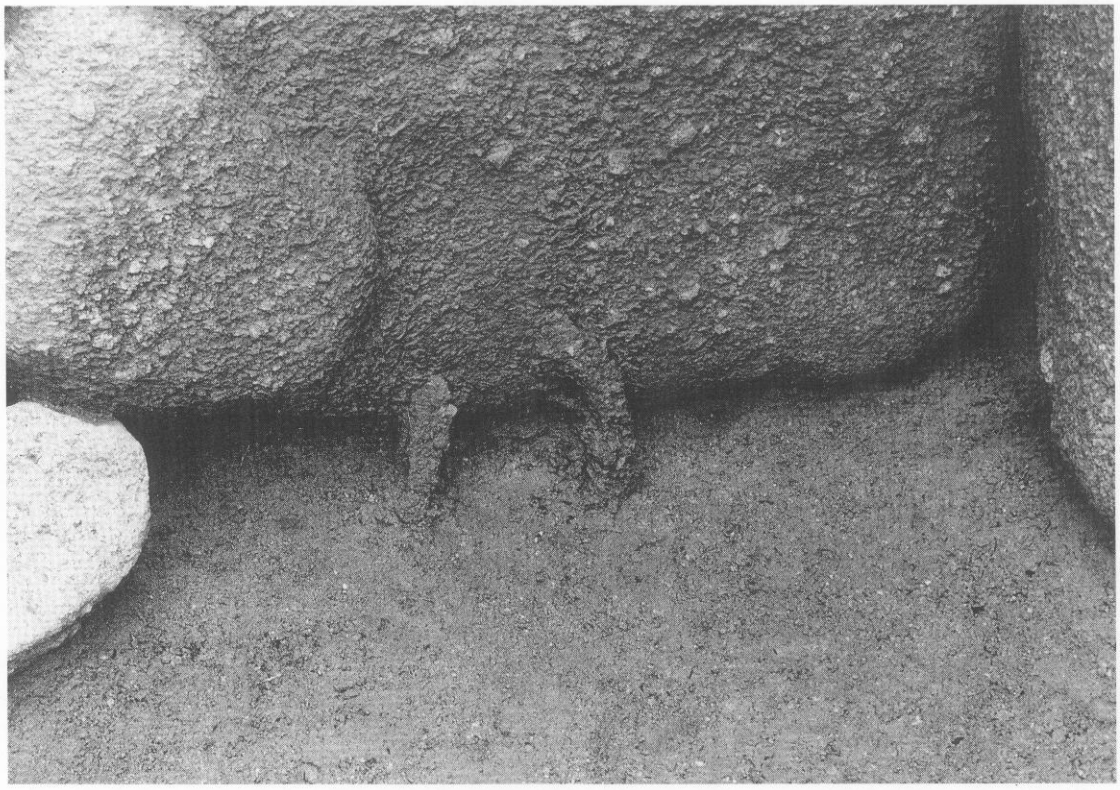
(2)　小田浦 2 号墳石室全景



(1)　小田浦２号墳石室全景（墓道側より）



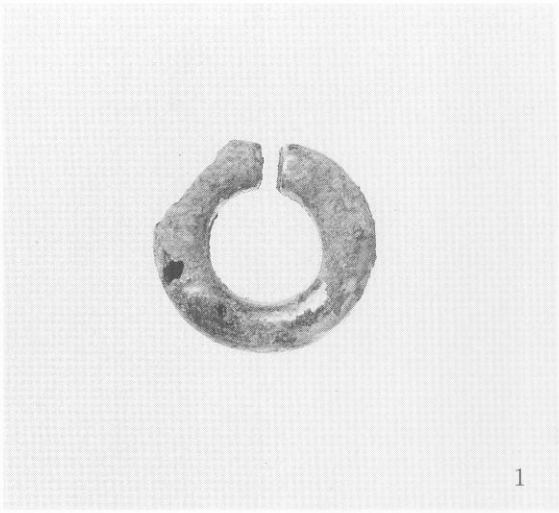
(2)　小田浦２号墳石室全景（南側より）

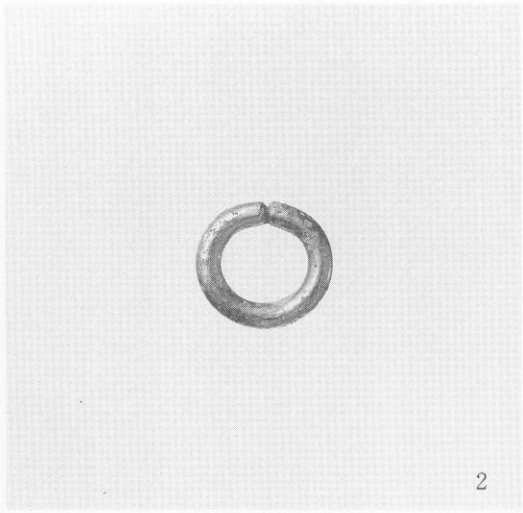


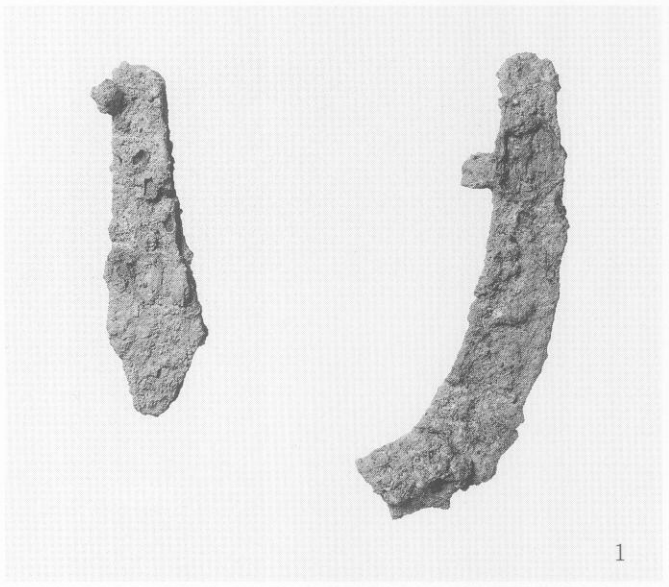
(1)　小田浦２号墳玄室遺物出土状態



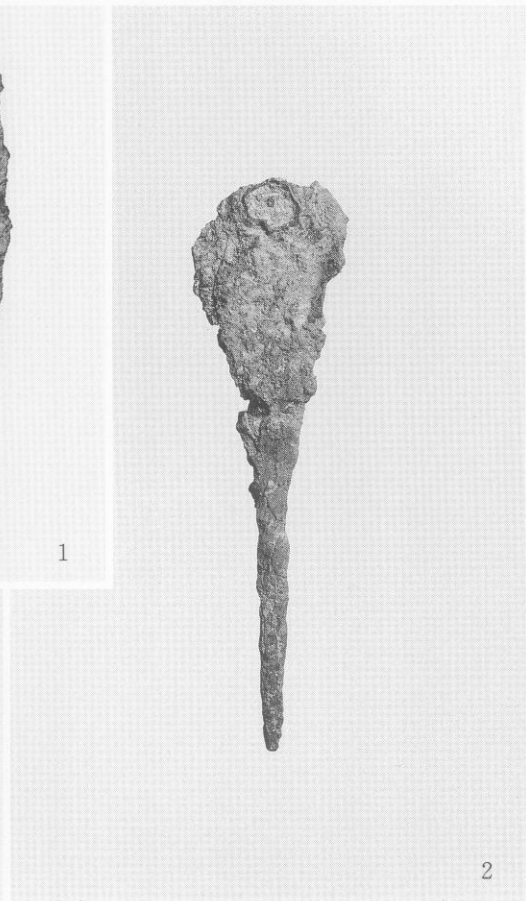
(2)　小田浦２号墳墳丘断面（Ｎトレンチ）


1

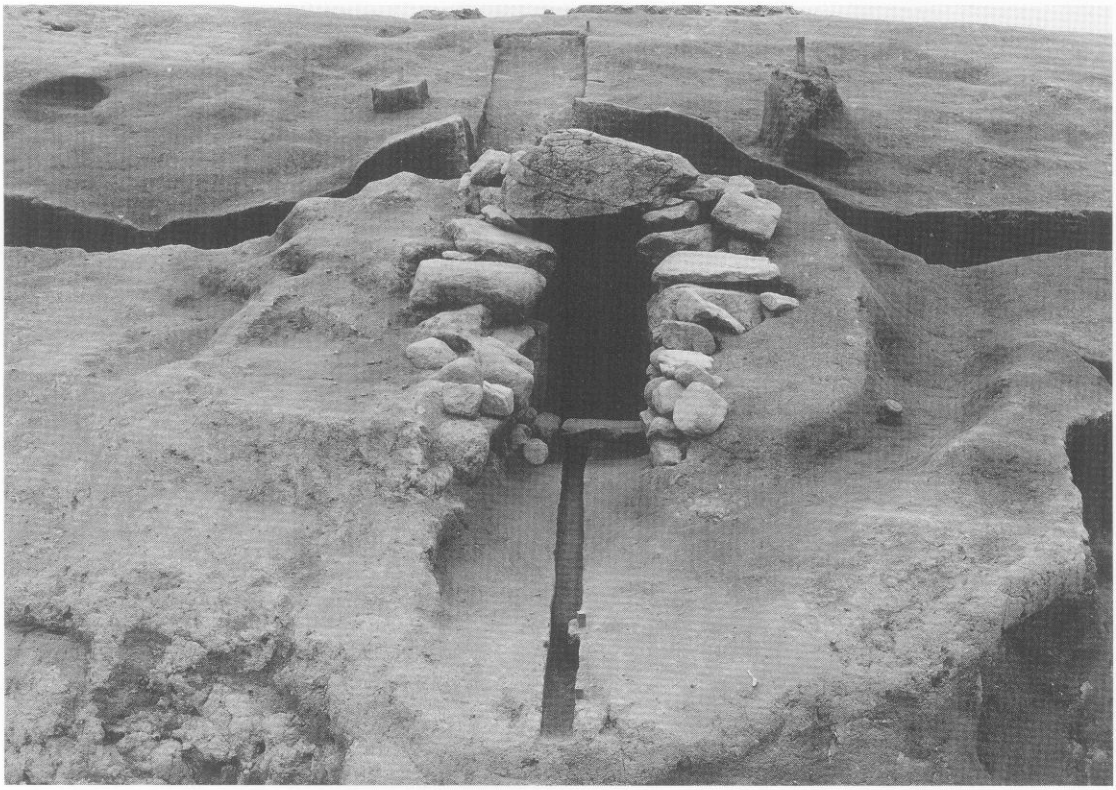

2


1

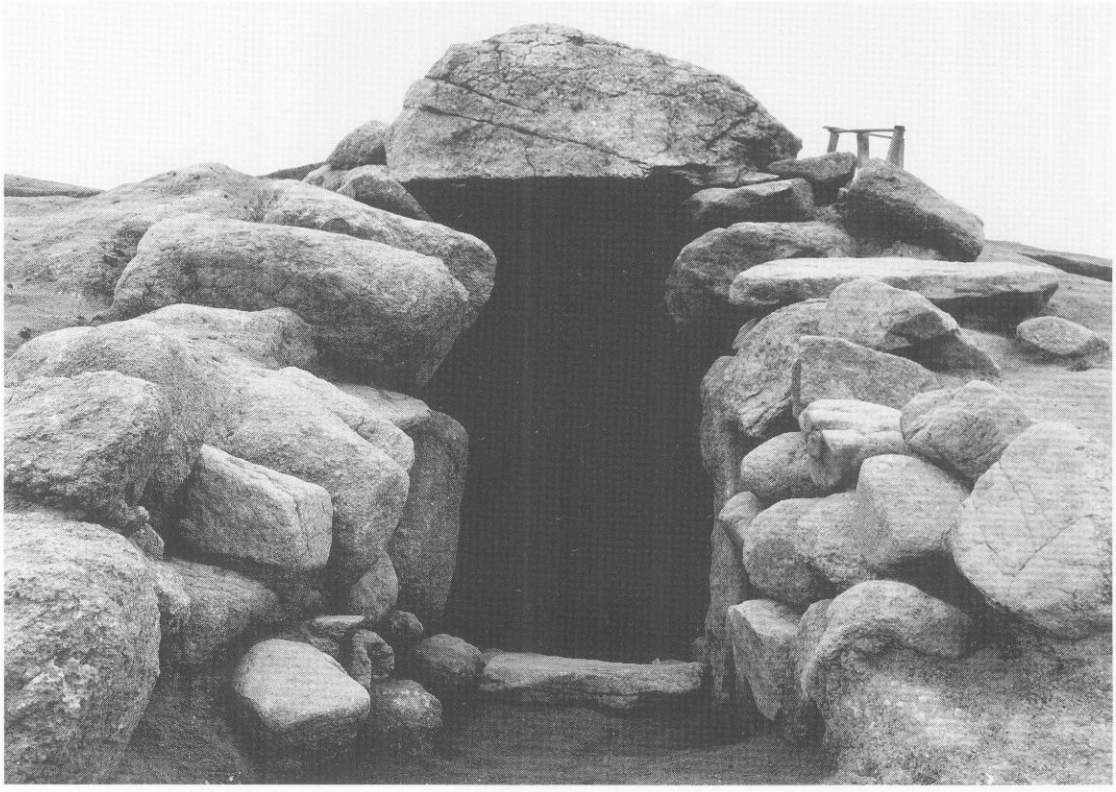

2


2

小田浦 2 号墳出土装身具・鉄器・土器



(1)　小田浦 3 号墳全景



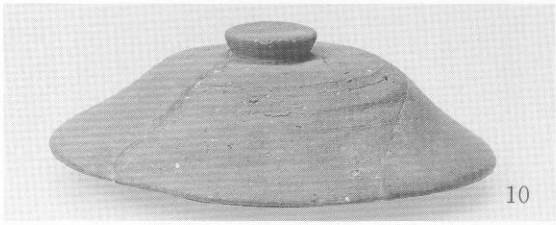
(2)　小田浦 3 号墳石室

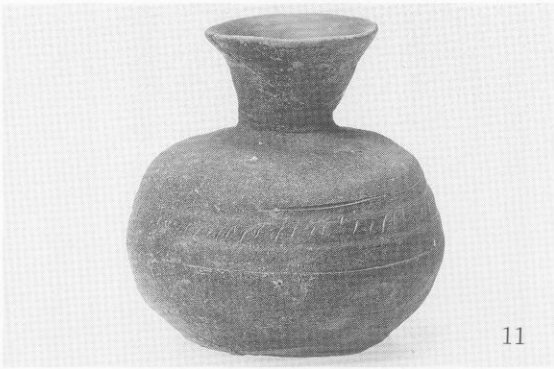


(1)　小田浦 3 号墳閉塞状況











(2)　小田浦 3 号墳出土土器

大野城市文化財調査報告書

第36集

平成４年３月31日

発　行　大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町２丁目2-1

印　刷　瞬報社写真印刷㈱
福岡市中央区天神５丁目4-16